
100万回死んでも生き返りますが、何か？

らくな。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100万回死んでも生き返りますが、何か？

【Nコード】

N4533Q

【作者名】

らくな。

【あらすじ】

ひよんなことで幻想入り、そして新たな歴史を刻むことになった一人の青少年の物語。

彼のコンティニューしまくりの冒険が、今始まる！…きっと。

超不定期更新です。

新章突入！旧作編だぜひゃっほう！

今考えてみれば、これから俺の物語が始まったんだな（前書き）

今回はコメディじゃありませんよ？

それでもよろしければどうぞ。

駄文なのは相変わらずです。

2011 / 6 / 16、一部修正しました。

今考えてみれば、これから俺の物語が始まったんだな

俺は今、なんか大変な大役を任されてしまったんだ。

「ごめん…私の代わりに、行つて。」

一体なんでこうなったのか、とりあえず簡潔に思い出してみることにする。

俺は彩崎^{さいさき} 玲奈^{れな}。皆からは「レナ」って呼ばれている。

女の子らしい名前だが、男だ。

どうしてこんな名前にしたのか母に聞いてみた所、「女の子っぽい感じだったからー（はあと）」となんか適当感溢れる回答だった。

ちなみに母は女優だ。しかし、女優にしては仕事が少ない感じがする。夜に放送されているドラマ（今の時期では週2回出てる、もちろん放送局は異なる）にも母は出ているのだが、連続ドラマにも関わらず、いつつも家に居るのだ。…撮影とか忙しくはないのだろうか。

父は歴史を研究している。なんでも、この世界には「パラレルワールド」というものが存在していて、

父は「仮に戦争が起きなかったらどうなっていたか」とか、「仮に海底遺跡があったらどうなっていたか」とか真面目に考えている。

…と力説していた。

それだけではなく、歴史から得た史実を科学的に考察していて、父の本は飛ぶように売れている。…今、この瞬間にも。

このままでは永遠に回想シーンから抜け出せなくなるので、話を進める。

俺はとある私立高校に通っている。高校2年、そろそろ進路について考え始める時期だ。

俺はとりあえず大学行って、父と同じ道を志すつもりだ。

そんな風に考えていたある日、異変が俺を襲った。

俺はいつもの通り、学校から家へ帰っていた。

駅の改札を通って、ホームへ。

電車は後2分で来るらしい。俺は鞆から読みかけの本…アガサ・クリステイの『そして誰もいなくなった』を取りだし、しおりを挿^{はさ}んだページを開いた。

『まもなく、？番線に電車が参ります。危ないですから…』

そろそろ来るな。俺はページの文字を読み始めようと、視線を本に向けようとした、その時。

視界の端に、何かが線路に落ちるのを見た。

気のせいだろう…どうせ落ちたとしてもゴミか…そう思ったが、直後の悲鳴で事態を理解する。

「ゆかり！」

どうやら子どもが線路に落ちた…って、あれ？番線じゃねえか！
もうすぐ電車来るぞおい！

俺は本と鞆をかなぐり捨て、線路に飛び降りる。

「危ないぞ、君！」

サラリーマンっぽい服装の青年が俺を呼びとめるが、そんな事はど
うだっていい。

俺は線路に倒れてる幼い女の子をホームの真下、緊急用の避難スペ
ースに無理矢理押し込む。
間に合った…女の子は大丈夫だ！

「危ない！」

え？

振り向けば、電車が目の前に。

「一名様、幻想の世界へごあんない」

と同時に。

俺は「落ちた」。

「うわあああああああ！！！！！！！！」

模型でしか見たことのない電車の底が、どんどん遠ざかる。
代わりに見えてきたのは紫色の不気味な世界。

眼、眼、眼。

無数にある眼が、俺を嘲笑^{あは}つかのように直視していた。

その眼の中を落下しながら、ふと冷静になった。

…俺、どこまで落ちるんだ？

ここで物理の話をしよう。

物体が真下、つまり鉛直方向に落下する時、落下距離 y を表す式は

$$y = \frac{1}{2} g t^2$$

ここで g は重力加速度、 t は落下時間だ。

ここは何処かさっぱり分からないが、地球だと仮定すれば重力加速度 g の値は 9.8 だ。

で、さつきから少なくとも 10 秒以上はこのままの体勢で落下し続けている。

こんな思考が出来るくらいだからな。

というわけで、少なくとも俺は 490 メートル落下していることになる。空気抵抗は抜きにして、だ。

当然、今も落下し続けているため、もうとくに 500 メートルは落下しているだろう。

さあ、俺は何処まで落下する？

このまま行けば俺は間違いなく死ぬ。

最後に、何処まで落下したのか知りたい。

そうして、落下秒数を数えていた。

28…29…30…

32 秒を過ぎたあたりか、急に視界が晴れた。どこかに出たらしい。日の光が俺に突き刺さる。

俺はそろそろ死を悟った。

下を向いた事で解ったが、地面が近付いているからだ。

耳にびゅっびゅっとうと音が響く、それはこれが「現実」だと俺に突き付けていた。

ふう…もう見える景色も見えなくなる訳だ。

俺はそつと、眼を閉じた。

近づく死に、俺は大手を広げて歓迎しようとしているのだ。

我ながらかなり勇気のある行為だと思う。って人生最後の思いつて
こんなにしょぼいのか!?

もつと走馬灯とかそんなもので『死にたくない』と思つのが普通だ
ろ!?!なんでこんなに冷静なんだよ、俺!?

が、もうすぐ死ぬ訳で。

深呼吸で頭を落ちつける。

迫るその時を、俺は待った。

ぐしゃり。

意識が、途絶えた。

ところが。

俺は目を開けてしまった。

見慣れない天井…木造だと一目見て解る天井。

此処は…天国…なのか。

にしては風景がリアル過ぎる。

天国と言えば、何処も明るくて、周りに天使がいて、神様もいて、雲の上で…というイメージだが。

天井がある時点で、何かがおかしい。此処ホントに天国？

「あ、気付いた。」

誰かが、俺を見て笑った。

小豆の色をもう少し薄めたような瞳に、頭に乗る大きな朱色のリボ

ン。

黒…というのか焦げ茶というのだろうか…そんな色の長い髪が、俺の頬をなでる。

紅白の明らかに巫女さんだろと言わんばかりの服。なぜか腋が露出している。

「大丈夫？あなた、随分ボロボロだけど。」

随分…ボロボロ…？

動こうとした瞬間、全身に電流のように痛みが走った。

「あなた、骨を沢山折ってるわ。なんでそれで生きてるの？ってくらい。とにかく、動いちゃ駄目。」

これが、俺と彼女の出会いだった。

今考えてみれば、これから俺の物語が始まったんだな（後書き）

感想とか要望などありましたらどうぞ！

次回予告「博麗という少女」

お楽しみにー！

博麗という少女(前書き)

今回、やっとここを回想から脱出です！

2011/6/16、一部修正しました。

博麗という少女

彼女は博麗霊夢というそうだ。

博麗神社という神社の巫女をやっているとも言っていた。

言われてみれば、この由緒正しそうなこの木造の建物の構造は神社のそれと同じものだった。

しかし、それでも謎だったのは、此処は果たして本当に地球のどこかなのか、そして…

「どうして腋を出しているんだ？」

うん、これすっごく謎だよな。

すると霊夢は少しムカツとしたような顔で

「出したくて出してるわけじゃないわ。」と返して来た。

「でもこれはこれで良いわ。夏とかとても暑くて。これでちょうどなのよ。」

確かに、巫女さん衣装は夏じゃ暑いよな…よくあんな衣装で外に居られるな…。

巫女さんもクールビズって事にしておこう。

「あなたは何処から来たの？」

「どこからって…」

困った。

まあ当然こんな流れになるのは予想できていたが、回答に困る。

落ちてきたなんて阿呆な事なんて言えない。

でも、落ちてきたとしか言えないのだ。

あれを落ちたと言わないなら、何を落ちたと言えばいいのか解らないレベルだ。

すると、霊夢は…

「もしかしてあなた、空から落ちてきたの？」

「！そうだ！」

ラッキーだ、霊夢から言ってくれた！

何、人の心読めるのか！？

「だとしたら…あなた、この世界の事、何にも知らないのね。」

「まあ…そうなるなあ…」

俺は霊夢からありがたーい話を聞いた。

それによると、どうやら俺は『幻想郷』という世界に入り込んでしまったらしい。

で、今の所元の世界に戻る方法もないらしい。

普通なら元の世界に戻れないという事実を知ったらかなりショックを受けるのだろう。

が、俺はすんなりとその事実を受け入れた。

…まああんなに落ちればすぐには戻れないよな…

というわけで、特に元の世界に今すぐにもしなきゃいけない未練があるわけでもないの、俺はこの世界…幻想郷に生きる事にした。

死ぬわけじゃないんだから、いずれ戻る手段も見つかるともしい…そう前向きに考えた結果だ。

「レナって呼ぶけど、いいかしら？」

「ああ。大丈夫だ。」

もうその呼ばれ方には慣れている。

「私の事は霊夢で良いから。よろしくね、レナ。」

霊夢が俺に右手を差し延べる。

「ああ。よろしくな、霊夢。」

右手だけとは言え、動かすには痛みが伴うが、何とか握手をすることが出来た。

どちらにしろ、俺は当分寝たきりだ。

霊夢には迷惑をかけるが、俺はただ早くこの骨折が治るのを願うだけだ…

翌日。

骨折が治りました。

「あなた…本当に人間なの…?」

その旨を霊夢に伝えた所、霊夢は湯飲みを落としてしまった。

いやー、治ったんだ、マジで。

起きてみたら身体が軽い軽い。

骨折って一日で治るものなのか?折った事ないから詳しくは解らないが、ドラマとかじゃそんなんじゃない気が…

「そんなわけないでしょう！あなたの骨折、少なくとも一ヶ月以上は安静にしなきゃいけないかったのよ!？」

霊夢は俺の心の眩きを察したのか、めっちゃくちゃな剣幕で怒る。

そうですよねー！。

「あなた…絶対おかしいわ……………そうだ!」

霊夢は何か気付いたのか、俺にこう聞いてきた。

「あなた、どうやって幻想郷に来たの!？」

昨日も聞かれた気がするが、俺は素直に答えた。

「えっと…なんか落ちて…凄く長い間…で地面にぶつかって…気付いたら霊夢が…」

覚えてるのはこれだけだ。

「解ったわ…あなたに伝えなきゃいけない事があるわ。あなたには不思議な力がある。」

不思議な力？魔法とかそんな感じの？

「例えば…」

すると、霊夢はふわりと地面から浮いた。

「な、なんだ…それ…!？」

「これが私の力…『空を飛ぶ程度の能力』。私は空を飛べるの。」

「…すげえ…」

アニメとか漫画でしか見た事ない光景が、俺の目の前で起きている。これは学会発表出来るレベルだ、父に見せてみたい。

「で、あなたの能力なんだけど…実証する為に、少し痛い思いをし
てもらっわ。霊符『夢想封印』!」

霊夢からなんか光の弾が出て…俺に直撃。

「痛い痛い痛い!」

とにかく痛かった。すっごく痛かった。

「…それがあなたの能力よ。」

「は?」

意味が解らない。どういうこと?

「申し訳ないけど今、正直あなたを殺す気で攻撃したわ。…でも、
あなたは死ななかつた。それに…」

え?殺されるの俺?

霊夢は俺の右手の甲を持った。

火傷した手だな…治るのにどれくらいかかるのやら。

!?

火傷が…治った!?

「あなたは傷を受けても死なない…それどころか異常な速度で傷が癒える…つまり、あなたの能力は…」己の傷を癒す程度の能力』よ。」

「己の傷を…癒す…」

「本当に不思議な力だわ…ダメージ受けても倒れないなんて…」

霊夢は信じられないという表情をしていた。

その後、弾の撃ち方を霊夢に教えて貰ったが…俺には霊夢のように連射は出来ないようだ。

霊夢いわく、「レナの弾は一発一発の威力が高く、連射には向かない」のだそうだ。

しかし、数日後には2、3発くらいなら連射できるようになった。霊夢のおかげだ。

「…上達が早いわね…」

霊夢は俺を褒めてくれた。これくらいまで出来るようになれば、護

身には十分らしい。

が、異変はすぐそばまで迫っていた。

ある日。

いつものように外で身体を伸ばそうとした、その時。

俺は異変に気付いた。

空が…紅い。

火事の時のような赤さではなくて、まるで酸化した赤黒い血のよう
な…紅。

「なんだ…こりゃ…!？」

俺はさらに気付いた。

月も…紅い。

これから起こる異変を暗示しているのだろうか。

俺は慌てて霊夢の元へ。

「おい霊夢！空が…って!？」

だが、霊夢はとても立ち上がれるような状態ではなかった。

荒い息を立て、何かにつなされているようで、とても苦しそうだ。

「どうしたんだ!？」

俺は霊夢に駆け寄りうつとしたが、霊夢の手に遮られた。

「ただの…風邪よ…近付かないで…うつっちゃっわ…」

命に別条はないのか…俺は安心した。

「空が…おかしいんでしょ…？それは…きっと…誰かが…したこと
だと思っわ…」

喘ぎ喘ぎ霊夢は話す。

「どうすればいいんだ!？あれはまずいぞ…」

「…誰かがしたのなら…その誰かを…倒すなり説得するなりして…
止めれば…いいわ…本当なら、私がやるんだけど…レナ。」

霊夢は柵の一つを指差して続けた。

「あそこに何も書かれてない札があるわ…2、3枚程持って行って
…きつと助けになるわ。」

「ごめんなさい…私の代わりに…行って。」

「勿論だ！霊夢は休んでろ！俺がぱぱーっと解決してやる！」

「心強いわね…風邪が治つたら行くから、それまでなんとか…」

「無理、するなよ！！」

俺は言われたとおりに札を取って、神社の外に出た。

どうすればいいのか、何をすればいいのか解らないが、俺は霊夢の
為に行かなきゃならない。

雲が流れていく。

だが、何かがおかしい。

何かを中心にして四方八方に放たれる雲。

あれは…建物か？城っぽいが…

…あそこに行けば、何かが解るのか？

俺はその何かを目標に走る事にした。

???視点

「ふふふ…私が興味を持って連れてきた『彼』の実力…見てみようかしら。」

私はこの異変の行く末を確かめるべく、こっそりと彼を着ける事にした。

『隙間』を斬り開き、中に身体を入れる。

さあ…どうなるかしらね。

???視点

これが私の目的。

この幻想郷を常時夜にしてしまえば…私は幻想郷の頂点に立てる！

この世界の頂点は…吸血鬼たる私しかいない！

「咲夜…迎撃の用意をしなさい。間違いなく博麗と魔法使いが来るわ。」

「かしこまりました、お嬢様。」

…さて、かかってくるなさい。

私は…逃げも隠れもしないわ！

博麗という少女(後書き)

次回予告

「#1…氷上の妖精」

レナ、初めての戦闘！

相手は勿論…！

お楽しみにっ！

#1…氷上の妖精（前書き）

本来なら紅魔郷1面ボスはそーなのかーと言いまくっているあの人が、ストーリー展開上今回は彼女から先に登場させる事にしました。ご了承ください。

*2011/5/31、一部修正しました。

#1…氷上の妖精

俺は雲の中心に向かって走っていた。

あそこに行けば…何かが解るかも知れない…

森の中を掻き分け掻き分け、ただ我武者羅がむしゃらに進んでいた。

ある程度森の奥まで着いたような気がした、その瞬間だった。

「うおっ!?!」

大量の白い球体が、俺に向かってきた。

大小色々大きさがあって、小さいのは野球のボールレベルで、大きいのはドッジボールで使うボールのようなサイズで。

「何だよこれ!?!」

と言った直後に、一斉に加速して突撃してきた!

しかも俺に向かって弾をぶっ放してきやがったし!

「んにゃろっ!?!」

弾をかわしてお返しだっ!

よっしゃ、当たったぜ!

ははっ、墜落してやんのっ!

きりもみ落下をしていく数々の球体。

「このまま行けるぜ！」

俺は先に進むため、奴らとのバトルをおっ始めた。

謎の球体を沈めつつ走り続けると、俺は開けた場所に出た。

月の紅い光で解ったが、どうやら湖の辺に出たようだ。

それにしても…なんか寒い。

此処が前居た世界と季節の巡りが一緒なら、今は冬じゃないはずなのに…

！？

湖が…凍ってる！？

こんなにカチコチに凍ってる湖、テレビでしか見た事ないぞ！？

「やべえな…季節なんてねえのか、此処には…」

俺は驚きながらも先を急ごうと走り始めた、その時。

「待ちなさい！」

何処からか声が響く。

さて…無視を貫くか。

こう言うときって無視するのが一番だったりする。

何回か呼ばれる度に同じ事を繰り返し、何回目か解らないがついに相手が動いた。

「待ちなさいって…言ってるでしょ…！」

声と同時に何か俺の足元に突き刺さる。

ナイフかなにかと思っただが…！

「氷！？」

何だよ、氷って地面に刺さるものなのか！？

「どうだ、驚いたかー！」

と自慢げに笑う、小さな何か俺の目の前に現れた。

小さいと言っても身長は100はあるだろう…

だが、どう考えても小学校低学年の女の子の身長だ。

よく見れば、背中から氷の塊が羽のように小さく広がっている。

青と白の服、水色の髪。

「…済まないが、俺には用があるんだ。ここを通してくれ。」
話をしなければ、回避出来る争いも回避出来ない。

「駄目よ。ここを通して欲しければ私を倒してみなさい！」
何、ヒーローごっこ？普通俺が悪役だろ？

「君の遊びに付き合う暇はない…頼む、通してくれ。」

「いや。」

「通してくれ！」

急いでいるとは言え、子ども相手に思わず語気を強めてしまった。

すると、女の子は視線を落とす。流石に言いすぎたか？

が、これは罠だった。

「分からず屋…あんたは此処でカチコチに凍って死ねばいいのよ！」
瞬間、氷の刃が飛んで来た！

「…くそっ！」

俺は氷の刃を弾で相殺し、相手に向かう。

「うらぁっ！」

流石に女の子に暴力というのも気が引けるので、俺はある事をした。

直接の殴打ではなく…

間接的に殴打を加える！

弾を発射するには、自らの力を一点に集中し…放つ。

そう霊夢は言っていた。

ならば、弾を放つ事なく力を一点に集中すればどうなる？

それは…！

「立派な武器になるんだよっ！！！」

少女に触れる事なくダメージを与えられる、立派な武器だ！

「しんこう霊掌…と呼んでくれっ！」

両手に溜めた自らの力を、相手にぶつけるっ！

「きゅぁっ！」

相手は空を舞う！

「…やったか!？」

だが、そんなことで相手は倒れる事もなく…

「や、やるわね…あんた、名前は？」

「玲奈。彩崎玲奈だ。」

「言いくいからレナでいいわ!あたいはチルノ!さいきよーの妖精よっ!！」

そうしてチルノは自らの手に氷の剣を作り出し、俺に突っ込んだきた!

「最強か…それは楽しみだなっ!」

自分を最強と言っただから余程の自信があるのだろう。

「てえいつ!！」

真一文字に剣を振るうチルノ。

対する俺は!

「剣だけじゃ倒せないぜっ!」

剣に弾をぶつける!

「解ってるよ」

チルノの姿が…ない!?

さっきのように、何処からか声が響く。

「知ってる?あたいの能力は『冷気を操る程度の能力』。触れた物を凍らせるなんてお湯の子さいさいよ。」

お茶の子さいさいだろうと突っ込みたかったが、そんな事を言うてる暇ではなくなった。

チルノは俺に『触れていた』。
つまり…

「あたいの勝ちよ。凍っちゃったら何にも出来ないもん。」

俺の身体が、氷に包まれた。

…マジかよ。

俺、此処で終いか?

いくら霊夢に『死なない』と言われても、これじゃどうしようも出来
ない。

動けないもん。

「こ、これで…これでおしまいよ…」

「なかなか…強いな…」

「!?!」

俺は氷を溶かし、両手に高熱を携えながら立つ。

「でもな…」

「うるさい!」

チルノの氷の刃が、俺に刺さる。

痛いけど…これくらいどうって事はない。

「俺は…ただの人間じゃないんだよ。」

「うるさいうるさいうるさい! いい加減死になさいよ!」

さらに俺に、刃が刺さる。

それでも俺は立てていた。

それでも俺は歩いていった。

「永遠に凍って死ぬ! 凍符『パーフェクトフリーズ』!」

俺の四肢が凍る、そしてバランスを崩して転倒する。

それでも…俺は立つ。

「な、何なのよ…あんたは何者なのよ?!」

チルノの顔が青ざめ、言葉の端々に焦りが見えていた。

「俺は死なない人間だ。ただそれだけだ。」

此処までくれば、余裕が見えてくる。

「じゃああたいが殺してあげるわ!」

俺はチルノの弾に吹き飛ばされ、地面に転がる。

「そんなものじゃ…俺は殺せない…」

少しずつだが…俺は再び立ち上がる。

「あ、あんた…何回死ねば気が済むのよっ!？」

そのチルノの恐怖からの質問に、俺は笑顔でこう返した。

「100万回死んでも生き返りますが、何か？」

「…」

死亡回数：7回（チルノに凍らされた時、手に熔ける程の熱を溜めた時、ヘイルストーム直撃時、氷の刃が刺さった時×2、パーフェクトフリーズ直撃時、弾幕直撃時の計7回）

#1…氷上の妖精（後書き）

次回予告

「#2…宵闇の少女」

今度こそ彼女が登場！

レナは彼女にどう立ち向かうのか！？

お楽しみにっ！

#2…宵闇の少女（前書き）

先にお知らせします。

今回バトルシーンなしです。

そのかわり次回は激しいバトルになります！

*2011/5/31、一部修正しました。

#2…宵闇の少女

「はぁ…はぁ…」

正直、疲れた。

とりあえず、あそこに休めるような場所がある…休もう。

さっきの戦闘で疲れた身体に鞭を打ち、一本の木になんとか近付ける。

…ふう。少し休んで、また行こう…こんな時にさっきのチルノみたいな敵に出会ったらマジでやばい…

俺は木の幹にもたれ、そのまま眠りについた…

???視点

起きてみたら夜だった…寝過ぎたみたいなのだ！。

…お腹すいた、外に出るのだ！。

うっ…寝過ぎて、まだ頭がぼーっとしてるみたいなのだ！。

食べ物が欲しいのだー。

あれ？何か居るのだー。

美味しそうな人間なのだー、持って帰るのだー！

レナ視点

「う……」

起きてみれば、周りが真っ暗。

だが、周りが真っ暗と言っても、今までは近付いてみれば木なりなんんりの輪郭がぼんやりと解る程度だった。

しかし…今は本当に真っ暗、何も見えない。

簡単に言えば暗黒。

…動くのが少し不安だな。

と思った瞬間、暗黒が晴れた。

俺の目の前には、チルノと同じくらいの高身の女の子が居た。

ただチルノと違うのは、彼女は金髪で、服装は黒をメインとしていることだ。

「君は…？」

見知らぬ顔だったので、彼女について情報を集めようとしたが…

「お前は食べてもいい人間か？」

それがこのザマだった。

「食べちゃ駄目。」

即答です。

食べられるなんて嫌だ。

「じゃあなんか食べ物頂戴。でないとお前を食べちゃうぞー！」

流石に食べられるのは嫌なので、俺は制服のポケットに突っ込んでいたチョコレートバーを一つ、彼女に渡した。

というより自分を強く見せようとしているのか、怪獣みたいに「がおー」って両手を上げている。なんか可愛い。

…それにしても、幻想郷に入ってからずっと思っていたのだが。

…美少女ばかりだな…

俺が元いた世界には、そんな美少女が溢れる程居るような事、なかった。

「これはなんなのだー？」

「チョコレートって言う食べ物なんだ。甘くて美味しいんだ。」

「…食べられないのだー！」

あ、包装のまんまじゃないか。

俺はチョコレートの包装を開け、中身を彼女に渡す。

「…これ、食べられるのかー？」

彼女は注意深くチョコレートを見つめる。

「大丈夫だよ。かじってみな。」

彼女は恐る恐るチョコレートをかじった。

「…甘いのだー！」

どうやら口に合ったようだ、良かった良かった。

「ありがとうなのだー！」

「どういたしまして。」

…とりあえず誤解がないように言っておくが、俺はロリコンではない。
あくまでこれは小さい子を世話する保育士さんみたいにするべきで
とトラブルもない、そう考えた故の行動だ。

「そつえば、お前、名前はなんなのだー？」

「俺？彩崎玲奈って言うんだ。レナって呼んでくれて構わないよ。」

「私はルーミアなのだー、闇を操れるのだー！」

おおつ、最強キャラが降臨しました。

闇を操るなんて、絶対最強キャラだろ君は？

「ん…？闇？」

待て。今は夜だ。

不気味な程紅い夜だが、夜である事に変わりはない。

そして闇を操る少女…ルーミア。

まさか…彼女が黒幕か？

「なあルーミア…こんな空にしたのは誰か知ってるか？」

あくまで冷静に。

彼女であるという確証はないから。

するとルーミアは…

「私じゃないのだー。いくら闇を操ると言っても、こんな広範囲には出来ないのだー。せいぜいこちらへんー帯が限界なのだー。」
やっぱり。

よくよく考えてみれば、雲は向こうのうっすらと見える建物の方から流れている。

彼女がやったのなら、わざわざ外に出る必要すらない。
建物の中なり洞窟なりに隠れた方が安全だからな。

「でも私は見たのだー。」

「何を見たんだい？」

ルーミアから得た情報だがその話によれば、昼頃に紅魔館という建物：先程『うっすらと見える建物』と言ったあの建物から黒い筋が空高く伸びて行ったのだとルーミアは言っていた。

つまり：この異変の謎は紅魔館に行けば解る可能性が出て来た。いや、紅魔館に行けば何かしらの手掛かりは必ず掴める。
俺はそう確信し：行動に出た。

「…ありがとう、ルーミア。俺、紅魔館に行くよ。」

「駄目なのだ！紅魔館には吸血鬼が居るって話なのだ！レナが戦える相手じゃないのだ！」

さっきとは打って変わり、首を横に振りながら強く言うルーミア。

「…けれど、俺がやらなくて誰がやるんだ？俺がやらなきゃ…助けられるものも助けられない。やらなくて後悔するんならやって後悔したい。」

「…」

ルーミアが黙る。

彼女がここまで言うのだから、紅魔館に居る吸血鬼とやらは本当に強いだろう。

…俺には分が悪過ぎる程に。

でも、俺は行かなきゃならない。

霊夢に頼まれたんだから、死ぬにしろ死なないにしろ、やれることは全力でやるのが筋だ。

「…解ったのだ。そしたら、これを持ってくのだ。」

そうしてルーミアは俺に黒い何かを渡した。

…このつくり…ネックレスだ。

真っ黒い、十字架ロザリオのネックレス。

「これは…？」

「お守りなのだ！これを持ってれば、危なくなっても守ってくれるのだ！」

「…サンキューな、ルーミア！」

とっても優しいな、ルーミアは。

「もうひとつ教えるのだ！『メイド』には気をつけるのだ！」

メイド…？まあ、あの建物は大きそうだし、メイドなり執事なりが居てもおかしくはないだろう。敵になる可能性も、十分にある。

「…解った！行ってくる！」

「いつてらっしやいなのだー！」

俺はルーミアと別れ、紅魔館へと先を急いだ。

？？？視点

「美鈴^{めいりん}、起きなさい。」

私はいつものように、門に居る彼女を起こす。

「ふあああ…：…どうしたんですかあ？」

またそんな寝ぼけ眼で…よっぱど寝るのが好きなようね。でも、寝るのはそろそろ止めて欲しいわ。

「敵が来るわ。誰も通さないようにと、お嬢様が…！」

「お嬢様が？…相手はよほどの手慣れなのですか？」

彼女は急に警戒心を強める…おっとりしてるふりしてやる時はやるから信頼出来る。」

「ええ。最悪、博麗の巫女とあの魔法使いが来ると思われるわ。今の内に準備して、美鈴。」

「かしこまりました！」

彼女は精神統一を始める…ないとは思っけど、寝てしまわないように観察はしておこう。

お嬢様が言っていた「生ける骸骨」…この言葉の意味を、私は確かめたい。

仮に博麗の巫女でもなく、あの魔法使いでもないなら、この紅魔館に来る侵入者は何者なのだろう？

????.視点

「レミィ、もう気付いてるわよね？」

「ええ…此処に来るのは博麗でも、あの泥棒でもない…感じた事のない靈力ね。」

やはり、私の読みは当たっていた。

今回来るのは博麗でも、泥棒魔法使いでもない。

「生ける骸骨」…私が見たビジョン。

それは、パチエの魔力感知能力のおかげで確定した。

…誰かが死ぬのかしら？

いや、パチエにも、美鈴にも、咲夜にも死は見えなかった。

だとするなら…彼女？

いや、彼女は強い、こんな事では死なないだろう。

「…何なのかしら…」

この計画に唯一の不安があるとしたら、それはこれから来る侵入者の存在。

誰が来ても良いように、出来る準備は全てしておかなくては。

…場合によっては、彼女の解放もできるように。

#2…宵闇の少女（後書き）

次回

「#3…立ちはだかる門番」

レナ、あの人と戦う！

…お楽しみに！

#3…立ちはだかる門番（前書き）

今回はあの門番さんが出ます！

* 2011 / 6 / 2 / 一部修正しました。

#3…立ちは大なる門番

レナ視点

ルーミアと別れ、紅魔館に近づくにつれて、何とも言えない不気味なものを感じるようになった。

背筋が、冷たくなる。

だが、こんなものに負けてはいられない、俺は不気味さを振り払うように足を動かした。

…着いた。

深紅の、西洋の城を思わせるようなその様は荘厳、その一言に尽きる。

案の定、この城の真上から雲は流れていた。

「ここか…」

俺は入口の門、固く閉ざされた門に近付いた。

…？

人が…居る？

座っているようだが…？

門に近付くにつれ、その人の正体が解ってきた。

色あせたような緑のチャイニーズドレス。

その長い緋色の髪から、どうやらこの人は女性のようだ。

それにしても…

胸、でかいなあ…

身体のラインがはっきりするドレスを着ているからなのか、胸がやたらと強調されているようにも感じる。

…ああそうだよ、俺だって男だよ！

だが、さっきから死んだかのように動かない…え？死体ですってオチじゃないよな？

「あ

石に躓きました。

「うお、おっととととと、うわあ！」

かっこ悪い、こけてしまった。

…？

なんだ、この柔らかいのは？

「…ん…」

このすげえ色っぱい声…

！？

ああああああああ！！！！！！！！

俺、やらかしてしまいました。

言いたくはないが、言わなくては。

こけたらチャイニーズドレスの女性に倒れこんでしまい、しかも右手が女性の胸をむぎゅっと掴んでました。

…俺、人生終了だわ。

「ううん…？」

そして、テンプレですが女性が目を覚まし…

「…私が寝てる所を襲おうとするなんて…」

「待ってくれ、これは」

「問答無用っ!!」

腹部に鈍痛が走りました…膝が入ってる…

「がふぁっ!!」

これは自業自得だね。

いくら事故とは言え、やって良い事と悪い事があるよね。

…今回の場合、間違いなく後者だよおおおおお（涙）

「そんな狼みたいな獰猛な変態には天誅を与える!」

うん、このままじゃ殺されてもおかしくないレベルだよね。

相手はめっちゃくちゃ怒っていらっしやります。

「そこの変態、名を名乗れ!」

ついには変態で統一されてしまいました。…全面的に俺が悪いけど。

「俺は彩崎玲奈。」

「私は紅美鈴!変態…覚悟!」

名乗った意味がな「ぐべらっ!!」

顔、殴られました。

親父にはぶたれた事はあるが殴られた事はない。

それにしても…凄く痛い。

それに、心なしか回復速度が遅い気がするが…？

「虹符『彩虹さいじゆうの風鈴』！！」

え？美鈴の姿が…消えた？

「後ろかどわがしよ！！」

後ろを向いた瞬間、勢いつけたと思われる回し蹴り。

威力高すぎ…身体が飛びました。

うう…しかも脇腹直撃であれば骨が数本逝ってしまった。

そして、俺は自分の能力の弱点に気付く事となる。

普段なら、最初の膝蹴りの打撃によるダメージがもう回復していてもおかしくないのに。

未だに回復していない。

寧ろ、攻撃を受け続けていてさらに悪化している。
切断や火傷程度ならすぐ癒えるのに…なぜだ？

「まだまだあ！！」

その間にも、美鈴の猛攻は続く。

両肩、脛、鳩尾に数発の殴打、そして腹部に蹴りで1セット。解っているのだが、かわす暇がない。

そのセットを数回受けているうちに、俺は気付いた。

殴る、蹴るなどと言った打撃の真の意味は、外傷ではなく『内側にダメージを与える』事。

つまり、俺の能力の弱点：それは、「打撃に因る傷に対しての回復速度は、切断や火傷と言った外傷に対するそれよりはるかに遅い」。確かに、始めて幻想郷に来た時も、骨折は一日寝ていなければ治らなかつた。

…ちくしょう、美鈴は俺にとって分が悪い相手だつて事か。

「動きが鈍いよ！はあっ！！」

さらに腹部に痛みが走る。

「っ！！」

僅かに痛みのみあまり、相手から意識を離してしまった。

「そろそろフィニッシュ行くよ！」

ガンっ！と俺の目の前で火花が散った。

これは…掌底か。

顎に一撃を加え、相手の身体の自由を奪う技だ。

「彩符『彩光乱舞』！！あたたたたたたたあ！！！！！！」

目にも止まらぬ速さで殴打、殴打、殴打！！

「ほわったあ！！」

鳩尾を蹴られて吹っ飛び、俺は木にぶつかり…意識が途絶えた。

美鈴視点

あの玲奈って人…よくここまで耐えられるなど正直驚きました。

『彩虹の風鈴』をもろに食らって気絶しないなんて…私、身体が鈍ったのかしら？

「違うわ…貴女が鈍ったんじゃない、彼がそこまでタフだったと言
う事よ。」

「咲夜様…見ていたんですね。」

メイド服を着た女性…十六夜咲夜様こやひご ねくぜが見ていたなんて…恥ずかしい
です。

「お嬢様が侵入者の事を気にかけていらしたから、どんな者か見たかったけど…タフなだけみたいね。」

「でも、タフなだけじゃ私にスペルを2回も使わせませんよ？彼には何かあります。」

かわすんならまだしも、直撃ですからね…何かないはずがありません。

「…美鈴、彼の気、見える？」

「はい…まだ生きています。」

私は生き物の気を見ることができません。『気を操る程度の能力』の応用です。

「あの美鈴のスペルを2回も食らって、まだ生きているなんて…これはお嬢様に報告しなくては。美鈴、彼を縛っておいて。私はお嬢様にどうするか聞いてくるわ。」

「かしこまりました！」

もしかしたら、この人は良い門番さんになれそうです。

???視点

「お嬢様…侵入者を捕えました。」

完全勝利の報告、だが…

「捕えた？ということは…まだ生きているの？」

排除とまで至っていないとは。
殺害

「はい。美鈴が侵入者を食い止め、捕えました。」

…美鈴が手を抜くなんて考えられない、全力で食い止めたのだろう
…だとしたら、その侵入者…

「咲夜。今すぐその侵入者を此処へ。確かめたい事があるわ。」

やはり…「生ける骸骨」と関係がある。

「かしこまりました。」

咲夜が消えた事を確認し、私は言葉を漏らした。

「ただの侵入者ではなさそうね…博麗と同等に面倒かもしれない。」

〈今回の戦績〉

V S 美鈴…敗北

死亡回数…数百回と思われる（とある烏天狗からの情報提供、彼女

いわく「殴打の一発一発が昏倒レベル、それを数百発も食らってよく死んでないね」とのこと)

#3…立ちはだかる門番（後書き）

次回

「#3・5…その名はレミリア・スカーレット」

美鈴に負けたレナが運ばれた先は…！？

そしてまさかの展開に！

お楽しみに！

#3・5…その名はレミリア・スカーレット(前書き)

原作とは少々展開が変わってきます…ご了承下さい。

2011/6/16、一部修正しました。

#3・5…その名はレミリア・スカーレット

レナ視点

「う…ぐ…」

目を開ければ、そこは建物の中だった。

やたらと綺麗な部屋…と言えるのか、これは？

部屋と言っよりホールだぞ、これ。

天井にはシャンデリア、床のど真ん中には紅いカーペット。

コンクリートか石かは解らないが、冷淡な冷たさが頬に伝わる。

それに、どうやら縛られているようだ、身体が自由に動かせない。

なんとか体勢を変えて座り込んだ、その時、

「お目覚めかしら？彩崎玲奈。」

「！」

声のした方に目を向ける。

一人の少女が、豪華な装飾のなされた椅子に座っていた。

…だが、俺の直感が言っている。

「こいつは危険だ」

見た目はパジャマでも着ているのかと言いたいようなピンクのランジェリー姿だが…

その深紅の眼は、餌を目の前にした獣のような眼だ。

帽子に隠れて見辛いが、眼と対照的な水色の髪。

そして、もっとも目を引くのは…

「翼が…生えてる…!?!」

「あら、もう気付いたのね。そうよ、私は人間じゃない…正統なる吸血鬼の末裔よ。私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ。」

紅魔館の主…ということとは。

「空をこんなにしたのは、あんたか!」

「そうよ。私は夜にしか動けないから、幻想郷を常に夜にしてしまえば私は自由に動けるわ。」

レミリアは悪びれた様子もなく微笑みながら話す。

…こいつ、真性の悪者だ。

「…けど、こんな事をしたら、一生朝が来ないじゃないか!あんたはあんまりにも自分勝手過ぎる!周りの事を考える!」

瞬間、レミリアの目が細くなった。

『こいつ、何を訳解らない事をほざいているのか』と言いたげに。

「…人間風情が何言ってるの？よく私に『自分勝手』なんて言えたものね…貴方、殺すわよ？」

「…殺してみるよ。」

…相手の攻撃がどんなものか解らない。
これは賭けだ。

レミリアの攻撃が打撃なら…俺は間違いなく死にかける。
死にはしないだろうが…きっと復帰するのに時間がかかるだろう。

だが、こいつに媚びるのだけは、絶対にごめんだ。

「ほう…私に恐れを抱かないか…面白い。その意思、何処まで持つか試させて貰う！」

レミリアは立ち上がり…右手の人差し指を立てた。

そして、人差し指をクイと俺の方に傾けた。

俺の腹から血が舞い、同時に引き裂かれそうな痛みが走った。

「ぐうっ！…！」

なんだ…レミリアは何をした！

「その顔を見ると、どうやら私の魔力は解らないみたいね。…まあ、

貴方はもうすぐ死ぬ。…咲夜、彼を牢獄へ。」

「かしこまりました。」

俺は抵抗をしたが、どうやらきつちりかつちりと手枷もされている
ようで、まともな抵抗すら出来ずに運ばれて行った。

それを良い気味だと思つめていたレミリアは再び座り、にやりと笑
った。

「これで不確定要素はなくなった…後は時を待つのみね。」

「おい！放せ！俺は…！」

俺は騒ぎながらじたばたする。

我ながら往生際が悪いなと思う。

「しっ！貴方、死にたいのですか！？死にたくなければ黙って運ばれて下さい！」

「…は？」

どうにも話が見えてこない。

『死にたくなければ黙って運ばれる』って、どういう事だ？

残念ながら、俺を持っている咲夜と言う人の顔は見えない。

だが、服装や声などから予測すると…女性、しかも俺と同年代の女性と思われる。

しかも…メイドだ。

ん？メイド？

待て、そういえばルーミアが『メイドには気をつける』って言ったな。

…待て待て待て！俺、死ぬのか！？

死にたくないよー！

精いっぱいじたばたして抵抗をすると、咲夜とか言う人が怒ったように声を尖らせた。

「じたばたしないで下さい！私は貴方の味方です！」

…ふえ？

ポカーンとしている内に、俺は牢獄の中に入れられたところだ。

既に中には先客が居た。

残念だが、身体が少し見えるだけで先客の顔は見えない。

「…？咲夜、この人、誰？」

先客はどうやら咲夜という人を知っているようだ。

「…彩埼玲奈という名です。妹様…彼を頼みます。」

「わかった。咲夜も頑張つてね！」

「ありがとうございます。」

そうして咲夜…さんでいいのだろうか、彼女の足音が遠ざかる。さっきの声からして、先客はかなり若い女性…場合によっては子どものようなものだ。

「ねえねえ、いつまで寝てるの？早く起きて。」

俺は無理矢理起こされた。

「あ！縛られてたのか、今なんとかするからね！」

ちようど先客の姿が見えない。

が、すぐに手枷が外れ、俺は自由になった。

「こっち向いて！」

と同時に顔を強制的に動かされ、俺は先客の顔を初めて見る事になった。

…真っ赤、澄んだ真紅の瞳。
さらりとした金髪。

そして、笑顔から零れる牙。

その服装はどことなくレミリアに似ていると思う。

翼は…違いすぎるな。綺麗な飾りになりそうだが、飛べるのかこれ？

「はじめまして！私、フランって言うの！よろしくね！」

「あ、ああ…よろしく…」

少女どころかもはや幼女だな。

俺はフランの余りの幼さに驚いた。

と同時に疑問が生まれた。

…彼女は何者なんだ？

「私ね、ずーっと此処に閉じ込められてて…さみしかったの。」

「誰がそんな事を…？」

すると、フランはこう答えた。

「お姉様。レミリア…」

「！…！」

レミリアは妹まで無下にするのか！？

…！…！

「ということは…フラン、君は…」

「お姉様…レミリアの妹なの。」

フランも吸血鬼、なのか。

「くそ…！レミリアの奴、妹まで閉じ込めやがって、何をしたいんだ！」

目的の為なら手段は選ばないのか、レミリアは！？

「わかんない…でも、なんかすごく皆が困るような事をしようとしているのは、なんとなくわかる。」

やっぱり…止めなくては！

「ここから出よう、フラン！レミリアを野放しには出来ない！」

「でも…これ。」

フランは鉄格子に触りながら続ける。

「すっごく堅いの…出られないよ。」

「俺に任せろ！っ！！」

俺は鋭い痛みを堪え、痛いと感じた腹部を押さえた。

手が、血に染まった。

傷の治りが、明らかに遅くなっている。

…疲れているからなのか？

「待って！咲夜が私にくれたの！」

フランはがさがさとかを探し、それを取り出した。

「これ…怪我したら飲んでって、咲夜が言ってた！」

俺に渡される透明の瓶。

中には、緑の液体が入っていた。

俺はそれを口に流し込んだ。

「…！？」

今まで感じていた痛みが、全て消えた。

ついでに疲れも取れ、俺は元気になった。

鉄格子は見事に熔け、通れるようになった！

「行こう、フラン！」

「うん！」

俺とフランは牢獄を飛び出し、反撃の狼煙を上げた。

#3・5…その名はレミリア・スカーレット（後書き）

次回予告

「#4…知識の賢人」

あの人が登場！

というか不死×きゅっとしてドカーンって最強過ぎやしないか!?

…とにかくお楽しみに！

#4…知識の賢人(前書き)

今回と次回で仕込みをします…

というわけで今回は軽めです。

*2011/6/16、一部修正しました。

4…知識の賢人

―咲夜視点―

遠くで牢獄が開けられた音がした。

私もついに、行動の時ね。

「咲夜様、侵入者及び妹様が牢獄を出ました！どうなされば！？」

私の部下のメイド達が慌てる。

「侵入者と妹様は牢獄の付近にまだ居るはず、探して侵入者は捕えなさい！私はお嬢様の所へ向かうわ！」

「かしこまりました！」

ダダダと駆けていくメイド達。

あくまで自然に…自然にお嬢様の回りの壁を払う。

今回のお嬢様のやり方には、私は反対の立場だ。

幾ら理由があるとは言え、あまりにも危険で横暴過ぎる。

だから私は気付かれないようにお嬢様の警備を薄くする。

…玲奈、そして妹様…これが私ができる最大限の事です。

どうか…お嬢様を止めて下さい。

ーレナ視点ー

「そこのけそこのけフランが通るぞ！」

案の定、メイド達が俺達を捕えに来た。

だが、弾を扱えないメイドに俺達は止められない。
全員何も出来ずに吹っ飛んで行く。

…まあほとんどは…

「禁忌『クランベリートラップ』！」

「ぎゃあああ！！！」

フランの圧倒的な力のおかげなんだけどね…

「フラン…彼女達、大丈夫なのか？」

命的な意味で。

「うん、加減はしてるよ！」

…にしてはメイド達は床に埋まってたり壁に刺さったりしてるんだが…見なかった事にしておこう。

「それにしても、レミリアは何処に…？」

ただっ広い建物である以上、レミリアが何処にいるのか見当も付かない。

「わからないよー！」

「そりゃそうだ…ならっ！」

俺は壁に向かって弾を放つ！

「壁壊しまくれば、いずれ見つかるさ！」

「そうだね！禁弾『スターボウブレイク』！」

どがーん！！

…壁が、30枚程粉碎されました。

な、何が起きたの…？

「どうしたのレナ？行こうよ！」

「お、おう…」

フランを敵に回さなくて、ほんとに良かった。

まあ、穴が空いた壁をくぐり抜け、俺達は大きな扉の前に着いた。

「うりゃー」

同時に扉を粉碎する俺とフラン。

…なんか俺、力が強くなった？
そんな気がする。

「…あれ？レミリアいなくね？」

「いないねー！」

明らかにレミリアは居なさそうな部屋。

というか、この本の量…

見渡す限り本、本、本という所を見ると、此処は図書館か？

「レミィは居ないわよ」

何処からか声が響いた。

「あ、パチュリーが居るー！」

声の主を、フランは知っているようだ。

「パチュリー？」

「うん！お姉様のお友達なの！」

レミリアの友達と言うのなら、レミリアの弱点を聞き出せるかもしれない。

「パチュリー、あそぼー！」

「へ！？妹様が居るの！？」

なんか慌ててる。

「遊ばないと本を焼いちゃうぞー！」

「待って！今行くから！」

と凄く慌てた様子で文字通り飛んで来た少女。

淡いピンクのネグリジェのような服を着た、三日月の髪飾りを付けた少女。

「レナー、この子がパチュリー！」

「あー？この人って…侵入者じゃ…」

パチュリーは驚いた様子で恐る恐る聞く。

「咲夜が『レナと一緒になら誰とでも遊んでいい』って言ったのー
」！」

「…やられた…」

パチュリーは溜息をつく。

「…此処じゃ本が燃えたりしちゃうから、場所を変えましょう。」

「いいよー！」

…やばい、俺、空気です。

「では、行きますよ…?」

パチュリーが手にある本を開いた瞬間。

「禁忌『クランベリートラップ』！」

「きゃあああ！先制攻撃なんて!？」

あんな威力の攻撃喰らって叫んでるだけとは…恐るべし。
弾の量が半端ないんですが、これは何？

「まだまだ行くよー！禁弾『スターボウブレイク』！」
続いて虹の弾が…爆発。

「うにゃあああん！」

叫び声がおかしい気がしますが…気のせいだろう。

「禁弾『カタディオプトリック』！」

屈折する弾が、パチュリーに直撃！

「いやああああ…！」

で、ぱたりと倒れた。

…ねえ、これだけで戦いが終わるなんて…
フランは何処まで強いんだ…？

黒焦げになったパチュリーをつつつくフラン。

「流石レミイの妹ね…強すぎ…ます…」

「やった パチュリーに勝ったー！」

「強え…マジ強え…」

最強キャラだね、フランは。

やばいわ、RPGで言う所の『主人公より強い仲間』だよな、これ。

「…で、でも…あなた達は…彼女には…勝てない…」

「？」

「レミィに挑む以前の問題よ…『完全で瀟洒』な彼女には…勝てない…」

完全で瀟洒…

どういうことなんだ？

ーレミリア視点ー

「お嬢様！パチュリー様が…！」

そうして咲夜に耳打ちされ、衝撃の事実を知らされる。

「え！？」

これは予想外だった。

あのパチエが…突破された!?

「…もう一つ、お伝えしないといけない事が…」

「何？」

続いたのは、最悪の展開を招くニュース。

「妹様が牢獄を出ました…! どうやらあの侵入者が手を貸したよう
で…!」

「!?!」

あの男…! やってくれるじゃない!

私は即座に手を打つ事にした。

「咲夜! 貴女は侵入者を! 私はフランを止めるわ!」

「かしこまりました!」

…まさか、フランを味方にするなんて…あの男…玲奈は何をしたの
!?

「くっ…それよりフランよ! 彼女は何をするのか…解らない…!」

場合によっては、この紅魔館が壊れる。

…なんとしてもフランを止めなくては…!

#4…知識の賢人（後書き）

次回予告

「#5…完全で瀟洒な従者の裏切り」

仕込みその2ですが、この仕込みがないと#6が上手く行かなくなるので…

もう少しお待ち下さい。

#5…完全に瀟洒な従者の裏切り（前書き）

瀟洒と書いて「しょうしゃ」と読みます…念の為。

仕込み？です。

PV10000突破…お、大台行っちゃった…

ありがとうございますm()m

*6/16、一部修正しました。

#5…完全に瀟洒な従者の裏切り

ーレナ視点ー

「禁弾『スターボウブレイク』!」

どがーん!

…さつきからフランはどんどん壁を破壊しているが…紅魔館は大丈夫なのだろうか?

と。

(…玲奈。私は手抜きで貴方と戦います。どんな手でも良いので私を倒して下さい。)

「!?!」

なんか耳元で声が聞こえた。

「うん!わかった!」

フランも誰かと話してるみたいだし…

だが、何となく声の主は解る。

…彼女か!

瞬間、思った通りの声の主が現れた。

メイドだ…

けれども他のメイドと違うのは、手に何本ものナイフを持っている事だ。

「…始めまして、で通しますよ。私は十六夜咲夜。この紅魔館のメイド長を務めております。」

ぺこりと頭を下げ、白銀の髪が揺れる。

こちらを見る目は透き通った明るい青色で、頭には白いカチューシャ。

全体的に整ってる体型だ。

スリムとはこの事を言うのだろうか。

「貴方方はお嬢様を困らせた…故に死んだ（ふりを）してもらいます！」

『ふりを』だけ小声だが、ナイフが飛んで来た！

「咲夜！、私、お姉様の所に行くよー？」

「どっぞー！」

あ、フランが飛んでった。

「…玲奈、貴方にはお嬢様を止めて貰いたいのです…でも、お嬢様は生半可な力じゃ止められない…貴方の力、私が確かめます！」

大量のナイフが、俺に飛ぶ！

いやいや、何処から出してるの！？

けど、驚いてる暇はない！

「…解った！」

ナイフの間を縫い、俺は咲夜の懐へ！

「靈掌！」

咲夜に拳を振るう！

「甘いですよ？」

拳は咲夜の体術に流され、お返しと言わんばかりに蹴りが入る！

「ぐっ！」

だがこれは美鈴の蹴りに比べりゃ優しい方だ、俺は少しよろけながらも咲夜の右腕を掴む！

「くっ…！」

「お返しだっ！」

咲夜に弾をぶつける！

「貴方は一発一発の弾の威力が高いみたいですね…その分、連射には向かないようですよ。」

「すっげえ、その通りっす、咲夜さん。」

わぁーお、洞察力半端ない！

「…ですが、それだけではお嬢様を倒すのは無理です。力の使い方…見せて差し上げましょう。」

そうして咲夜さんは一枚の札を…

つて上着と肌の間から（具体的に言えば胸から）出さないで！目のやり場に困ります！

「幻世『ザ・ワールド』」

なんだあの札は…

あれ？俺、動けないぞ？

「ザ・ワールド！時よ止まれっ…！」

しかもどこかで聞いた事ある台詞。

目も動かせませんし、視界も変えられないので第三者視点に任せよう。

作者、頼んだ！

ーらぐな視点ー

なんか頼まれた！？

というわけで文々。新聞下っ端記者にさせられた私が実況します！

えーっとですねー…

レナが止まっています。

咲夜さんが居ません。

…ついでに私も動けません（涙）

咲夜さーん、貴女だけが頼りですー！

―咲夜視点―

…はあ、玲奈は良いけどあの記者…使えないわね。

というわけで私の能力について説明しますね。

私の能力は『時間を操る程度の能力』…その名の通り、時間の進行を遅らせたり、進めたり…止めたり出来ます。

ただ、時間を遡る事だけは出来ません。

こんな事が出来たら間違いない最強キャラになってしまいますからね。

で、某吸血鬼よろしく最大？秒しか時を止められないなんて事はなくて、私の場合…

半永久的に止められるのです。

なので彼みたいに『？秒止めてボコボコにしようと思ったら逆に時を止められてボコボコにされた』なんてことはないのです。

で、時を止めて何をするか…それは。

…ナイフを回収するのです。

私、実はナイフを常に398本持ち歩いているのです。

…冗談です、本当は200本です。

弾幕勝負では弾代わりにナイフを投げるのです。ところが…ナイフは200本しかない。

というわけで時を止めてナイフを回収しつつ…
相手のそばにナイフを置きます。

するとどうなるか、ご覧に入れましょう。

「そして時は動き出す。」

「ぎゃあああああ！！全身にナイフが刺さったー！！」

…こうなるのです。

さて、時が動き出したのでそろそろ玲奈に視点を戻して貰いましょう。

ーレナ視点ー

「そして時は動き出す」

瞬間、俺の回りにナイフが…！！

「ぎゃああああ！！全身にナイフが刺さったー！！」

全身血だらけ、まるでバイオ○ザードのゾンビ状態に…俺、死なないから本当にゾンビになるぞー！

「…貴方、スペルカードはお持ちで？」

「スペルカード？何それ？」

聞いた事ありません。食べ物…ではなさそうだ。

「札なのですが…」

「あ、これ？」

霊夢から貰った無地の札…これがスペルカードなのか？

「それです。一枚持って念じてみて下さい。」

一枚持って…念じる。

え、何を念じればいいの？

「もういいですよ。」

なになに…？

砲符『エキセントリックバルカン』？

「それがスペルカードです。実際に使ってみて下さい、書いてある言葉を唱えるだけで構いません。」

よく解らんが、やってみよう！

「砲符『エキセントリックバルカン』！！」

と俺が叫んだ瞬間…

「きゃああああ！！」

咲夜さんに直撃。

な、何が起きたの！？

「あ、貴方のスペルカード…かわしきれない…！不規則に跳ねる弾なんて…聞いた事…！」

なんか凄い技…みたいだ。

「こ、これなら…お嬢様も…倒せるかもしれない…」

「え？そんなに凄いの？」

「凄いも何も…かわしづらさでは随一だと思います。」

…ま、まあ、スペルカードを入手した事だし、レミリアを倒しに行きますか！

…え？勝てる算段はあるのかって？

そんなのないよ！あるわけないじゃん！
でも、レミリアを止めなきゃまずい気がするのは間違いない！

俺と咲夜さんはレミリアの所に向かった。

#5…完全で瀟洒な従者の裏切り（後書き）

次回予告

「#6…永遠に幼い紅き月【前編】」

ついにレミリア戦！

レナはどうやって彼女に挑むのか！？

お楽しみに！

#6…永遠に幼い紅き月【前編】（前書き）

紅魔郷編クライマックスに突入です！

*2011/6/16、一部修正しました。

#6…永遠に幼い紅き月【前編】

俺と咲夜さんはレミリアの居場所を探していた。

「咲夜さん！レミリアの能力を教えてください！」

そう俺が言うと、咲夜さんは少し黙り…口を開いた。

「お嬢様の能力は『運命を操る程度の能力』…他人の運命もお嬢様にかかれば小石のようにどうとでも転がせるのです…例えば他人が死ぬ運命になかったとしても、お嬢様の前では…」

なに、じゃあ俺も死ぬのか？

運命操るって、そういう事だろう？

「そう言えば、玲奈の能力は何なんです？」

「俺の能力は『己の傷を癒す程度の能力』…切断やら火傷とかの外傷ならほぼ一瞬で治るが…打撃にはてんで弱い。というか普通だ。」

『普通』と言うのもおかしいかも知れないが…骨折が一日で治るくらいだし。

「なら勝てるかもしれません…！お嬢様は主に魔術や切断武器を用いて戦います。打撃は使いません！」

マジっすか！勝てるんじゃないやね、俺！？」

そう思っていると、咲夜さんがある扉の前で止まった。

「ここです…！」

「おっしやあ！」

俺は扉を蹴飛ばし、中に入った…

そこには。

「やはり咲夜、貴女が根を回していたのね。」

「お嬢様…！」

レミリアが居た。

いや、そんなことはどうでもいい。

それより…！

「フラン！大丈夫か！？」

「あ…レナ…ごめん…ちょっとやられちゃった…」

ぐったりとしているフラン。

…怪我程度で済んでるようだが、戦えそうにない。

「…咲夜、私がどんな性格か、解っているのよね？」

「…」

「…裏切り者には、死を。」

「危ない！」

「！」

さっき俺にやった事を…あいつは咲夜さんにやるつもりだ。
そう感じた俺は…

ブシュッ。

「玲奈！？」

「…大丈夫ですか、咲夜さん？」

「ええ…でも、貴方は…！」

「これくらい…どうって事ないですよ。」

咄嗟に咲夜さんの前に立った。

咲夜さんは大丈夫みたいだ、けど…

「右腕が…！」

そう、右腕が切断された。

「馬鹿ね。咲夜を庇うなんて事するから、貴方の腕が飛んだのよ？」

…黙れ。

「だいたい下等な人間が私に盾突く事自体おこがましい。そんな人間は死んでも構わないわね。」

…黙れよ。

「それに、よくも妹を誑かしてくれたわね…チリー一つ残さないで消してあげるから、感謝しなさい。」

「黙れ!!」

一瞬だけだが、周りの空気が凍りつく。

「!」

「レミリア…お前のやる事はただの独りよがりだ！俺はあんたを止める！死んでもな！」

「その傷で、私を止める？…面白い冗談ねっ！！」

レミリアが迫る！

「うらあっ！」

俺は左手で弾を放つ！

「片手間で私を倒すなんて甘いわ！」

なっ、腕からなんか出た！？

「そこ！」

左足に…刺さった！？

なんだこれ…爪！？

「よそ見なんて余裕ねっ！」

左腕が斬られ！

「…もうおしまいね。」

胸に、爪が。

グサツ。

…何だよ、俺、何にも出来ずに死んじまったのか？

…誰も、まともに守れずに。

思えば俺…自分で、自分の意思で何かを成した事はなかったな。

…周りに言われるがままだったな。

…けど、俺は…

「まだ、生きていたいな…」

…それはもう夢なのか。

『夢なんかじゃない』

…？誰だ？

『貴方の力…まだ不完全…強過ぎるが故に…制限されている。』

制限…されているのか？

『貴方はまだ死ぬべきではない。貴方は貴方の成すべき事をしなさい。それが貴方に出来る唯一の善行よ。』

私が力を貸しましょう…また会った時に返してくれればそれで構いません。』

おい、待ってくれ！君は誰なんだ！？

『私が誰かはまた会った時に教えましょう。』

そうして、目が覚めた。

「…さて、邪魔者も死んだ事だし、そろそろ貴女を殺しましょう。」

「…待てよ。」

「！？」

レミリアは感じた。

…死んだはずなのに…何故生きている！？

「…んで、腕返せや」

彼に引き寄せられるかのように切り離されたはずの両腕が動き…

くつついた。

「…まだ死に足りないようね…いいわ、何回でも殺してあげる!」

俺にはやる事があるんだ。止まる訳には行かないんだ。
だから…

「殺せるもんなら殺してみろよ」

レミリアが再び俺に迫る!

「見え見えなんだよっ!」

俺は爪など構わずにレミリアの腹部に霊掌をかます!

「うつ!」

「効いてるみたいだな!そこだっ!」

さらに足をかけ、転倒させた所に高熱の右手を!

「やられたままだと思うな!」

零距离で弾を放ち、距離を取るレミリア!

「くつつ!前が見えない!」

レミリアは弾を俺と、そして床にぶつけた…その時に舞った砂煙で、前が見えなかった。

それを好機と見たレミリアは、最大火力の攻撃を仕掛ける事にした。

『神槍』と名のつく最強の槍。

それを以て相手を消し去ろう、そう考えたのだ。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアの魔力が、右手の人差し指の先に集まる。

集まった魔力は、自然にその姿を成した。

紅い魔力のベールに覆われた、黒き槍。

神話にも記されたその究極の槍…矛先はレナに向いていた。

「…死になさい。」

ぶんっ！！と投擲された槍は空気を斬り裂き、レナの身体を貫く！！

「…勝ったわね。」

槍が貫いたのは…

レナの心臓。

「いくら傷の回復速度が異常でも、心臓を貫けばそんな事関係なくなる。…貴方は私が定めた運命通りに…」

レナの身体がバランスを失い…

「死ぬ。」

ドサリと音を立て、倒れた。

#6…永遠に幼い紅き月【前編】（後書き）

後編に続きます！

#6…永遠に幼い紅き月【後編】

レナの身体が、地に伏した。

「玲奈！」

咲夜の叫びが響く。

「全く…人間風情が私に本気を出させるとは…良い運動になったからそれでいいけど。」

レミリアの顔には「やっと死んだか」という安堵の表情が見える。

「…おい。」

咲夜とフランはある異変に気付いたようです。

ところが、レミリアは浮かれていたのか異変に気付いていない様子。

「レミリアの詭弁を暫くお楽しみください」

「それにしても、博麗と言い泥棒魔法使いと言い、拳句の果てにはなかなか死なない人間なんて…人間は超人の集まりなの？どうせ心臓を一刺しであっさりと死ぬのに…まあ、そんな事しなくても私の

確かに、レナの服の胸部にはぼつかりと穴が空き、血に染まって藍色の制服が黒っぽくなっている。

「俺の能力は『己の傷を癒す程度の能力』…傷があつと言つ間に治ります。おしまい。」

「それじゃ説明になってませんよ…」

咲夜が突っ込む。

「いやー、当の俺もなんで生きてるのかよく解らないんだ。奇跡？」

「はあ！？奇跡なんて、私の前では起きないはず！なのになぜ…！」

「まあ生き返りましたんで、もう一度ぶっ飛ばしてやるよ！」

「くっ…！何回でも殺してあげるわ！」

こうして、レミアVSレナ、再開。

??? ?視点

このままではなんで彼が蘇ったのか全く不明なので、私が解説します。

…え？私は誰かって？今は聞かない方がいいですよ。

さて、彼、彩埼玲奈の能力は『己の傷を癒す程度の能力』ですが、
今までは「外傷及び骨折など」しか治りませんでした。
それこそ心臓貫いたり首を落とさない限り死にません。

…でも、このままでは彼が死んだとして、彼には未練が残ってしま
い、成仏が出来ません。

というわけで、彼の能力にかけていたりリミッターを一個外しました。

それは『超速再生能力』…よく少年漫画にありがちなアレです。

ただ、彼の場合…『身体から臓器が離れた場合のみ』発動します。
今回レミリアは、心臓を「身体から槍によって」引き離してしま
いました。

握りつぶしたなら死んだんですけどね。

というわけで、彼の心臓は元通り。

え？じゃあさつきレミリアは心臓を爪で突き刺したんだけど、あれ
じゃ死なないのかって？

…死ぬわけがありません、なぜなら…

私は彼に力を貸しました。その力のおかげでしょう。

レナ視点

目覚める前に、謎の声の主はこんな事を言っていた。

『私は貴方に力を貸します。それは貴方のもう一つの力の目覚めの手伝いになるでしょう。』

どっちら、それのおかげで…

弾幕の乱射が出来るようになりました。

今までほんの2、3発が連射の限界だったのに…

今やばかばか撃てます。なんじゃこりゃ。

「おらおらおらあ…！」

「くっ！何なのこの弾の量は！」

おお！レミリアを押ししている！これはマジで行けるんじゃないか！？

「舐めるな！天罰『スターオブダビデ』…！」

…まあ、そんな上手くいきませんよね…

レミリアのスペルカードの威力は半端ない。
地面砕けてますもん。

『幻想 し』とかあれば別だけど、俺は上 さんじゃないです。

…というのは今までの俺。だが、今の俺にはスペルカードがある！

「砲符『エキセントリックバルカン』…！」

不規則に跳ねる光弾！

「なっ！？スペルまで使えるの！？」

レミリアは慌てて肘を張り、防御の体勢を取る。

「甘いぜ、レミリア。」

「何…？この体勢の何処に不備があるのよ？」

「後ろ、ガラ空きだ。」

「！？」

レミリアが後ろを向いた瞬間。

弾が、直撃した。

…なぜか俺に。

「ぎゃあああああ！！！！」

「え？何が起きたの？」と状況が読めないレミリアに…
今度こそ弾が直撃。

「うわっ！どう放てばこんな時間差攻撃が出来るのよ！」

「知るか！」

多少背中が痛いけど、俺はレミリアに迫る！

「霊掌！！！」

腹に入った！！

「うっ！うっ！」

「まだまだ行くぜ！無駄無駄無駄無駄あ！！！」

…うん、さっきの咲夜さんのスペルカードで思い出したんです。

やってることは霊掌の連打だけだねっ！

「ふざけるな！『紅色の幻想郷』！！！」

零距离の弾かよ！？

「うわあ！！」

爆風が駆け巡る。

「うっ、これで…私の勝ち…よ…」

レミリアは息が上がっている。

「まだ…俺は死んじやいないぜ？」

「！！」

相手から見れば、何度でも立ち上がる様は焦りと恐怖を感じさせるのだろう。

レミリアの顔は少し青くなっていた。

「ふ、ふざけるなっ！！いい加減死ね！！」

弾が俺の身体のおちこちに当たるが…こんなもの、もう怖くない。

「お前は！！」

弾の量が、レミリアに近付くにつれて増していく。
視界はもう紅の弾だらけだ。

「何回死ねば！！」

前に進むのも一苦勞。俺は、一歩一歩レミリアに近付く。

「気が済むのよっ！！」

腹部にもろに入った弾。

俺はよろけて地に伏した。

「はあ…はあ…」

が、そこで攻撃を止めたのが運の尽きだったな、レミリア。

がしっ!!!

「ひっ!?!」

俺はレミリアの足を掴み、余裕に見えるような笑みを浮かべてこう言った。

「100万回死んでも生き返りますが、何か?」

「わ、私が…」

俺はレミリアに向かって最大パワー、ありったけの力を乗せた霊掌を。

「高貴な吸血鬼の末裔である私が…」

この一撃ですべてが終わると信じて。

「負けるなんて…！」

思いつきりぶつけた。

「か、勝った…のか…？」

「勝ったんですよ！お嬢様に！」

「すごい！すごいよ、レナ！」

そうか、俺、勝ったんだ。

そう思うと、どっと疲れが戻ってきた。

ああ…もう身体、動かねえよ…

ドサリ。

レナの意識は此処までであった。

????.視点

「凄いわね、あの外来人は。まさか本当にあの吸血鬼を倒してしま
うなんて。」

これは少し予想の範疇を超えていた。

そして同時に、私は彼に興味を持った。

彼の強さの原点は、何処にあるのかしら。

「面白くなってきたわね。」

私は自分の住処に戻る事にした。

#6…永遠に幼い紅き月【後編】（後書き）

次回予告

「#Extra1…本気の遊び」

レミリアに勝ったレナに、最大のピンチが…！？

お楽しみに！

#Extra-1: 本気の遊び(前書き)

Extra突入です!

Extraも2本立てでお送りします。

*2011/6/16、一部修正しました。

#Extra-1…本気の遊び

「ハッ！」

やっべ、寝てたわ…

外が明るい…窓を見ると、日がさんさんと輝いていた。
…異変は、終わったんだな。

つて、此処…何処？

「お目覚めになられたようですね。」

「咲夜さん…」

ああ、紅魔館の中だ。

「あの後、貴方は3日も寝ていたんですよ？妹様が心配なさっていました。お嬢様の部屋にいらっしやいますので、顔を見せてあげてください。」

…ん？

「あれ？そついえば…レミリアは？」

「お嬢様なら博麗の巫女にボコボコにされて牢獄にぶち込まれています。当分は出られません。」

…さらりと酷い事を言っただな、咲夜さん…

「つて、霊夢来てたのか？」

「ええ。彼女は今パチュリー様の所に。」

風邪治ったんだな。良かった良かった。

「咲夜さん、これは…？」

俺は気付いた。

…服が、変わった。

黒い背広だ。

「貴方が寝ている最中にサイズを測らせて貰いました。そのサイズを参考にスーツを作ったのですが…お気に召したでしょうか？」

すっげえー…ぶかぶかでもなく、かと言ってきつきつではない、まさに最適サイズのスーツ。

「デザインも良いし…こりゃ最高だ！」

咲夜さんが妻なら間違いなく旦那は救われるな…完璧じゃないか。

「お気に召したようで幸いです。」

笑顔が素敵です、咲夜さん。

「よし、そろそろフランの所へ行くか！」

「フランー、居るー？」

「あ、レナだー！」

扉を開けた瞬間、フランが俺に抱き着いてきた。

…懐いてるだけ、だよな？

「もう大丈夫なの？」

「ああ、怪我也治ったし、異変も解決したみたいだし、もう大丈夫だ！」

こんな優しい子を閉じ込めてたレミリアはなんて悪者なんだ…そう

感じた。

姉がダメ吸血鬼なら、妹はまもって奴なのか。

「そうなんだ！じゃあレナ、あそぼー！」

…ん？この言葉…どっかで聞いた気が…デジャブかなー？

いや、デジャブじゃない！

思い出せ、俺！あの時は…

『パチュリー、あそぼー！』

で、その後どうなった！？

『やった パチュリーに勝ったー！』

…という…とは。

「あそんで…くれるよね？」

弾幕勝負の、始まりだ。

- 霊夢視点 -

「…そんな事があつたのね。」

私はパチュリーからこの異変の顛末を聞いた。

…今回の異変…『紅魔異変』の黒幕…レミリア・スカーレットをレナは撃破。

直後レナは気を失い、今は安静にしているそうだ。

「…にしても、おかしな事があつたのよ…」

パチュリーが腑に落ちないような表情で言う。

「何？」

「レミイの妹…フランって子が居るんだけど…彼女は精神が不安定で…かんしゃく癪癪起こす事もあるんだけど…どうも彼のそばに居る時の彼女の顔…幸せそうだったのよ。
癪癪なんて起こす事なかったみたいだし、それどころか笑顔だったって。」

…レミイですらどうにもならなかったのに、何で彼女は彼に近付いたのかしら？」

精神が不安定。

そしてレナの能力…『己の傷を癒す程度の能力』。

…もはや、レナの能力は他人にも有効なのかしら？

…精神が不安定という事を『傷』と捉えるなら…レナ的能力が他人にも有効だとしたなら…
レナはフランの『傷』を知らず知らずに癒したという事になる。
それなら合点が行く。

「パチュリー、もしかしたら彼は…凄い人間なのかも知れない…」

- レナ視点 -

流石に紅魔館内で弾幕勝負を始めてしまうと紅魔館が破壊されかねない（と咲夜さんが言ってた）ので、俺はフランを外に連れ出した。

「…ここら辺なら大丈夫だろう！」

「うん！本気出すよー！」

待て。紅魔館の壁を30枚程破壊したのは本気じゃなかったのか？

「いつくよー！」

弾がいきなり来た！

「うおっ！？」

といつかこの時点で解る。

…弾の強さだけならレミア以上だ…

「禁弾『スターボウブレイク』！」

一緒に居た時は何が起きたか解らなかったが、今なら解る。

虹色の弾が飛び…壊れると同時に散乱する。

「ぐっっ！」

が、その散弾がかなり強力で、体力をこっそり奪われる勢いだ。

「…まだまだ遊び足りないよー！禁忌『フォーオブアカインド』！」

…な…！？

フランが…4人…！？

「…マジ…かよ…！」

一度に4人を相手するのは流石にキツイものがある。

ならっ！

「砲符『エキセントリックバルカン』！」

ばらまき弾放てばどうにかなるだろ！

「すごい！一気に分身を消しちゃった！」

…本体だけが残った、か。

「…私、好きな本があるの。外の世界の本なんだけど、とっても面白かったんだ。…その本の事、教えてあげるね。」

…ある童謡の通りに人が死んでいっちゃうの。

『1人、2人、3人のこども』

『4人、5人、6人のこども』

『7人、8人、9人のこども』

『10人に増えました』」

…死んでない、寧ろ増えている。

しかもこのリズム…確か『10人のインディアン』だ。

「これ…2番もあるって知ってる？」

2番…？そんなのあるのか…？

「『10人、9人、8人のこども』

『7人、6人、5人のこども』

『4人、3人、2人のこども』

『1人に減りました』

…なんで1人になっちゃったんだろっね？」

「そりゃあ…皆帰ったりしたからだろう？」

童謡だからなあ…平和に行きたいだろう。

「違うよ。一人ずつ…殺されたからだよ。

…そして、最後の一人は…自分で命を絶ってしまいました。
それと同じように展開する本…」

！！

まさか…！

「それって…！」

「気付いたみたいだね。…今日、『11人目の犠牲者』が出るけれど。」

11人目の…犠牲者！？

けど…！あれは10人しか死なないはず！

「…レナだよ、11人目の犠牲者は。」

…新手の死亡通告か？

「秘弾『そして誰もいなくなるか？』」

弾が俺に降り注ぐ。
でも…あまりにも軽過ぎる。

「私はこっち。」

後ろ！？

だが反応が間に合っはずがなく…背中が斬られた。

「ぐうっ！」

「まさかスペルカードがただのはったりなんて思いもしなかったで
しょっ？」

爪についた血を舐めるフラン。

やっぱり…フランは…

レミリア以上に…

強い…！…！

#Extra-1…本気の遊び（後書き）

次回予告

「#Extra-2…495年の波紋」

紅魔郷編最終話！

フランの本気の前に、レナは…！？

お楽しみに！

#Extra-2: 495年の波紋(前書き)

紅魔郷編最終話です!

#Extra-2: 495年の波紋

「…レナ、もっと楽しませてよ！」

…まず、フランに勝つ為には…
この『速さ』をどうにかしないといけない。

もはや瞬間移動レベルのこの速さ…反応しきれない。直感だけじゃ間違いなくガタが来る。

次に『力』。

レミアにもあるはずだが（同じ吸血鬼だし、しかも姉妹だし）、フランの力は段違いだ。

フランは切断・弾・さらに打撃まで出来るようだ。

というかフランのパンチをガードしただけで…

「腕の骨が折れたー!?!」

半端ない。

「もっと遊ぼうよー!」

「…ぶつ倒れるまで遊んでやるよ!」

…とは言ったものの、ガード不可・回避困難なフランの攻撃を耐えるのは随分と難しい事だ。

「どうしたのか…お？」

思い出した。

そついや…白スペルカードが余ってたな。

何が起きるか解らないが、一枚取り出してみる事にする。

「うおっ！！」

危ない危ない、フランのパンチをもろに喰らう所だった。

「…っってもう出来てる！」

砲符なのは変わらないが…砲符『リヴァイバル』？

「一か八かだ！砲符『リヴァイバル』！！！」

と俺が叫んだ瞬間、身体が勝手に動いた。

「ちよ、うわ、あわわわわ！？」

しかもなんか溜め始めたし…ってこれ、かめ〇め波の発射体勢じゃないか！

手熱い熱い！！

「うおおおおおおおお！……！！！！！！」

発射！

何だこのビームは！？

リアルか〇はめ波じゃないか！

「うわっ！危ないよー！！」

が、やっぱりかわされた…

「翼が焦げちゃったー！！」

かすっただけか！

「治るのに時間かかるんだよー！？もう許さない！止め刺してやる
ー！！」

いきなりフランの動きが…止まった。

「これが私の完全証明…：Q・E・D・『495年の波紋』！」

Q・E・Dとは数学用語『Quod Erat Demonstrandum』の略で『証明終了』の意だ。

略語だから『QED』ではなく『Q・E・D』と書くのが正しい。

と俺の高校の先生が言った。

…って呑気な事を言ってる暇じゃなくなってきた！

弾の量が尋常じゃない量だ！

「ひょい、おっと、とっ！」

なんとかかわせてるが…！

「禁忌『レーヴァテイン』」

は！？さらに武器装備！？

…ってあれ…剣…なのか？

黒い、時計の針をぐにやりと曲げたような細いもの。

「ぼーっとしてると、当たっちゃっよ？」

刹那、フランの剣から放たれる紅い刃！

「うおっ！」

…まずい、勝てる気がしない。

上から弾来るわ、前から刃が飛んで来るわで…

くそっ、気合でかわすしかないのか!?

そう迷ったのが運の尽きだった。

「後ろ、がら空きだよ?」

「!?!」

振り返った瞬間には、フランは笑顔で俺に剣を刺そうとしていた。

ザスッ。

「……が……!」

最悪だ、心臓刺された。

「……やべえ……強い……な……」

台詞だけ聞けば死にかけたが全然死にかけでないという不思議。
口からは血が滴るけどねっ!

「よいしょっど!」

身体から剣が抜かれた……痛いね、やっぱり。

「やったー！レナに勝ったよー！」

うん、聞いた事ある台詞だね。

こうして、死にはしなかったがフランに負けた（と言つよりボロ負け）俺。

…まああれだな、レミアに勝てたのは奇跡だったって事にしておう、うん。

傷は2時間程安静にしていれば治った。

その間に、咲夜さんが背広を取り替えてくれた。

って複数作ってくれてたのか？

その疑問はすぐに解決する事になる。

「玲奈、折り入って頼みがあるのですが…」

「何です？」

「貴方に妹様の専属執事になって貰いたいです。」

…へ？

「専属執事い！？」

永久に紅魔館生活か！？

「…お嬢様が牢獄から出るまでで構いません。とにかく、妹様になんとか機嫌良くして貰わないと…正直命が幾つあっても足りませんので…」

…確かに。フランが大暴れしたら間違いなく紅魔館沈むね。

「レミリアが出るまでで構わないんすか？」

「ええ。」

「…そしたら引き受けます。もう異変も終わったし…」

俺は少し今までの事を思い返す…色々あったな。
まあとにかく、今は…

「暫くは休みたいんで。」

紅魔郷編、これにて終幕

カーテンコール

#Extra-2: 495年の波紋(後書き)

次回から妖々夢編に入りますが…

プロット作成などで投稿するのが少し遅れます。

それでも一日くらいですが…

頑張りますので暫くお待ちください。

キャラ紹介など…（オリジナル）（前書き）

ネタバレ込みなので最初に此処を見る方は要注意です。

*2011/6/16 追記しました。

キャラ紹介など…（オリジナル）

・彩崎 玲奈

この小説の主人公。とある私立高校の二年生。

わずかに茶色いツンツン頭だが、ワックスによるもので、頭を洗うと女性に見えてしまう。

頭脳はかなりのもの。

性格は優しく、他人を庇う勇気も持ち合わせている。

弾のタイプ…連射には向かないパワー型（後に連射も可能に）

能力…『己の傷を癒す程度の能力』

異常な速度で自分の傷が治る。ただ骨折などの身体の内側の怪我や傷の治りは遅い。

使用スペルカード

砲符『エキセントリックバルカン』…超不規則に跳ねる弾幕。ただ自分にも当たる。

砲符『リヴァイバル』…かめめ波のようなビームをぶっ放す。

らぐな

作者本人…の分身。文々。新聞の下つ端記者との事（自称）

なんらかの事情で第三者視点が必要になった時に登場する。…それだけではなさそうだが…？

能力…???（描写がないのであるのかどうかすら解らない）

ー以下ネタバレゾーン、まだ第一章しか読んでない方は次話へ進んで構いません、第四章の前まで読んでら帰ってきて下さいー

く以下、第二章以降から第4章直前までのレナについて記述、豪快にネタバレなので十分注意して下さい。く

実は過去に月の民により「システムIED」と呼ばれるものを埋め込まれていた。

このシステムは本来、人間の危機察知能力及び身体能力を強化し、不慮の事故を防ぐシステムだったのだが、レナに埋め込まれたのは試作1号機（永琳いわく「骨董品レベル」）とかなり古いものであり、暴走に至った。

が、幽香によってシステムの半分が破壊、さらにレナ本人ももう自分のシステム本体を破壊し、その反動かどうかは定かではないが身体能力が異常に強化。

そのせいかスペルカードにも変化が見られた。

また、後に第一章でレナに力を与えた四季映姫によってレナの能力にかけられていたリミッターが外され、膨大な魔力を手に入れた。魔力をフル活用しようとする流石に身体が持たないため、「翼を^{ロイハート}求めし者」というオプシオンがないと魔力をフル活用出来ない。

使用スペルカード

砲符『リヴアイバル・改』：魔理沙のマスタースパークからヒントを得て編み出されたスペルカード。もう一つのスペル「ハイパーグラビトンレンズ」と併用することで火力がさらに跳ね上がった。

照準『ハイパーグラビトンレンズ』：リヴアイバルの火力をさらに上げる為に使われる。光線を収束出来る。因みに盾としても使用可能。

砲符『リヴアイバル・』：さらに強化されたリヴアイバル。多少は制御しないと目の前が火の海になる程強力。紅いビーム。一点突破型の貫通力が高いビームである。

砲符『リヴアイバル・』：こちらは緑色のビーム。前方を広くカバーする拡散型のビームである。

砲符『リヴアイバル・』：こちらは細いレーザー。青色だが、細くて解りづらい。周囲をランダムに（と言っても敵味方の区別は出来るようだが）攻撃する。

砲打『シューティングドライバー』：「翼を求めし者」を展開しているときに主に使うスペルカード。リヴアイバルによって加速し、相手をぶん殴る。妹紅と一緒に思考錯誤し完成に至ったまさに「切り札」。

〜続いてらくなについてネタバレ〜

まだまだ謎が多いが、解る範囲内で記述。

どうやら作者本人ではなさそう。(本人はある場所で登場)しかしレナには作者本人と間違えられている(たまにレナが「作者頼んだ!」と言って彼が出てくるのはそのため)。

生前は文々。新聞社の下っ端記者で、色々取材をしていたようだ。密かに幽々子・紫が起こした異変に協力していたりする(これは当然あの天狗の編集長に提供するネタとして協力しただけ)。

下っ端記者をやっている傍ら、四季映姫率いる地獄の断罪人(処刑人)もやっており、かなりの実績をあげているようだ(綿月豊姫を裁いたとされている)

が、蓬莱山輝夜との戦いの最中に死亡。

此処からの彼についての記録は諸説あるが、信憑性が高いのは風見幽香、上白沢慧音、射命丸文の証言に基づく記録である(稗田阿求もこの証言を元に彼について記録している、本編には描写ないけど)。

その説によれば、彼はある目的の為にわざと死んだらしい(これ以上の言及はぶつちやけ全話のネタバレ故割愛)。そして何をしたのかは解らないが復活、新たな能力を得て帰って来た。

能力「あらゆるものから逃げる程度の能力」 「兵しづものを操る程度の能力」

前者は名前の通り、あらゆるものから逃げられる。だが「可能」なだけで、逃げない事も可能。

後者がどのような能力かは、第四章以降をお楽しみに。

秘密の会談（前書き）

お待たせしました！
今回から第二章突入です！

PV20000、ユニーク3500突破感謝！

*2011/6/17、一部修正しました。

秘密の会談

「うーん、今宵も月が綺麗だわ。まるでお団子みたい。」

私は真ん丸の白い月を見つめていた。

「そうね、幽々子。」

いきなり彼女が現れるのは何時もの事。
別に驚く事はない。

「紫じゃない、久しぶりね。」

数ヶ月ぶりに会った気がする。もしかしたら実は一週間しか時間が経っていないのかも知れない。

「そうね…良い酒、持って来たわ。」

ごとりと置かれた、褐色の瓶。
一升瓶みたい。

「月を見ながらの酒って風流があっといういわ。」

盃を交わし、少し飲む。

うん？このお酒…。

「美味しい！何処の酒なの？」

「妖怪の山産よ。…萃香手作りの酒。」

そう言えば、お酒造ってるって言ってたような。

「萃香ちゃん、腕上げたわね、流石ね。」

「ええ…今度お礼を言わなきゃね。…ところで、本格的に飲む前に少し話したいんだけど、良いかしら？」

「…なあに？」

大体、彼女から話題を持って来る時はイベントを起こすつもりだと
言うのは昔から変わらない。

彼女が口を開く。

「紅魔異変は突発的だったけど、私が送った例の彼のおかげで解決
したわ…

どう？次は私達が異変を起こさない？」

「霊夢ちゃんが止めに来るかも知れないのに？」

大体この手の異変を解決するのは博麗霊夢、彼女だというのが相場だ。

彼女は強い…わざわざやられに行くだけだったという可能性も無きにしもあらずだ。

「手は打つわ。霊夢は今回も出番なしにしておく。でないと楽しくないじゃない。…私はあくまで彼の力を見たいの。」

「うふふ…変わらないわね、紫も。でも…準備に時間掛かるんじゃないの？私達だけじゃ。」

久しぶりに動きたい…それは私も、そして彼女も同じだった。

「そう思って影の立役者を呼んだわ…」

そうして現れた、一人の男。いや…まだ子どもね。

「始めまして。私、こう言う者で…」

彼は私に紙を渡す…名刺ね。

「文々。新聞の記者さんなの？」

名詞に書かれたその文字を読みながら、私は彼に聞く。

「ええ。一応、ですがね。」

けれど、私は見逃さなかった。

彼の眼が一瞬、ほんの一瞬だけだが私から離れた。

彼は嘘をついている。

「…嘘はダメよ？正直になさい。」

彼は観念したようだ。

「いやあ、流石ですね。やはり幽々子さんは騙せませんか…。本業ではないですね、あくまで副業です。…その点では私は嘘をついてませんよ？」

「…みたいね。目は嘘をついていない。で、貴方の目的は？」

「それは話せませんね。此処で話すと少々計画に狂いが出ますので…」

あまり詮索はしない方が良さそうだ。

「…そう。紫、彼は何をするの？」

「仕込みよ。…霊夢を止める為の。」

「彼が霊夢ちゃんを？相当強いよね。」

「…まあ、私ですら殺せないからね…彼は。」

実力者の紫が彼を殺せない？そんなことがあるの？

「紫が殺せない？…凄いわね。じゃあ私が殺してみようかしら？」

「止めなさい、殺すなら異変を起こした後にしなさい。彼、怖がってるわよ。」

ぶるぶる震えてる…可愛い。

「やーねー、冗談に決まってるじゃない。それで、私は何をしたらいいのかしら？」

「…幻想郷の季節を冬に固定して。」

「冬に？…紫、あなた寝ちやうじゃない。」

彼女は冬は冬眠する…それじゃ意味ないような気がするけれど…？

「今回は冬眠しないわ。…力を溜めておく。ついでに、あの桜を咲かしてみたら？」

彼女は枯れた木を指差した。

「良いわね。でも、あの桜、滅多に咲かないわよ？それに…『桜の下には死体がある』なんて良く言うじゃない？あの桜が滅多に咲かないのは…もしかしたら死体があるから、じゃないの？」

亡霊な私が言えた事じゃないけれどね。

「あるとしたら、あの桜はおかしくなってるわ。…それこそ、妖怪になってたりしてもおかしくない。」

「それもそうね。…やってみるわ。」

まあ、咲いたら咲いたで運が良かったと思うくらいがちょうど良い。あれはうんともすんとも変化を見せない…ずっと。

「私は霊夢とあの泥棒をどうにかするわ。…貴方には霊夢を攪乱して貰うわ、良い？」

「ええ。博麗の力、見てみたいですし。」

彼は笑顔で答えた。

「…良いわ、これで話は終わり。さて、飲みましょっ？」

彼女は瓶を持つ。

「そうね。…もうすぐ秋だし、月は綺麗になるわ。」

「冬が来るのが待ち遠しいですね。」

「そうね。それまでは…つかの間の平和を楽しみましょう？」

その後、私達は朝まで飲んだ。

…秋の香りが近づく空の下、私達は平和を謳歌していた。

「次の異変はあの八雲紫が起こすそうだ。…君の望むとおりの展開になってきている。」

「…そう。そしたら、彼も見つかるかな？」

「間違いなく。霊夢は俺と紫が止めるし、泥棒はきつと霊夢を追いかける…計画通りなら、彼女を止めるのは彼だ。おまけは居るかも知れないがね。」

「…新聞記者には勿体無い存在ね、貴方は。まあ、新聞記者じゃないけど。で、この情報も編集長様にリークするのかな？」

「ああ。スクープだから彼女も喜ぶさ。それより、君の望みも達成出来そうかい？」

「おかげさまで。貴方と組んでおいて良かったわ…」

自称文々。新聞下っ端記者のらぐなさん。」

「それは何よりだ…さいさき碎先れな零奈。」

様々な思惑が交差する…だから、この世界は面白い。

にやりと笑う彼の目に映る未来は、
どう転がるか予測不可能だ。

秘密の会談（後書き）

次回予告

「終わらぬ冬の始まり」

レナに届いた、衝撃の知らせとは！？

そしてレナのコンティニュー生活が再び始まる！

お楽しみに！

終わらぬ冬の始まり（前書き）

本格的に妖々夢編が始まります！

* 2011 / 6 / 17 / 一部修正しました。

終わらぬ冬の始まり

「ふう…」

彼、彩崎玲奈は紅魔館でフランの専属執事として日々働いていた。

「…よし、今日の作業はおしまっ！」

ぐっと身体を伸ばし、疲れを取るように肩を揉む。

と、そこに咲夜さんが何かを持ってやってきた。

「…玲奈、霊夢から手紙が…」

「ん？」

丁寧に封がなされた手紙。

俺は手紙を開けて、中に入っていたものを取りだした。

『拝啓 彩崎玲奈様』

…ごめん、さらわれた。場所は解らない。

敬具 博麗霊夢』

「はあ！？」

うん、訳が解らないね！

一行の手紙とか聞いた事ないね！

「…どうしろと？」

「これは…助けた方がいいんじゃない？」

「だよな！？これ、助けた方がいいよな！？」

とにかくやばいのは解る、解るんだが！

…肝心の場所が解らないんじゃない、話にならない。

「…ん？もう一枚？」

おお、此処に場所を記してるんだな！流石だ霊夢！

『追伸 レナって女装とかした事ないよね？』

「はあ！？」

本日2回目。

「何だこれ！女装なんてしたことないぞ！？」

「とにかく、霊夢を探さないとまずいと思いますよ？」

「そ、そうだな…」

霊夢の手紙の内容には少々どころか多数の疑問を感じるが、霊夢を助けないとまずい気がするのもまた事実。俺は準備を始めようとした、その時。

「あれ？今俺が行ったら、フランはどうなるんだ？」

「妹様なら私に任せて下さい。その代わりと言ってはなんですが…」

咲夜さんに連れてかれ、俺は門へ。

「…また寝てる…」

シュ、グサツ！！

「あわわ！？いつの間にか寝てた！」

頭にナイフ刺さってるよ…美鈴。

「『寝てた』じゃないわよ…美鈴、玲奈と一緒に仕事をしてもらおうわ。」

「ふえ？」

美鈴は状況を理解していない様子だ…寝起きだからだろう。

「博麗靈夢が何者かにさらわれたみたいだから、貴女は彼と一緒に助けに行つて。」

「あの腋巫女を助けに？」

「さらりと酷いことを言つてる…」

「ええ。今の内に恩を売っておきなさい。お嬢様が復活したらまた迷惑かけるでしょうから。」

「解りました！それじゃ、行きましょう！」

「え？ちよ、まだ準備が…あーれー！」

美鈴に引つ張られる俺。襟掴まれてるものだから首が絞ままままままま

「あれ？玲奈さん、意識無くしちゃった…」

美鈴が気付いた頃には、俺は意識不明だったのは言うまでもない。

霊夢視点

…はあ、困つた事になつたわ。

何処か解らない場所に連れて行かれたばかりか、ご丁寧に結界まで

張られている。
出るのは難しそうだ。

私は謎だと思ふ事がいくつかある。

まず第一に、連中は何の目的で私をさらったのかしら？
人質？それとも他の目的？

わざわざ私を人質にしたとして、何を要求するのかしら？

他の目的があるとするなら、私で誰かをおびき寄せろ？誰を？

第二に、レナって女装した事あるのかしら？

こう考えたのには訳がある。

〈回想〉

それはある日の事。

何時ものように博麗神社の境内でお茶を啜ってたら…

ドガン！

「何!？」

慌てて飛び出した私は、賽銭泥棒に遭った事がすぐに解り、犯人を

追いかけた。

「待ちなさい！ 賽銭泥棒！！」

しかし、相手もかなり速かった。

そして、地面を走ってる所を見ると、どうやら常習犯の彼女ではなさそうだと解った。

「止まりなさい！ 霊符『夢想封印』！」

スペルカードを使えば、なんとか捕まえられそうだったけど…

「こんな所で捕まりたくないのねえ。逃符『エスケープ・フロム・オーガ』」

相手もスペルカード持ちで、さらに加速して逃げられてしまった。

「…ついてないわね。」

あんな速さで逃げられては捕まえるのも至難の業…諦めた私は神社に戻る事にした。

その途中。

「あれ、レナじゃない。」

白いフリフリのドレスを着た人が立っていた。

顔がレナのものであったから、私はレナだと思っていた、ところが…

「傷符『炸裂する痛み』」

…気がついてみたら此処だった。

〈回想終了〉

それにしても、あれはレナだったのかしら？
レナにしては声が女性に近かった。

でも、確信が付かなかった、だから私は手紙にあんな事を書いたの
だけど、レナに伝わったかしら？

…此処は何処なのかも解らないけれど、今は助けを願うしかなさそ
うね。

- レナ視点 -

「大丈夫ですかー？玲奈さん？」

「おおっ！」

やばい、魂が持ってかれそうだった。

どうやら俺はずっと美鈴に担がれていたようだ。

「…済まない、美鈴。」

「いえいえ、生きてるだけで十分です。」

…まるで『俺は死の淵に今まで立ってました』的なニュアンスは止めてくれ。

「…にしても、もう冬なのか？紅魔館周辺はまだ紅葉したくらいなの。」

「ですよ。何かがおかしい気がします。」

美鈴は雪の中を歩いていた。

この積もり方…真冬だぞ？

美鈴の足が半分程雪に埋まっていて、見るだけで辛そうだ。

「美鈴、代わろう。」

「いえいえ、ちょっと捕まってくれませんか？」

「？ああ…」

言われるがまま、俺は美鈴の肩を掴む。

「捕まりましたね！行きますよ！」

軽く助走して、美鈴は飛んだ。

「さっきは玲奈さんが気絶しててこの手段が取れなかったんですよ
ー！」

確かに、捕まっていないと落ちるな。

「…なんかごめん。」

俺は美鈴に担がれたまま、この雪の道を進んでいった。

終わらぬ冬の始まり（後書き）

次回予告

「@1…冬に舞う、2つの花」

レナ達の前に現れたのは…！？

お楽しみに！

◎1…冬に舞う、2つの花(前書き)

PV300000、ユニーク4500突破しました！

ありがとうございます！

*2011/6/17、一部修正しました。

@1…冬に舞う、2つの花

「うう…寒いですう…」

「だったら咲夜さんに服でも借りればよかったですじゃないですか」

俺と美鈴はトコトコと道を進んでいた。

美鈴は暫く飛ばしてくれてかなり進んだのだが、疲れたみたいだ。

今行っている道の雪はそんなに積もっていないのが救いだ。
が、冷たい風が身体に堪える。

美鈴が凄く寒そうにしていたので、俺は背広を背中に被せてあげた。
故に俺の上着はYシャツ一枚。

寒くないと言えば嘘だが、女性が寒そうにしているなら上着一枚着
させてあげるのが男って奴だ。

「あ、ありがとうございます。」

美鈴の笑顔は癒しになった。

「今日は休もう…そこに洞窟がある。」

見れば、ちょうど良い感じの洞窟がある。

「そうですね。つかれましたあー。」

入った瞬間、熊に襲われそうになったが…

「のびてるっ!!」

「ちょっとお借りしますよっ!!」

熊の顔と腹に入る俺と美鈴の足。

ちなみに顔担当が俺、腹担当が美鈴だ。

…事前に打ち合わせた訳ではないのだが、自然にそうだった。

熊は気絶したのか、ドスリと倒れた。

「玲奈さん、強いですね!」

「そりゃ毎日フランとやりあってたらなあ…」

専属執事らしい仕事は正直な話、それほどしていない。

代わりに、フランに『あそぼー』なんて言われて毎日の如く弾幕ごっこ(という名の本気の殺し合い)をしていた。

勿論だが、俺はフランを殺す気など更々ない。

だが、本気を出さないとフランを満足させられないのだ。

…それほどフランは強いのだ。

それのおかげか、最近骨折もすぐに治るようになってきた。

…が、美鈴の蹴りは試していないので本当の打撃にはどうなのかは

解らない。

一応打撃のダメージのでかさは

美鈴>フラン>>咲夜さん>>越えられない壁>>パチュリー

と感じた。(あくまで個人的です)

パチュリーは蹴りとかパンチより辞書の角攻撃(別名『豆腐の角に頭ぶつけて死ぬ攻撃』)がかなり痛かったりする。

「これからどうするんです?」

「解らないけど…まあとにかく今日は休もう。明日になってから考えよう。」

集めてきた枯木に霊掌で火を付け、暖を取る。

…にしてもこの力、中々便利だ。

上手く使えば武器にも道具にもなる。

「寝るか…」

俺は目を閉じた…

翌日。

俺と美鈴は相変わらず道を歩いていた。

雲一つない空。

小春日和って奴だな。

と、そこに。

「ふんふんふん」

鼻歌を歌う人が。

頭に白い帽子か何かよく解らないものを乗せる、青と白のドレスの少女。

髪は淡い紫だろうか…？色が薄いのは間違いない。

そして、横には笑顔を崩さないチルノと同じくらいの背の妖精が。

が、この妖精…白い。

気付かれそうになったので、慌てて俺と美鈴は近くの草むらに隠れた。

「リリーはこの状況、どう思う？」

「……!……?……」

あれ?なんかおかしいぞ?

「やはりね…おかしいわよね…いきなり冬が来るなんてね。」

「……!……。」

「そっだよね」

俺と美鈴は顔を合わせ、同時に呟いた。

「何言ってるのか全く解らない(解りません)……」

「……!」

「ん?誰かいるって?」

「……!」

「2人?」

「気付かれた!?!」

瞬間。

「……みーっけ。」

俺達を見る、少女の姿が。

「ちいつ!」

距離を取る俺達。

「そんなに逃げないで下さいよ。私達もこの状況に戸惑っているんですから。」

「……君達は?」

警戒を解き、話を聞いてみる事にした。

「私はレティ・ホワイトロックです。で、こっちはリリーホワイトです。リリーは言葉が特殊でして……普通じゃ理解出来ないんですよ。でもこっちの言う事はきちんと解ってます。」

どうやら妖精がリリーホワイト、少女がレティのようだ。

「……………」

「あ、今『よろしく』って言ってます。」

通訳が必要だなんて、中々不便だ。

「よろしくな。」

とりあえず、握手はする。

なんかぽかぽかしていて暖かった。

「……!……。」

「ふふっ、リリーはあなたの事が気に入ったみたいです。『かつこいいね』って。」

「……それは嬉しいな。で、君達はこんな事をした奴が誰か知ってるかい?」

「……!」

「『知ってたらそいつを倒しに行ってる』って。因みに私も誰がやっただか知らないわ。」

……やはり彼女達ではない、か。

まあ、黒幕がこんな所ほつつき歩いていたらいたで馬鹿としか言えないが。

「そうか……疑って済まない。」

「……!」

リリーはどつちやら何かに怒っているようだ。

「『私は春を告げる妖精だから、このままじゃ仕事がなくなっちゃ

う『って。」

仕事の危機なの!?

「そうだな…俺達も、こんな寒いのがずっと続くのは嫌だしな…犯人を探して、何とかするよ。」

「私達も調べてみます。」

「……………!」

「あ、『そういえば貴方の名前は?』って。」

「彩崎玲奈だ。」

「……………!」

「『玲奈に不幸がないことを願う』って。」

「ありがとう。リリーとレティも気をつけて!」

「ありがとう!」

俺達は先に進む事にした。

それを見送ったレティは、リリーにこう言った。

「…リリー、仲間を集めましょう。場合によっては戦争を始めるかもしれないわ。」

「そうね。妖精最強の彼女も呼ばないと、ね。」

実は喋れたリリー。だが、喋らないというのも一つの才能だ。

「そうね、妖精最強の彼女も呼びましょう。…私の推測がもし正しいなら…相手は…」

レティは少し間を置き、続けた。

「『幻想郷最強』だから。」

①…冬に舞う、2つの花(後書き)

次回

「②…寒空に響く鎮魂歌」

あの3姉妹が登場！

お楽しみに！

@2…：寒空に響く鎮魂歌（前書き）

ユニーク…：5000突破…？

嬉しい限りです

*2011 / 6 / 17 / 一部修正しました。

@2…寒空に響く鎮魂歌

- ??? ? ? 視点 -

「…紫、やることはやったわよ。次は貴女の番よ。」

空間が裂け、彼女が現れた。

「…そうね…にしても、寒いわね…年増の身体には堪えるわ。」

少し寒そうに身体を震わせる彼女。

「全然年増じゃないじゃない！身体は若い娘のものなのに。」

それに彼女はぴしゃりと返した。

「精神年齢はとうにおばあちゃんよ。おばあちゃんどころか何十回も転生出来そうな勢いだけど。」

「それは私も同じようなものよ…ほんと、亡霊や妖怪で助かったわね。」

少し沈黙が続き、話題は変わった。

「計画は第二段階に突入、か…そっちは順調？」

「一応季節の固定は上手く行ってるけど…あの木は咲きそうにない

わ。」

「…まあ、じっくり行きましょう。『強いては事を仕擲じる』って言うじ。」

「それもそうね。」

レナ視点

「…ふう…」

レティ達と別れて2日。

景色に変化はなく、疲れが溜まる一方だ。

「手掛かりは0、か…」

解ってはいたが、改めてその事実を突き付けられると気が滅入る。

美鈴はと言うじと…

「すう…すう…」

俺の背中で寝てらっしゃいます。

満身に休めていないから、眠いのも解る。

「ちょっと、そこのお兄さん。一曲聞いてかない？」

「ん…？」

バンド…ぼいな、似たような格好をした3人の少女がいる。赤…白…黄色じゃなく、黒。

キーボードに、トランペットに、バイオリン…ギターがないのは残念だが、プロの雰囲気を感じられる。

「キーボードなら任せなさい！リリカ・プリズムリバー！」

「トランペットが得意です、メルラン・プリズムリバー！」

「バイオリンだけしか弾けません…ルナサ・プリズムリバー。」

「…3人揃ってプリズムリバー3姉妹！」

…そのままじゃん。

「というわけで、一曲聞いてってよ！合奏『プリズムコンチェルト』」

おお、音色はかなり良いな…

「…って弾飛んできたー！？」

3方向から飛んでくる弾を、美鈴を守りながらかわす。

「…んにやるっ…!!」

こちらにも負けじと弾を放つが、なんせ片手間だ、命中率が低い。

「その程度で私達を相手にするつもり？ 甘いよ！ ルナサ！」

「りょーかーい。神弦『ストラディバリウス』」

バイオリンからこの世のものとは思えない美しい音色が響く。

と、その時…

「身体が…動かない…!?!」

身体が突如動かなくなり、倒れ込む。

雪が冷たい。

「決まったみたい。メルラン、頼んだわ。」

ルナサに続き、メルランがトランペットを奏でる。

「冥管『ゴーストクリフォード』」

「!?!」

頭に響く、不協和音。

「う…が…!?!」

意識が千切れそうになる。俺は意識をしっかりと手放さないように唇を噛んだ。

「…これでも意識が持って行かないなんて凄いね。でも…」

続いたのはリリカ！

「私の前じゃ、それすら無駄なもの！騒符『ソウルノイズフロー』」

さらに強くなった不協和音が、脳に直接響く。

「くっ…耐えられない…のか…！？」

身体が動かないし、意識が途切れそうになる…と大ピンチだろ、俺！？

その時！

「……つるさあーい…！…！」

音が、掻き消された。

「なっ！？私達の音が掻き消されるなんて!？」

「もう…寝られないじゃない!うるさすぎて寝不足になるじゃないですか!」

身体が動くようになったので、俺は身体を持ち上げて声の主を見た。

「め…美鈴…!？」

「玲奈さん、こいつらの音うるさすぎるんで、私が何とかします!」

美鈴はぐつと構え…突っ込んだ!

「接近戦なんて卑怯よ!？」

「うるさい音をガンガン鳴らす方が迷惑です!彩符『極彩颱風』!」

回し蹴りを応用した…風攻撃!?

これならあの不協和音も聞かずに済む!

凄いで美鈴!

「こ、このままじゃ音が聞こえない!」

うるたえる姉妹達の後ろに…

「俺、復活！」

「「「うそおつ!?!?」「」」

相手が驚いている所悪いが、間髪入れずに俺はスペルカードを使う！

フランとの戦いの中で制御が効くようになった、あのスペルを！

「砲符『リヴアイバル』!!」

3人を包むビーム!!

「「「きゃああああ!!!!!!」「」」

そのまま爆発が起き…

「バイオリンの弦が…!!」

「トランペット…お気に入り壊れたー!!」

「キーボードがぐちゃぐちゃー!!」

「「「やな感じー!!」「」」

星になりました。

「これで安心して寝れますー!!」

「え？そついう問題なの？」

と思ったつかの間に、美鈴は俺の背中に飛び乗ってまた寝息を立て始めた。

どれだけ寝れば気が済むんだろう…
咲夜さんの気持ちは解った気がした。

「全く…凄い音がしたから何かと思ったら…いつもの近所迷惑3姉妹だったのね…」

「ソウダナ！」

「!？」

…誰？この人？

@2…寒空に響く鎮魂歌（後書き）

次回予告

「@3…マグロじゃありません、アリス・マーガトロイドです」

アリス登場！

藁人形にごっすんする時は来るのか！？

お楽しみに！

③…マグロじゃありません、アリス・マーガトロイドです

「…誰？」

うん、誰か全く解らないね！見覚えも当然ないね！

…姿から見るに…普通の少女だが…？

山吹色の艶がある、肩にぎりぎり届くか届かないかの髪。

深海のような澄んだ、深みのある瞳。

カチューシャしてるな。

女の子らしく、ドレス姿だ。

「ああ…ごめんなさい。私はアリス・マーガトロイドよ。ここに入りに住んでるの。」

「コイツ、ミタコトナイヤツダナー！」

「つて、人形が喋った!？」

驚いた、アリスとか言う女の子の回りを飛んでた人形が突然喋り始めた!

「この子は上海人形。私の相棒よ。」

「ヨロシク！」

橙色のドレスを着た人形：上海人形が俺の回りを飛ぶ。

「ああ…よろしくな。」

自律回路でも組み込んでいるのか？

技術がかなり高い。

「見た事ない人ね。お名前、教えてくれないかしら？」

「俺は彩崎玲奈だ。皆は俺の事をレナって呼ぶ。」

「此処じゃ寒いでしょ、私の家に来ない？」

「ありがたい！是非そうさせて貰うよ！」

久しぶりの建物だ…

寒さから少し離れられるのが嬉しい。

アリスの家はとにかく綺麗だった。

「オチャ、モツテキタゾ！アリガタクオモエヨ！」

上海人形が湯飲みに入れたお茶を持って来てくれた。

「ありがとう。」

「彼女はベットに寝かしているわ。安心して。」

美鈴はまだ夢の中、か。

「…ところで、レナは何の目的で此処に来たのかしら？」

「季節がおかしいからだ。原因を調べたくてな。」

「…もう一つ質問ね。レナ…貴方は本当に人間？」

「は？人間だが？」

人間じゃなかったら何なんだろう。

「いや…貴方からおかしな力を感じるのよ…まるで『数百回生き返った』みたいな貫禄と言うか…よくわからないけれど。」

「なんだ、そのことか。俺の能力だ。浅い傷ならすぐに癒える…例えば致死傷喰らっても、少々の時間があれば傷は治る。ちなみに死んだ事は数百回ある。」

「さらりと凄い事言うわね…まあ、貴方の能力故ならいいんだけど。こっちも調べてるんだけど、原因は解らないわ。一週間くらい前からこんなおかしな季節になったみたいだけど…誰がやったとか、そ

んなのは全く解らない。」

「…やっぱり、か…」

犯人は誰だ？

「今夜は止まっていつて。汗も流していくといいわ。シャワーがあるから。」

シャワーあんの!？

この世界…ハイテクなのか…!？

とりあえず、アリスの好意に甘えて俺と美鈴はアリスの家に泊まっていた事にした。

シャワーを浴び、なぜか綺麗になった背広に着替え（後に解ったが、アリスが何かしたらしい）、俺は寝室に向かった。

…ところが。

「何で寝室に美鈴が…？」

最大の謎、何故…？

「…ごめんなさい、寝室が一つしかなくて…私は何処でも寝れるけど、お客さんはちゃんと良い所に寝て貰わないと…」

つまり、だ。

同じベットに2人…

恋人でもないのに異性同士とは…中々まずい気がする。

「…玲奈さん…2人つきりですし、いいこと、しませんか？」

…なあっ!？

いいことって…それって…つまり…アレの事…だよな？

…俺だって男だ、いいことの意味くらい解る。

このシチュエーションで…やることって、勿論…

「疲れたんでマッサージ頼みますう〜。」

…ですよー。
あくまで先方にとって良い事ですよー。

「うーん、気持ち良かったー！」

気持ち良かったなら何よりです。

「マッサージ師の才能があるんじゃないんですか！？これは凄いですよー！」

そうなのっ！？

「ピンポイントのツボ押しとか絶妙過ぎますよー！」

…おお…

とにかく、俺は新たな能力を身につけたようです。

『ツボをピンポイントで突ける程度の能力』

…役に立つのか、この能力？

「…」

そして朝。

うん、朝なんだが…

「どうして…美鈴は…

裸なんだ？」

寝る前まで服着てたはずなのに…

何があったのか、俺には解らなかった。

「おはよう、気分はどう？…っ…っ…」

ドアを開いた直後のアリス視点では。

裸の美鈴。

横には玲奈。（服着てる）

@3…マグロじゃありません、アリス・マーガトロイドです（後書き）

次回予告

「@4…新たな力」

…どうなるの!?

お楽しみに!

@4…新たな力

「なんかごめん…結局2泊しちゃってさ。」

「いいのよ、賑やかで楽しかったわ。こちらこそ誤解してごめんなさい。」

この会話を理解していない人が一名。

「誤解…？何の事です？」

「「貴女は黙ってて」」

「うえーん…皆がいじめますう〜。」

何が凄いかって、彼女を責めるに責められない事だ。

「とにかくありがとう。それじゃ、行ってくる。」

「行ってらっしゃい。」

アリスに感謝しながら、俺達は先に行く。

それから暫くして…

「アリス、ここに見知らぬ人が来てなかったか？」

突然来るわね、魔理沙は。

「あら、魔理沙じゃない。見知らぬ人って言えば…玲奈の事かしら？」

「それ！私、玲奈を探してるんだぜ！伝言を貰って来たから！」

「そしたらあっちに行つたわよ？」

「ありがとう！飛ばして行くぜ！」

「…で、なんで美鈴は寝てるんだろうか…」

雪が地面を覆う事はなくなったが、寒いには変わらない。

当然のように美鈴は俺の背中にもたれて寝ている。

「何処に霊夢はいるんだ」「うわあああ！」「」

なんか横を通りました。
何かに当たる音も聞こえた。

「…何だ？」

「痛たたた…」

木にぶつかったのか、身体に幹の痕が残っている。

この人…魔法使って奴なのか？

黒と白を基調とした洋服。

頭には魔法使いらしい帽子。

そして近くには箒。

「…お？お前…お前が玲奈か！」

「え？ああ…そうだけど。」

待て、なんでこの少女は俺の名前を知ってるんだ？

「咲夜から伝言預かってきたぜ！これだ！」

俺は彼女からその伝言を預かる。

…ってなんでこんなにぐちゃぐちゃなんだ？

とりあえず、読んでみよう…

『玲奈へ。』

この手紙を読んでいるということは、近くに白黒の金髪の魔法使いが居ると思います。その魔法使いは霧雨魔理沙といって、博麗霊夢に肩を並べる有力者です。』

ふむふむ…つまり伝言を届けてくれたこの少女が魔理沙と言っのか。

『さて…私も博麗霊夢の安否が気になるので、お嬢様をパシらせて調べてみました。』

レミリア…舐められてるな。

『すると、博麗霊夢の居場所が判明しました。』

マジ!? そりゃ嬉しい報せだ!

『ただ…居る可能性がある場所が2つあるのです。一つ目は白玉楼…冥界にある建物です。そしてそこには…西行寺幽々子というかなり強い者が居ます。場合によっては彼女とやり合わなければなりません。』

白玉楼…そこに霊夢が居るのか!

『もう一つは八雲紫という伝説の妖怪の家…ただし、場所までは特定不可能でした。…ちっ、お嬢様は使えない。』

玲奈には白玉楼に行つて貰います。

八雲紫の家については魔理沙に搜索して貰いますのでご安心下さい。

」

咲夜さん、本音出てますよー。

『最後に。仮に、西行寺幽々子及び八雲紫と戦う事があれば、勝敗より博麗霊夢、そして玲奈、貴方の命を最優先して下さい。

…貴方の能力を以ってしても、彼女達は強すぎる…まともに戦おうなんて絶対に思わないで下さい。』

…そんなに西行寺幽々子と八雲紫は強いのか…！？

『追伸。美鈴に関しては、場合によっては盾にして構いません。紅魔館のメイド長である私及び妹様が許可します。』

「ええっ！？私、盾になるんですか！？」

美鈴がショックを受けていた。

「…ん？これは？」

封筒の中から出た、3枚の白い紙。

…スペルカード？

『白スペルカードです、どこかで役に立つかもしれません。』

「用意周到だ…」

やっぱり咲夜さんは完全で瀟洒です。

「…でさ、あの咲夜が認めるお前の力…見てみたいんだ。ちょっと手合わせ、やらないか？」

「うおっ、いい女…」

「？」

…まあこのネタ、通じるわけありませんよね！。

「…良いのか？俺の力、見くびっていたら泣く事になるぞ？」

「いいぜ。ただし…泣くのは私じゃなくて…！」

弾を展開する魔理沙！

「レナ、お前だぜ！」

星形の弾が、俺に降り注ぐ！

「俺と同じ…パワー型か！」

一発一発の火力が凄い！

「弾幕はパワーだぜ！ほらほらあ！」

こんなに乱射されたら動くに動けない…ならば！

「砲符『エキセントリックバルカン』！」

相手を無理矢理動かす！

「うわっ！かわしづらい弾だぜ！」

弾と弾の隙間を縫い、魔理沙はかわす。

…にしてもかなり速いな…！

スピードが売りと見た！

「こつちも乱射させて貰う！おらおらあ…！」

これならスピードを殺せる！

「あつぶない！…なかなかやるじゃん！けど、甘いぜ！恋符『ノン
ディレクショナルレーザー』！」

あつちもスペルカード使用か！

俺を追尾するレーザーをかわしつつ、牽制の弾を数発ほど魔理沙の
方に放つ。

「よくかわすなあ！けど、これはかわせないぜ！」

！？

魔理沙が…俺の前に！？

「恋符『マスタースパーク』！」

何だこの激太レーザーは！？けど！

「ただで喰らうと思うな！砲符『リヴァイバル』！」

レーザーには（レーザー）ビームで対応だ！！

「そんなへなへなレーザーじゃ」

だが、俺のリヴァイバルがマスタースパークに喰われた！

「私のマスタースパークは貰けないぜ！」

くっ…かわしきれない！

「ぐわあああ！！！」

吹き飛ばされ、地面に叩き付けられる俺。

「…リヴァイバルが…破られた…！？」

「へへっ！伊達に研究してるわけじゃないから！」

…切り札、て奴か！

「これを撃つのに道具が必要だけど、火力は誰にも負けないぜ！」

…確かに、あんな火力のレーザーを生身のままでぶっ放したら身体がただじゃ済まない。

俺のリヴァイバルだって、生身で撃つ以上、火力は少々調整しないと身体が熔ける。

…まあすぐ再生するけど、戦いどころじゃなくなる。

「どうだ！参ったかー！」

…道具、そんなのは今更こしらえる事は出来ない。

しかも生身のまま火力を上げれば戦いどころじゃない事態になる。

かと言って、あのレーザーを怪我なしにかわすのは至難の業だ。

…ん？

つまり生身のまま火力を上げる事が出来れば勝てる…？

だが、そんな便利な道具はな…

いや…ある！

俺が放つのはビームだ！

ビームならば、あの手段が取れる！

後は…俺のイメージだ！

まずはスペルカードを一枚作る！

「照準『ハイパーグラビトンレンズ』」

レンズを一枚正面に創る…！

そしてえ…！

「もう一枚だ！砲符『リヴァイバル・改』…！」

レンズに向けてビームを発射…！

ビームは突き詰めれば『光』…！

そして、光はレンズによって…

収束するっ…！

「ありがとな魔理沙…！おかげで、俺のリヴァイバルは進化した…
…！」

レンズによって収束した光は…！！

細くとも、貫通力は高まる…！！

「ま、負けたぜ…」

「…か、勝ったぜ…」

「なかなか面白いな！これからもよろしくどうぞ、レナ！」

「おつよー！」

互いに握手して、戦いは終わった。

…こんな戦いならいいんだけどな…

俺は心の中でそう思った。

@4…新たな力（後書き）

次回予告

「@5…貴方はまだ、お呼びでない」

ついにあの剣士が登場！

…レナはどうなる！？

お楽しみに！

@5…貴方はまだ、お呼びでない(前書き)

ついに彼女が登場します！

2011 / 7 / 1、一部修正しました。

@5…貴方はまだ、お呼びでない

目指すのは白玉楼。

そこに行けば、霊夢が居るかもしれない。

俺は魔理沙と別れ、白玉楼を目指す事にした。

途中、道行く人や妖怪に冥界への道を聞き、なんとか冥界の入口に着いた。

…冥界へは関所で隔たれており、固く閉ざされた門の前には門番だろうか、2人立っている。

事情を話して、通して貰いたいところだ。

「待たれよ。此処からは許可なしでは通行出来ぬ。許可はあるか？」

目前に鉄製の槍が交差される。無理矢理には通れなさそうだ。

「冥界に…俺の友達がさらわれたんだ、頼む…通してくれ！」

「それは聞き流せないな…その友達というのは誰の事だ？」

「博麗靈夢だ！」

「「！！」」

門番の2人は「少し待っていてくれ」と言っただけきり姿を消してしまっただ。

暫くして、先程の門番が戻ってきた。

「…君の言っている事は本当みたいだな…冥界に彼女は居るのか？」

「あくまで可能性ですが…それでも、少しでも可能性があるなら確かめたいんです。」

門番は悩んだような様子で、少し黙り…こつ返した。

「…解った、通そう！…友達を大切に！」

「ありがとうございます！」

冥界への扉が開かれた。

- ??? ? ? 視点 -

「幽々子様…」

「解ってるわ、誰か来たわね。」

この感じ…きっと例の彼だわ。

「どうなされますか？」

「…最初はごまかしなさい。それでもしつこいようだったら斬って構わないわ。」

…ただ、彼はこんな事では止まらないだろうけど。

「かしこまりました。」

…どう転んでも、彼は間違いなく私のもとにたどり着く。

その時が、山場ね。

- レナ視点 -

「何処だ…！？白玉楼は…！？」

冥界に入ったのは良いが、肝心の白玉楼の場所が解らない。

そもそもどんな建物なんだ…？

「こつちよ。」

「お、そつちか！サンキュー！…ってうおっ…！」

なんか飛んで来た！

「…教えてくれたわりには結構冷たい事やるじゃん…！」

地面のヒビのような斬り傷を一瞬見てから、俺は声の主を見た。

白いおかつぱに近いような感じのヘアスタイル。

頭には黒いカチューシャ、緑と白の洋服。

腰には2本の長さが違う刀が。

「…外しましたか。惜しいですね。」

「…どういっつもりか、話して貰おうか。」

考えられるのは一つ…！

彼女は…！！

「幽々子様の命を狙う不届き者は、この魂魄妖夢が斬る！」

刀を構える少女。

やはり西行寺幽々子の手先か！

「っ！」

何だ…！？

服が…切れた！？

「…貴方が幽々子様の敵なら、私は幽々子様をお守りする身…貴方には此処で…死んで貰います！」

少女から何かが見え…

俺の身体が…

縦に…

割れた。

「…貴方はまだ、お呼びでない。」

「へえー。」

「!?!」

初めて少女に焦りが見えた。

そりゃそうだ、身体真っ二つになっというてすぐに再生だからなあ。

「な、何のはったりだ!」

やっぱりと言うべきか、相手…妖夢は焦っているようだ。

「何のはったりと言われてもなあ…君が剣を高速で振れるように、俺は身体の傷がすぐに治る。それだけだ。」

「!?!だけどっ!」

彼女がやることは一つ。

再生出来ないように身体を斬り刻む事だろう。

解っているから、俺はこっする!

「なっ…!?!」

刀を…

わざと俺の身体に刺す！

そうすれば刀を動かす事も出来ない！

「先人はこう言った…『肉を斬らせて骨を断つ』ってな！」

右手に力を溜める！！

「霊掌っ！！！」

彼女の身体にぶつける！！

「ぐうっ！」

彼女は苦悶の表情を浮かべる…こんな事したくはないが…霊夢を助ける為だ、許せ！

「…俺はあくまで博麗霊夢を探しているだけだ…！居場所さえ解れば西行寺幽々子には手を出さない…！」

「…信じられない！私は幽々子様を守らなくてはならない…！此処で負ける訳には…！」

相手は必死に抵抗するが、刀は俺の身体から抜けない。血が滴るが…問題はない！

「俺だって…友達を助けたい！だから、こんな所で止まる訳にはいかない！！砲符『リヴァイバル』！！！」

ビームで追撃！

彼女は刀を手放し、もう一本の刀を握る。

「ま、まだよ…！獄神剣『業風神閃斬』…！」

もう一本の刀がある事は確認済みだ！

刀を握み、剣を封じる！

「くっ…！」

止めを…加える！

「砲符『エキセントリックバルカン』…！」

勝負が、決した。

「美鈴、彼女を頼む！俺は西行寺幽々子の所に行く！」

「え！？あ、玲奈さん！？」

彼女の事を美鈴に任せ、俺は先を急ぐ。

…待ってる霊夢、今行くからな！

- 霊夢視点 -

「あ…貴女は…!？」

私の目の前に立っているのは…!

「始めまして…でいいかしら？私は八雲紫…名前さえ聞けば何者かくらいは解るわね？」

八雲紫。

幻想郷を幻想郷として成立させた伝説の妖怪。

そして…幻想郷に住む者なら名を知らない者はいない、有力者。

「…幻想郷の母と言われる貴女が、何故私なんかをさらったの？」

力はあるのに…こんな事をしなくても、目的は達成出来そうなのに…何故？

すると紫は扇子を取り出し、唇を隠しながらこう答えた。

「貴女はあくまで餌よ…彼を釣り上げるための、ね。」

「彼…？まさか、レナの事！？」

「ご名答」 そうよ、私は彩崎玲奈に用があるの。彼がどこまで成長したか、幻想郷に誘ったこの私が直々に試そうかと思ってるね。」

ふふふ…と紫は笑う。

「貴女が…レナを幻想郷に送ったのね。」

「そうよ。それで、貴女は何をするつもり？此処からは出られないわ…私の結界の前では無駄よ。」

「やってみないと解らないじゃない！霊符『夢想封印』！」

しかし、弾は見えない壁に弾かれてしまった。

「だから言ったのよ…無駄だった。貴女を殺すつもりなんて更々ないから、素直に待ちなさい。」

「…」

…レナ、ごめんなさい。

私には…何も出来ない。

…貴方に…全てを任せるしかないわ…！

⑤…貴方はまだ、お呼びでない（後書き）

次回予告

「⑥…幽雅に咲かせ、墨染の桜【前編】」

幽々子登場！

彼女の能力に、レナはどう立ち向かうのか！

お楽しみに！

@6…幽雅に咲かせ、墨染の桜【前編】（前書き）

ゆゆさま登場！

PV40000、ユーク6000突破！

2011/7/1、一部修正しました。

@6…幽雅に咲かせ、墨染の桜【前編】

レナ視点

建物に入り、奥に進むと、人の気配がした。

…しかし、姿は見えない。

「来たわね。」

何処からか声が聞こえる。やはり姿は見えない。

だが、声の主が誰かというのは十分予想出来る。

「あんたが…西行寺幽々子か！」

「そうよ、紫から聞いたけど、貴方、紅魔異変を解決したらしいじゃない。そういう強い子、私は好きよ。」

…どこか抜けている感じだが…
聞く事は聞かなくては！

「博麗霊夢は何処に居る！？俺は霊夢を探しに来た！」

「霊夢ちゃんなら此処には居ないわよ。」

「なら何処に!?!」

「教えないわ。」

さらりと返して…!

「人の命がかかってんだぞ! あんたは人の命を何だと思ってやがる!?!」

「人の命は儂いもの…すぐに亡くしてしまふ。所詮そんなものよ。それを大事にするなんて、馬鹿げてるわ。」

「…あんたって奴は…!」

俺は周りを見渡すが、彼女の姿は一向に見えてこない。

「今、私を見つけようとしてるでしょ? 無駄よ。貴方には私の姿は捉えられない。」

「…何処だ…! 何処に居る…!」

何で…何で見えない!?!

「…やはり、貴方はまだ未熟ね。」

…もしま、彼女は人間ではないのか?

だとしたら何だ？

妖精…妖怪…違う、チルノもルーミアも見えた！

魔法使い？姿を消す魔法か？…だが何で姿を消す必要がある？
強いのならさっさと魔法で俺を倒した方が速いはずだ。

…そうか！

見えないんじゃない、俺が見えていないのか！

俺が見えないもの…そして喋れるものは…考えられるのは一つしかない！

「あんだ…幽霊か？」

暫く沈黙が流れる。

「そうよ。」

と、俺の身体に纏わり付く何か！

それははつきりと形を成していく。

俺の身体にくつつくその綺麗な赤紫色の髪の少女は、明らかに幽霊だった。

頭には幽霊お馴染みの、水色の帽子についた白い三角巾。

その姿は振袖の、美しい少女だった。

だが、俺の背中に走るこの不気味な冷たさは何だ？

触られている場所はちゃんと人の暖かさが感じられるのに…何で背中に寒気が感じるんだ？

「よく気付いたわね。永遠に気付かれないのかとひやひやしたわ。」

「…妖精とか妖怪とか吸血鬼の次は幽霊か…なんだこのメルヘンチックな展開は？」

この不気味な冷たさに、脂汗が垂れる。

「あら、こづいうの嫌い？」

「全く…この世界は不思議だらけだ。」

不思議過ぎてもう驚く事ないんじゃないか？

「私を見つけてくれたから教えてあげる。霊夢ちゃんは八雲紫の家で拘束されてるわ、でも命までは取らないから安心して。」

「信用出来ないな。命を軽視するあんたの言葉は。」

「嫌われちゃったみたいね。でも命を軽視するなんて事、私はしないわよ？ただ貴方に見つけて貰いたくて挑発しただけだけど。」

…幽霊だけに、彼女は掴めないな。

「…でも、貴方に霊夢ちゃんの事を教えたところでどうにかなるわけでもないしね。だって貴方…」

彼女は俺の胸に手を当ててこう言った。

「もうすぐ死ぬもの。」

瞬間、身体の内側で何かが掴まれる感じがした。

「がっ!?!」

何だ…!?!心臓が…苦しい…!

「私の能力は『死を操る程度の能力』…貴方はもうすぐ死ぬわ。」

な、なにかが…抜かれていく…

「うーん、でも死ぬって言ったって心臓潰したりしてグロテスクに仕上げるわけじゃないのよ？」

全ての生き物には魂が存在する…魂は肉体という器を持つ事で初めて生き物として生きていけるの。

私はその魂を器から抜ける…つまり、貴方という魂は肉体から抜け…」

駄目だ…！抵抗出来ない…！

「生き物として終わる。それを『死ぬ』と私は定義するわ。」

くそっ！これは『傷』ですらないから、能力も使えない…！

「さようなら。貴方の魂はこれから私のものよ…」

抜ける…な！

「なかなか強靱な魂ね。抜けかけてるのに抜けないなんて。」

「…ざけんな…！」

「!？」

どうして!？

魂が肉体に戻っていく！

「俺は…やることあるんだよ…!!」

まさか、意志の力で魂を取り戻したって言うの!？

「まだ…こんな所で終わる訳にはいかない…!! 霊掌!!」

くっ、魂を抜くのは失敗した！

「…此処から本番だ…西行寺幽々子！」

…仕方ないわね。

相手を戦闘不能にしてから魂を抜いた方が良さそうね。

扇子を広げ、戦闘体勢を取る。

「…面白いわね。貴方、名前は？」

「彩崎玲奈だ…！」

「玲奈…貴方の魂、頂くわよ！」

双方、同時に弾が放たれる。

白玉楼から離れ、二人は一瞬眼を合わせ、動く。

本気の戦いが今、始まった。

@6…幽雅に咲かせ、墨染の桜【後編】

ドドドドドド！！

「流石に…強いな…！！」

咲夜さんの忠告は間違いなかった、明らかに押されている俺。

弾の量、正確さ…何を取っても相手より劣っている。

一方、相手はかなり余裕そうさ。

「そんな弾じゃ私は倒せないわよ？」

「まあそうだろうなっ！」

連射数を上げて相手に対応する！

「やるわね〜。」

口だけだと直感が言う。

まだまだ余裕のようさ。

「砲符『エキセントリックバルカン』！！」

これでなら崩せるか！？

「亡舞『生者必滅の理 - 死蝶 - 』」

なっ!?!?

黒い蝶…だと!?!?

俺の弾は黒い蝶に阻まれ、目標に当たらない。

お返しに黒い蝶達から放たれる弾丸!!

「ぐうっ!!」

防御体勢を取り、なんとかやり過ごす。

「敵から目を離しちゃ駄目よ?」

いつの間に接近していたんだ!?!?

魂を抜かれては終い、故に距離を取る!

「かかったわね。華霊『ゴーストバタフライ』」

突如、俺の周囲に現れた黒い蝶!

「一斉掃射」

全方位、360°からの射撃!

「いっ!」

流石に守り切れない、ダメージは蓄積する一方だ。

「そろそろお終いにしましょ？」『反魂蝶』」

幽々子の周りに集まる、黒い蝶達。

「やるしか…ないか…！砲符…！！」

俺は蝶を消し去る為の最善策を取った。

「『一分咲』」

「『リヴァイバル』！！」

蝶達が俺に迫る！

そして俺は蝶を撃ち落とす！

「面白いわね…！あら？」

幽々子は気付いた。

長年咲かなかった桜が…蕾を付けている。

「（もしかすると、この桜は…）」

「余所見してんじゃないぜっ！！」

隙を突いた！！

…はずだった。

「…釣られすぎよ。『反魂蝶 - 八分咲 - 』」

蝶…！？

弾が見え…

目の前が、光になった。

「…やっとやられたのね。さて、貴方の魂、頂くわ。」

幽々子は地に伏した玲奈に少しずつ迫る。

「（賭けだ…！照準『ハイパーグレイトレンズ』）」

小さく…小さくレンズを作る！

「強靱な貴方の魂はきつと綺麗だわ…ずっと私の側に置いてあげるから、恐れる事はないわ。」

そつと玲奈の頭に手を置く幽々子。

「…砲符…『リヴァイバル・改』…！」

「綺麗ね、貴方は…っ!？」

幽々子が光に包まれる。

「…決まったな…！」

「あ…貴方…!？何をしたの…!？」

逆に仰向けになった幽々子に、レナは種明かしをする。

「レンズで俺の力を収束した…！」

「やるわね…!だけど、私は倒れないわ！」

「まだか…!！」

レナは能力で傷を癒し、立ち上がる。

「私の勝ちよ。貴方にはもう勝ち目はない。今が貴方の切り札みたいだし、私はまだ切り札を切つてないわ。」

「…だろっな!逆に言えば、その切り札を潰せば俺の勝ちだ…!！」

…後は俺の体力に賭けるしかない。
スペルカードは使い尽くした。

ならば、後は己の身体のみ。

「桜符『完全なる墨染の桜 - 開花 - 』」

弾という厚く、高い壁に生身一つのみで立ち向かうのは無謀かもしれない。

だが、そうでもしなければ倒せる算段はなかった。

「突破してやるよ！うおおおおお！！！」

真正面から突っ込む！

「愚直過ぎるわ…！よりによって1番弾の密度が分厚い場所突っ込むなんて！」

確かに真ん中は弾の密度が高く、とてもかわせるレベルではない。

「もってくれよ…！俺の身体…！」

全身、ありとあらゆる場所から痛みが走る。

それでも彼は進む、弾の波の中を！

「自殺願望なの！？死ぬわよ！？」

「『普通の』…『人間』…なら…そうだろうな…！」

弾を掻き分け、一撃の用意をする！

「死にたいなら勝手にしなさい！」

さらに弾の密度が増える！！

「だが…残念ながら…俺は普通じゃねえ…！」

「！貴方…もしかして…！？」

幽々子はやっと彼の正体に気付いた。

「…俺は人間だ…けど…『普通の事じゃ死なない』人間なんだよ…！」

「くっ！」

距離を取り、幽々子は自らが創った弾の壁を注視する。

壁から出て来た…

火傷だらけの相手！

しかし、その火傷はまるで生まれ変わるかのように元の肌色に再生する！

「…そう、貴方も死ねない人間なのね…」

「なんでかは知らんが、死ねないな。…切り札、突破したぜ？」

「そうね…此処からは同じ土俵に立つのね…！」

お互い、後は体力の戦い。

「どっちがタフか、白黒つけようや…！」

「…そうね…！」

同時に地を蹴る2人！！

扇子の一振りで皮膚が裂け、鮮血が舞う。

一発の殴打で、身体の内側にダメージを与える。

「俺は…！」

「私は…！」

「「貴方を倒す…！」」

「…俺の…勝ちだ…」

「まだ…私は動けるわよ…」

二人は向き合い、止めの一撃を加えようと相手に向かう。

が…

両者の体力は限界をとうに越え、これ以上戦える状態ではなかった。

レナと幽々子は同時に、地に崩れ落ちた。

トサリ。

そして永かった冬も…

終わった。

「玲奈さん!？」

「幽々子様!？」

両者に駆け寄る妖夢と美鈴。

二人共倒れている…それは、両者の力は互角だったと言う事であり、勝敗は付かなかったという事であった。

咲かなかったはずの桜が、蕾を開く。

新たな季節の始まりを示していた。

@6…幽雅に咲かせ、墨染の桜【後編】（後書き）

次回予告

「Extra-1…小さき魂は主の為に」

魔理沙、ついに八雲紫を発見！

霊夢を救うべく奇襲を掛ける！

お楽しみに！

Extra-1…小さき魂は主の為に(前書き)

Extra突入です!

今回は妖々夢編なので…

勿論あれもありますよ?

2011/7/1、一部修正しました。

Extra - 1 : 小さき魂は主の為に

- 魔理沙視点 -

「八雲紫の家つて何処なんだ…？全く解らないぜ。」

正直な話、手掛かりがなさすぎるぜ。

それで捜せつてのも随分無理な話だと思っけど…霊夢は大切な友達だ。

…助けたらたんまりとお金を要求してやるぜ。

それで宴でも開くか！

「私達も手伝いますよ」

…え！？自由気ままな妖精達が霊夢を助けるのを手伝ってくれるのか！？

レティにリリーホワイトにルーミアにチルノ…それにプリズムリバー3姉妹までいる！

「どづいつこった…？」

「玲奈を見ると、私達も居ても立ってもいられなくなって。」

「さいきょーのあたいが手伝ってあげるから感謝しなさい！」

…これならすぐに見つかるかもな！

「ありがとう！」

- 咲夜視点 -

「…魔理沙だけでは心配ですからね…こうして私達も手伝っているわけですが…パチュリー様、霊夢の居場所は？」

「…この付近に反応があるわ。八雲紫の家は近い。」

…魔力探知に優れたパチュリー様を呼んでおいて助かりました。

「…解った、ありがとう。」

誰かと話をしているみたいだけど…誰なのかしら？

「どうされたんです？」

「類は友を呼ぶみたいよ…一人、既に八雲紫の家に入り込んでるわ。」

咲夜、何時でも動けるようにして。此処からは…戦争よ。」

ナイフを構え…

八雲紫の家を特定するまで待つ。

…???視点…

「ふう…編集長からの依頼とあっては、逃げる訳にはいきませんね…さて。」

俺は隠していた力を見せる事にした。

「博麗霊夢さん、迎えに来ました。」

結界に囚われた彼女を、俺は見る。

「貴方は…?」

「彩崎玲奈さんと同じ目的を持つ者です。さあ…下がって。」

境界を…この世界から『逃がす』。

「行きましょう。」

俺は霊夢さんの手を取った、その時。

「何をしているのかしら？」

「!?!」

バレたか!!

声の主は見ずとも解る、幻想郷最強の名を持つ八雲紫!

「霊夢さん、しっかり捕まっけて下さい! 逃符『擬似・恋の逃避行』」

俺は慌ててスペルカードを発動し、この場所から『逃げた』。

「…してやられたわね。でも…私からは逃げられないわよ…?」

「はあっ、はあっ…」

汗が止まらない。

「大丈夫？ 凄い顔だけど……」

だつて怖かつたもん。

「大丈夫です、霊夢さん。それより……彩埼玲奈さんの近況をお伝えします。」

玲奈さんは冥界の白玉楼で西行寺幽々子と戦い……相打ちに持って行きました。」

「レナが……!？」

「ただ、彼は今大怪我をしています……今の彼ではどう考えても貴女を助ける事は出来ない……そう考えたある方が、依頼を回して来たのです。」

『博麗霊夢を救出せよ』と……」

「……」

「時間は余りありませんね……それでは、貴女には此処から逃げて貰います。これを。」

俺は霊夢さんに2枚の紙を渡した。

「一枚は私のスペルカード……逃符『逃げるが勝ち』です。それを使えば、俺が事前に指定しておいた場所へひとつ飛びです。」

着いた場所を少し搜索すれば、次にするべき事は自ずと貴女なら解

ります。

もう一枚は…貴女が向こうに着いてから読んで下さい。」

「貴方はどうするの!?!」

「…きっと八雲紫が来ます。俺は八雲紫を止めます…貴女が安全にこの場を離れるまで。貴女は俺に構わず行って下さい。」

「でも!貴方が危ないじゃない!」

確かにぱつと見自殺行為だ…だけど。

「貴女には待っている人が居る。その人の為に、元気な顔を見せてあげて下さい。それが貴女が真つ先にやるべき事です。」

…それが終わってからは、貴女が何をしようとする自由です…命を捨てる事以外なら。」

「…解ったわ。」

理解してくれたようで何よりです。

「霊夢さん…俺が『行って』と言うまでは俺の腕なりなんなりを掴んでおいて下さい。…八雲紫の能力を封じる為です。」

左腕が握られた…後は俺の問題ですね。

「来た！」

空間が裂け、彼女が現れると同時に！

俺は彼女に向かう！

「観念したのかしら？」

彼女の右腕を掴み、俺は計画を動かした！

「行つて！！！」

霊夢さんが俺の腕から離れ…

札を空に掲げる。

「逃がさないわ…！」

だが、彼女は動けない。

彼女の能力は封じた…！

「貴女の能力は対象物が貴女に触れているとおいそれと発動は出来ない…何故なら貴女も隙間に巻き込まれるから…！！！」

「そこまで解つてたの…！？」

霊夢さんが消えた事を目の端で確認し…

俺は俺のすべき事を実行に移した。

「…そうだ、お蔭様で博麗霊夢救出に成功した…後は貴女を止めるだけ。」

「貴方…本当に新聞記者の器じゃないわ…ギャンブラーよ。」

俺はにやりと笑って返した。

「分の悪い賭けは嫌いじゃないんでね…此処からが大博打ですが！
！逃符『背水の陣鬼ごっこ』！！」

俺と彼女を包む結界。

「ルールは簡単…俺を捕まえればおしまいです。

しかし…貴女の足できちんと俺を追い掛けて捕まえないと適用されません。つまり…隙間なんて使えませんかというわけです。

因みに、制限時間は1時間…1時間以内に俺を捕まえられなかった場合、貴女的能力は5時間封印されます。

逆に制限時間内に俺を捕まえた場合…俺にはペナルティが課せられますが。」

「時間稼ぎのつもり？甘っちょろいわね。」

「そう言ってられるのも今の内です。」

ハイリスクハイリターンだが…決まれば有利になる！

「では…鬼ごっこ、スタート！」

Extra-1…小さき魂は主の為に（後書き）

次回予告

「Extra-2…命を懸けた鬼ごっこ」

紫と対峙する者の正体とは！？

そして…

霊夢が飛ばされた先は！？

お楽しみに！

Extra-2…命を賭けた鬼ごっこ(前書き)

なんかExtraが長くなりそうな予感…

2011/7/1、一部修正しました。

Extra - 2 : 命を賭けた鬼ごっこ

- ??? ? ? 視点 -

「では、この鬼ごっこを主催した俺からアドバイス。ゆっくり、慎重に俺を追い掛けた方が結果的に早く捕まえられるかもしれない。」

「…私を誑かそうとしても無駄よ。」

彼女は俺の忠告を無視して俺に突っ込む。

「忠告はきちんと聞きなさいな」

彼女を包む土の壁。

「だから言ったんだ…忠告はきちんと聞けと。」

だが、『幻想郷最強』は土の壁ごときでは止まらなかった。

壁は砕かれ、彼女は再び俺に突っ込む。

「まあそうだろうな。…これだけではないのは勿論解ってるよな？」

続いて地面がせり上がり、彼女はちょうどフラスコの中に入ったかのように行く手を阻まれてしまった。

「で、これだ。」

上から岩を落としてやる。砕かれるのは承知だが、あくまで時間稼ぎ。

「上手く頭にも当たって気絶してくれれば御の字だな。」

彼女は冷静に土のフラスコを駆け上がる。

「虐めてやるよ」

今度は地面を落としてやる。

「…趣味悪いわね。」

「…それは貴女も変わらないと思うが。」

「貴方をさっさと捕まえて終わらせるわ。」

彼女は何度も俺に迫り、その度に俺はあらゆる手段で逃げる。

…この鬼ごっこは遊びではない。

俺の能力…『あらゆるものから逃げる程度の能力』の存在意義を示す行為だ。

彼女から逃げられなくては、もっと強大なものから逃げられるはずがない。

「…そういえば、貴方はらぐなって言ったわね。」

「そうだが？」

「貴方のような人間が、何故私に刃向かうの？貴方は非力過ぎる…私に刃向かった所で犬死になりかねないのに。」

「…可能性を見たくなくてね。彼と彼女…祖先を同じとする者の未来をね…」

「貴方がいつも連れてる彼女の事ね…今は居ないのね。」

やっと気付きましたか。

「八雲紫…早く俺を捕まえないと大変な事になりますよ？なんせその彼女は貴女の優秀な部下を相手にしてるんだから。」

「！貴方…藍をどうするつもり！？」

「…そりゃ知らん。彼女次第だ。」

「貴方は早々に片付けないといけないみたいね…！」

さあ、焦るがいい、八雲紫。

そしてその間に、貴女が描いたシナリオは崩れていく。

・霊夢視点・

「ぎゃあっ…!」

地面に尻餅をつき、私はどこかに着いた。

「…此処は…?」

周りを少し見渡す。

すると…

「レナ!」

彼は眠っていた。

「…そういえば…」

彼が『着いたら読め』と言った紙。

「…読んでみよう。」

『…八雲紫の真の目的は、貴女を餌として彩崎玲奈をおびき寄せ、幻想郷と外の世界の隔離を強める事にある。』

…だから、貴女と彼には全てが終わるまでそこに居て欲しい。
紫の思い通りにさせたら何が起きるか全く予測出来ない…間違っ
ても彼を八雲紫の所へ向かわせるような真似はしてはいけない。』

…そうか。

レナは外からの人間…

そして紫はレナを何らかの目的で幻想郷に導いた…

その目的を白紙にしたいが為に彼は…

「解ったわ…私はレナと一緒に居る…！」

- 零奈視点 -

「…作戦は成功したみたいね。ご主人様は大層怒ってらっしゃるで
しょうね、八雲藍。」

「貴女は最初からそれが目的で…！」

「違うわ。あの女に私の玲奈をいじくりまわして欲しくないだけよ。」

それに、胡散臭いのは嫌いだし。

「紫様を侮辱するとは…！碎先零奈、貴女には死んで貰う！」

「やれるものならやってみなさい。…ただ、橙はちゃんと避難させておきなさいよ？でないと、死んじゃったりしちゃうから。」

小さい子を殺すのは心が痛む。

「…認めたくないけど、貴女の言う通りね…！」

藍は踵を返して姿を消す。

「…パチュリー、私よ。…藍が出て来たら保護してあげて。家は焼くわ。」

『解った。…貴女の情報は本当だったわね…彼には会ったの？』

「彼には会ってないの。強い彼の事だから、きっと西行寺幽々子あたりと刺し違えたんじゃない？一段落ついたら会いに行くわ。」

『…そう。その時が、全ての始まり、ね。』

・らくな視点・

「…時間稼ぎは終了、だな。」

「どっぴいっ事…!?!」

「俺の目的は全て満たされた…」

刹那、結界の外で爆発音が聞こえた。

結界がカタカタと震える。

「!!!貴方…!!!」

「俺の目的?今なら教えてやるよ。1つ目は博麗霊夢の救出。

2つ目、八雲藍と八雲紫を隔離する事。

で、最後は…紫、あんたの家を破壊する事。

2つ目と3つ目の目的を達成する為にこうして隔離したんだが…
さ、さっさとこの鬼ごっこを終わらせるか。」

俺は八雲紫のそばに立った。

「捕まえればおしまいだ。あんたの勝ちという形だね。」

「くっ…!」

紫の手が俺に伸びる。

「残念でした。時間切れ。」

結果が崩れ、全ては終わる。

「…おしまいだ。」

最大のアドバンテージ、相手の能力の封印。

「さあて、俺は向こうに飛びますかね。さようなら、八雲紫。」

そうして俺も姿を消す。

…何とか一文無しにはならなくて済んだ。

この『5時間』が勝負の鍵だ…俺は伝える事を全て伝えて、この問題から逃げよう。

- 魔理沙視点 -

『魔理沙、家が見えたわ！とりあえず一発撃って！』

何もなかったはずの場所に、建物が。

「よっしゃ！皆、一斉攻撃だ！マスタースパーク！」

「パーフェクトフリーズ！」

爆発が起き、家は崩れ去る。

「わはー、凄いのだー！」

だが、一つ思った事が…

「…思った、中に誰もいないよね？」

「」「」「」

…もしかしたら私達、恐ろしい事をしたかもしれない…

- パチユリー視点 -

「…これで橙は安全なのね…？」

「ええ。心配なら付いて来てくれても構わないわ。」

…零奈の計画なら、橙と藍は紅魔館行きだ。

「解ったわ…私も付いて行くわ。」

…計画通りね。

これで八雲紫と藍を別離する事に成功した。

零奈…貴女の出番よ。

Extra - 2...命を賭けた鬼ごっこ(後書き)

次回

「Extra - 3...彼の真意」

らぐなの口から語られる、衝撃の事実とは!?

楽しみに!

お知らせ

次回更新ですが、リアルがかなり忙しくなってきた、推敲等の関係上、土曜くらいになると思います。

申し訳ありません。

その分再開したら頑張りますのでそれまで待っていて下さいm(.m
m(.m

Extra-3…彼の真意(前書き)

お待たせしました！

本日から再開しますよー

2011 / 7 / 1、一部修正しました。

Extra - 3 … 彼の真意

- レナ視点 -

「うう…」

目を開ければ、そこには居ないはずの人間が居た。

「霊夢！？なんでここに!？」

勢いで起き上がってしまい、身体に痛みが走った。

「そこらへんの事情は彼に聞いて。」

と霊夢が指差す方を見ると、見慣れぬ人物が近くで胡座あぐらをかいていた。

ある程度着崩したスーツ姿の青年。

「お、気付いたみたいだな。俺はこう言う者だ、宜しくな。」

手に渡される名刺。

「文々。新聞社記者…らくな？」

聞いた事ない新聞社だ。

なんて読むの？『ぶんぶん』？それとも『ぶんぶんまる』？

「『ぶんぶんまる』よ…この世界のトップ新聞社と思ってくれればいいわ。」

トップ新聞社の記者がなんで！？

「でも、あくまで自称よ…」

声の主を見て俺は警戒した。

「西行寺…幽々子！」

俺は身構えたが…

「大丈夫…戦うつつもりはないから…それより…らくな…紫は…？」

「死んでませんし、彩崎玲奈を追い掛ける事を諦めていません。残念ながら。」

「…いまいちよく事態が飲み込めないんだが…」

置いてけぼりな気がする俺。

「とりあえず彩崎玲奈さん、今までの事態を説明します。

まず、博麗霊夢さんが何故さらわれる事になったのか。それは、俺にも理由があるんです。

俺は新聞記者…故にスクープとか掴みたい訳です。そんな時、八雲紫と西行寺幽々子さんに不穏な動きがあるという情報を掴みました。俺は事実を確認すべく、八雲紫に接近…そして八雲紫と西行寺幽々

子さんが会談を開くと言うのでそれに参加させてもらいました。ただ…それには条件がありました。」

らぐなは少し間を置き、続けた。

「八雲紫はあくまで彩崎玲奈さん、貴方に目的がありました。そして貴方をおびき寄せる為に…」

俺は博麗霊夢さんをさらいました。」

「なっ…!？」

こいつが霊夢を!？」

「こうでもしないと八雲紫に信用されないと考えたからです、勿論抵抗がありました…」

「待って、じゃああのレナは何なの!？」

…霊夢、何を言ってるんだ? 『あのレナ』って…どついつ事だ?

「そういえば彼女にも動いて貰いましたね…彼女は碎先零奈と言いました…玲奈さん、貴方の双子みたいなものです。」

「はあ!？」

妹とか姉とか俺には居ないぞ!？」

「理由は解りませんが…彼女は貴方に会いたがってました。近い内に会えるでしょう。」

さて、話を続けましょう。俺は霊夢さんをさらった事に罪悪感を覚

えていました…そこで、秘密裏に十六夜咲夜さんに霊夢さんが居ると思われる場所を伝えました。」

だから咲夜さんは霊夢の居場所を知っていたのか！

「そして同時に咲夜さんに頼みました…八雲紫の家を襲撃してくれと。」

俺は霊夢さんを救いに八雲紫に再び接近…そして救い出した訳です。

「

「すげえ…」

「正直怖かったつす。でも、これで少しでも罪滅ぼしになるなら…霊夢さん、すみませんでした。」

ぺこりと頭を下げるらくな。

「いいのよ。貴方のおかげでレナに会えたし…」

「もう一つ、罪滅ぼしをさせて下さい。彩崎玲奈さん…八雲紫を倒す手段を教えます。」

「…!!」

八雲紫を…倒す!?

「彼女の能力は『境界を操る程度の能力』…その気になれば空間を操る事すら可能になる恐ろしく強力な能力です。」

今、とある事情があつて彼女は能力を使えませんが、それも一時…時が経てば八雲紫は間違いなく玲奈さんを追います。その時まで、

彼女の対策案を立てましょう。」

「って言ったって、具体的に何をしたらいいんだ？」

「…そうですね、貴方の身体能力を強化しましょう。」

「は？」

あんまり動けないぞ？

「魔力バイパスを創ります。貴方は今まで闇雲に弾をぶっ放してました…それは貴方自身の力を浪費しがちになります。」

魔力…バイパス？

説明を求めた所、どうやら弾を放つのを楽にしてくれる、いわば魔力が通る血管みたいなものを創ってくれると言っ。

「まあスペルカードを作るのと同じ感じでやってくればすぐに出来ますよ。要はイメージです。」

イメージ…かあ。

「では目をつぶって貰いましょう…集中を…」

身体に通る…魔力の道。

手先…足先…全てを通る…道。

!?

「身体が…暖かい…っーか、軽い!」

「うまくいきましたね…!その感覚を忘れなければ大丈夫です!」

めっちゃ楽だったな…バイパス作り。

「後は実戦で覚えて下さい。というわけで…零奈!」

「やっと私の出番ね。」

!?

あの女性…顔が…俺にそっくりじゃん!

全身白いフリルの俗に言うゴスロリ。

ブロンドの髪…

「あ、玲奈じゃん!やっと会えたー!」

いきなりテンションが上がったかと思うと、抱き着いてきました。

「…あんたが…零奈?」

「そーだよ?それに、将来のお嫁さん、それが私!」

「待て待て待て」

嫁？彼女すつ飛ばして嫁ですか？

「私と玲奈は運命の赤い糸で結ばれてるのー！なんちゃって！」

「うん、君は美人だとは見て解るがもう少し冷静になろうか。」

「あ、そっか！その前に実戦だったね！じゃ、こっち来て！」

零奈に連れられ、外に出る。

「魔力バイパスを上手く使えば、弾幕の強化もパンチの威力も跳ね上がるんだ！」

…つまり何でもokというわけか。

「そしたら…行くよ！」

Extra-3…彼の真意（後書き）

次回予告

「Phantasm-1…生と死の境界の狭間で【前編】」

ついにゆかりんが牙を剥く！

レナは生き残れるのか！？

お楽しみに！

Phantasm - 1 : 生と死の境界の狭間で【前編】（前書き）

最近更新が不安定で申し訳ございません…

2011 / 7 / 1 , 一部修正しました。

Phantasm - 1 : 生と死の境界の狭間で【前編】

「貴方が彩崎玲奈ね…？」

「だったら何だ？俺を追っ掛け回すストーカーさんよ。俺はストーカーには興味ないんでね。」

…お気づきかと思うが、奴が来ました。

傘を差した紫を基調とした妖艶な美少女。

八雲紫：幻想郷最強と言われる伝説の妖怪。

俺は相手の事をストーカー呼ばわりしているが…正直、相手から放たれる威圧感が半端なくて身体が震えそうです。

見た目はナイスバディな美少女なのだが…威圧感に関しては大人だろあれ。

「…殺し合いの大喧嘩吹っ掛ける前に聞くが…あんたはどうして俺なんかを追い掛けたんだ？ぶっちゃけ霊夢の方が俺より強いのに…」

「貴方の力はこの世界では有り得ない事。いや…あつてはいけないのよ。」

…つまり、この世界の王である奴にとって俺はイレギュラーな存在
…故に消すってか。

「…幻想郷の女王が直々に俺を消しに来たってわけか…だが。」

俺は安い挑発をかける事にした。

「俺は死ねない身体…だから俺を消そうとしたって無駄だぜ？」

「そうね…確かに貴方は死ねないみたいね…けれど…それは『幻想郷に存在』するからでしょう？」

「！」

どういうことだ？

幻想郷に存在…何を言ってるんだ、あんたは？

「まあ直に解るわ…幽々子を倒したその力…」

相手の姿が消える！

「私にも見せて貰うわ！」

後ろからか！

振るわれた傘を右腕で防ぎ、左腕でカウンター！

「…貴方の弱点は解っている…『打撃に弱い』でしょ？」

「事前調査はばっちりつてか!!」

カウンターのパンチはかわされたが、傘を掴み相手の自由を奪う!

「だが弱点は克服できるんだよっ!!」

傘を引つ張り、相手を引き寄せ!!

「霊掌っ!!」

腹に一撃!

「ぐっ!!」

効いてるみたいだな!

「幻想郷最強つてのは名ばかりか!？」

「…確かに、貴方はかなり強いみたいね…でも。」

傘を…手放した!?

「貴方はもう私の境界の中…結界『夢と現の呪』」

結界…!?

何処に、どうかけてるんだ!?

「…貴方は白玉楼で私と戦うのを恐れた…戦いの途中で他の誰かを

傷付けたくなかったから。」

…そうだ、白玉楼でやり合うのは周りが危ない…そう感じた俺は、
奴が白玉楼に来た時に『場所を変えよう』と提案して、奴は飲んだ
…！

「そしたら、場所を移した先に罠が仕掛けてあるという考えは浮か
ばなかったのかしら？」

「!？」

まさか…奴は最初からこうなると踏んでいたのか!？

「気付いたみたいね…貴方が此処に来る前から既に結界は張られて
いた…そして、この結界の内部では、相手の感覚を惑わす事が出来
る…つまり。」

相手が…空中に…浮いている!？

「…貴方の五感…すなわち視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚は私のも
の…」

背中が…蹴られた!？

「人間は五感に依存しすぎている…五感が潰されれば非力なだけよ。
幾ら貴方が不死でも、五感がなければいずれ精神が死ぬ。永遠に殴

られ続けているようなものだしね。」

…この間にも、俺の身体の節々に痛みが走る。

傘が地面に落ちるが、それよりも重要なのは、『五感は当てにならない』。

ならば…賭けてみよう！

「砲符『リヴァイバル』！！」

適当な方向にぶっ放せ！

「なっ…！？」

何かが…割れる音がした。

「…やるわね。まさか五感が潰された状態から結界を破壊するなんて。」

「…知ってるか？第六感って話を…勘だ。」

勘が外れてりゃやばかったが。

「勘で結界を破壊するなんて人間離れな技ね。」

「だがこれでイーブンだ…次はどうすんだ？」

「魍魎『二重黒死蝶』」

相手は弾幕を展開！

「今度は正攻法ってか！やってやるよ！」

弾をかわしながら奴に迫る！

「あんたのその余裕そうな顔、今すぐ恐怖に変えてやる！」

狙うは…鳩尾！

「素直に喰らうとでも？」

傘を広げ、奴の姿が見づらくなる。

つーか、いつの間に傘持ったんだ奴は！？

「一瞬の油断が死に繋がるわよ」

今度は左から！？

なんとか左腕で攻撃を防ぐが…

「足一本頂くわ」

ザクッ！

「っ…！」

マジかよ…！足に傘突き刺すとかおかしすぎだろ！

「これで動けないわね」

好機と見た奴は俺に切迫する！

「ちいつ…！」

左足は傘のせいで使い物にならない。

そして、少しでも動けばその足から悲鳴が激痛と共に聞こえる。

「なぶり殺しにしたいか、八雲紫！」

「勝てるなら」

どうやら奴は自らの目的を果たす為なら手段を選ばないようだ。

なら…こつちも手段は選ばない…！

「こんな足枷…！」

無理矢理傘を引き抜く！

「俺を止めるには物足りないぜ！」

突撃、隣の玲奈さんってな！

「どこまでも規格外の人間ね…！」

「そりゃどうもっ…！」

癒えた左足で一発蹴ってやる！

「貴方の能力はとても厄介だね。…本気を出さないといけないよね。」

「かかってこいよ。」

…だがこの時、俺は自分の力を過信し過ぎていた。

相手の能力の真の恐ろしさに気付くまで、俺は『負けるはずがない』という妄信をしていたのだ。

「落ちなさい」

そう、遠い昔のようだが、実は約5ヶ月前に感じたあの感覚。

落ちるはずがない地面に穴が空き、落ちていくあの感覚。

「…あんだだったのか…！！俺を…！！」

俺は全てを悟ったと同時に、この世界から『消えた』。

Phantasm - 1 : 生と死の境界の狭間で【前編】（後書き）

次回予告

「Phantasm - 2 : 生と死の境界の狭間で【中編】」

ゆかりん戦その2！

隙間に喰われたレナはどうする！？

お楽しみに！

Phantasm - 2...生と死の境界の狭間で【中編】(前書き)

やっと中編です...

Phantasm - 2 ... 生と死の境界の狭間で【中編】

- 紫視点 -

… 勝った。

何人たりとも、あの隙間に喰われた者は私の許可なしには出られない。

それに、あそこは『幻想郷であって幻想郷でない』場所… 能力は自由には使えない。

… どうあがいても無駄よ、彩崎玲奈。

貴方はもう… 諦めるしかないわ。

- レナ視点 -

「うわあああ！！」

ドン！

「痛たたた… つーかまた落ちたのかよ… で、此処は何処だ？」

… と言わなくても何となく場所は解る。

八雲紫の能力で作られた世界。

そういや、「あの時」もこんな不気味な眼に見られていたな。

つまり、俺は奴に捕まった…というわけだ。

「どうすれば出れる…?」

軽く周りを見渡す。

当然の事ながらドアとか外に出れそうな雰囲気醸し出すものなんて全くない。

あるのは不気味な無数の眼と紫色の世界。

「…困ったな…」

先程の落下でかなりの距離を落ちた事を確信した俺は上に向かう事を諦めた。

そのかわり暫く歩いてみることにした。

上に出口がなければ横にあるんじゃないだろうかという僅かな可能性に賭けて。

それにしても奴は凄いな…幾ら自分の能力とは言え、此処まで自分の世界を広く創り出せるとは。

だが、デメリットはないのだろうか？
俺は、傷はすぐに治るが疲れはすぐに治らない。

奴の能力が俺と同じ制約を受けているとするならば、いずれ奴にも
限界が見えてくる。

能力はただでは使えないだろう。

能力を使うのに体力を使うのが普通…

あれか、奴はチート級に強いから能力はガンガン使えますよって事
か。

…まあとにかく俺は体力を温存しつつ好機を待つしかないようだ。

- 紫視点 -

「やられたわね…」

私は自分の家…マヨヒガに戻り、事態を知った。

マヨヒガは全焼。

そして藍と橙が行方不明。

私は懐から一枚の人型の紙を取り出した。

これは藍の状態を表すパラメータのようなもの。

藍は私の式神：故に私が管理出来るようになっていた。

仮に彼女にダメージがあれば紙が燻ったり、破れたりする。

ところが紙に異変はない。藍は無事のようにだ。

「つまり：匿われたか掠さらわれたかの二択ね：でも仮にも藍は九尾：掠さらわれたなんて事は有り得ないわね。」

藍は元は九尾の狐：伝説クラスの妖怪。力はかなりあるはず。

「でも：やってくれたわね。」

結構建てるのに手間隙かかっているのよ？
それをボロボロにして：やった奴は許さないわ。

「やっとおいでになりましたか、八雲紫。」

…中々面白い事になったわね。

「あら、紅魔館のメイド長がこんな所で油を売っていいのかしら？」

十六夜咲夜。

「油を売ってる訳ではないです、玲奈を返して貰いに来ました。」
やはりか。

「そう、でも彼は返さないわよ？彼はこの世界に居てはいけないイレギュラーと化したんだから。」

「…彼をこの世界に引きずり込んでおいてよく言えますね。」

「だから何？ unnecessaryなものは捨てるなり消すなりするでしょう、貴女だって。今回は『たまたま』彼が必要だっただけよ。」

挑発に…

乗った！

「それでも彼は人間：他人に unnecessaryなんて言われる筋合いはない！
奇術『エターナルミーク』！」

彼女の姿が消える…いや、高速で動いているだけね。

ナイフは痛いから、これでかわしましょう。

「境符『四重結界』」

この結界は身を守るには十分。それに…

「くっ！」

自動で反撃出来るように仕込んである。

弾幕をかわしつつ、結界を破るなんて不可能に近いわ。

「…確かに一対一ならば辛いですね…ですが！時符『プライベートスクウェア』！」

またまた無駄な事を…結界でナイフは弾かれるだけなのに、何故そうするかしら？

…？

何か…暗いような…？

「あたい最強！新技を見せてやる！氷塊『グレートクラッシュャー』」

上から！？

落ちてきた、氷の塊。

結界が…震える！

「く…結界が…割れた…！」

妖精だからって馬鹿にしてたわ！

四枚結界を張ったのに、一枚は割れ、二枚目にもひびが入っている
…！

「今よ！一斉攻撃！」

！まだ居るの！？

「いくのだー！」

「えーいー！」

全方位からの一斉弾幕掃射は、結界をさらに弱らせる。

「く…周りが…見えない…！」

そしてその間に、更なる攻撃の準備がなされていた。

「皆、射撃止めて！」

弾幕が…消えた？

「止めは任せるわ！」

「任せました！魔力チャージ完了！魔理沙、そっちは！？」

「こっちもOKだぜ！魔力チャージ率150%！行けるぜ、パチュリー！」

視界が晴れたと同時に、それらは放たれた！

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！！」

「日符『ロイヤルフレア』！！」

かわしきれない……！！

閃光と爆風が、辺りを包んだ。

「…まだ…！」

結界のお陰でダメージは受けなくて済んだ。

しかし、結界が破れたということは攻撃をもろに喰らうということ。

そして、一瞬の隙を突かれた！

「甘いですよ。幻符『殺人ドール』」

なっ…！？

血の華が、鮮やかに咲いた。

Phantasm - 2 … 生と死の境界の狭間で【中編】（後書き）

次回予告

「Phantasm - 3 … 生と死の境界の狭間で【後編】」

妖々夢編堂々完結！

お楽しみに！

Phantasm - 3... 生と死の境界の狭間で【後編】(前書き)

妖々夢編完結っ!!

Phantasm - 3 … 生と死の境界の狭間で【後編】

- レナ視点 -

うん？

なんか今、周りの景色が歪んだ気が…

…気のせいか。

…しかし、奴が此処に来てくれれば、なんとかかなりそうなんだがなあ。

- 咲夜視点 -

…やった…？

結界を破り、追い撃ちにスペル一枚使用。

しかも一瞬の隙を突いた…倒せたと信じたい。

でも、念には念を。

「ボサツとしてないで撃つて下さい！」

我に返った皆が弾を撃つ。

此処までしておけば大丈夫。

- 紫視点 -

弾を乱射なんて…やるわね。

でも、私には能力がある。

一時的に逃げれば後はじっくりと戦える。

隙間を切り開き、潜る。

そして相手の隙を突いてやれば終い…

「こりゃラッキーだ。まさかあんたから来てくれるとはな。」

…最大の誤算だった。

まさか降りた先に…

あの男が居るなんて!?

「八雲紫…この時を俺は…待っていた!」

「まだ死んでないのね…!この世界で死ねば、貴方は本当に死ぬ!それでも貴方は私に挑むと言うの!?!」

これは脅しではない。

この世界は私の思い通りになる世界。

…生と死の境界すら曖昧になるこの世界で殺し合いをする時点で狂気の沙汰だ。

「んな事関係あるか。俺はあんたをぶっ飛ばさないと気が済まないんだよ!?!」

…仕方ないわね。

「ならば望み通り殺してあげるわ!結界『生と死の境界』!」

結界を越えて私に近付けば…死ぬ!

「ルーミア…俺に力を貸してくれ!」

何あれ…十字架?

- レナ視点 -

もしかすると、此処って…

それを証明するためにも、この結界を破らなければならない。

そのために…今こそ使う時だと感じた、この黒い十字架。

ルーミアから貰ったこのお守り。

「頼む…俺に力をくれ！」

…汝に力を託そう。

「俺は…あんたを倒す！」

…汝の心を示す剣を具現せん。

「うおおおおお！！！！！！」

十字架が輝き…！

十字架は新たなる形となる！

「こんな壁！」

十字架は黒い薙刀と化し、結界と拮抗！

「その剣…記憶が正しければ結界を貫く為だけに存在する剣なんだけど…」

「え？」

つまり…殺傷力…0？

「そしたらさようなら、俺の剣！」

剣を消して、改めて奴に向かう！

「最後はやっぱり俺の拳でって事だな！霊掌っ！！」

鳩尾に拳を入れる！

「いい加減倒れるや！」

「倒れるわけにはいかない…！」

傘で殴り返して来る！

「なめんな！」

傘を掴み、奴ごと投げ飛ばす！

いいとこなので、此処で話そう！

「…能力が使えねえ？此処で死んだら終いだあ？ハッ、そんな脅し文句で俺をどうこうしようって時点で間違ってるんだよ！よくよく考

えてみればおかしな話だよな！仮に、この世界で能力が本当に使えないって話なら、あんだだってこの世界に閉じ込められてどうにも出来ねえじゃねえか！」

妙に頭が冴えてきた。俺ってまさか、生まれながらの戦闘民族とか？そんなわけないか。

「そのルールに疑問を持たせないために、あんたは一撃で俺を倒そうとしていた。だが、その行動にもボロがあつた。よく考えりゃ、スペルカードってのは『能力の延長線上』のものが多し。あんたはさつき、『生と死の境界』ってスペルをぶつ放しやがった。それだつてあんたの能力…『境界を操る程度の能力』の一部に過ぎないんだろ？つまりだ…此処では俺だつてスペルカードを使えるって事になる！」

「まさか…そこまで解つていて、わざと隙間に喰われたつて言うの！？」

「まっさか。あんたの隙間に喰われて気付いたよ。そうじゃなきゃ、俺はあんたに負けていたかもな。」

…だが！これであんたのハッターが解つた以上、俺はこうする事だつて出来る！照準『ハイパーグラビトンレンズ』！」

目の前にレンズをひとつ。

そして！

「砲符『リヴァイバル・改』！！」

いつもの収束レーザーだ！

「何処を狙っているの？」

レーザーはお世辞にも奴を狙ったとは言えない。

「そうだな…だって目標はあんたじゃないからな。」

「!？」

向かうは、はるか高く！

「あなたの隙間を破壊する！それが俺の目的だ!!」

この世界は八雲紫が創り出す世界。

そして、この隙間はいくらでも広げられるようだ。

なら、隙間の端はどうなっている？

「空間固定はそんなにがちりしていない！ならば入口さえ破壊すれば…!!」

レーザーは入口だった場所を貫いた！

「隙間は形を崩す!!」

そして外から、幕に乗った少女が。

「魔理沙！いいとこに来たな!!」

「乗って！」

「あいよっ…!!」

箒に飛び乗り、外へ！

同時に出てきた奴に対し、俺は弾で牽制！

「一回出れても、私はいくらでも隙間を構築出来るのよ？」

「だろうな！」

俺は箒から飛び降り、奴の上を取る！

「隙間は私の上にも構築出来る…再び閉じ込めてあげるわ。」

「そんな事はさせないぜ！」

奴に降り注ぐ弾！

「くっ、泥棒め…何処までも邪魔をして…!!」

奴は俺じゃなく、魔理沙の方に意識を向けた。

「サンキュー、魔理沙。奴の気を逸らしてくれて。」

「!？」

しまった、彼が上に…!!

「此処は幻想郷！能力は心おきなく使えるな！」

右手に霊掌…

いや、違う！あれは…！

「魔力付きの拳を喰らえっ！！霊魔掌！！」

奴の身体が僅かに地面に沈む。力が大きい証拠だ。

「ついでに新技でも喰らいやがれ！奥義っ！！！！」

今度は両手に何かが…！

煙が…立ってる…！！

「溶岩よつがんにじゅうしょうは二重掌波っ！！！！」

両手から押し出されるようにして放たれた灼熱は、彼女を包み…！！

「これが…死なない俺の…！」

爆発！！！！

「戦い方だっ！！」

「ただいま……って、誰も居ないか。」

久しぶりに戻った、俺の始まりの地。

「居るわよ。」

いつものように軒下でお茶を啜る巫女。

「無事だったのね。連絡ないからてつきり……」

まさか死んだと思われていたんだろうか。

「俺がそんなことで死ぬとでも？」

「……まあいいわ。それより、これ。」

ぱんと渡された、数百枚はあるであろう紙、紙、ペーパー。

「貴方が八雲紫を倒しちゃったものだから、妖怪討伐依頼がかなり届いているわ。」

「…は？」

「人間に危害を加える妖怪達を懲らしめてやりなさい。今や貴方は英雄扱いよ？英雄が人々の願いを叶えないなんて話、そんなの有り得ないから。」

「待て、俺に休みは」

「そんなのないわ。英雄に休みはないの。ほら、行った行った！」

「マジかよ…」

俺はほんの3分くらいで追い出された。

…でも、他人に英雄なんて呼ばれるのも悪くはないな。

「人間は食べ物なのだー！」

「食べ物じゃないから！つたく、いい加減にしないと怒るぞー！」

ルーミアは常に見ておかないとまずいな。

「助けてー！」

「ニンゲンハオレタチノエモノダ！」

こいつは救いようがなさそうだ。

「待ちな！」

「ダ、ダレダ！」

妖怪に指差して、俺は言う！

「不死身のレナってのは、俺の事だー！」

暫くは妖怪達をどつき回さないといけないようだ。

妖々夢編、終

Phantasm - 3... 生と死の境界の狭間で【後編】（後書き）

次回から永夜抄編に突入です！

少し待ってて下さいね！

月下の惨劇(前書き)

永夜抄編スタートです！

2011.7.3.一部修正しました。

月下の惨劇

その日は不気味なまでに月が白く、鈍く輝いていた。

月の下、白装束の者が神輿のような何かを運んでいた。

ちょうど人が数人入りそうな箱を乗せ、神輿のようなものは進んでいく。

「…蓬萊山輝夜、もうすぐ目的地に着く。準備を。」

外から冷たい声がした。

「…姫様、何かの間違いですよ？ 姫様が蓬萊の薬を飲んだなんて…」

「飲んだわ。不老不死というのは魅力的だった。…誰も死にたくないのと同じ。」

十二単を着た少女が、心配そうに見つめる従者にぽつりと言った。

「そうでしょう…永琳？」

少女は目の前に座る女性にそう語りかけた。

紺と赤の2色の服を着た、白銀の髪的女性。

血に濡れた黒の男。

「…随分と酷い出迎えじゃない。」

少女は彼を知っているようだ。

「…姫、もう少し待ってくれ。…まだ生きてる奴が居る。」

音を立てずに逃げようとした白装束の者が彼に捕まる。

「た…助けて…」

その恐怖の感情を直に表した顔を見て、彼は引き攣る程唇を吊り上げて返した。

「無理だ。今の俺は…殺人鬼だからな。」

頭を握り潰し、返り血を直に浴びた彼の顔には笑みが。

「…うっ！」

従者が余りもの惨劇に耐え切れなくなったのだろう、その場所から離れた。

「…恐ろしいわ。人を人と思わないのね。」

少女…輝夜はあくまで冷静に話しかけた。

「あれはそもそも人じゃない。『人の形をした何か』だ。現に、あれは…」

彼は、先程頭を握り潰した肉体を指差した。

肉体は立ち上がっていた。

「頭がないのに動いている、これはどう考えても人じゃないだろう。だから容赦なく殺した。」

今度は胸の辺りを貫き、止めを刺した。

「…蓬萊山輝夜…でいいんだな？」

「ええ。」

「依頼主と確認した。こつちだ。」

彼に案内され、竹林に足を踏み入れる。

「…此処だ。貴女方には暫く此処に隠れて貰う。…異論はないか？」

目の前には立派な建物が。

「特にないわ。強いて言うとなれば…貴方の名前をまだ聞いてない。」

「

「…名前はない。貰った事すらないが、上司からは『ネイビー』と呼ばれている。」

「そう…。ネイビー、私達は何時まで此処に居ればいいのか？」

「奴ら…月の奴らが追ってこなくなるまでだな。」

「月の奴ら…？」

「きっと、この事態は直ぐに奴らに伝わる…つまり、奴らは必ず君達を追いかけまわす。だが、必ず終わりは来る…それまで、君達は隠れていてくれ。」

「解ったわ。それより、貴方はどうするの？」

「俺は月へ向かう。奴らが動き出すより前に手を打つ。…ただ、君達にもう会う事はないだろう。」

ネイビーのその一言が、輝夜に疑念を抱かせる。

「どういう事？」

「俺の任務は此処で終わりだ。後は月で一騒動起こせばそれでおしまい。安心しろ、人殺しは今の所する予定はないから。」

「何処に安心できる要素があるのよ…月に入るのにも一苦労なのに、それを…」

「何も正しい手段で入るとは誰も言ってないぞ？…ある人物の力を借りる。これ以上は聞かないでくれ、任務に支障が出る。」

とにかく、ネイビーはそう間を繋げ、続けた。

「『月の頭脳』と言われた彼女が傍にいるんだ…俺の行動の意味は彼女になら解るはずだ。解らないなら彼女に聞いてくれ。」

そう言い残し、彼は足早に去った。

「どづいう事、永琳？」

すると、彼女はすぐに閃いたようだ。

「姫様、すぐに…」

輝夜に何かを耳打ちする永琳。

「…え！？それって…！」

全てを聞いた時、輝夜の顔に見えたのは驚き。

「ええ…彼はきつと…！」

月下の惨劇（後書き）

次回予告

「欠けた月、新たな異変」

久しぶりにレナ登場！

お楽しみに！

欠けた月、新たな異変（前書き）

まさかのPV80000、ユニーク100000突破！

す、すげえ…読者の皆様の人数が…

あ、ありがとうございます（こつこつ事になると急にチキンハートになる作者）

2011/7/3、一部修正しました。

欠けた月、新たな異変

「月は出ているか？」

唐突にそんな事を言い始めた、黒いスーツの青年。

「出ているけど、それがどうしたの？」

紅白の巫女はきよとんとした顔で彼に聞く。

「出ているのか…そしたら今日も…」

言いきらない内に、空間が斬り裂かれる。

「はあい 今日も飲むわよ（はあと）」

「既に出来上がってら…」

顔が少し紅潮している紫の少女、紫が彼にひつつく。

「え？どういう事？」

いまいち状況が理解出来ない霊夢。

「作者の文字数稼ぎに付き合ってやるか…というのみな、実は…」

回想

「今日は満月だから飲むわよ〜！」

俺はたまに白玉楼に行くようになったんだが、いきなり幽々子がそう言い出したんだ。
や、これだけなら良かったんだが…

隙間が開いて…

「お、お前は!？」

なんか瓢箪を持った鬼っぽい少女(頭に生えた二つの角でそう判断した)と、紫がやってきた。

「あ、あんたが紫を倒したレナか！」

「え、あ、はい…」

「あたし、伊吹萃香！鬼だからそこんところよろしく！」

「よ、宜しく…」

萃香とか言う鬼が、ひたすらに紫になにかを飲ませてたんだ。

「ぷはあ！流石ね、ここまで美味しいといくらでもいけそうだわ！」

「飲みすぎちゃうと潰れるよー、にゃはははははー！」

「幻想郷では常識に囚われちゃ」貴女はまだお呼びでない。

「解ったわ。私がなんとかしておくから、レナは紅魔館に戻ってて。」

「恩に着るぜ、霊夢…」

この時は思っていなかったのだが、霊夢はかなり飲める口なのか？
それが解るのはもう暫く後になる。

俺は力のない足取りで、紅魔館へ向かった。

「ただいま…」

と同時に倒れる俺。疲れたよ、パトラッシュ。

「どうしたんですか？」

声から、誰が来たかは直ぐに解った。

「ああ、咲夜さんか、実は…」

青年説明中

「それは災難でしたね…立てますか？」

「ああ…なんとか…」

咲夜さんの肩を借りながら、俺はふらふらと進んだ。

途中、釈放されたばかりのレミアが俺を襲おうとしたが、フラ
ンに遊びという名目でボコボコにされていたのはここだけの話だ。

「なんだか申し訳ない…」

「いえいえ、あの鬼の前には誰もかいませんよ、お酒という意味
では。」

ベッドに寝かしてくれた咲夜さん。優しすぎるぜ。

「酔い止めの水です。随分と変わってきますよ。」

「ああ、頂こうか…」

俺は水を喉に流し込んだ。…ある程度、楽になった。

「今日は休んでいて下さい。後は私がやっておきますので。」

「何もかもすまない…」

だんだんと、瞼が重くなる。眠た…

???視点

「姫様、すぐに…」

囁きで解った。

あの男の目的は、私と永琳の復讐への準備時間を稼ぐ事。

「ちよつと待つて。」

私はある機械を取り出す。

月の技術は、此処より数百年先を行っている。

もしかすると、外の世界より進んでいるかも知れない。

「つまり…月を混乱させれば、皆異変に気付く訳ね。」

らくな視点

皆さん、こんにちは。 (ひそひそ話レベルの小声で)
月の技術について、此処で説明します。

今、あの姫さんが取り出した機械ってのは、ぶっちゃけるとノートパソコンです。

月の技術ってのは、現在の日本レベルと思って下さい。
で、この姫さんの第二の顔、それは…

「月の全サーバーをハックして、月の形をおかしくするわ。」

立派なハッカーなのです。コードネームは『絶世の美女』らしいです。

「まずはXXね。…完了。続いてサーバーにXXXXXXXXXを制作：完了。後はこれをこうして、あーして…、永琳、救急箱の中にUSBメモリがあるはずだから、取って。」

月は太陽光が当たる角度によって見かけの形が変わるのですが、綺麗な形にするために月全体に光学迷彩をかけてあるのです。（勿論これはフィクションだからね、鵜呑みにしないでね。『月は太陽光が当たる角度によって形が変わる』のは本当だけどね。）

で、この姫さんはその光学迷彩をおかしくしようと考えているのです。伏字なのはかなり危険なワードだから伏せてます。やましい意味は全くないけど。

「あとはこれをサーバー全体に適用…完了!」

ついにこの姫さん、月のサーバーを掌握してしまいました。

「光学迷彩の設定を変更…完了!」

それにしても、月側はセキュリティどうなっているんでしょうね？
堅いで有名なんですけど…

その頃、月では…

「祭りだ祭りだわっしょいわっしょい！」

「え？祭り？」

「マジで！行こうぜ！」

ネイビーの「祭りだ作戦」で、セキュリティはダメダメでした。

咲夜視点

「ふう……」

今日のノルマを終え、身体を伸ばす。

「それにしても、今日は綺麗な満げ……！？」

私は目を疑いました。

さっきまで真ん丸だった月が……雲も何もないのに……

欠けて、三日月になっていた。

「どづいつ事……！？」

私は慌てて行動に出る事に。

？？？視点

「永琳、月を仮にミサイルで破壊するとして、何日くらいあったら破壊出来そう？」

すると、彼女は少し考えて…

「材料は私が調達するにしても、およそ3日でしょうか。」

3日で出来るんだ、月の頭脳は伊達じゃないわね。

「3日ね…解った、今すぐ用意にかかって。月を破壊するわ。」

「本当にやるんですか？」

「ええ。あんなもの、壊してしまえばすっきりするわ。」

私を追い出した罪は重いわよ…？

らぐな視点

こりゃあまずい事になったねえ。月が壊れちまったら随分と困る。
…レナに力を借りますか。

「逃符『逃げるが勝ち』」

ほんと、彼は姿を消した。

欠けた月、新たな異変（後書き）

次回予告

「?1: 夜に謡う者達」

早速あの二人が登場！

お楽しみに！

1…夜に謡う者達(前書き)

携帯変えて書き置きが事故で消えて…

もうやだ…という愚痴。

皆様お待たせしました。

2011 / 7 / 3 , 一部修正しました。

1…夜に語る者達

「……………！」

うう…眠いんだよ、俺は…もう暫く休ませてくれよ…。

「…ナ！レナ！」

うにゃ…？俺を呼んでる…何があったんだ？

「起きて下さい！」

「う…咲夜…さん？どうしたんすか…そんなに慌てて…」
凄く焦っている様子。え、どうした？

「月が…月が！」

「月？」

俺は窓から外を見る。

月…ねえ。

けどどこからどう見ても…

「…普通の三日月だが？」

「普通じゃないんです！今日は満月のはずなんです！なのに…！」

「三日月、だと？」

「そうです！」

…嘘を付くならもっとまともな嘘を付けばいいものを…。
だが相手は咲夜さん。
嘘だとしても、こんなレベルが低い嘘をわざわざ付くか？

そもそも咲夜さんって嘘を付くような人じゃあないし…

とあれこれ考えていると。

「連れて来ました〜！」

「ありがとう。」

見慣れない二人が現れた。

一人は黒い翼を広げた、黒髪の女性。

…高校生くらいか？

もう一人は目を回している、服装からして今時の若者と言える女性。
…っーかこの世界にもニーソってあるんだ…

「紹介します、こつちの翼の人が射命丸文で…」

「あ、貴方がレナですね？」
「彼」がお世話になってると思いますが…」

文と言う女性が挨拶してきた。

『彼』？彼って誰だ？

「私、文々。新聞社の編集長なんですよ。」

「ああ！らくなさんの！」

やっとピンと来た！

「貴方の強さについては是非取材したいのですが、今はそんな事やってる暇じゃないんですよ。はたて！起きて起きて！貴女の写真が役に立つ時が来たよ！」

文がもう一人の女性の身体を揺する。

「え…私の…写真が…？」

もう一人が目を覚ましたようだ。

「そう！貴女の練習写真、月の写真があるでしょ？それを見せて！」

「？私の月の写真なんかを見てどうするの？」

「いいから今日の分を見せて！」

「…まあ、別にいいけど…全然綺麗に撮れてないよ？」

と言いながら写真を出すはたとえつ女性。

お世辞にも、ピントが完璧に合っていないので綺麗な写真とは言えない。

練習と言うのは本当のようだ。

一枚目、日が沈んだ直後の月…満月。

二枚目、およそ一時間後に撮ったと思われる月…満月。

三枚目、さらに一時間後…

「!？」

月が…欠けている!？

「本当に欠けてるね…これは調べてみる価値がありそうです！」

「レナ…信じて貰えますでしょうか？」

「ああ…これは非常事態だな。」

月が1日で欠けるなんて、どう考えてもおかしい。

「というか、あんた！」

いきなり俺ははたてに指差された。

「あんた、あの八雲紫を倒したんだって？」

「ああ。それがどうした？」

「そんな事、どうしても信じられないわ！この月が欠けた理由を突き止めたら、あんたは凄いつて認めてあげる！だから私も連れて行きなさい！」

素直に連れてけと言えればいいものを…

「解った…」

「私は姫海棠はたてよ！はたてって呼ばせてあげるから感謝なさい！」

…ふと思った。

はたてって…ツンデレって奴なのか？

「レナ、今回は私も同行します。」

「咲夜さんもですか？」

「ええ。霊夢と魔理沙には文と一緒に動いて貰います。だから、レナは私とはたてと一緒に原因を探しましょう。」

「了解だ！」

こうして、俺は咲夜さん、はたてと共に今回も異変解決に奔走する事になった。

はいいんだが…

「遅い！女の子待たすなんてホントあんたはへっぽこ君ね！」

「レナ、大丈夫ですか？」

「俺…人間なんだけど…」

空を飛べるはたて、時を上手く操って瞬間移動する咲夜さんに対し…

俺は普通に走る。

よって女性陣が先に進み、俺が後から追い掛けると言う構図の完成。

つまり、はたてと咲夜さんを待たせる結果に…

「…済まない、人間なばかりに…」

「人間ってかなり不便なのね…だらけてる訳じゃないか…メモメモ。」

見かねた咲夜さんが俺と一緒に動いてくれ、なんとか先に進む。

「ん？あれは…？」

俺達は何か動くものを見つけた。

鳥…人間？

「あれは…夜雀じゃない。ちよつど良いわ、聞いてみよう。」

はたてが先行し、話を聞いてみることに。

「ねえ、ちよつといい？」

「うん？あなたは…？」

「ただの新聞記者よ。それより、月がおかしくなってるってご存知？」

「私達もそれに気が付いて、情報収集に当たってるんだけど…」

「そう…そしたら、貴女も何も知らないのね…」

「私もリグルに聞いてみるけど、きつとなんも解らないよ？リグルも知らないだろうし。」

「リグルって、あの可愛らしい虫の女の子？」

なんかはたてと鳥人間ばい人の近くに居る、ボーイッシュな短髪の人を指差してはたてが言ってる。

「うん。一応聞いてみるだけ聞いてみるけど…というかよくリグルが女の子って解ったね！」

「洞察力だけは良いから、ありがとう！」

はたてが戻ってきた。

腕で「x」としている所を見ると、情報は得られなかったようだ。

「先に行きましょう。色んな人に聞いてみないと。」

新聞記者は切り替えが早い。

俺もその精神を見習いたいものだ…。

「リグル、なんか情報掴めた？」

夜雀ことミスティア・ローレライは友達でもあるリグル・ナイトバグにそう聞いた。

「何にも。こうなったら慧音先生に聞くしかないね。」

首を横に振るリグル。

「そうだね…夜がおかしくなったら私達も困るから…出来れば解決したいね。」

1…夜に謡う者達(後書き)

次回予告

「 2…歴史を律する者」

ってけーねが言ってた。

お楽しみに！(おいこら)

2...歴史を律する者(前書き)

PV90000、ユニーケ11000突破感謝

2011/7/3、一部修正しました。

2…歴史を律する者

「……？……？視点」

「永琳、作業はどうなってるの？」

「材料は揃いつつあるのですが……いざミサイルを作るとい話になると、人手が足りな過ぎます。」

頭は良くてもこればかりはどうしようもならない。

「3日では難しいかと……このままの人手では最低1週間はかかるかと……」

まあそれくらいが妥当ね。

「要は人手を集めればいいのか？」

「ええ……ですが姫様、当てがあるんですか？」

舐めて貰っちゃ困るわ、永琳。

「あるわ。私を誰だと思ってるの？姫よ？しかも箱入りのダメダメ姫なんかじゃない。行動力だけはあるわ。」

私がこの地球に降り立てたのも、地球に根付いたコミュニティがあった故。

さて…私の人望、見せてあげるわ。

- レナ視点 -

「こおらあ！あなたは何回私達を待たせれば気が済むのよ！」

「はあ…はあ…」

だから俺は人間だって言いたいのだが、言う気力すら起きない。
疲労困憊ひらくんぱいとは正にこの事だ。

「まったく、仕方ないわね…近くに人里があるわ、今日はそこに泊めて貰いましょう。にしても咲夜…だっけ？あんた、人間なのに疲れが見えないんだけど。」

「私の能力で休みつつ動いているので、それほど疲れてないんです。」

「便利な能力みたいね…私なんか、写真を複写コクシするくらいしか使い道ないわ、羨ましい。」

「この能力がないと、紅魔館ではまともに働けないんです。仕事が多すぎて…」

「あ、あんたも大変みたいね…凄く急に疲れた顔になったわよ？」

後ろからでも解る、咲夜さんの溜息。

「仕事は苦にはならないのですが、あの『自称』カリスマ溢れる吸血鬼のお世話が大変なんです…あれをお嬢様と呼ぶなんて…妹様の方がまだマトモです。」

「確かに…あれを上手く操るのは難しそうね…」

なんか女性陣の話が深い…。

「あ、人里が見えて来たわ！急ぎましょう！」

休息の場所が見えてくるだけでも、テンションは上がる。俺は残りの体力を振り絞り、はたて達を追い掛けた。

が、体力なんて残り一桁の勢いなので、また置いていかれた。

…これが後にちょっとした事件の原因になるとは、俺は考える事すら無かった。

「待て。」

「？」

後数歩歩けば人里に着くという所で、俺は見知らぬ女性に呼び止め

られた。

紺のしつかりしたワンピースをシャツの上から着ている女性。
…というより、この人も胸がでかいな…

咲夜さんは普通だが、はたてはあるとは言い切れないレベルだから
な…っと、なんか脱線した。

淡い水色の腰までかかりそうな長髪が、風に揺らめく。
頭には…烏帽子でいいのか、あれ？

「貴様…私の教え子に手を出したそうだな？」

「え？」

訳が解らない。

教え子？彼女は先生か何かをやっているのか？

「惚けても無駄だ、この外道が。」

見知らぬ女性に罵られるような事、俺やったかなあ…？

「話が見えてこないんだが…その教え子って誰なんだ？」

「チルノ…と言えば思い出すか？」

「！…ん？」

チルノって言えば、確か紅魔異変の時に突っ掛かってきて、ぶっ飛ばしたな…

！まさか！？

「待ってくれ！あれは正当防衛だ！あつちからいきなり喧嘩吹っ掛けてきたんだよ！」

「外道が！貴様の言葉など信じるか！この上白沢慧音が貴様に天誅を下す！覚悟！！」

そうして相手は俺に迫って来た！

「聞く気はなさそうだな…！信じて貰う為に、俺は戦う！」

両手に魔力を集め、放つ！

「弾を使える！只者ではないな！」

だが弾はかわされる、お返しが来た！

「うおっ！狙いが正確だ！」

顔を狙う弾を、なんとかかわす。

「甘い！」

なっ…！？足が払われた！？

「うわっ！」

体勢を崩した俺に…

「終わりだ！」

鳩尾を突く一撃！

「がはっ！」

な…何だよ…これは…！パンチってレベルじゃねえぞ…！

「まだ耐えるか…だが、貴様は運が悪いな。今日は満月だ…満月の時の私は…」

月の光を背中に浴びる彼女は、唇の端を軽く上げてこう続けた。

「何をするか解らないぞ？」

…あれは…！？

「私は少々特殊な生き物なんだ…狼人間の話は知っているな？」

「狼…人間…」

満月になると狼と化す人間か…

「私もそれと似ていてね…満月になると、私は力が高まるんだ。」

少しずつだが、彼女の姿が変わる。

頭に聳える一對の角。

服装の色すら変えてしまふ彼女の変化は…
とにかく恐怖しか感じられなかった。

「私は白沢…不思議な生き物さ！」
はくたく

血管が隆起するほど強く握られた拳が、俺を砕かんと迫る。

「貴様には死が相応しい…あの世で後悔するんだな！」

死にはしないだろうが、暫く寝たきりだろうな…

「そこまでだ、上白沢慧音。」

「「!？」」

声のする方に振り向くと、先程はたてが話していた少女と、もう一人の少女が巨漢の妖怪に拘束されていた。

「クカカカカ…まさか俺の変身能力がここまで役に立つとはな…おかげで誰にも気付かれずに餌を手に入れる事が出来たぜ。」

「貴様！彼女達を放せ！」

「おっと、それは出来ない相談だなあ。…そうだ。そこにいる人間を殺せ。まあ俺がなりきった人間だけだよ。そうすりゃこいつら

を解放してやってもいいぜ。
君たちはしっかり見てろよ！先生が人殺しになる瞬間をよお！クカ
カカカ！！」

どうやら、俺はやるべきことがありそうだ。

彼女が俺の方を向く。

「…済まぬ…！」

踏ん切りがつかないだったので、俺は唇を動かした。

「……………」

彼女の拳が、俺の腹に入った。

「クカカカカ！まさか本当に殺しちゃうとはよお！それほどこいつ
らは大事か！？…まあ良からう、こいつは解放してやるう！」

妖怪は一人の少女を解放する。

「貴様！もう一人は！？」

「クカカカカ！こいつも解放したいのか！良からう、条件をくれて
やるよ！俺の女になれ、そうすりゃ解放してやるよ！」

「くっ…！」

「お前は美人だからなあ、やりがいがあるってもんだ！クカカカカ
」

何のやりがいだよ…と思いつながら、俺はこっそりと起き上がる。
それにしても彼女の拳は痛かった。うう…

幾らさつき唇で「遠慮なくやってくれ」と言っただとはいえ、痛いも
んは痛い。

「さあ、俺の女になれ！」

…バカだな。あの妖怪、俺を殺せると本気で思っていたのだろうか。

「なってやるから、さっさとその子を放せやこのクズ妖怪が…！」

相手はでかかった、それすなわち急所も高い位置にある！
なんせ股の付け根が俺の顔の位置にあるからな。

というわけで奴の後ろから〇〇〇〇を蹴り上げてやりました。

「%#& § £ !?」

その痛さ…俺も男だから解るよ。

「だが加減はしない！」

さらに蹴り上げ、奴を苦しめる！

「慧音先生！今のうちにその子を！」

「え！？わ、解った！」

目の端で人質だった子ども達が保護されたと確認し、俺は奴の左腕を掴む！

「うおおおおおー！！」

背負い投げが決まったー！！

「ど、どうじで…ぎざまは…」

「俺は死なない人間なのさ。俺になりすますならもう少し考える。」

軽く妖怪を放り投げ、止めのスペルを発動！

「私も一撃いいか？」

横に並ぶ慧音先生！

「ええ、構いませんよ！」

「私に付いて来て貰えるか？」

「…了解！行きましよう！」

まず駆け出したのは先生！

「貴様が真の外道だな！許さん！野符『武烈クライシス』！！」

殴打、蹴り、怒濤のラッシュ！！

「負けてられないな！奥義い！！」

両手に溜めるは超高熱！

「熔岩二重掌波あ！！」

妖怪さんこの時点でオーバーキル！

「だがまだ気が済まない！！」

止めの拳！

右からは慧音先生の拳！

左からは俺の拳！

「あの世で詫びろ！！」

妖怪、死亡しました。

「これぞ見敵滅殺！！」

「済まぬっ！私が誤解をしたばかりに！」

「いやいや、構いませんよ。」

平謝りする慧音先生。

「チルノの事は本当ですし……」

「しかし……！」

納得がいかないようだ。

「そしたら教えて下さい。月の事ですが……」

すると先生は有力な情報を提供してくれた。

「欠けた月の話なら、私より詳しい人が居る。私の友達なんだが、会って話を聞いてみるか？」

「ありがとうございます！」

この後、咲夜さんとはたてに再会でき、翌日動く事にした。

2…歴史を律する者（後書き）

次回予告

「3…月破壊計画」

レナが出会った人物はまさかのあの人！

お楽しみに！

3...月破壊計画(前書き)

書ける時に書かないといつ書けなくなるか解らないといつリアルの
忙しさに...

妬ましいわ!

2011 / 7 / 3 , 一部修正しました。

3…月破壊計画

「?????時点」

「見なさい永琳！この人の数を！」

「す、凄い……」

私にかかれば1000人くらい集めるのは造作もない事だわ。見る、人がゴミのようだって奴ね。

「それよりも…まさか姫様に忠誠を誓う者が、こんなに沢山地球には居たんですね……」

「まあ私だからこそ成せる業だけど。さ、これから何をするの？それを私の口から説明すれば、彼等は喜んでやるわ。」

「ミサイルの部品を組み立てる作業ですね。」

「解ったわ。愚民共、聞きなさい！」

私が声を出せば民衆は黙る、最高の下僕達だわ！

「あの憎き月を破壊するために、ミサイルが必要な。材料はもう揃っているから、あなた達はミサイルを造りなさい！きちんと造れたらご褒美をあげるわ、だから死ぬ気で造りなさい！」

『かしこまりました、姫様！』

ふふふ…高い所から愚民共を見下ろすのは楽しいわね。

ーらくな視点ー

『かしくまりました、姫様！』

…気持ち悪いな、この集団。あんな奴に従って、何が楽しいんやら。
ま、俺はやることをやるだけだ。

月を破壊するミサイル…そんなもの、絶対に発射させない…！

「あ、あ、あ…聞こえるか？そうだ…それを頼む。俺は暫く動けそ
うにないんでな。」

ーレナ視点ー

「慧音先生…今回のこの異変の黒幕を、その先生のお友達さんが知
ってるんですか？」

「ええ。だけど、少し問題が…」

先生は少し顔を曇らせた。

「問題？問題って何よ？」

「彼女の居場所がかなり問題なの…場合によっては、彼女にいつまでたっても会えないわ。」

「まさか…迷いの竹林ですか？」

「迷いの竹林？」

聞いた事ない場所だな…

「ええ。彼女は迷いの竹林の道案内役…彼女は竹林中を飛び回っていて、いつ会えるか見当も付かないんです。」

「だが、たかが竹林だろ？そんなに広くないなら、そこまで言わなくても…」

この発言が大間違いだったのはすぐに解ることになる。

「レナ、迷いの竹林の広さを知っててそう言ってるんですか？」

「え？精々人里くらいの広さじゃ…」

俺は思いっきり墓穴を掘ってしまった。

「バツカじゃないの！？人里よりずっと広いわよ！」

「人里の数十倍の広さよ。覚えておきましょうね、レナさん。」

「す、すみませんでした…。」

流石慧音先生、知識は沢山頭にある。

「此処よ。迷いの竹林…私から離れないで。迷ったら一巻の終わりよ。」

俺達は慧音先生の案内の下、迷いの竹林に入る事にした。

「?????視点」

「うえーん！お母さーん、お父さーん！」

どっちら呼ばれてるみたいね、今行くよ！

「ひっく…ひっく…」

「大丈夫？私が付いてるから、もう泣かないで。」

小さい女の子ね…何でこんな所に？

「どうしてこんな所に来たの？」

「お母さんの為だね、筍を探ってあげようと思って…」
優しい子ね。

「筍を探してたんだ。解った、ちょうど良い所があるの！こっちよ
！」

女の子の手を引き、ある場所に案内する。

「此処！筍がかなり採れる場所なんだ！」

「…でも、筍は一つもないよ？」

確かに、何も知らないと此処には立派な竹しかないと思ってしまっ

「それがあるんだよ、ここに！」

私は地面のある一点を指差した。
僅かに土がひび割れている。

「何にもないよ？」

「そしたら、一緒に掘ってみようか！」

ひび割れた土を掻き分け、地面に穴を空けていく。

「あ、あった！」

土に埋まった真ん丸とした筍を掘り出し、女の子の顔に笑顔が戻った。

「お姉ちゃん、凄い！何で解ったの！？」

「筍はね、土から顔を出す前に探ると美味しいの。既に出ちゃったものも食べられなくはないんだけど…固くて中々食べにくいよ。食べ頃の筍は今のみたいに土がひび割れた所にある事が多いから、覚えておくといいよ。」

「うん！」

「もう少し探してみようか！」

この後も順調に筍を見つけ、いつの間にか女の子の両手で抱えきれないくらいの筍の量になった。

「そろそろ帰ろつか、あんまり遅いとお母さんが心配するからね。」

「うん！」

後はこの子をお家の近くまで案内してあげたら大丈夫だね。

暫くして…

「もう大丈夫！お家の近くだから！」

「そうなの？気を付けて帰ってね。」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

「気を付けてね！」

…あの子には、お母さんやお父さんが居て、帰りを待ってる人達が居る。

私には…そんなのない。

「此所にいたのね、妹紅。」

「慧音？どうしてまた？」

それに、なんか見慣れない人達がいるし。
なんかあったの？

「例のあの件で来たんだけど…」

「あ、そのことね！あれからそんなに進展はないわ…強いて言うなら、人を見る事が多くなっただくらいかしら。」

「ちょっと待って妹紅。ちゃんと皆に解るように説明して。私は解るけど、他の皆はポカーンとしてるわよ。」

「あ、そっか。」

皆に一から説明しなきゃ、この異変は解決出来そうにないしね。

ーレナ視点ー

慧音先生に案内されて着いた先には、一人の少女が居た。

白髪、でも歳をとって出来た白髪じゃなくて、まるで生まれた時から白髪のような感じがする、キューティクルが綺麗に輝いているから。

にしても、まさか「もんぺ」とは…

薄々予想は出来ていたが、この世界は数十年…場合によっては数百年前の世界なのか？

だとするならば、文明はそんなに発達していないはずだ。

しかし、はたてのあの服装…どう考えてもごく最近のものだ。

どういうことだ？

…それよりも、この異変の黒幕を知っているかもしれないこの人物…俺と似たような感じがする。

妙に親近感が湧くが、これは何なんだろう？

「まずは自己紹介から。私は藤原妹紅。この竹林の案内役をやって

るよ。よろしく。」

妹紅が俺に手を差し伸べる。

「俺は彩崎玲奈だ、皆は俺をレナって呼ぶ。宜しくな、妹紅。」

握手を交わした瞬間、妹紅の顔が曇った。

「レナ：ちょっと聞いていい？レナってさ…実は人間じゃないとか、そんなことはないよね？」

「？意味がよく解らないが、普通の人間かと聞いているのなら違う。俺は死なない人間なんだ。」

すると、妹紅は急に俺の首根っこを掴んだ。

「あんだ…蓬萊の薬に手を出したのか!？」

「な…何だよそれ!？蓬萊の何とかがって聞いた事もないぞ!」

死なないと言った途端、急に怒り出した妹紅。

「待つて妹紅！レナは蓬萊の薬のことなんて全く知らないわ!」

慧音先生が割って入り、俺は何とか解放された。

「能力持ちよ！薬に手を出した訳じゃない！それに、あれはそこら辺に転がってる訳じゃないでしょう!？」

「…本当なの?」

妹紅の質問に、俺は正直に返した。

「誓おう、蓬莱の薬なんて知らないし、飲んだりなんかしていない。」

暫く俺をじっと見る妹紅。

俺もしつかりと彼女の緋色の瞳を見つめた。

「…私の思い違みたいね、ごめんなさい。」

良かった、信じて貰えたようだ。

「妹紅、答えられるんなら答えてくれ。その蓬莱の薬って…何なんだ？」

すると、妹紅は少し躊躇いがちに話し始めた。

「蓬莱の薬…それは飲んだ者を不死身にする禁断の薬…手を出した
が最後、その者は死ぬという事がなくなる。私も飲んでしまった…
あの時の私はきつと、憎しみに飲み込まれてしまっていた…」

「いや、今も私はきつと憎しみに囚われている…あいつが、あいつ
が此処に来さえしなければ！」

「あいつ？」

「蓬莱山輝夜…」

かぐや？かぐやと言うとあのかぐやか？

「きつと貴方の予想は正しいわ…レナ。『かぐや姫』のかぐや。彼女が今回の黒幕…でも、何をしようとしているかは解りませんが…」

「いや、何をしようとしているかは解るよ、慧音。あいつは絶対に何か人を困らせる事をやる。あいつはそういう奴だから。」

とにかく、今回の黒幕はあのかぐや姫だそうだ。

正直な話、信じられないが妹紅のこの様子からして演技とは考えられない。

それにしても、歴史的有名人物が出て来るとは…全く、何なんだこの世界は！

—らぐな視点—

「は？今何と？」

「簡単な話よ、貴方は中々の有力者の様じゃない。だから邪魔者を排除してほしいのよ。」

「邪魔者と言いますと、具体的には？」

「藤原妹紅…でも彼女はどうやっても殺せないから、戦えない程に痛めつけてやりなさい。後…何だっけ？ほら、最近有名の不死身とか言うあいつは…」

レナの事が。

「あいつもついでに痛め付けなさい。来るならの話だけど。」

…いい加減、この傲慢くそ女の顔を見るのも嫌になってきた。

ギロチンで首を落としたいんだけど…

『抑えるのよ！彼が来たことを確認してから執行しなさい！』

ですよね、流石です。

『でも、幾ら貴方とは言え、彼女の首を落とすなんてことは不可能よ。彼女も不死身…。』

だけど、執行だけは出来る。そうですね？

『確かに…』

すみませんが、俺はあの女の首を落とすまでは譲りませんよ？

『解ったわ…』

ありがとうございます。時が満ちたら…

あの女を処刑します。

3…月破壊計画（後書き）

次回予告

「4…死闘の幕開け」

ついに全面対決！

お楽しみに！

4...死闘の幕開け(前書き)

4月初めての更新!

4…死闘の幕開け

―レナ視点―

俺達は一度、人里の慧音先生の家に戻り、蓬萊山輝夜を倒す計画を練る事にした。

「本拠地は何処にあるかまでは解らないけど、私達は何としても蓬萊山輝夜のやろうとしている事を止めなければならぬわ。…皆、力を貸してくれる？」

「ここまで関わっておいて引き返すって選択はない。俺なりにやることをやるよ。…それで良いか？」

「私も協力します。」

「わ、私は役立たずだけど、私にもやれることがもしあるんだったら協力するわよ！」

「私は輝夜をぶっ飛ばす！あいつを一発殴らないと気が済まないよ！」

「皆…ありがとう。」

俺達の目標はただ1つに定まった…

蓬萊山輝夜の撃破。

「そんな貴方達にとっておきの情報」

「お、お前は!？」

何故に紫が此処に!？

「蓬莱山輝夜は迷いの竹林の中心に居るわ。竹林の中心に建物があるのを藍が確認したわ。」

「竹林の中心か…しかし、中心とは何処だ?ただでさえ広いのに、中心が何処かなんて全く解らないぞ?」

「そう言うと思って、既に策を講じているわ。…それに、月には何かと因縁があつてね…ここで少しくらい精算したいわ。」

「…よく解らんが、あんたは今回は信用出来そうだな。」

…相手の手数が解らない以上、仲間が多いに越した事はない。

「暫定のこちらの戦力は、私・藍・橙に霊夢・魔理沙・文、貴方達に…さらに二人加わるわ。ただ、その二人はもう既に行動を開始しているわ。レナ、貴方が知っている人よ。」

…誰だ?

「とにかく、動くなら今すぐにしましょう。先手必勝…戦争の定石」

「……？？？視点」

「……もうたくさんよ。」

「……というか、もう動いていいよね？」

「……誰も答えないよね。」

彼女に対する忠誠の証だった白装束を脱ぎ去り、私は言う。

「私でした！」

白装束脱いでも白のゴスロリだから特に変わりないけど、これで存分に暴れられるわ！

「貴様、何をしている！」

出た、ちよつとした仕切り魔。

「私、あんな女に従うのはやめた。だから抜けるわ。」

我ながら立派な演技だ。

こいつを姫様扱いするなら彼女を姫様に仕立て上げる方が百二十分にマシだ。

…もつとも、彼女も随分なじじゃ馬だが。

彼女…零奈も大暴れをし始めたようだし、俺もそろそろ行動に移ろうか。

「それも一理あるわね…流石だね。永琳、先にミサイルの最終調整を。私は彼と後から向かうわ。」

「かしこまりました、姫様。」

…最も厄介な永琳が輝夜から離れた。

この時を…俺は、俺は待っていた！

「姫様…いや、蓬萊山輝夜。貴様には罪を償って貰おうか。」

「…何の冗談かしら？」

「貴様は余りにも多くの命を粗末にし過ぎた…命の重さを、しかとその身に刻め！！」

やりたくはない。

だが、これが俺の本業なんでな！

「罪人…蓬萊山輝夜。」

罪状…多数の人々に苦行を強いた、強制隷属罪。

求刑…死刑。

…処刑人の名において…死刑執行開始。」

右手に握られる、血に塗れた…斧。

「さあ、逃げ惑え罪人！自分の行いを悔いて、地獄で罪を償え！！」

狙うは貴様の首！

俺はただ、貴様の苦しむ顔が見ればそれで良い歪んだ処刑人だ！

―輝夜視点―

「さあ、逃げ惑え罪人！自分の行いを悔いて、地獄で罪を償え！！」

やはり、此処で裏切ったか。私が貴方の裏切りを知らないとしても？

…愚か過ぎるわ、人間風情が。

「永琳！」

「はい！」

私の真後ろから現れる永琳！

これは予想外でしょう…人間！

すると相手はニヤリと笑い、こう返した。

「だろうな。だが、詰めが甘い。それで俺だけを倒すなら立派だが、残念ながら敵は俺だけではないんでな！」

直後、様々な出来事が起きた。

まず永琳を後ろから蹴り飛ばす天狗が現れ。

次に空に黒煙が上がり。

竹林が火に包まれた。

「間に合ったみたいね、らぐな。」

「時間通りとは、流石編集長！」

「永琳は私に任せなさい！貴方は輝夜を！」

「了解です！」

まさか、伏兵が居たとは…！

「チェックメイトだ、蓬萊山輝夜。貴様の悪運も尽きたんだよ。」

「私は死なない…貴方に私は裁けない！」

「そうか。」

…ならば何千回と首を落とせるなあ？」

「なっ…！？」

あの男、狂っている！

「素晴らしい身体だな！首を落としても落としてもなお生きているというその身体！まさに生き地獄を貴様に味わせる事が出来る！」

「…！」

不死を武器に出来ると思っていただけ、撤回する…

この男を何としても殺さなければ、私は殺される…！

4…死闘の幕開け（後書き）

次回予告

「5…不死の脅威」

らぐなVS輝夜、文VS永琳！

そしてレナは…！？

お楽しみに！

5…不死の脅威（前書き）

少々短めですが次回がきつと長くなると思います…

5…不死の脅威

―文視点―

「全く、貴女達は何をしようとしているか解りませんが、何となくあの姫は放っておいたらいけない気がします。」

「烏天狗ですか…剥製にしてみたいですね。」

怖い人。

「私の裸は誰にも見せないですよ？貴女のような年増には見せても意味ないですし。私は百合なんかじゃないですから。」

「…流石、挑発だけは一流みたいね、編集長さん。」

相手…八意永琳が弓を構えます。

「下手なお世辞をありがとうございます。ですが、貴女では私を射抜くことは出来ませんよ?」

「何故?」

貴女も月の民とは言え、所詮人間の粹でしかありません。

対して、私は…

「幻想郷最速ですから。」

大地を蹴り、戦いを始めた！

ーらくな視点ー

「今更恐怖か？貴様はどこまでもめでたい人間のようだ。」

斧を振り回し、奴を追い詰める。

「趣味が悪いわね」

「貴様に比べればマシだ」

頭をかち割りたいが、奴はそう簡単には割らせてくれない、頭蓋目掛けて降り下ろした斧は大地を軽く砕いた。

「貴方は何者なの？私の命を狙うという所を見れば、月の人間なのかしら？」

「月？あんな腐った社会は嫌だね。この間こそ月の姫…確か何とかの豊姫とやらを地獄に送ったばかりだ。まあこの間と言ってもう3年くらい前だが。」

「あ、貴方…！？あの豊姫を！？」

お、奴が動揺している。

「ああ。妹みたいな奴が泣いていたな。貴様も後を追うか？地獄生

活は楽しいそうだぞ？」

「お断りだわ！」

…豊姫を捕まえるのは大変だったな…

まあこの話は気が向いたら振り返ってみてもいいかもな。

ま、すぐに釈放されたけど。

「さて…そろそろ苦しんでみようか。」

そうして俺は3年前の繰り返しをすることにした。

「墮ちろ。処刑『王妃の断頭台』」

瞬間、奴を捕らえる鎖。

「最後に聞く。蓬萊山輝夜、罪を償う気はないか？」

これが最後のチャンスだ、蓬萊山輝夜。

「ないわ。罪なんて犯してないもの。」

…駄目か。

やはり、首を落とすしかないようだ。

「なら死ね。」

降り下ろす斧。

…鮮血が、俺に飛び散った。

が、奴は死んではいなかった。

まあ豊姫の時もそうだったから薄々予想は出来ていたが。

「…豊姫は確か扇で俺の斧を消したから死ななかつたが…貴様は単に不死か。」

「さつきから言ってるじゃない。」

分かれたはずの身体の内、生首が喋る。

「痛いよ？本当に気を失いそうな痛さなの。…それでも死なない。それが蓬莱の薬の力…」

手が生首を抱え、断面にくっつける。

これは筆舌に尽くしがたいグロさだ。

これくらい描写しか出来ないのがグロ好きの作者にとっては物足りない感じらしいが…

「ふう…残念ね、殺す事が出来なくて。」

「ミンチになりたいのか？貴様はそこまでのマゾか？」

「逆よ。貴方の苦悶の表情が見たい…サドよ？」

「貴様の性癖は聞いていない」

何度でも落としてやる。

貴様は裁かれるべき存在…故に、俺は貴様を裁く！

―零奈視点―

「数が多すぎる…！」

流石に私の能力…『痛みを操る程度の能力』をもってしても、いつまでもうまく捌ける訳ではない。

疲れていないと言えば嘘。いつガタが来るか…

「そこだ！」

しまっ…！？

「恋符『マスタースパーク』！」

「霊符『夢想封印』！」

こ、これって…！

吹き飛ぶ白を横目に、私は攻撃の出所を見た。

「零奈、お待たせ！」

「助けに来たぜ！」

「霊夢…魔理沙…！」

英雄が二人も…！

「怯むな！たかが女3人！困めば恐れる事はない！」

白があつという間に私達を囲む。

一見すれば絶体絶命の大ピンチだ、だが霊夢と魔理沙は困るところか笑っていた。

「それはどうだか。」

「そうだな、まだあいつが来てないぜ！」

あいつ…？

誰のこと？と思考を一瞬巡らせていると…

「砲符『リヴァイバル』…！」

さらに吹き飛ばす白。

「来たわ…！」

「遅いぜ、レナ！」

あの隙間…紫の仕業ね。

中から出てきたのは…！

「先に暴れてたのって零奈だったのか。お待たせ！」

「ダ、ダーリン…！」

「…え？いつの間に夫に？」

いいじゃん、どうせ私はダーリンの嫁なんだから。

っと、ボケてる暇はないわね。

「待ってたわ！まだまだ数が多いから気をつけて！」

「解った、行くぞ！」

約800対4の戦いが…

と言っても後に無双と言われる戦いが、始まった。

5…不死の脅威（後書き）

次回予告

「6…幻想無双」

リアル無双が今始まる！

レッツボコボコ！

お楽しみに！

6…幻想無双(前書き)

ユーク12000…だって…!?

こ、怖い…((…))

6…幻想無双

ーレナ視点ー

「うらあ！」

弾を展開し、雑魚共を飛ばす！

「霊夢、このままじゃ埒があかない！少し時間を稼いでくれ！魔理沙！」

「え？」

魔理沙に耳打ちし、行動に移す。

「照準『ハイパーグラビトンレンズ』」

今回はでかめに作る！

「魔理沙、行くぞ！」

「解った！」

レンズに向かって…！

「砲符『リヴァイバル・改』！」

「恋心『ダブルスパーク』！」

同時に照射！！

3つの光はレンズによって1つになり…！

超極太の光線に！

「ぎにやああああ！！！！」

見える範囲ならかなりの人数を吹き飛ばしたはずだが…

「まだ終わらんか！」

わらわらと集まる白。不気味だ。

ふと霊夢の方を見ると…

「紫直伝の奥義よ！境界『二重弹幕結界』！」

「ウボアー！」

綺麗に吹き飛ばす白。

それにしてもウボアーって何なんだろうね。

となると…零奈もきつと…。

「私の視界に入るな！傷符『加速する痛み』！」

「ひでぶっ！」

なんか聞いた事ある断末魔。何処だっけ？

「やってもやっても増え続けるとかキリがないわ！」

「一度集まろう！今各自でやった所で無駄だ！一気に畳み掛ければ
…！」

瞬間、白が穴に落ちていく。

「はあい 隙間妖怪のお出ましょ。」

「紫！」

「藍、橙！妖怪の力を見せてあげなさい！」

「はい！」

白に向かう黄色いのと橙色。

どうやら紫の部下か？

「レナ、霊夢、魔理沙！貴方達は先に行きなさい！蓬莱山輝夜を倒すのよ！」

「あ、ああ！」

此処は紫に任せる事にして、混乱の間をすり抜ける。

と、前方に白が！

「ちいつ！邪魔をする『幻世』ザ・ワールド』！」

このナイフは…！

「レナ！先に！」

「咲夜さん！」

「あたしも居るわよ！」

「はたて！」

「蓬莱山輝夜をぶっ飛ばしなさい！」

「…了解！」

さらに先へ！

「待ちなさい！此処から先は通さな「産霊」『ファーストピラミッド』
！」

なんか小さな兎が居た気がするが、慧音先生の一撃で見えなかった。

「私も行くわ！」

「慧音先生、ありがとうございます！」

「待ちなさい！此処から先は私を倒してから「不死」『火の鳥』鳳翼
天翔』！」

なんか紫色の髪の毛の兎が居た気がするが、妹紅の炎で見えなかった。

「雑魚に構っちゃ駄目！目的はあくまで輝夜よ！」

「妹紅！」

というより妹紅、その炎の翼…熱くないか？

だが、おかげで先に進める。
蓬萊山輝夜…待っている！

―永琳視点―

「幻想郷最速ですか…ですが、動きが単純過ぎます！」

残像を残す程の素早さだが、動きは単純至極…狙いさえ定めれば！

「そこ！」

足を狙えば潰せる…！

よし！当たった…！

「甘い。私はそんな事で速さは失わない！」

当たって…ない！？

「はあっ！」

「ぐうっ！」

は、速い…！

数回地面をバウンドし、私は腹部に走る痛みを抑えながら立ち上がる。

「幻想郷最速の名前は伊達じゃないようね。」

「あら、褒めてくれるのね。あそこの姫様とは正反対の性格ね。」

姫様はあんな男には負けない。

「私は貴女を倒す。それが私が姫様の為に出来る唯一の事ですから。」

私は…姫様を守ると誓った。
だから…。

ーらぐな視点ー

「墮ちろ、カトンボがあ！」

振り回す斧は、空を斬る。

「当たらなければ痛くない。そろそろこちらも本気を出させて貰うわ。…難題『蓬莱の弾の杖ー虹色の弾幕ー』」

文字通り、七色の弾が容赦なく俺に降り注ぐ。

だが…スペルカードには余りにも威力が軽すぎる。

つまり…ハツタリか。

「その解りすぎたハツタリをどうにかしやがれ。」

弾を斧で弾く、そして接近！

「もう一度首を落としてやるよ！」

が、この行動に導く事こそが奴の策だった。

奴の顔に笑みが見えた。

「墮ちるのは貴方よ。『永夜返しー世明けー』」

「！」

咄嗟に斧で防御してみたはいいが、どうやら限界のようだ、使い物にならなくなった俺の斧。

「…さっきまでの威勢は何処に行ったのかしら？武器も使えなくなつたみたいだし。」

奴の手が、俺の目前に迫る。

「…チェックメイトよ。死になさい。」

そうか、此処が死に場か。

神よ、俺の死に場、生命の灯を吹き消す場所が、本当に此処であると言っのだな？

…解つた。なら、やることは1つだ。

「チェックメイトだと…？貴様、それはただの王手チェックの間違いじゃないのか？」

奴の手がぴくりと跳ねる。

「つまり後一手は打てるわけだ…王手のつもりが、実は貴様の首を

絞める行為になるとするならば？」

「遺言のつもり？だとしたら非常にセンスがないわ。」

…奴は必ず負ける…俺が倒せなくても、きつと…

「まあそう言うな。とっておきのプレゼントをくれてやるよ。相続資産だと思って貰え。…これをな！」

最期の賭けだ…貰つとけや！

「うっ！！！」

奴の胸に刺した…白い小刀。

「な…何よ…これ…身体が…動かない…！」

ぐったりと俺に全体重をかける羽目になった奴。

「処刑人の道具の1つ…『鳥兜』だ。名前を聞けばどんな道具かくらいは解るよな？」

「ま…まさか…」

「猛毒を刀身に塗りたくった処刑道具だ。ただこの刀は他のものは少々違っていてね…俺の血を纏わないと効果を発揮しないんだよ。しかも刀身が全て血に濡れていないと完全に発揮しない。」

「！！！」

腹に一発刺して抜いて、奴に刺す…それが完全なる鳥兜の使い方。だが…それは。

「おっと…どうやら俺もそろそろ死に際のようなようだ。死神が迎えに来た。」

俺の命を賭けると言うこと。

「俺は貴様が100%の力を発揮出来なくなればそれでお役御免なのさ。蓬萊山輝夜…死にはしないだろうが、これから貴様は死以上の恐怖に曝される事になる。毒は永琳に頼め。彼女なら治せる。」

「さ…最後に聞くわ…貴方の…名前を…」

目が眩んできた。

だが、これだけは伝えよう。

「俺は…最後まで…振り回され…続けた…誰にもなれなかった…名無しだ…」

「…敵同士…でなければ…よかったわね。」

「ハッ、くそくらえだ…じゃあな…」

後は…頼んだ。

6…幻想無双（後書き）

次回予告

「7…一刻を争う戦争」

永夜抄編クライマックスに突入！

お楽しみに！

7…一刻を争う戦争（前書き）

PV…1000000…突破…!?

あ、ありがたいんですが、怖いいい！…!というのが本音だった
りします（；^ | ^ A

永夜抄編終わったら記念外伝でも書こうかと思ってます。

7…一刻を争う戦争

「?????視点」

「暇だな…」

私は足を小舟にやり、川の縁に座っていた。

「誰か来ないかな…」

ふと目を横にやると。

「よ、相変わらず暇そうだな。」

「あ、あんたは…!」

まさか、こいつが此処に来るなんて…!

「へまやらかして死んじまったよ。暫く世話になる。」

「…用件を言いなよ。」

彼が来た…それはすなわち…!

「覚えてくれていたのか。そりゃ話が早いな。…彼女は俺が死んだ事を…」

「知らない。私が報告するまでは知らないはずよ。」

「全て思い通りか。素晴らしい。…それなら行く。この川を下れば…」

確かに目的は果たせる。だけど…

「…あんたは何の為に行くの？」

「簡単な話だ…忌々しいものを…全て壊す。」

彼の瞳には、負の感情しか見えなかった。

「復讐…それは誰も救わない。それでも…」

「俺は奴を…必ず潰す。それが俺の…存在意義だ。」

「にしても、その過程で死ぬなんて思い切った事したね。」

「今の力では奴は殺せない。奴を殺す過程で死ぬ事が必要だった…それだけだ。」

「解った。とりあえず舟に乗りなよ。まずはこの川を下らなきゃ、やれることもやれないよ。」

…暇にはならなくなった、その点じゃ感謝だね。

くっ、まだ身体がふらつく…。あの毒はかなり強力だった。

彼の目的はある意味果たされた…

でも、あの感じ…本気で私を苦しめる気はなかったように見えた。

本気で私を苦しめるなら、心臓に毒つきの刀を刺せば良かったのに、何故脇腹にしか刺さなかったのかしら？

…まるで自ら死を望んだような…

考える暇はない、ミサイルはどうなったの？

ーレナ視点ー

「あれは!?!」

地面に聳え立つ鋼のそれは、月の光を浴びて冷たく輝いていた。

「レナ、あれが輝夜の目的!ミサイルで月を破壊する…それが輝夜の…!」

つまりあれを壊せばいいんだな!

「ならさっさと壊すぜ!砲符『エキセントリックバルカン』!」

よし、これで…！

あ、あるえー？

「びくともしないぞ!？」

「火力が足りないって事だぜ！恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

続いて魔理沙の攻撃、大量の細いレーザーがミサイルに当たり…！

「嘘!？当たったのに傷1つ付かないぜ!」

「結界が張られてるみたいね。結界を碎ける強さの攻撃を加えないと…」

慧音先生、冷静な分析ありがとうございます！

「待て。あれって結界なんだよな？」

「そうね。結界だわ…だから何よ？」

なら…あれ使えるんじゃない？

「ルーミア！また力を借りるぞ!」

十字架カモン！

おいでませ、結界ぶった斬りブレード！

「結界カッター！でやああああ！！！！」

やったぜ、結界斬れたよ！

「凄い！後はミサイルを…！」

全員が一斉攻撃をしようとした、その瞬間！

「蘇活『生命遊戯ーライフゲームー』」

何かが来る、そう直感した俺は叫ぶ！

「皆、散らばれ！！」

間一髪、弾の直撃だけは回避出来た。

だが、何処から攻撃してきた？

「レナ、あれ…！」

「！？」

ミサイルの影から、誰かが現れる。

紺と赤の服の銀髪の女性…いや、そんなことはどうでもいい！

「文！」

力なく地に伏している。

助けなくては！

「動かないで下さい。おかしい行動を取れば即、彼女を殺します。」

「くっ…！」

事情は解らないが、あの女性に文はやられた…！
そして、彼女は非常に強い…！

「さらに悲しいお知らせよ。」

ミサイルの影から、誰かが現れる。

十二単を着た少女が出てきた。

「輝夜…！」

あいつが蓬萊山輝夜…！

「あら、貴方が噂の不死身君なのかしら？初めまして。私が蓬萊山輝夜…元月の姫よ。で、こちらが八意永琳。私の側近よ。」

何処か気品がある声。

「そうそう、これ以上死人を出したくなければそこから一步も動かない事ね。」

「どづいつ事！？」

「既に人が死んでいるのよ。ほら…」

近くに強引に投げられたそれは、明らかに知っている顔。

「ら、らぐなさん!？」

嘘…だろ？

「私に喧嘩吹っ掛けて死んだわ。格が違い過ぎるのよ。」

な…なんで…

「なんでらぐなさんが死ななきゃならないんだ!？」

「知らないわ、そんなこと。それよりも、後30分でミサイルは発射されるわ…急がないと。…と、急ぎたくても急げないものね。人質が居るし。」

くっ…!…どうすれば…どうすれば!？

「さて、さらに絶望を与えてあげましょう。神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」

弾が…!

俺は咄嗟に防御体勢を取るが、何時まで経っても来るはずの痛みが来ない。

恐る恐る、周りを見渡してみた。

霊夢が、魔理沙が、慧音先生が、妹紅が。
うつ伏せになって動かない。

「後は貴方だけね、不死身君。貴方の迷いが仲間を危険に晒したのよ。自分の無力を知りなさい。そして後悔するがいいわ。」

…俺は…無力なのか？

誰も救えず、誰も救われず、見ているだけしかないのか？

「大丈夫…次は貴方の番だから。」

俺のこの手は、誰も…誰も救えないのか？

「心が折れたようね。そこで見ているがいいわ。」

皆…皆、死ぬのか？

俺のせいで…皆…

「あ…うあ…」

血に濡れた…俺。

それ以外は何も無い。

…それを待つしか、ないのか？

「違う…そんな事、絶対にさせない…それを、それを見るくらいなら、俺は…!」

そんなの見たくはない、俺は皆が生きる世界を見たい！
幸せな顔を見たい！
だから！！

「死んだ方が何千倍もマシだ！！」

「母体反応に異常。母体の安全を最優先します。」

「な…なんだ？」

「システム『IED』、強制起動」

「う、うわあああ！！！！！！！！」

赤い光が、彼を包む。

…それは異常。
それは理不尽。
それは歪み。

…それは、全てを破壊せしもの。

「ヴオオオオオオオ!!!!!!!!!」

7…一刻を争う戦争（後書き）

次回予告

「 8…獣は月の下に慟哭する」

やっところさ永夜抄本編ラスト！

変貌を遂げたレナの力とは…！？

お楽しみに！

8… 獣は月の下に慟哭する（前書き）

本編ラストです！

8… 獣は月の下に慟哭する

―輝夜視点―

な…何なの、あれ…？

さっきまでの不死身君の面影が…見た目からも雰囲気からも、完全に消えた…！

「…新たなる秩序…母なるこの大地に…貴様の存在は必要ない…」

まるで別人…いや、化け物…！

「唯一にして純粹なる存在…私はそれを望む…」

彼の変貌が終わる。

まるで樹の蔓を巻き付けたような不気味な緑色をした腕。

胸に輝くのは黒い球。

眼は輝きが消え、生気がない。

腰から伸びるのは土の塊。

「私は始まり…そして終わりでもある。新たなる秩序は、私が創る。」

「…神にでもなったつもり？ 貴方は神なんかじゃない、ただのケダ

モノよ。」

「…古き者には何も解らぬ。…死ぬがよい。」

え？今の今まで目の前にいたはずなのに…消えた！？

「姫様！上です！！」

「なっ…！？」

上を見ると、あの獣が両腕に力を溜めていた。

「消え去れ。」

腕を交差して放たれた力の塊は、まっすぐ私に向かう…！

「くっ！」

これは逃げるしかない。

私は回避行動に移ったが…

「追いかけてくる…！？」

私が逃げるのを追いかけてくる光弾。

「不愉快な弾ね！落としてやるわ！神宝『ブディストダイヤモンド』」

これなら弾を打ち消すくらい出来る！

「敵は弾だけではない」

いつの間に真後ろに!?

「終わりだ。」

流石にこれは無理があるわ…!

「天呪『アポロ13』!」

奴がよろけた。

「姫様!」

「永琳!助かったわ!」

「体勢を立て直しましょう!」

「解った!」

此処は永琳の言う通りに引き下がるべきね。

「永琳…あの化け物は何なの?」

あれは明らかに人間ではない事は解るのだけど…

「…あくまで仮説ですが、きっとあれは私達の技術…つまり、月の技術によるものだと思います。」

「月の…？でも、月の技術はかなり安定してて、あんな化け物を生むような不安定な技術なんてないはずじゃ…」

「今の月の技術は数え切れない試行錯誤の上に成り立っています。もしあれが、その試行錯誤の途中で生まれたものだとしたら、不安定なものも領けると思います。」

…月の技術の大半は永琳によるもの。つまり、これも多分…

「…そこまで言えるんだから、永琳、貴女もあれに関わっていたのね？」

「はい…あれは自己防衛システム…システム『IED』の試作品だと思います。」

自己防衛システム…それは人間に埋め込み、危険察知能力及び身体能力を強化し、不慮の事故を防ぐシステム。

月ではもうなくてはならないものとなっていて、不具合なんて聞かない完全なシステムとなっている。

「私が昔提案して、実行に移す事になりましたが、不具合が当初はかなり多く…きっとその試作品のサンプルになったのでしょうか。」

「その試作品が不具合起こして今あんなに暴れているの？」

「はい。当初の試作品には『自己進化』という機能が組み込まれてきました。今のあれは自己進化機能が暴走した結果かと。あくまで可能性ですが。」

全く…試行錯誤は大事とは言え、失敗だと解つたら然るべき対応を
しなさいよ…と思う。

「永琳、あれを止める方法はないの？」

「一応ありますが、かなり難しいです。彼の胸の部分に黒い球がついていました。それはシステムの本体…あれさえ破壊出来れば、暴走は止まるはずです。」

「確かに難しいわね…でも、それをしないとミサイルが壊されるかも
知れないわ。やりましょう、永琳。」

あれを止めない限り、ミサイルは無闇に発射出来ない…

「…逃げられたか。」

「私はこっちよ!」

私達の策は、私が奴を引き付けて永琳が弓矢でシステムを破壊する
というもの。

…来なさい！

「貴様を破壊し、私は新たなる秩序を創る。」

そう、こっちに来なさい…

「まずは貴様からだ。」

「永琳！」

後ろから矢が放たれる。

後はあの球さえ貫けば…！

「！？」

は、弾かれた！？

「よくぞ弱点に気付いた…だが、対策を取らないと思ったのは愚かだ。」

まずい！

そう思った瞬間、私と永琳は首を掴まれて押し倒される。

「古き者よ…土に還れ。」

このままではやられる…！

突然、獣が吹き飛ぶ。

「え…？」

目の前の光景に、私は驚くしかなかった。

獣を吹き飛ばしたと思われる人物は女性。

畳んだ傘の柄を右手に掴み、獣をじっと見る、緑の髪の女性。

赤いチェックのスカートが風にそよぐ。

「…全く、また面倒な事を持ってきたわね…さっさと終わらせて、家に帰りたいわ。」

誰かは解らないが、どうやら今は私達を助けてくれるらしい。

獣は起き上がり、本能を剥き出しにして彼女に飛び掛かる。

「甘いわ。」

左腕を獣の頭にぶつけ、右足のローキックで体勢を崩し、さらに傘で殴る！

「貴様は…！」

「私の事を知っているのね。でもすぐに忘れるわ。」

頭にさらに一撃、そして胸の球に一撃！

「中々硬いじゃない。じゃあ、これはどうかしら？」

傘を球に突き刺す！！

「終わりよ。…マスタースパーク。」

ゴッ！！という轟音と共に、勝負は決した。

「…終わったようね。」

獣の姿が変わり、人間に戻る。

「私の仕事はここまで。それじゃ。」

彼女は傘を広げ、ゆっくりとその場を離れた。

「…邪魔者が入ったけど、これでミサイルを発射出来るわ。…ミサイル、発射！！」

これで月を破壊し、復讐を遂げる…！！

「あ、もう一つ仕事があったわ。花符『幻想郷の開花』」

え？ミサイルに弾が…

ちゅどーん！！！！！！

ミサイル、爆発。

「「嘘おおおおお！！！！！！？」」

結局、あの女性のせいでミサイルは不発に終わり、私達の計画は頓

挫した。

…というわけで、私達は竹林に建てた永遠亭に暫く住む事になりま
したとぞ。

8… 獣は月の下に慟哭する（後書き）

次回予告

「Extra-1… 歴史を喰らう者」

毎度の如くExtra突入！

お楽しみに！

Extra-1…歴史を喰らう者(前書き)

寝ぼけながら書いたら非常に質が低くなった気が…

今回はちゃんとなっております…

おかしかったら修正加えますm) |・(・m

Extra-1…歴史を喰らう者

ーレナ視点ー

「どおわあっ!!」

目覚めたら、竹林のど真ん中。

「ミサイル！ミサイルは!?!…って、あれ？」

現在の状況を説明すると。

周りにミサイルらしき残骸が燻っている。

俺以外、誰もいない。

「…ということは…?」

朝日が眩しい空を見上げる。

…僅かに月が見えていた。

「…?」

そう言えば、俺は輝夜を倒したのか？

…覚えているのは、輝夜がスペルカード使って、皆倒されて…それから…

今は戦う気なんてないから。」

「そんな上手い話あるか」

「怪我人は黙って治療されなさい！神宝『ライフスプリングインフ
イニティ』！」

「ぎゃあああああ！！！！！」

意識を落としてしまいました。

―輝夜視点―

全く、せつかくの私の善意を無下にするなんて、本当に人間は無礼
だわ！

「いや、今のは当然の反応だと思うが……」

死人の貴方は黙ってなさい！

「そんな殺生な事言わないでくれよ、死んだ人間はこんな風に幽霊
にならないと喋れないんだぜ？」

とういかなんで私は幽霊の声が聞こえるのかしら。
そこが謎だわ。

「それより輝夜、レナを運んでやらないと今度こそ死ぬぞ？」

「あ、そうよ！」

お、重い…男はこんなに重いのね…

私としてもこれ以上人殺しはしたくないので、幽霊の彼の言う通りにレナとか言う彼を永遠亭に運ぶ事にした。

―永琳視点―

「やはり、彼はシステム『IED』のサンプルでした…しかも、試作1号機の。」

これは骨董品レベルですよ。

「試作1号機？」

「ええ。最も機能を詰め込んだものです。自己進化機能、自己再生機能、そして自己学習機能…これらは試作を重ねる毎に機能を制限していったのですが、まさかオリジナルとは…」

その暴走の結果があつた。

「でも、壊されたんでしょ？そしたらもうシステムは発動しないのよ？」

「…いえ、システム『IED』オリジナルの本体はもう1つ…もう1つあるのです。それは…彼の脳内…深層心理を司る部分に…」

つまり、解除は不可能…

「面倒にも程があるわね…後は彼に任せるしかないということ？」

「ええ。しかも、2つで1つのシステムが1つ欠けてしまった…今以上に不安定になるかもしれせん。」

将来的にもう一度暴走する可能性も、なきにしもあらず…。

「全く…月のマッドサイエンティストは最低ね。不安要素いっぱいじゃない。」

姫様の怒りも解ります…だから私は技術開発から身を引く事を決めた…

「彼を助ける方法はありそう？」

姫様は優しい方です。

「彼がシステムを覆すしかないです。」

「…そう。なら永琳、やれるだけの事をやって。システムの発動を

防ぐのは無理かもしれないけど、遅らせるのなら……」

「解りました。」

…システムの発動は彼にも負担をかける。
なるべくなら発動は防ぎたい。

私はあらゆる手段を講じる事にした。

「?????視点」

「…貴方の頼み通りにやったわよ。」

こんなことに私を呼ぶなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「…済まない。感謝してもしきれないよ。」

「本当に感謝しているんなら、今度私の所に来なさい。色々と用事があるから、動いて貰うわよ。」

きつと近いうちにだと思っけれど。

「解った。後は…頼んだ。」

「どこまでも世話を焼かせるわね。いいわ、頼まれた。」

―レナ視点―

「う…」

起きてみたら、此処は…

「あ、目が覚めたのですね。具合はどうですか？」

「あ、あなたは…」

確か輝夜の側近の…

「八意永琳です。今は貴方を看病する医者ですので、敵側の人間であることは忘れて下さい。というより、もう貴方の敵である理由がなくなってしまうかもしれませんが。」

「理由がなくなった…？」

何を言っているんだ、この医者は何？

「貴方にお伝えしないといけない事があります。貴方の力の事で…」

力、だと？

「貴方には力がある。というのも、貴方は力を『与えられた』としたほうが適切でしょう。…システム『IED』はご存知で？」

「！！」

そうだ、俺はあの時……！！

「システム『IED』……それが貴方が暴走した原因……」

「暴走！？どういう事だ!？」

「貴方はあの時、システム『IED』を発動した。存在は知らなかったと思いますが、要は貴方に埋め込まれた自己防衛システムと違って下さい。」

ところが何故かそのシステムは暴走した……結果、貴方はシステム『IED』に一時的に支配され、破壊の化身となった……」

破壊の……化身？

「私達は貴方に殺されそうになりました。ところが、見知らぬ女性が貴方を止め、暴走は止まった。……それが今回の出来事の全てよ。」

「……1つだけ質問していいか?……そのシステムとやらがどうやら俺に埋め込まれたというのは解ったが、そのシステムは……この先暴走する可能性はあるのか?」

「ええ。でも、心配しないで下さい。私ができることはやりました。……無理さえしなければ、暴走する可能性は限りなく低いです。」

ですが……これからも無理をするつもりなら、いずれシステムと向き合う必要があります。」

「解った。……機械ごときに俺の行動を左右されてたまるか。俺は、そのシステムをぶち壊す。」

…俺は、俺自身のやり方を貫く。

システムなんかに喰われてたまるか…!!

永琳と別れ、俺は迷いの竹林で…

迷った。

「妹紅…こんなときに来てくれないと…」

迷ってみるか…と思った時。

「あら？レナなの？」

救世主、現る。

「慧音先生！？」

「それにしても、レナが最後だったなんて……」

どうやら霊夢達は先に治療を終わって帰ったらしく、俺が最後だったらしい。

「…慧音先生、頼みがあるんですが。」

「いきなり畏まってどうしたの？」

システムに喰われないようにするには、俺が強ければいい。
だから……

「俺と本気で戦って下さい。」

Extra-1…歴史を喰らう者（後書き）

次回予告

「Extra-2…歴史を創る者」

本気の慧音先生は色々と危険だった！

お楽しみに！

Extra-2…歴史を創る者(前書き)

衝撃的な超展開に作者もびっくり！(おいこら

Extra - 2...歴史を創る者

―慧音視点―

「俺と本気で戦って下さい。」

目を見るに、ふざけ半分で言っている訳ではない事は楽に予想出来た。

「…解ったわ。今日の夜でいいかしら？」

本気で戦うなら、夜じゃないと…

「はい。」

…それにしても、あの時の目じゃない。

…何を求めているのかしら？

…月が照らす夜、私とレナは向き合っていた。

「…貴方から提案したんだから、怪我しても文句は言わないで。」

「ええ。…行きます！」

レナは真っ直ぐ私に突っ込んで、早速一撃を入れようと拳を用意していた。

「来なさい！」

拳を流し、腹に一発パンチ。

「…めっちゃ痛いっす！」

直後、痛みが走る。

「やるわね…！」

今のはわざと私の攻撃を食らっておいて、カウンターで確実にダメージを与える寸法。

不死身ならではの攻撃。

「でもっ！」

不死身だからといって、それはダメージを喰らいすぎていいという事にはならない！

ラッシュをかければ、流石にレナももたない…！！

「自分の身体は大事にきなさい！」

右で一撃殴り、左でもう一撃、そして回転をつけての蹴り！！

「ぐわっ…！」

やり過ぎたかしら？痛過ぎたかも…

「…やりますね…」

あ、大丈夫だった。

「…だが、俺は負けない！これ以上、負ける訳にはいかないんだ！」

なんでレナはこんなに必死なのかしら？

なんか…何かに怯えているような、そんな気がする。

「勝ちにこだわっても意味はないわ！」

「勝たなきゃ誰も救えない！もうあんな…あんな思いはごめんだ！」

何に囚われてるの？

それでは、レナは…

「貴方一人で何が出来るの！？英雄気取りだとしたら迷惑だわ！今の貴方は英雄なんかじゃない、ただの死にたがりよ！！」

「死にたがりでも、俺は死なない！」

やっぱり、何かに怯えている。

「だから自分を犠牲にして他人を救おうとするの！？それは違うってこと、解らないの！？」

「ああ解らないさ！化け物の俺には、そんなことは解らないね！」
化け物…そうね。

「確かに…今の貴方は人間なんかじゃない…ただの化け物よ。だから私は貴方を…貴方を止める！」

「化け物でいいさ…戦えるのならな…！」

人間だからこそ、出来る事がある。

レナ…それを思い出して！

「転世『一条戻り橋』！」

「砲符『リヴァイバル』！」

爆風が吹き荒ぶ、私はハクタクの力を得て、レナに接近！

「甘ったれるんじゃないわよ…！」

彼を掴み、頭をぶつけた！

「うぐっ…！」

「人間は！互いに助け合える！化け物はそんなこと出来ないわ！貴方は1人じゃない、そうでしょう…！」

「…けど、俺は…化け物なんだ…機械なんかには操られるような…弱い存在なんだよ…！」

相当参ってるみたいね…

「だから何なの！？貴方と言う存在は、私の目の前に居る！それは機械とか関係ない！貴方は貴方よ！」

「だったら殺してくれよ！俺と言う存在が消え失せる前に！俺が皆を殺してしまう前に！！！」

…そこまで…

「解った…だったら全力で殺してあげるわ！！新史『新幻想史』ネクストヒストリー」！！！」

ーレナ視点ー

ああ…これで俺は死ねるのか。
暗闇に落ちて…

ーシステム『IED』、起動ー

駄目だ、このままじゃ！！

「させるかああああ！！！！！！！！」

まだまだ、まだ死ぬ前に！！

このシステムをぶち壊して！

俺は…俺は、人間として死ぬ！

ーシステムに異常発生、危険、危険ー

「だから何だ！？俺にはもう、お前は必要ない！」

ー危険、危険、危険ー

「危険の一点張りか！テメエを道連れに出来るんなら危険だろうが何だろうがやってやんよ！」

ーシステムに不具合が発見されました、復旧を試みていますー

「ざけんな！俺の未来は俺が決める、俺が切り開く、俺が突き進む！！」

テメエなんざ居なくても！俺は…俺は、限界を越えてやる！！
こじ開けてやるよ、不可能の壁をなあ！！」

ーシステムに致命的な欠陥が発見されました、解決方法を検索していますー

「欠陥？あるとするなら、それは…！！」

彼はないはずの壁目掛けて！

「システム『IED』、テメエ自身だ…！！」

拳を打ち込んだ!!

―システム…損傷…修復不能、修復不能…―

「まだまだあ!!」

殴打!

「もうテメエの声を聞かないようにぶち壊してやる!」

殴打、殴打!!

「俺は化け物じみた奴かもしれない、でも!!」

殴打、殴打、殴打あ!!!

「俺は!!」

全体重を右の拳に!!

「人間だ!!!」

―慧音視点―

「うっ…うっ…レナ…ごめん…」

こうするしか…なかった。

0 距離からの最大火力のスペル。

無傷じゃ済まない…

いくらレナでも…

「うおおおおおおお！…！…！…この世が輝いて見えるぜ…！」

…え？

いまいち状況が掴めない。何、今の声？

「慧音先生！」

ふえ？

「おかげで目が覚めました。どうかしていたみたいっすね、俺。」

え、え？

「ありがとうございます。もう俺は大丈夫なんで。」

…という…とは…？

「ただいま！」

…もう、心配かけて！

「何が『ただいま！』よ！」

「ぐべらっ！」

思いっきりグーで殴った。

「人を散々心配させておいてそれだけなの！？全く貴方って人は！」

その先、言葉が続くはずなのに。

それ以上に。

「…嬉しい…じゃない…！」

なんでだろう、自分の事みたいに嬉しい。

「慧音先生…」

何かに包まれる感じがした。

「もう、俺は大丈夫だから。」

心の緊張が、解けた。

「うう…レナの馬鹿…」

彼の胸の中で、久しぶりに涙を流した。

「感動の再会の所、誠に申し訳ないが」

ーレナ視点ー

「！」

そこには、妖怪達が。

「俺達はその女に用があつてな、引き渡して貰おうか。」

…空気読めやこいつら。

答えは決まってる！

「む・り・じゃ・こ・の・ボ・ケ!」

「ざけんなあ!!」

一斉に飛び掛かるといふ雑魚ならではの展開。

「慧音先生、ちょっと眩しいつすよ。」

俺はフツと、左手を奴らに向けた。

「魔力全解放」

掌から光が迸る。

「今はこれ以上先生を泣かせる訳には行かないから、冷静に伸びてる。砲符……」

これ以上は抑えきれないというポイントで、俺は放った。

「『リヴァイバル・』」

「…」

うん、まさかこんなに火力が上がってたなんてね。

幾ら「限界を越えてやる」って言ったとはいえ、此処まで上がつてるとは誰も考えてなかったよね。

…

目の前が火の海に…

「環境破壊にも程があるだろ俺はああああ！…！！！」

というわけで、主人公が更に強くなって帰って来ました。

Extra - 2 : 歴史を創る者（後書き）

次回予告

「Extra - 3 : もこたんINしたお！（前編）」

別の意味で自分の力に恐怖したレナはもこたんとバトルして力を調整する事に！

お楽しみに！

Extra-3…もこたんINしたお！（前編）（前書き）

もつすぐ永夜抄編もおしまいです。

次はPV100000記念特別章です

Extra-3…もこたんINしたお！（前編）

ーレナ視点ー

「怖えぞ俺…色んな意味で…」

訳の解らないものに意識を喰われたりする事がなくなったのは喜ばしい事なのだが…

な、なんか身体能力が以前とは桁違いに上がってしまった、前に感じていた恐怖とは別の恐怖を感じるようになってしまった。

…例えば。

『レナー、これを文の所に持っていつてくれないか？』

『いいぜ。』

魔理沙から手紙を貰い、普通に走って文の所へ…

理想：まあ出来るだけ早めに渡せればいいよね！

現実：ダッシュが早すぎて妖怪の山の自然を破壊してしまい、紫に怒られる羽目に

そういえば…こんなことも…

『妖怪討伐依頼来ているわよ』

『解った。行ってくるよ。』

何時もの妖怪退治、いい運動になるな…

理想：いい汗かいたぜ！

現実：5秒で相手を塵1つ残さず消滅に追い込んだ

「なあ…俺って何者なんだろう…」

以前より化け物です、俺。

「大丈夫よ、レナ。レナはレナでしょ？」

「慧音先生…」

慧音先生は優しい。

俺は思わず先生の胸で泣いた。

「しくしく…」

「大丈夫だから。だから泣かないで、ね？」

…きっと全国の慧音先生のファンはこういう性格に惹かれたんじゃないんだろうか。

美人教師の時点でそれなりに人気取れるし、性格に難なしだし。

「けーねせんせー…ありがとう…」

俺は先生の優しさに泣いた。

―慧音視点―

「…それにしても、困ったわね…」

泣き疲れて眠っているレナの頭を撫でながら考える。

流石に床が枕だと痛いので、膝枕でどうにかしているんだけど…

「どうすればいいのかしら…?」

「おいすー！」

「あ、妹紅！」

「レナの様子はどっつって…寝てるよ…」

状況を理解して、声のトーンを落としてくれた妹紅。

…あ。

「妹紅、明日空いてる？」

「え？一応空いてるけど…どうしたの？」

「あのね…」

ーレナ視点ー

なんか息苦しい気がする…

目を開けると、真っ暗。

というか家の中なのに近くの物すら見えないとはどっぴろっぴろっことなのだろうか。

頭を動かして情報を得る事に…

「…っうん…」

な、何だ今の声!?

それに、なんか頭に柔らかい感触がする…

どういう状態なんだ!?! 誰か、誰か俺に教えてくれ!

そつだ、作者! 作者なら描写出来るだろ!

— 幽霊ならぐな視点 —

ざんねんですが、さくしやはすでにしんでいるゆえにじょつぎょつをおおしえすることができません。

「なんで平仮名なのよ。」

あ、そろそろ君の存在バラしていい？皆さーん、この人はですねえ…

「それは秘密」

ちよ、なんで幽霊の身体触れるんだ!？

え、それ、何？そのウィンウィン言ってる物は…え、やめろ、いや
止めて下さいというか今すぐやめろ…ぎゃあああああ!…!!…!!

ー作者は死んでも苦しみ続けていますー

ーレナ視点ー

で、朝だ。

いつの間にかもう一度眠ってしまっていた。

「…」

昨日とは違う、状況を理解するにはそれほど時間はかからなかった。

そして、その事実…

俺は焦っていた。

目の前に…

「…レナ…お前…」

「むー！むぐむぐむぐー！むーむげむれ！（違う！誤解だ、信じてくれ！）」

「が、これが逆効果で…」

「…ん…」

「やたらと色っぽい声が。」

「レナ、ちょっと表出る。」

「だから誤解だつて！話せば解る！」

「どう考えても覆せないから。大丈夫、ちょーっと話を聞くだけだから。」

「それが怖いんだあ！！慧音先生、言つてやって下さいよ！」

ところが、慧音先生は…

「ふえ？レナはふかふかしてて気持ち良かったよ？」

寝惚けていた。

人生オワタ。

「完全に黒だな…」

「慧音先生はまともだと信じていたのに…」

妹紅に引き摺られながら、俺は慧音先生を少し恨んだ。
寝惚けていたから仕方がないっちゃんないけどねっ！

「よし、此処まで来れば大丈夫かな。レナ、生きてる？」

「なんとか…」

精神ダメージがでかいですが。

「慧音の事はいいから、私の話を聞いて。」

「人生オワタ…自分の未来がパーフェクトフリーズ…え？」

意外な展開にびっくり。

「慧音から聞いたけど、自分の力を制御しきれてないんだって？」

「あ…ああ。」

「私がちよつと面倒を見てあげるから、一緒に頑張ろう?。」

「マジで!?!ありがとう、妹紅!。」

ラッキーだ。力の制御の練習が出来る。

「でも、このままじゃ自然破壊しまくっちゃうから、助っ人を呼んだの。」

「はあい 呼ばれて来たわ。」

「紫!?!。」

ということは、まさか…

「紫の隙間の中でやりあうわ。そうすれば被害は抑えられるし。」

確かに…

「準備出来たわ。」

は、早っ!

「じゃ、行くよ!。」

俺と妹紅は隙間の中に飛び込んだ。

Extra - 3...もこたんINしたお！（前編）（後書き）

次回

「Extra - 4...もこたんINしたお！（後編）」

永夜抄編ラスト！

お楽しみに！

Extra-4…もこたんINしたお！(後編)(前書き)

永夜抄編ラスト！

Extra - 4...もこたんINしたお！（後編）

ーレナ視点ー

「準備は出来たみたいね...早速始めようか！」

妹紅が迫ってくる！

「そうだなっ！」

俺も負けじと妹紅に突っ込み、取っ組み合う！

「それくらいの力しかないわけないよね？」

「当たり前だっ！！！」

バンっ！！と一瞬妹紅をフルパワーで押し返し、そのままの体勢から...

地面を蹴り飛ばしての一撃！

ところが...

「あ

本来妹紅に一撃を加えるはずだったのに拳は見事に空振り。

なおかつ地面を思いつき蹴飛ばしてしまったので。

「うわあああ、とーまーらーなーいー（エコー）」

俺は遙か彼方へ。

「逆に凄いや…！」

妹紅には呆れられた。

「仕切り直し！」

やはり力の加減が上手く行かない。

抑えすぎると相手にダメージはないし、かといって少しでも油断するとさっきのように遙か彼方へfly away!してしまふ。

「不便な身体だっ！」

それでも、少しずつだが相手を狙えるようになってきた。

何十回もfly awayした結果だが。

「そろそろ私も本気を出すよ！時効『月のいはさかの呪い』！」

光弾が広がる。

「かわしてみせる！」

が、慣れていないので…

「痛っ！痛い、痛い！」

ちよくちよく当たる。

「だが直撃よりかはマシ！」

開き直りからの再チャレンジ！

今度は上手くいった！

「ならば今度はこっちの番だ！砲符『リヴァイバル』！！！」

一点突破型のリヴァイバルだ！！

「きゃああ！」

え？直撃？

「妹紅！？大丈夫か！？」

かわすものだと思っていたのに！

「リザレクション！」

え？復活？

「これが蓬莱の薬で得た唯一の良いところ。やられてもすぐに復活出来るの！」

「すげえ、俺の身体と訳が違うぜ！」

「まだまだ行くよ！滅罪『正直者の死』！」

「ぎゃあああ！！！」

「なんか凄く痛いんですが!？」

「凄いい…人を騙した事ないんだね。」

「幻想郷じゃ…そうかも…しれない…。」

「正直者って報われるんじゃないんですか。」

「このスペルカードは正直者にしか当たらないんだよ。当たるわけないかって思って撃つただけだよ…。」

「当たったよ!？」

「そこは予想外だったの。」

「ああ、予想外だったんだ。」

「…まあいいや、続けようぜ?」

「そうね。」

前々から思っていたのだが、俺のスペルカードは基本的に中距離・遠距離のものが多い。

近距離は霊掌で事足りていたのもあったが…

もうそろそろ、近距離用のスペルカードの一枚くらい用意しておきたい。

身体能力も上がった事だし、色々工夫してみよう。

「新技開発！」

右手に創る、光の刃！

「試作1号、霊掌手裏剣！！」

投擲っ！！

切れ味はそこそこありそうだ。

が、作るのに時間がかかる…ううん、没だな。

「試作2号！」

今度は足に光の刃を作ってみる！

それを…相手にぶつける！

「霊脚剣…」

しかし、いまいちしくりこない。威力は安定しているのだが…。
ううん…保留だな。

やっぱり…あれか？

でもあれはかなり危険だしな…

よし、やってみよう！

「試作3号！！」

後ろに左手を向ける！

「一か八か、当たるも八卦、当たらぬも八卦！一世一代のびっくり
攻撃をとくとご覧あれ！！」

地面を蹴飛ばす！

「妹紅、俺を気にせずにフルパワーで来てくれ。それを突破出来る
か出来ないかで話は変わる！」

「やれやれ…大怪我しないでよ？パゼストバイフェニックス！」

やべえな…あんな神々しい鳳凰を貫かなきゃならないなんて…

だが、俺は決めた！

俺の力が、誰かを救えるのなら！

俺の力が、誰かの笑顔を守れるのなら！

俺は…俺はもう、迷わない！！

「俺の身体、もってくれよ！！」

まずは一撃、だが拳は相手に当たらない。

このままではさっきの二の舞だ。

だからっ！！

「まっがれええええええええ！！！！！！！！！！」

リヴァイバルを発射し、推進力とする！！

少しずつだが曲がってきた、そして妹紅に狙いを定める！

「リヴァイバル、フルバースト！！」

その身体の輝きはまさに彗星！

「捉えた！」

狙いは定まった！

「ただ、撃ち貫くのみ！！」

煌めく彗星は、輝きの証！

「私も負けてられないね！鳳凰、私に力を！」

翼を優雅にはためかす鳳凰は、天に舞い上がらんとする！！

「不死鳥は、何度でも甦る！」

燃えたぎる翼は、純粹なる魂！

二つの光は、同時にぶつかった！！

「…うそーん…」

ぱったりと俯せになるレナ。

というのも、ぶつかった瞬間…

「リヴァイバルが切れた…」

推進力としたリヴァイバルが切れてしまい、減速した所に妹紅のパ
ゼストバイフェニックスが直撃。

防御体勢すらとってなかった為に黒焦げに。

「けれど、だいぶ調整は出来るようになったと思うよ。」

荒削りだが、とりあえずは及第点レベルだろう。

まあ、平和になったことだし、じっくりとやっつけていこう…

その前に…

「妹紅…なんでか火傷が治らない…」

「そりゃあ鳳凰の焰と普通の炎を一緒にしたら困るよ。」

鳳凰の焰はずいぶん脅威だ。

俺は妹紅に運ばれ、慧音先生の家で暫く安静にすることにした。

…永琳にやってもらったほうがすぐ治る気がするが、妹紅が嫌がる
と思っただめだ。

…正直な話、火傷は痛かった…

― 永夜抄編、これにて終―

Extra - 4 … もこたんINしたお！（後編）（後書き）

次回から特別章をお送りします。

「第3・25章… 出会いの物語」

… 何故、レミアは紅魔異変を起こしたのか？

それは、我欲だけではない深い訳があった…

余り触れないレナの紅魔館生活も描かれる！

そして、日常の中で起きたある事件。

その事件には前兆もあった…！

乞うご期待下さい！！

レミリアの黄昏（前書き）

第3・25章突入！

色々とかオスですが、結構重要だったりするので流し読みだけでも
お願いします！

レミリアの黄昏

ーレミリア視点ー

はあ…。

ん？もう話は始まったの？

…解ったわ、そしたら始めましょう。

今回の主人公は私、レミリア・スカーレットよ。

何？「レナを出せ？」

貴方はこの章の名前を読んでいないの？

『第3・25章』よ？

今まで第一章や二章のような「レナが異変解決するために奔走、レナはかつこいいね！」「みたいな展開にはならないの！

つまりこの章では私が主人公！

このカリスマ溢れる私が主人公よ、もっと喜びなさい！

…と言いたい所なただけ。

今回はどうやら、昔話をしなきゃいけないみたい。

というのも…運命がそう言っているのよ、「昔話しやがれ」ってまるでバル〇トスのようなごつい声で。

だから話しましょう。

私と咲夜の出会いを…。

その前に、昔の私について少し触れておくわ。

昔の私はフランと一緒に紅魔館で自由気ままに過ごしていた。

近くの村は全て私を崇めていた…随分気持ち悪い団体のように見えるけれど、崇められるのは悪くはなかった。

後でパチエに聞いてみた所、昔から悪魔崇拜をしていた集まりだったみたい。

私は崇められる側として、それなりにやることはやり、信仰を得ていたわ。

…でも、今は私を崇めている村なんて一つもない。

それは、ある事件があったから。

…逆に言えば、その事件がなかったら咲夜には出会ってなかった。

そして、異変を起こそうとも考えなかった…。

今からおよそ20年くらい前の事だわ。

その日は酷く荒れた天気で、雷が轟いていた。

普通なら外に出るような天気ではなかったんだけど、その日は妙に胸騒ぎがした。

…まだ他人の運命がはつきりと見えていなかった頃だけど、ただ事ではないような気がして、私は外に出た。

私の予想は合っていた。

…つい数日前まで私を崇めていたはずの村が。

壊滅していた。

「どっついう事…!？」

確かに村の家屋は少し朽ちていた所もあったけれど、こんな荒れた
天気一回で潰れる程のものではなかった。

私はまず、生存者を探す事にした。

村は潰れても時間をかければ再び栄える。
でも、私を崇めていた人は…

見つけたのは屍だけだった。
何処をどう探しても屍または家屋の瓦礫。

私は諦めかけたわ。だって、ほとんど探しきったんだから。

…その時、気配がして振り返った。

そこには傷を負った女性がいた。

銀髪の若い女性…

「…に、逃げて下さい…私の事はいいから…」

「放っておけるはずないじゃない！」

私は彼女を担ぎ、紅魔館に戻った。

彼女は意識こそあったけれど、出血が酷かった。

私はパチエの協力のもと、彼女の治療に当たった。

「血が足りないわ…！」

「くっ…！」

傷は大事には至らない程度まで回復、でも血が足りない。

輸血なんて全く出来ない。

…私はある策を取った。

「パチエ…私の血を使って。」

「でも、レミイは吸血鬼よ！彼女は人間よ、吸血鬼の血が馴染むとは思えないわ！」

「でもそれ以外に彼女を救う手段はない！リスクはあるけれど、彼女を見殺しにするよりかはマシだわ！」

最優先すべきは彼女の命。何故か私は彼女を何としても救わなければならぬような気がしていた。

「…解ったわ。」

私は自らの血を彼女に飲ませた。

魔力入りの血…人間に与えたらどうなるかなんて知らない。

…彼女の様子が、変わった。

「…峠は超えたみたいね…」

彼女の息が安定した。

彼女は助かった。

…私は彼女に話を聞いた。

その話によると、突然村が嵐の被害に遭い、あのようになったのだと言っ。

だけど、「自然災害なんかじゃない」と彼女は続けた。

「幾ら雨と雷が激しかったとは言え、風はそんなに吹いていなかった。突然でしかも長時間の嵐…まるで魔法のようだった。」

…人為的な嵐…

誰が？何のために？

「私は最初、近くに住む吸血鬼の仕業だと思った。でも…そこにいたのは人だった。」

彼女は怪しい人物を見つけ、止めようとしたが圧倒的な力の前に深手を負ったと話してくれた。

此処で少し疑問に感じたのは、彼女は村の人間なのか？ということ。

だが、すぐに答えは解った。

「私は…ただの旅人です。あの村の人間じゃありません。」

…そう、彼女こそが後の咲夜だったのよ。

私はそれをした人間に怒りを感じた。

村を潰されたというのもあったけど、咲夜のような無関係な人も傷付けるような人間…私は許せなかった。

いつか、必ず…その人間を探し出す。

そして…復讐を果たす。

そう決めたのよ。

私は吸血鬼…外に出られるのは太陽が出ていない時、または夜。

対して相手はいつでも動ける可能性が高い。

だから私は何時でも動けるようにする必要があった。

…私が紅魔異変を起こした理由は、これよ。

幻想郷の時間を夜に固定すれば、私は自由に動ける…それは相手を探しやすくなるという事と同じだわ。

…そして復讐を果たす…はずだったんだけど。

何の偶然か、それを打ち砕いたのは人間…それも規格外な人間。

でも、彼のおかげで復讐が馬鹿馬鹿しいちっぽけな事だと解ったわ。

その点では彼に感謝しているの。

…でも、あの日村を潰した奴の正体は未だに解らない。

…咲夜に怪我させた奴の正体は未だに解らない。

…誰かくらいは知りたいわね。

…というわけで、ざっとだけ昔話は終わりよ。

「…」

何黙ってるのよ？不満でもあるの？

「レミリアって…良い奴だな…」

な、なっ！？

「なのに俺と言う奴は…何にも知らずに…」

べ、別に貴方に同情して貰いたくて昔話をした訳じゃないのよ！？

「申し訳ない、レミリア！俺が悪かった！」

ちよっと、土下座までしなくていいわよ！

というか、なんで泣いてるのよ！何処に泣く要素があったのよ！？

「もう次回から主人公はレミリアでいいよ…」

はあっ！？貴方、主人公でしょ！？しっかりしなさいよ！

「…ぐすん…」

本格的に泣くなー！！

…というわけで、なんか私が主人公に本当になってしまった。

本来の主人公が夕陽を見て黄昏ているものだから、使い物にならないわ。

次回からどうしようかしら…作者！あんたの力が必要だわ！

「お呼びですか？」

そうそう、貴方…って何で毛玉なのよ！？

幽霊の方はどうしたのよ！？

「幽霊の方はあくまで私の分身で、しかも本物じゃないんですよ。

…私が本物の作者です（キリッ）」

…まあいいわ。姿形は今回気にしない事にして、これからの事について考えるわよ！

レミリアの黄昏（後書き）

次回予告

レミリア「で、作者、タイトルは決まったの？」

作者「ない頭をひねって決めましたよ！」

というわけで次回

「レミリアの冒険」

レミリア「なんか変なタイトルっ！」

お楽しみに！

レミリアの冒険(前書き)

まさかのレミリア主人公編その2!

もう少し続きます!

レミリアの冒険

事態がよくわからない人の為の前回までのあらすじ。

レミリアの昔話を聞いたレナは、レミリアの優しさに感動、そして自分の愚かさを悔いてフェードアウト。

…なんとレミリアが主人公に！

どうなんのこの小説！？

ー以下本編、レミリア視点でお楽しみ下さいー

翌日。

…さて、どうしたものか。

レナは咲夜に任せるとして、主人公になってしまった以上、私がレナの代わりにならなくてはならない。

ところがレナは普段何をしているのか、私はよく知らない。

本人に聞いてみよう。

「ああ…私めは毎日悪い妖怪を懲らしめているのです、レミリアお嬢様。」

なんかキャラが変わってる!?

「ちょっとレナ!? 貴方、どんどん主人公としてのカリスマさがなくなってきたわよ!?!」

「カリスマ? そんなことはどうでもいい…自然と一体となり、大地の声をを感じるんだ…」

悟りを開きかけてる!?

「咲夜! 今すぐレナの正気を取り戻して!」

「かしこまりました!」

咲夜にこの場を任せ、私は妖怪を退治することにした。

「…で、なんであんたが来てるのよ?」

「仕方ないじゃない！レナがちょっと見せられない状態になったんだから！」

私は貧乏腋巫女こと博麗霊夢に妖怪退治について話を聞いていた。

「…まあいいわ。でも、なんで吸血鬼のあんたがこんな白日の下にいられるのよ？よく灰にならないわね。」

「…パチエが特製日焼け止めを作ってくれたのよ。」

正直、パチエが居なかったら死んでたわ。

それでも効力は8時間しかもたない。

…時間はない。さっさとやるべきことをやらなくては。

「大体話は掴んだわ…要はこのリストに乗ってる妖怪を殺せばいいのね？」

「最悪そうなるわ。レナも何百単位で殺してるから。」

何百単位か…しかし、あのレナの事だ、きっと話が通じない相手だったのだから。

「解ったわ…最近巷じゃ私を舐めてる奴等が多いみたいだけど…」

背中の翼を伸ばす。

「スカーレットデビル深紅の悪魔の力、見せてあげるわ。」

…最近の人間や妖精って、吸血鬼を恐れないのかしら？

「あ、レミリアだー！」

人間の子ども達は私を見るなり喜んで寄ってくる。

害はなさそうだし、血も十分に足りているので殺しはしないが。

「レミリアって、フランちゃんのお姉ちゃんなんですよ？」

「え？なんで知ってるの？」

「レナお兄ちゃんがいつもフランちゃんを連れてきてくれるの！
それでね、遊んでくれるの！その時にフランちゃんが言ってた！」

…最近フランが凄く機嫌がいいのは、これがあったからなのか。

レナ…結構忙しいのね。

「レナお兄ちゃんはね、私達を守ってくれてるんだよ！悪い妖怪を
退治してるんだって！」

「そうね…」

だが、このあとの子どもの一言に衝撃を受ける。

「でもね、実際は良い妖怪さんもいっぱいいるんだって！だから妖怪だからって話もせず嫌っちゃ駄目だよって、レナお兄ちゃんが言ってた！」

「……！」

レナ…貴方って人は…！！

妖怪は悪行が目立つから、人間からは嫌われがちだ。

だけど、実際は本当に悪い妖怪は一握りしかなくて、大多数は人間に友好的なのだ。

それを、レナは知っていた…

「だから私ね、妖怪さんと仲良くなるの！悪い妖怪さんもいるかもしれないけど、レナお兄ちゃんが守ってくれるから！」

その屈託のない純粹な笑顔を、私は直視することが出来なかった。

人間の血を喰らう為に人間を殺してきた私は、こんな子ども達を守る資格はあるのだろうか。

「レナお兄ちゃんはや？」

「今日は休みなのよ。」

全く…あーだこーだ考える前に、やらなければならぬ事を思い出した。

「そしたらレナお兄ちゃんにこれをあげて！」

子どもから渡された…

「飴？」

「うん！いつも守ってくれてるから！」

…あの馬鹿、後でぶっ飛ばしてやるわ。

こんな子ども達を守らずに何やってんのよ！

「解ったわ。ありがとう。」

その頃、紅魔館では。

「ぐすん…あ、そういえば妖怪退治に行かなくちゃ…」

「何やってんのよ、レナ。」

「悪夢…？」

「レミリアがあんたの代わりに妖怪退治に行ったわよ。こんな真昼間に。自殺行為にも程があるわ。」

「あ…レミリアは吸血鬼だもんな…」

「行ってやりなさいよ。このままじゃレミリアはかなり無理するわよ。それに、あんたに会えるのを楽しみにしてる人が居ること、忘れないで。」

「…」

―再び、人里付近のレミリア視点に戻る。―

子ども達を守る…昔の私ならあり得なかった事ね。

…レナに出会ったからかしら。

さて、最初の目標は…

「怪人『オヤノスネカジリ』?」

なになに…？この妖怪は大人の人間に「お金くれよー、お金くれよー」なんてしつこく頼んでくるらしい。
一回きつくお灸を据えてくれとのこと。

「殺しちゃ駄目ね…お灸を据えるんだから。」

「お金くれよー、お金くれよー！」

「出たあ！オヤノスネカジリだ！」

ああ…あれね。

にしてもあの妖怪…骨と皮しかないくらいげっそりしているわね。

なにかあったのかしら？

「怪人才ヤノスネカジリね。」

「お金くれよー…って、お前は！」

暫く私を見たあと、スネカジリは一言。

「なんだ、れみりゃか。」

「その『なんだ』は何！？」

随分舐められてるわね…やっぱり殺そうか？

いや、これくらいで殺しちゃ駄目ね、話を聞かなくちゃ。

「なんでお金が欲しいの？自分で稼いだらいいじゃない。」

働くくらいなら出来るはずだけど…？

「…母さんが病気なんだ。俺も働いてるんだよ！でも、お母さんは手術が必要で、お金が全然足りないんだ…。」

なんか凄く不憫に思えてきた。

「そのお母さんは何処に？」

「妖怪の山の家で安静にしてるよ。病気が悪化しないか毎日祈ってるんだけど、最近日に日に悪化して…。」

「病院行った？」

「行ったけど、手術が必要だって…お金が全然ないのに…。」

涙を流し始めたスネカジリ。

どうにか出来ないかしら…

あ、そういえば…

『最近さ、永遠亭って病院が迷いの竹林に出来たらしくて、治療が完璧で凄い良いところみたいだぜ。』

なんて泥棒魔法使いが言ってたわね。

「ねえ、最近出来た病院：永遠亭って知ってる？」

「永遠亭…？」

知らないみたいだ。

「迷いの竹林にあるらしいわ。そこに行ってみたら？治療は完璧という噂よ。」

「…迷いの竹林ですか…？行ってみます！」

スネカジリはすぐに踵を返して走って行った。

「…解決、でいいのかしら…」

いいよね。

私は二つ目の依頼を受ける事にした。

レミリアの冒険（後書き）

次回予告

レミリア「作者、次のタイトルはどのようなの!?!」

作者「うーん…（この後1時間程考えました、でレミリアに怒られました）」

というわけで次回

「レミリアの激昂」

レミリア「あ、今回のに比べたらマシなタイトルね。」

レミリアの激昂（前書き）

タイトルと内容が微妙に一致してない気が…

PV120000突破しました

次は130000！（ハードルが低いぞ！？

レミリアの激昂

「前回までのあらすじ」

レナの代わりに主人公になったレミリアは妖怪退治へ。

一つ目の依頼の中で、妖怪を一人救って解決。

二つ目の依頼とは何なのか…？

「以下本編」

「今度は…救いようがなさそうね。」

今度の依頼は連続強盗犯『ルピー二世』の逮捕。

なんでも弾幕が使えるらしい。少しは骨がありそうな妖怪だ。

「逮捕って言うけど…これは別の職業の人の仕事なんじゃ…」

と思っただが、言葉にすると負けな気がして止めた。

「助けてー!」

「ぐわっはっは、助けなんて来ない、さっさと金を出せい!」

あれが連続強盗犯ルピー二世ね。

でも、あれ…人型じゃないわね。
何…大きくなったカメレオン？

強盗犯なんて言うから人型だと思ったんだけど…こつこつこつともあるのね。

「待ちなさい！」

「な、なんだ貴様は！？」

カメレオンの前に立ち、私は言い放つ！

「強盗は止めなさい！でないと痛い目に遭うわよ！」

「このチビが！そこをどけい！！！」

うわっ、舌を伸ばしてきた！

気持ち悪いわね…

それと！

「私はチビじゃない！立派な吸血鬼よ！！！」

その舌、千切ってあげるわ！

「はあっ！！！」

爪を伸ばし、舌を両断！

「ぐわあ！！！」

痛みに悶えるカメレオンの真上から、私はスペルカードを使う！

「天罰『スターオブダビデ』！！！」

弾の直撃よ…ただでは済まないはず！

「な、なかなかやるな…！」

まだか！

「流石お尋ね者ね…だけど相手が悪かったわね！」

私はカメレオンの真横に潜り込み、もう一枚スペルカードを使った！

「沈め！！紅符『不夜城レッド』！！！」

奴に突き刺さる紅き針！

「…私に刃向かえると本気で思っていたの？」

身体を貫通した針は、相手の命を奪った事を確認してから砕けた。

「…大丈夫かしら？」

「あ、あ、あなたは…あの…レミリア…なのですか？」

大人の女性が震えた表情で聞いてきた。

「ええ。貴女の命は奪わないから安心なさい。今回は貴女の味方よ。」

「

…あ、ありがとうございます…」

ふむ、これが人を助けるといふことか。

私は女性の安全が確保された事を確かめて、その場を後にした。

「次は…」

少し慣れを感じた所で、次の妖怪を探す。

次の妖怪は…

え？

「孤狼…フェンリル…？」

待ちなさい、フェンリルと言えば確か北欧神話における『神々の最終戦争』に姿を現したとされる伝説の狼…

「伝説の狼を倒せとか何ふざけた依頼してんのよ！？大体あんな化け物が幻想入りしてる時点で何かおかしいわ！」

そもそも依頼の範疇を遙かに超えている気がする。

「幻想郷では常識に囚われちゃ」

「うるさいっ！」

何、今の声!?

全く、人の会話に入り込むとか非常識にも程があるわ!

「しかし…これは本当に依頼なのかしら? イタズラという可能性は…」

と言いかけた所で。

「残念だけど、イタズラじゃないわ。」

何も無い所からいきなり現れる、誰か。
いや、こんなこと出来るのは一人しかいない。

「八雲紫…!」

「本当ならレナに直接頼みたかったんだけど、どうやら貴女がやってくれるみたいね。」

「…結界の管理はきちんとしておきなさい。それが貴女の仕事じゃないの?」

すると彼女は「ふふっ」と笑ってこう返してきた。

「結界を破られて入ってきたなら確かに私と霊夢の不備よ…でも、あれは『直接』この幻想郷に入ってきた。結界を飛び越えて、ね。」

「つまり貴女ですら感じられなかった…そういうこと？」

「そうなるわ。原因は何であれ、仮にも神話クラスの強さを誇る存在…貴女だけで倒せるかしら？」

そんなの決まっているじゃない。

「無理ね。私は吸血鬼だけど、流石に神話クラスの化け物に刃向かえる程、私が実力を持っているとは到底思えないわ。」

「でも、レナは今は使い物にならないわ。なら私がやるしかないじゃない。」

「貴女も手伝ってよね。貴女も居れば、神話クラスの化け物を撃退するくらいは出来るかもしれないわ。」

「そうね。私も手伝うわ。」

こうして、スキマ妖怪と吸血鬼、交わるはずのない二人が手を組み、伝説の狼…フェンリルの撃退をすることになった。

…同時刻、花が風にそよぐ丘にて。

「…」

彼女はただならぬ気配を感じていた。

「…久しぶりに本気を出す必要があるそうね。」

「…その必要はないぜ。」

「……」

まさか、もう戻ってきたの!?

「約束を果たしに来た。待たせたな……」

その声は存在しないはずの者。

「風見幽香。」

レミリアの激昂（後書き）

次回予告

幽香「まず聞くわ、貴方は誰？」

????「おい待て忘れたのか。」

幽香「雑魚に用はないわ。」

????「うそーん！」

というわけで次回

「伝説の孤狼、フェンリル」

お楽しみに！

伝説の孤狼、フェンリル（前書き）

今回は色々な意味でカオスです…

伝説の孤狼、フェンリル

―前回までのあらすじ―

伝説の孤狼フェンリルの撃退をすべく、レミアは八雲紫と手を結ぶ。

一方、フェンリルの出現に気付いた者も居た。

風見幽香…そして、「約束を果たしに来た」と言う謎の人物。

本来の主人公が出番なしというこの展開、果たしてどうなる!?

―以下本編、幽香視点でお楽しみ下さい―

「貴方は…!」

まさか、こんなに早く戻って来るのは予想外だった。

「なんだよその顔、まるでお化けを見るような顔だな。そんなにびっくりにしたのか?」

「…雑魚にしてはよくやった方だなと思って。で、どうやって逃げてきたの?」

「逃げてねえよ!ちゃんと戦いました!でなきゃこれが手に入らねえよ!」

…驚いたわ。

本当に『これ』を持って帰ってくるとは。

「つまり、少しは強くなったと見ていいのね？」

「ああ。で、なんか来たんだろ？」

「ええ。今回は少々手強いかもしれない。…早速貴方の力試しが出るわね。」

「…力が付きすぎてるのを見て腰抜かすなよ？ついでに惚れるなよ？」

「腰抜かすのは万が一あるとしても、惚れるのはないわ。」

大体、私が惚れるとか何かの冗談でしょうに。

「おお、手厳しい。…んじゃ、行こうかね。」

でも、雰囲気は変わったのは確かね。

「…ええ。」

「レミリア視点」

「…で、1つ聞いていいかしら…」

「何？」

凄い違和感、というか絶対に何かおかしい。

「なんで…」

私と八雲紫しかあの時はいなかったのに。

「こんなに不気味な集団が私達に付いてきてるの…？」

私と八雲紫が先頭で、その後ろには…

ざっと数百名の人間が。

ところが全員何故か白い布の袋を被って、なんか顔の部分には「罪」

なんて文字が書いてあったりする。

「私のファンクラブの罪袋よ。気にしないで。」

「気にするわよ！！全員男だし、大事な部分隠さずに顔を隠すなんて馬鹿としか言えないじゃない！」

これぞ『頭隠して尻隠さず』…確かこの小説、全年齢対象なのよね？
色々な意味で大丈夫なのかしら？

「あら、そうなの？貴方達、ちゃんと隠す所隠しなさい。」

なんか心読まれた！？

『ゆかりんの仰る通りに…！』

凄い統一感！？

…ま、まあ、隠す所は隠したみたいだから良いとして…

「それより、フェンリルは何処に居るのかしら？」

「解らないわね。神出鬼没なのが狼だから。相手が神話クラスなら尚更ね。」

ふむ…困ったわ。

仕方ない…やりたくなかったんだけど。

「作者！フェンリルの居場所を吐きなさい！！」

作者に居場所を吐かせる事にした。

「ちょっと待ってくれよ、そもそもフェンリルは狼なんだろ？そしたら妖怪の山とかそこらへんにいるんじゃないの？違うの？」

毛玉の作者がなんかほざいてる。

「貴方達、妖怪の山を搜索しなさい。」

『ゆかりんの仰る通りに！！』

話がかかり進んだ！？

罪袋…なかなかやるわね…

「で、収穫なしと。」

よくあるパターン。

「こんなときに目の前に居たりするパターンなんだよな…って…」

毛玉が何かにぶつかり、その何かを視認した。

「マジで来た！！」

目前に佇む、一匹の獣。

白銀の体毛に、純白の爪と牙。

その眼は私達を鋭く睨む。

…伝説の孤狼、フェンリル。

「八雲紫！奴が来たわ！」

「解ってる、あれがフェンリルね…！」

私と八雲紫は戦闘体勢をとるが、一人あたふたしてるアホが居た。

「作者、あんたも戦いなさい！」

「ふえ！？だつて俺、毛玉だぜ！？毛玉がどうやって伝説の狼を倒せるってんだ！」

いや、戦えるわ！だつて…！」

「あんた、毛玉が様々な奴をぶっ倒す小説書いてるじゃない！」

「ちよい待てえー！あれは別の作品だ！あれは毛玉を操れる少女が

居るからこそどうにかなるんだよ！毛玉一匹でどうしようとする話じゃない！」

「そんなのはいいわ！さっさと更新しなさいよ！二ヶ月くらい放置してるでしょ！」

「それには深い事情が」

「ただのサボりでしょう！読者を大切にしなさい！」

さっきから何を言っているのかしら、私は。

「あのね、此処で耳寄りな情報があるのよ。」

「なに！？」

そして、八雲紫が私に耳打ち。

「そう…それなら仕方ないわよね…ってなるか！！」

どうやら作者はあの作品の事を忘れていなかったらしく、更新しようとして書き溜めをしていたらしい。

ところがある日、保存していた書き溜めが携帯の故障により喪失。

これが作者が携帯を変える理由となり、今現在ない頭を絞ってプロットを再び構成し直しているらしい。

…自業自得じゃん。

とにかく、現在鋭意製作中らしいのでもう少し待ってほしいのと。
と。

「あのお…何時になったら戦ってくれるんだろうか…」

「喋れるの!?!」

フェンリルは喋れるらしい。

作者も私もびっくり。

と、とりあえずフェンリルを討伐するわよ!

…次回!(えっ?)

伝説の孤狼、フェンリル（後書き）

次回予告

レミリア「フェンリルを倒すわよ！」

作者「どうやって?」

レミリア「どうやればいいのか考えなさい！」

というわけで次回

「VSフェンリルという名のクライマックス」

お楽しみに！

V Sフェンリルという名のクライマックス(前書き)

番外編最終話!

ユニーク15000突破感謝!!

VSフェンリルという名のクライマックス

ー前回までのあらすじー

フェンリル出現！

それだけなんだ…

ー以下本編、レミリア視点でお楽しみ下さいー

「行くわよ、八雲紫、作者！」

「久しぶりに本気出そうかしら。」

「て、俺も戦うの！？」

3方向、フェンリルの右に私、左に八雲紫、そして正面は…

「やけくそだー！毛玉マシンガン！」

作者が弾を乱射。

ところがフェンリルには傷1つつかず…

「甘いわー！…」

脚で蹴飛ばされて…

「あーれー！」

星になりました。

「…解ってたけど、作者って弱いわね…」

「毛玉だもの。」

やっぱり無理か。

けれど、収穫もあった。

弾ごときでは傷はつけられない。

つまり…最初から全力で叩かないと駄目だと言う事。

「ならば私から仕掛ける！八雲紫、援護は頼むわ！」

「ええ！」

フェンリルの真下に潜り込み、私は起点を作り出す！

「悪魔『レミアアストレッチ』！そおーれっ！」

まさかのしゃがみからのジャンプ！

フェンリルは宙に舞う！

「後は頼むわ！」

「任せて！魍魎『二重黒死蝶』！」

あの八雲紫の本気のスペルカード…ただでは済まないはずよ！

「レミアア！もう一撃やるわよ！」

「解った！」

だが相手は伝説、最大の攻撃をしなければ…！

ならあれが一番良いわね…！

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

魔力をありったけ注ぎ込み、紅き槍を創り出す…！

「八雲紫！フェンリルを拘束して…！」

「了解 式神『八雲藍+』！」

フェンリルを拘束する…

つてあれ、たまに見る八雲藍じゃない！

大丈夫なの！？

「大丈夫よ、そのまま貫いて！」

大丈夫と言うなら大丈夫なのだろう…！！

「グングニル、奴を貫け！」

力を込めて投擲した槍は、まっすぐフェンリルに向かう！

そして、槍はフェンリルを貫いた！

「やったの…！？」

フェンリルは力無く落下し始める。

「！！レミア、まだ終わってないわ！！」

「なに！？」

確かにフェンリルは落下している…やられたんじゃない？

だが、フェンリルはすっと体勢を立て直し、地面に着地する。

「…やるな…深紅の悪魔レミア・スカーレットに幻想郷の母、八雲紫。だが、この程度で私は倒れぬ。見せてやるう…私が畏れられる、真の理由を…」

フェンリルの魔力が上がり始める。

「流石ね…神話は嘘じゃないのね…！」

フェンリルの魔力は桁外れ。

「私は『軍勢』…孤狼では力があっても数の前では無力…」

フェンリルの回りに現れた…狼。

「故に私は私達で1つ。…この数を、捉えられるか？」

私は八雲紫に背中を合わせ、1つ頼んだ。

「貴女に背中を預けていいかしら？」

「いいわよ。…此処を切り抜けないと、私も貴女も死ぬしね。」

「でも、そのスリルがたまらない。…そうでしょ、八雲紫？」

「あら、貴女と意見が一致するなんて。…命のやり取りだからそう感じるのかもしれないわね。」

珍しく至極真つ当な考えだ。

「後ろは頼んだわ。」

「貴女こそ、後ろは頼んだわ。」

狼達が一斉に飛びかかって来た。

「『紅色の幻想郷』！」

狼達を撃ち落とす。

「結界『生と死の境界』」

弾き飛ばされる狼。

「次から次へとっ！」

弾を放ち、狼の接近を防ぐ。

後ろでも何か音がする、きっと八雲紫が弾でも撃っているのだろう。

「？」

突然、獣達が来なくなった。

「何か策を講じるつもりね。結界を強めておきましょう。境符『四重結界』」

さらに結界が張られる。

「来なさい…フェンリル。」

私達は相手から動くのを待った。

ところが、相手が来ない代わりに何か轟音が迫ってきた。

それは…閃光だった。

「うっ…うっ…」

あの八雲紫の結界を破る一撃…まともに喰らっていたら、きっと…

「大丈夫…かしら？」

何とかね、私はそう答えてふらふらと立ち上がる。

少しずつ歩いてくる獣。

「哮^{いっかほつ}牙砲…私の一撃だ。魔力を圧縮し、解き放つ…結界ごときでは防げぬ。」

神話は伊達じゃなかったわけね…

「お前達では私は倒せぬ…諦めるが吉だぞ？」

諦める、だって？

「諦める？そんな事はしないわ。」

私も彼に毒されたみたいね。

「死なない限り、諦めるといふ考えはないわ。」

とはいえ、今日1日の疲れがある。それに私の魔力は尽きかけていた。

「愚かな…ならばお前から消えるがよい。」

最大のピンチね。

八雲紫もまともに戦えないようだし、これは詰みかしら？

「哮牙砲…！」

「劍符『狼牙一閃』」

フェンリルが吹き飛ぶ。

「なっ…！？」

風と共にやってきた、男女のペア。

一人は存在するかどうかすら解らなかった、花を愛する妖怪…風見

幽香。

もう一人は黒いマントを羽織った青年。
誰かは見当も付かない。

「間一髪、間に合ったみたいだな。」

「後少し遅れてたら一人死んでたけどね。」

「ま、助かったからいいだろ。」

「来るわ！」

青年に食らい付かんとするフェンリル。

「そんなに怒るなよ。」

が、それをまるで犬のじゃれ合いのようにあしらう青年。

「へえ…結構強くなったのね。びっくりだわ。」

「だろ？」

「どつやらあの人達と同じくらい骨があるようね。殺し甲斐があり
そう。」

話が見えてこないけど、解った事がある。

少なくとも、あの二人にとっては…

フェンリルは「敵ですら」ない…!!

「貴様：貴様らは、まさか『あの世界』の住人か!?」
フェンリルが吠える。

「『あの世界』が何処を指すのかはよく解らんが、きつと考える事は一緒だろう。」

「何故だ!? 何故、あの世界に足を踏み入れて此処に存在出来ない!? あの世界は、あの世界は恐怖でしかないのに…!」

「まあ…俺は俺なりに頑張ったんだよ。」

「貴様らがあの世界の住人だと言うのなら…本気を出さないといけないようだな…!!」

また、フェンリルの周りに現れた狼。

だが、さっきとは桁違いな数だ。

「…幽香、いけるか?」

「私を誰だと思ってるの？貴方に心配される程弱くないわ。」

「確かに。今の俺ですら敵わないからな。」

「…解ってるなら精々死なない事ね。」

その幽香の一言に。

彼は異常な行動で。

返事をした。

彼の目前に居たはずの40匹の狼達が。

一瞬、まさに瞬き1つするくらいの時間の間に。

「殺された」のだ。

「幽香、終わったぜ。」

「あら、こつちもよ。」

まさに二匹の血に餓えた猛獣。

もはやこの二匹を、伝説とされた狼は止められない。

「な…な…」

「フェンリル…意外にあっけない最期だな。」

彼は残り一匹の獣に剣を向けた。

それは一匹の兎と猛獣のようだった。

「さ、最後に聞かせてくれ…貴様は、何処のどいつなのだ？」

彼はふつと笑い、返した。

「地獄から舞い戻った、処刑人だ。」

同時に、フェンリルは斬られた。

—紫視点—

「幽香…」

「貴女、弱くなったわね。あの時の強さを取り戻してくれないと、勢いで殺しかねないわ。」

相変わらずの加虐的な笑みは、彼女が健在であることを示す。

「そう言えば、貴女が引つ張って来た彼はどうなのかしら？」

「かなり強いわ。」

「そう。彼に伝えておいて。『今度殺しに行くから』って。」

…昔からの親友故に、この言葉が本気であるのは簡単に理解した。

「…ええ。ただ、幽々子ですら彼は殺せなかったということだけは伝えておくわ。」

その一言に、彼女は反応した。

「…へえ。」

やけに上ずった声だから、結構期待しているんだろう。

「…彼を鍛えなきゃ…今度こそ死ぬわ…」

彼女の本気は、神すら殺しかねない。

親友だからこそ解る事だ。

…というか実際に彼女、神を殺しちゃったから…

久しぶりのレナ視点

「結局出番なかったわね。」

「そうだね。」

「影薄かったね。」

「そうだね。」

「主人公（笑）だったわね。」

「そう…だね。」

うわああああああああん（涙）

「ちょっと、何が起きたのよ!？」

霊夢に弄られ、レミリアに主人公の座を取られて散々な章でしたが、これにて終幕。

VSフェンリルという名のクライマックス(後書き)

次回からまたオリジナル行きます。

題して「第3・5章」

何が起きるかはその目で確かめろっ!!

お楽しみに!

ある日の事、美少女に殺されかけた奴がいたんだって（前書き）

第3・5章…スタート！

ですが早速道草してます。

ストーリーがマジで進むのは次回から！

ある日の事、美少女に殺されかけた奴がいたんだって

これはとある妖怪が綴った、一週間分(?)の記録。

― 第1日目 ―

「私と殺し合いをしましょう?」

「待て、経緯も事情も見えないのに殺されるとかありえないんだが。」

理由は簡単、貴方を殺したいから。

でも、このやり取りはもはや日常と化している。

「私を満足させなさい、それが貴方の役目よ。」

そう言って、何時ものように戦いを始める。

…でも、この戦いが楽しかったりする。

彼はある日、突然やってきた。

『俺は殺したい奴が居る。だが、このままではどう考えても殺せない。…奴を殺す方法を、一緒に考えてくれないか？』

そんな事を言っていた。

見ず知らずの男に何も言う事はない、そう思った私は問答無用で彼を殴った。

彼は気絶した。

流石にこのまま殺してしまうのもなんか癪だったので、私は気絶した彼を家に運んだ。

暫くすると、彼は目覚めた。

『う…此処…は…？』

「私の家よ。私のせいで貴方が死んだって事になると色々面倒だから。」

と言っても、死んだら死んだで向日葵達の栄養になったのだけだ。

『そうか…優しいんだな、君は…』

優しい…意外だね、そう捉えられたなんて。

でも、まんざらではなかった。

それ以上になんか顔が赤くなったのを感じて、見られるまいと彼を殴ってしまった。

また、彼は気絶した。

数時間後、彼はまた目覚めた。

「お腹、空いたでしょ。それなりに食べられるものを用意したから、勝手に食べて。」

『済まない。頂くよ。』

彼はそれはそれはとても幸せそうな顔で、私が用意した食べ物（アップルパイと言うそうだ）を食べていた。

というより、がつついていた。

『これ美味しいぞ！君が作ってくれたのか？』

「一応、ね。口に合ったみたいで良かったわ。」

こんな会話をしたのは何時以来かしら。

…たまに紫と幽々子が来た時にくらいしか会話してないわね。

でも、こんな会話もすぐに終わる。

用事さえ終われば、彼は居なくなる。

さっさと終わらせよう。

「…で、貴方が殺したいと言うのは誰の事なのかしら？」

『は』

アップルパイを頬張っていた彼が首を傾げる。

「相談に乗ってあげてるの。で、誰なの？」

『○○○。』

その名は、余りにも予想外だった。

「なっ…！？貴方、本気なの！？」

『本気だが？』

この男…余りにも馬鹿げている。

「だとしても無理だわ。貴方、人間じゃない。人間ごときに殺せる相手じゃないわ、諦めなさい。」

瞬間、彼の顔が曇った。

『…そうか。俺は…無力なのか…』

彼はそう言ったきり、黙ってしまった。

翌日、彼は私の前から姿を消した。

唯一あつたのは、置き手紙一枚だった。

『少しの間だったが世話になった、わざわざ押し掛けて済まなかった。俺の事は忘れてくれ。そうした方がきつと良い。』

「…」

日常が、戻った。

―第2日目―

今日も何時ものように彼と殺し合う。

今思えば、こつして彼と殺し合いが出来るというのは奇跡だったのかもしれない。

「なかなかやるようになったじゃない。」

「そりゃどうもっ!!」

まさか、彼に傷を付けられる日が来るとは。

彼は確かに強くなっていた。

547

…彼が私の前から姿を消した数日後。

ある客がやってきた。

『いやあ、まさか貴女に取材出来る日が来るなんて思いもしませんでしたよ。』

射命丸文…昔から私に取材をしつこく申し込んできた烏天狗。

「今日は気分が良いの。奇跡ね、貴女は。」

いくら相手がしつこい烏天狗でも客は客。
私は彼女を家に入れた。

「で、取材って何なのかしら？」

『ええ…最近、何か面白い事ありました？』

「面白い事…ねえ。」

あ、そう言えば。

「男が来たわ。それも変な。」

『それは面白い事ですな！詳しくお話を聞かせて下さい！』

予想以上の食い付きに少し驚いた。

『…へえ、そんな事があつたんですか。』

「大体これで話は終わりよ。」

しかし、相手は釈然としない顔をしている。

「…どうしたの？」

『その話、勿論全て本当なんですよね…?』

「ええ。貴女に嘘をつく理由なんてないもの。」

暫く彼女は何か言いたそうに口をもごもご動かしている。

「言いたい事があるならばつきり言いなさい。『面白くなかった』
つて。」

ところが、此処から少し驚く展開になる。

『いやあ…もしかしたらその人、私の知り合いなのかもしれない
ですよ。』

「何処に居るの?」

あれ、私、なんでこんな事聞いているのかしら?

『今から会いに行きますか?』

「ええ。」

な、なんで?

彼の事なんて、私にはどうでもいいのに。

…来ちゃった。

『多分彼だと思っんですよ。おーい!』

ドンドンと戸を叩く彼女。

そして、戸が開いた。

『何ですか編集長？今日は仕事じゃ…っ…っ…』

そこには、数日前に私の家に居た彼が寝惚け眼で立っていた。

「あ、貴方！何処に行ったかって心配になったじゃない！」

せめてあの時、一言かけて欲しかったのは確かだった。

『編集長…これは…どういう事で…？』

彼はまだ事態を理解していない様子だ。

私はなんかイラついて、彼を殴った。

やっぱり彼は気絶した。

『置き手紙の字を見て、貴方じゃないかと思ったんですよ。やっぱり合ってた！』

『それにしても、よく此処まで来てくれたんですね……すみません、少し待っててくれませんか？』

「…？」

彼はニコリと笑い、こう続けた。

『アップルパイのお礼、したいんで。』

「…」

目の前には、簡単な料理が並んでいた。

ピカピカに炊けているご飯、豆腐と玉葱の味噌汁、そして鯖の塩焼き。

『ささ、お口に合うか解りませんが、召し上がって下さい。』

「い、いただきます…」

ご飯を少し食べてみた。

「…」

美味しい…ご飯って、こんなに美味しいものだったの！？

『流石だね、一人暮らしする男の子は料理が上手いってやつですか』

『そこまでは…』

えへへと、彼が照れ臭そうに笑う。

「…」

私は無性に叫びたくなるような衝動に駆られた。

…とりあえず、この衝動をどうにかしたかった。

だから。

「貴方！」

バンツ！！と机を叩き、私は彼を指差して言った。

「明日から私の家に住みなさい！！」

「…え？」

一名程「これはスクープ」と言いたげに目を光らせるのが居たが、そんなのは関係なかった。

―第3日目―

今日も何時ものように彼と殺し合いをする。

正直な話、彼にも私にも、相手を殺そうと思う気はないだろう。

私はあつたのだが、段々となくなってきた。

いつの間にか、ただのじゃれ合いになっていた。

彼を家に連行して3日。

彼はそわそわしていた。

というのも、どうやら私を意識しているらしい。

女として私を見ている部分もあるのだろう。

でも、それは私も同じだった。

私の話を聞いてくれる人が、傍にいる。

今までなかったことで、私は気が付けばずっと話をしていた。

…それは他愛もない話で、酷く退屈するような話なのに、彼は笑顔で聞いてくれた。

「…そう言えば、貴方…強くなりたいのよね？」

『ああ。強くなって…あいつを殺す。それが俺の…生き甲斐なんだ。』

1つだけ、彼が強くなる方法があった。

だけどそれは、失敗すれば彼は死ぬ。

それに、暫くは彼の声を聞けなくなる。

何故だろう…それはとても嫌だった。

『…』

彼は私を睨んでいた。

『なんで…なんで黙ってたんだ。』

彼が強くなる方法。

それは、彼をある世界に送り込む事。

これだけなら問題はない、けれど…それは…

「貴方が…死ななければならぬのよ。」

彼の死が絶対条件だった。

『…』

彼の願いを果たすには、死ななければならない。

そして、送り込まれたその世界で、その世界の王とも言われるある人物に認められる強さを持たなくてはならない。

強さがなければ、彼の願いは果たせない。

生半可な事ではなかった。私もその苦しさを知っているから。

「私…貴方に死んで欲しくないの…」

彼には死んで欲しくない。

すると、彼は私の頭に手を置いて、こう言った。

『気持ちは解るよ。でも…俺は…やっぱり死ななきゃならない。』

だけど。彼はそう置いて、続けた。

『それはあいつを殺す為じゃない。…君を守れるような強さを手に入りたいからだ。君を守れるなら、あいつだって殺せる。だってさ、

君はとっても強いから。』

「！」

『残念だけど、今の俺じゃ君は守れない。俺は弱い人間だ…だから、強くなる。約束するよ…強くなって、帰ってくる。必ずだ。』

「なんで…なんでそこまでして、私を守りたいの？」

彼は暫く黙り…答えた。

『…もっと早く気付くべきだった。』

彼の腕が、私を包む。

『君が好きだから。』

「えっ…!？」

すすす、好き…!？

『大切なものだと思ってるから。それじゃ駄目か？』

あ、あわわわ…

『俺は君を愛してる。』

え、えええっ!？

「私は妖怪よ!化け物なのよ!」

さらに私は強く抱き締められる。

『知るか。妖怪だろうがなんだろうが愛してる事に変わりはない。』

「…わ、解ったわよ…で、でもっ!!」

必ず帰って来なさい!約束よ!」

『ああ。約束は守るよ。』

彼はその後、死んだ。

でも、それは強くなる為。

いつか必ず帰って来る…その約束と共に。

― 第4日目 ―

今日は彼と殺し合いはしなかった。

代わりに、彼と家の中で話をした。

あの時のような、他愛もない話。

でも、私と彼はあの時と変わらず笑い合っていた。

「今日と一緒に寝てあげる。」

「マジで！？暖かいんだよな…太陽みたいだもん。」

「誰が抱き枕にしていって言ったのよ…」

「駄目？」

「冗談よ。でも、私を抱き枕にするんだから、当分寝かさないわよ？」

「それは楽しみだ。」

彼は無事に戻って来た。

戻って来たその日はずっと彼にくっついて泣いた。

そして、寝かさなかった。

「今夜はずっと寝かさないぞっ」

『ちょ、どうしたんだ、いきなり…あああああ！…！！…！！』

一週間分書かなきゃいけないみたいだけど、これ以上はただのおの

るけにしかならないので此処で終わるわ。

「ねえ、最後に一つ聞いていい？」

「ああ。」

「今でも私の事、好き？」

「当たり前だ。」

「じゃ、名前で呼んで。」

「ああ。…愛してるよ、幽香。」

「私も。ずっと一緒よ？」

「…ずっと一緒だ。」

―射命丸文の追記―

これは本にしていいレベルですので、本にしちゃいました。

『とある下っ端記者と妖怪の恋物語』

文々。新聞社より発売中！

―とある下つ端記者の追記―

編集長おおおおお！！！！！？

何してくれたんすかあああああ！！！！？

―妖怪の追記―

あの烏天狗…今度会ったらただじゃ帰さない…！

絶対しばき倒してやるわ…！！

ある日の事、美少女に殺されかけた奴がいたんだって（後書き）

ゆづかりんと結婚するという夢を昨日見たんだ。

その夢を少し書き換えたんだ、すまない。

面白かったからどうせならと言つ軽い気持ちで書いたんだ、すまない。

というわけで次回

「平和ってどうして簡単に吹き飛ぶんだろっね」

お楽しみに！

平和ってどうして簡単に吹き飛ばんだらうね（前書き）

本格的にスタート！

平和ってどうして簡単に吹き飛ばんだらうね

―レナ視点―

「熱い…」

俺は妹紅と毎日のように戦って…火傷を負っていた。

その度に慧音先生の家へ連れられ、安静にする。

「妹紅…毎回済まない…」

「いいよ、気にしないで。」

そして、妹紅は夜な夜な輝夜を殺しに行く。

で、俺はと言うと、慧音先生の家泊まる。

そんな日常が、約3ヶ月くらい続いていた。

「あれが噂の…これはスクープですね。」

近づく日常の終わりに気付かず、俺は幻想郷ライフを満喫していた。

―紫視点―

「…というわけよ。彼はかなり力を付けている…道を踏み外す事もなく。」

私はある人物に話をしていた。

「そう…貴女から見て、彼は罪を犯していない、と？」

「ええ。仮に彼が罪を犯していたとしても、それは些細な事…妖怪退治中の殺害レベルのね。」

それですら彼は悔いているくらいなのよ？彼は貴女の基準に合わせれば『白』であることに間違いはないわ。」

『彼女』の前では嘘は付けない。

それが『彼女』の強み。

「紫…彼の力、私も見てみたいわ。」

「貴女が直々に彼に会うと言うの…!？」

異例中の異例…いや、あり得ない事。

「しかし、私は知ってる通り、罪を犯した者にしか本気を出せない…これでは彼の力は見れないわ。」

どうすればいいかしら…

そうだ。

「…つまり、彼に罪を着せればいいのか？」

「駄目よ！それは彼の心を汚す事になる！」

「違うわ…本来『白』である行為を、あたかも『黒』であるように仕立て上げればいいのかよ。」

「そうか…！そうすれば、私は彼を裁ける！でも、どうやって…？」

これは私だからこそできる事ね。

私は扇子で口を隠しながらその案を話した。

「…貴女が頭を抱えてる彼女を使えばいいのよ。」

「?????視点」

「色々書く事が出来たし、これで明日もいい記事が出来ます！」

私は早速筆を取った…

その時。

「ちょっと良いかしら？」

「あ、貴女は…！？」

ーレナ視点ー

「って、これはどづいづ事だあああああ………！………？」

何で？

何で俺は…

「待て、この変態…！」

「とつとと捕まりやがれこの犯罪者…！」

追いかけてるんだ？

冷静に思いだそう、さっきの事を…

〈THE・回想〉

全ての元凶はあれだ。

「レナ、これ何？」

慧音先生に見せられた、一枚の紙。

「なになに…？」

『指名手配』

『名前…彩崎玲奈』

『罪状…婦女暴行及び強制猥褻罪』

『懸賞金…100万円』

「はあっ！！？」

超凶悪犯罪犯になった覚えはないんですが！？

「つまり…これは嘘、ということではないのね？」

「ああ！こんな事、やってねえ！！！」

すると、慧音先生と妹紅は頷いた。

「私がかするわ。レナはその間に逃げて！」

「迷いの竹林にはすぐ抜けれる近道があるの、私が教えるわ！」

持つべきはやはり友、か！

「ありがたい！そうと決まればすぐに動こう！」

こうして俺はまた非日常に引きずり込まれた。

一方。

実はもう一人、この指名手配に翻弄された人が居たりした。

「…え…？」

『指名手配』

『名前…レミリア・スカーレット』

『罪状…カリスマでないのにカリスマだと謳った詐欺罪』

『懸賞金…1000万円』

「なんでレナより私の方が懸賞金でかいのよ!？」

罪は彼の方が重いのに!？」

「それより、早く逃げた方がいいと思います。何時お嬢様を捕らえようとする輩が来るか…」

全く…なんで私が…

「…解ったわ。咲夜、紅魔館を…皆を頼むわ。」

「どうかご無事で…!」

レミリアは窓から飛び立った。

―幽香視点―

「面白そうね、これは。」

私は2枚の指名手配状を眺めていた。

「これ…レナのじゃん。」

彼が私が見ていた紙を見て気付く。

「知ってるの？」

「ああ。紫が言った例の男だ。…紫どころかあの西行寺幽々子を倒せる男だ。戦いを挑むつもりなら気を付けて。」

「面白いじゃない。殺し甲斐があるわ。」

だけど、と彼は私に忠告をする。

「けど、こちらから動かないと彼には会えないと思う。幽香は『かなり危険だ』と噂されてるから。…ホントは凄く可愛いのに。」

「最後の一言はかなり余計よ。…大丈夫。策は取ってあるから。」

…噂の彼の實力…見てみたいわ。

けれど、私の隣に居る彼には到底及ばないだろう。

…私が万が一、噂の彼にやられる事になっても、その彼を捻り潰すのが…

この下っ端記者さんだもん。

平和ってどうして簡単に吹き飛ばんだらうね（後書き）

この章はおまけみたいなものなんで…

ここらへんでもはっちゃけます。

いきなり始めました、勝手にランキング。

作者の好きな東方キャラランキング【紅魔郷編】

レイマリは除きます。

1位…めーりん

2位…咲夜さん

3位…フラン・レミリア

次点…パチュリー・ルーミア

妖々夢編は次回！

というわけで次回

「レナとレミリアの逃走劇」

お楽しみに！

レナとレミリアの逃走劇（前書き）

本編に戻りますよ！

レナとレミリアの逃走劇

- レナ視点 -

俺は妹紅の協力のもと、迷いの竹林を駆け抜けていた。

「妹紅、慧音先生は大丈夫なのか？」

「慧音を舐めちゃ駄目。人里のボスみたいな存在だから、こんなこととてどうにかなる柔な精神じゃないよ。」

慧音先生は大丈夫か、だけどこれ以上は迷惑はかけられない。

「…妹紅、迷いの竹林を抜けたらもう戻っていいよ。妹紅や慧音先生に要らぬ心配はこれ以上かけたくない。それに、一人の方が隠れやすいから。」

「それもそうだね。なら、此処から真つ直ぐ行けば出られるから、そこから紅魔館を経由していくといいよ。紅魔館には味方が居るんでしょ？」

そうだな…紅魔館の面子は間違いなく味方をしてくれる。

いざとなれば、レミリアやフランも居る。大丈夫だ。

「解った…此処までありがとうな、妹紅！」

「気を付けて！」

妹紅と別れ、俺はとりあえず紅魔館を目指す事にした。

だが、俺は見落としていた…。

『もう一人の逃亡者』の存在に。

・レミリア視点・

「くっ、何時までも付いてくるな…！」

私を追いかける妖怪達を弾幕で黙らせる。

だが、逃げながらの弾幕展開は魔力や体力を消費する。

さらに、私は太陽光から身を守る為に薄い魔力のベールを身体中に纏わせている。

パチエの特製日焼け止めもあるのだが、塗ってる暇はない。

「魔力の浪費はできないわね…！」

魔力が尽きれば、待つのは死。

太陽に焼かれて死ぬ。

だがその前に捕まるだろう。

捕まっても死。

どうにかして、魔力の補充をしたい。

しかし私は一人…そして、常に妖怪達に追われている…これはまずい。

「さて、この状況をどうしましょうか…」

- 文視点 -

自称カリスマ溢れる吸血鬼は指名手配してもいいレベルだけど…

「なんで彼を…?」

彼は数々の異変を解決した英雄的存在。

それを何故、冤罪をでっち上げてまで指名手配しなければならないのか?

私はそれが解らなかった。

「なんで彼を追いかけ回す真似をしたんです?」

「それは秘密。」

「ですよね?。」

当然、この見た目は妖艶な少女、現実は何年生きたかすら解らない隙間で引きこもってるご老人は答えやがりません。

正直な話、彼女を少女と呼ぶのなら、まだ冥界で大食いやってるほんわか幽霊さんを少女と呼ぶ方が自然なんです。

「…」

彼と彼女を呼んで、このスキマ妖怪を潰して貰おう…。

- 霊夢視点 -

「え！？レミリアを捕まえるだけで1000万円！？」

私はこの情報を魔理沙から聞いて愕然としていた。

「もう皆血眼でレミリアを追いかけて回してるぜ。早くしないと捕まえるのも時間の問題だぜ。」

「魔理沙、行くわよ！」

私は魔理沙の腕を引っ張り、早速レミリアを追おうとした。

「普段は妖怪退治すらレナに押し付ける癖に…っと、思い出した！」

「何を思い出したのよ？」

私はレミリアの事で頭が一杯だった。
魔理沙の一言を聞くまでは。

「レナも追われてるんだぜ！」

「え…！？」

・幽々子視点・

「妖夢〜！」

「なんですか、幽々子様？」

「レミリア・スカーレットを助けてあげなさい。きっと面白い事になるわよ〜。」

「レナは？」

「レナは大丈夫よ〜、それよりレミリアが危ないわ。今日は日が傾いてきているからまだどうにかなるかもしれないけれど、明日はきっと死にかけになるわ。だからレナよりレミリアを優先しなさい。」

「かしこまりました。」

妖夢が姿を消す。

「うふふ…つまり、私も貴女を狙っているって事よ…レミリア。」

それよりも、最悪な事態を考えなくてはならない。

「幾ら罪人相手とは言え、この騒動…『彼女』は見逃さないでしょうね。」

レナとレミリアの逃走劇（後書き）

勝手にランキング。

作者の好きな東方キャラランキング【妖々夢編】

例の如くレイマリは除きます。

- 1位…妖夢
- 2位…幽々子
- 3位…アリス・紫
- 次点…藍

永夜抄編は次回！

というわけで次回
「はたての取材」

お楽しみに！

はたての取材（前書き）

PV130000、ユニーク16000突破感謝！！

はたての取材

- レナ視点 -

迷いの竹林を通った俺は、追っかけに見つかる事はなく、比較的楽に逃げる事が出来ていた。

だが、いつまた見つかるか解らない…油断は、出来ない。

…くっ、身を隠せる場所があればまだマシなんだが…

！？人の気配！？

敵か！？

「敵じゃないわ。私よ。」

「は、はたて…！？何だよ、驚かせんなよ。」

なんだ、はたてか。

「今日は取材しようと思ってるの。レナの罪についてよ。」

「解ってると思うが、そんなことはしていないぞ？」

ふと思ったのだが、紅魔異変の時のあれはノーカウントだよな？

第一章参照)

カウントするなら美鈴が既に行動起こしてるはずだから。

ちゃんとあのあと謝罪したしな…

「解ってるわよ。だから、レナの無実を証明するための取材よ。」

ああ、ありがたい。

俺は今回の件に関しては全く知らないし、やった覚えなんて到底ない。

「この指名手配状によると、レナは婦女暴行及び強制猥褻の罪で指名手配されてるみたいね。強制猥褻なんて、冤罪がかなり多いから裏付けが大事なのよね。」

俺が居た世界でも、よく『満員電車の中に居るときは手を真上に向けて吊革に捕まっておく』という小技がある。

そうすれば冤罪の可能性はぐっと落ちるのだ。

が、この幻想郷、電車なんて通ってるはずもなく、そんな小技は使う事すらなかったし、そもそも俺は女性を襲おうなんて思った事すらない。

「強制猥褻は間違いなくでっち上げよ。だから気にしないで。問題は婦女暴行罪なのよ。だってレナ…」

そうなのだ、一番有罪喰らう可能性が高いのは寧ろ婦女暴行罪の方だ。

なんせ俺：チルノ殴るわレミリア殴るわ妖夢殴るわ幽々子殴るわ紫
殴るわ…

さらにプリズムリバー三姉妹をぶっ飛ばすわ慧音先生と殴りあいだ
わ妹紅とも殴りあいだわ…

最終的には永琳や輝夜を殺そうとしてしまったしな…（今までの出
来事を参照）

「レナは異変解決の実績があるから、免罪符が付いててもおかしく
ないはずなんだけど…」

が、やったことには間違いないのでこれは追われても仕方ないレベ
ル。

だが強制猥褻は完全に冤罪だろ…

「私もレナは無実だと思うんだけど、暫くは逃げた方がいいわ。喉
元過ぎればなんとやらって言うしね。」

そうだな…時間が経てば、きっと皆冷静になってくれる。
そしたら、俺のこの罪の疑いだって晴れる。

「解った。はたて、ありがとな。」

「頑張つて逃げ切つてよ！」

ポンと肩をはたてに押された俺は、先を急ぐ事にした。

はたて視点

「…にとり、仕掛けたわよ。」

私はにとり製の携帯電話を取り出し、にとりに電話をかけた。

『そうみたいだね。感度良好！彼の居場所は何時でも掴めるよ！』

「レナには悪いけど、私にも生活がかかっているのよね…彼女は協力してくれそう？」

『うーん、やってみただけど駄目っぽい。「面倒事に巻き込まれたくない」ってさ。』

「彼女、お金に困ってないのかしら？」

『それなら、私の研究に付き合ってくれてるからお金はある程度確保出来るよ？』

「うー…」

彼女さえ協力してくれれば、かなり事態は好転するのに。

『はたてからのお願いって伝えようか？』

「それもそれで押しつけがましい気がするし…」

流石に無理は言えない。

『なら直接本人に伝えよう！イヴ〜！』

『どうしたの？』

電話の向こうで声がする。彼女が近くに居たようだ。

『はたてが「ちょっと頼みがある」って！』

『解ったわ。：代わりました、私よ。』

「イヴ、私に協力してくれない？」

『どうして？』

「実は…」

少女説明中…

『そこまで困ってるんだつたら私も協力するわ。でも相手は英雄よ？私一人じゃどうやっても倒せないわ。』

「そっだと思って、『四天王』の一人を呼んでるわ。」

『ならなんとかやれそうね。相手の居場所は？』

「後でメールする、彼女に『宜しく』って伝えておいて。」

「解ったわ。じゃ、また後で。」

「ありがとね。それじゃ。」

ついに漕ぎ着けた、『ネクロマンサー死体人形師』と『一人百鬼夜行』の協力を…！

「ごめん、レナ…今回ばかりはただじゃ済まないわ。」

???視点

私なんかをわざわざ呼ぶなんて、はたても必死なのね。

…友達に頼られてるんだから、死にたいとか言ってる場合じゃないわ。

「あれ？イヴ、もう行くの？」

「ええ。きつと百鬼夜行の主は待ちくたびれてるわ。」

「…呑んで寝てる、の間違いじゃないの？」

「それは平和な時の彼女よ。でも今は…久しぶりに暴れられるとうずうずしてるはずよ。」

行ってくる、私は親友にそう声をかけて彼女のもとへ急いだ。

「あ、イヴじゃん！仲間ってイヴの事だったんだ！」

「もう呑んでるの？顔が紅いけど…」

「そりゃあ戦の前の景気付けだからね、にやははははは…」

「じゃ、私も一杯頂こうかしら。」

「お、呑んじゃいますか！いいよー！」

少しだけ、私は口を付けた。

「『一人百鬼夜行』と言われた貴女と、『死体人形師』なんて言われてる雑魚の私が手を組むなんて…人生というのは、つくづく解らないものね。」

「そうだねえ、でもイヴは私並みに強いじゃん！」

「そう言っただけで頼ってくれる大切なものがあるから、私は死にたくても死ねないんだけどね。」

「それはそれで幸せ者だと思うよ？」

「そうね…友達の願いだもの、叶えてあげたいよね。」

「そうそう、それでいいんだよ！持ちつ持たれつ、一人で全部背負わなかったっていいんだよ！」

「そうね。ありがと、萃香。」

死ぬのは少しだけ延期しよう、そう思った。

「そしたら、行こう！」

「ええ！」

此処に、強者と呼ばれる二人の妖怪が、手を組んだ。

レミリア視点

「はあ…はあ…」

魔力はもう空寸前^{から}、体力も限界が見えてきた。

「くっ…！まだ追いかけてくるの！？」

このままではいずれ捕まる。

「はあっ…！」

！？今の声は…！？

私はばつと振り向く。

「大丈夫ですか、レミリア・スカーレット？」

「あ、貴女は…！？」

誰だっけ？

はたての取材（後書き）

勝手にランキング

作者が好きな東方キャラランキング【永夜抄編】

*レイマリは除き（ry）

1位…慧音

2位…妹紅

3位…うどんげ

次点…えーりん

輝夜「なんで私がランクインしてないのよ!？」

作者「お前のせいで文花帖全スペカ撮影出来ねえんだよゴルァ!」

輝夜「なんでよ!？」

作者「金閣寺」

輝夜「…ごめん。」

あれはきつすぎ…

風神録編は次回!

というわけで次回
「レミリア包囲網」

お楽しみに！

レミアア包田網(前書き)

結構長くなる予感が…

レミリア包围網

・レミリア視点・

「あ、貴女は…!!?」

誰だっけ？」

「ええええええええ!!!!?!?それはないですよ!」

白髪の彼女は憤慨する。

「確かに私は出番少なかったのですが、名前すら忘れ去られるなんてあんまりですよ!」

「ごめん、原作じゃ殆どどころか全く接点ないもの。名前の件は謝るけど、それは作者に怒ってよね。」

仕方ない、運命という名のアカシック・レコードにアクセスしてみましよう。

「…あ、魔力空っぽだからアクセス出来ない…」

「アカシック・レコードにアクセスしないと解らない程私は影薄いですか!?!」

だって貴女、半人半霊じゃない。

…

あ、思い出した。

「魂魄妖夢ね！」

「はあ…思い出してくれたんですね…。」

妖夢はほっとしたように溜め息を付く。

だが、ほんわかムードはここで終わり。

「…で、何故私を助けた？私は、貴女が主の命令で私を捕らえに来たかと思っただけね？」

「幽々子様は弱った貴女を捕らえても面白くないと仰ってました。」

…幽霊め、なかなか掴めないわ。

「つまり、貴女の主は私が完全回復してから捕らえようとしているわけ？だとしたら愚か過ぎるわ。紅魔異変の時の私と違っていたら痛い目に遭うわよ？」

実際、彼のおかげである時よりは力が付いている。

「それを覆すのが私の仕事です。」

脇差に手をやる妖夢。

「面白い…！完全な私を打ち砕き、主君に強さを示すか！」

「ええ。そのつもりで貴女を助けました。」

「解ったわ…：相手をしてあげましょう。…と言いたい所なんだけど、邪魔者が来たようね。」

「！！！」

後ろから来たのは、妖怪達。

「どうやら貴女を倒すのはこれが終わってからのようですね…！！！」

妖夢は単身妖怪達の塊に向かって走る。

「人符『現世斬』！」

流石、あの幽霊のお付きだけある。

あのくらいの妖怪は一閃で斬り捨てるか。

「…：斬り捨て御免。」

肉片と化した元妖怪を余所に、話は進む。

「…：さて、今度は貴女の番ですよ？」

「その前に一つ良いかしら？さつきも言った通り、私は魔力切れだ。そこで、魔力を補充したい。…：が、それには貴女の協力が必要なの

よ。」

「…解りました。私に出来る事なら。」

ニヤリ。

今の私に出来る魔力補充の方法はたった一つ。

そしてそれは…

相手の了解さえあればある意味一撃で相手を葬れると言う事…！

「解ったわ…『遠慮なく』頂くわ。」

貴女の、血をね。

がぶり。

首から吸うのが一番なのよね。

「うっ…！貴女、何を…！？」

貴女が魔力補充に協力してくれると言ったからしているだけよ？

血を貰うということを。

「…卑怯な！」

あら、貴女は良いって言ったわよ？

だからやったのよ？

「身体が…動かない…い…」

ある程度血を抜けば人は気絶する。

妖夢もやはりそうだった。

「ありがとう、魂魄妖夢。貴女のおかげで魔力は十分に補充出来た

…」

鮮血で濡れた唇を軽く舐め、私は再び逃亡を図る事にした。

妖夢が妖怪達を斬ってくれたおかげで、追っ手が来なくなった。

私は少し休憩を取り、身体に日焼け止めを塗る。

…さて、此処からどう動こうかしら？

少し考える。

…迷いの竹林の方へ向かおう。

私はそう決意し、動く。

- 霊夢視点 -

「魔理沙、迷いの竹林まで飛ばして。」

「へ？なんでまた？」

「レナはそこに居るわ。レミリアもきつと。」

「どうしてそう言えるのか解らないぜ。」

「勘よ、勘。」

直感しかないわ。

「霊夢の勘は恐ろしく当たるんだよね…飛ばすぜ、しっかり捕ま
て！」

そこに居なければ居ないでまた考えよう。

・紫視点・

「さて…そろそろ頃合いかしら。ねえ、幽々子？」

「そうねえ。」

「レミリア・スカーレット…彼女を捕らえるチャンスよ。」

彼女はこの舞台には必要ない。

スキマを切り開き、私と幽々子は中へ入る。

舞台から大根役者を引き摺り下ろす為に。

・レミリア視点・

私は逃げていた。

…ひたすら道なき道を。

その間に、私は包囲されていたのだ。

…前方から博麗霊夢、霧雨魔理沙。

背後からはスキマから現れた八雲紫、西行寺幽々子。

…絶叫絶命とはこの事ね。

「そこまでよ、レミリア。おとなしく捕まりなさい。」

「霊夢が懸賞金のためだってさ。ま、私は興味ないけどね。」

前は英雄。

「貴女は捕まりなさい。それが…貴女の役割よ。」

「もうおしまいよ。こんな状況でどうしようも考えないでね。」

後ろは伝説の強者。

いくら私でも…

これは無理だわ。

「どう考えても…死ぬわね。」

だけど…死ぬ前に、抵抗はするわ。

「でも、ただで死ぬとって？」

私は…何も抵抗なしには死なない！

「永遠に幼い紅き月…レミリア・スカーレットとは私の事よ…！」

「へえ、面白い事になってるじゃない。」

『!?!?』

ここに居る5人全員が驚愕した。

そこに居たのは。

かつて神すら殺したと言われる、絶対強者。

風見…幽香。

「私も混ぜなさい。こんな殺し合い、楽しくないはずがないわ。」

そして。

「…レミリア？レミリアなのか？」

『！？』

さらに衝撃が走る。

そこには…もう一人の指名手配犯。

だが…彼は強者。

不死の青年…レナ。

「あれ？霊夢とか、なんでレミリアを取り囲んでるんだ？」

…事態を理解していないようだ。

だが、来客は彼だけではなかった。

「幽香？？さっさと終わらせようぜ？」

『！？』

もう一人、忘れていた。

風見幽香の影で力を蓄えていた…男。

だが、彼は…彼は死んだはずじゃ…！？

「地獄から帰ってきました…文々。新聞社の下っ端記者ですよ。」

運命は、狂い始めた。

レミリア包囲網（後書き）

恒例（？）の勝手にランキング。

作者の好きな東方キャラランキング【風神録編】

1位…にとり

2位…雛

3位…諏訪子、あやややや

次点…早苗さん

地霊殿編は次回！

というわけで次回

「至高天の戦い（き）」

お楽しみに！

次回更新は明日の午後～夜中予定です。

何時もは夜中なんですけどね（；^_^A

至高天の戦い(巻)(前書き)

お待たせしました！

至高天の戦い(巻)

- レナ視点 -

「なんだこりゃ…!?!」

まず状況を理解しきれない。

レミリアを取り囲む…

霊夢、魔理沙、紫、幽々子。

そして、紫と幽々子の後ろから傘を突き立てている、緑髪の子エツクのスカート的女性。

もう一人、霊夢と魔理沙の後ろに立つ青年。

…って、あの人は…!?!?

「らぐなさん!?!なんで此処に!?!」

「うにゃ?レナか!おひさ〜!」

「『おひさ〜!』って軽すぎでしょ〜!?!」

手を振ってるし…

「詳しい話は後にしてくれや。それより、俺はこいつらに用がある

んでね。」

そして、彼は鋭い視線を霊夢にぶつけた。

「で？お前らは何やってるわけ？」

「…死人が出てくるなんて、なんか異変でも起きてるのかしら？」

「バカ、『元』死人だ。」

「だとしても随分おかしいわ。一体何のからくり？」

「お前に教える義理はないね。それより最初の質問に答えろ。何やってるわけ？」

「見て解らないの？犯罪者を捕まえようとしてるのよ。」

…やれやれ、彼はそう呟き、とんでもない行動を起こした！

「物事の真相すら推測出来ない馬鹿は失せろ。剣符『狼牙一閃』」

霊夢は咄嗟にかわしたが…！

「ちっ、後少し速かったら当たってたのによ。」

装束の端が斬られていた。

「貴方は敵のようね！レミリアは私が捕らえる！霊符『夢想封印』」

「!!」

弾幕が彼に降り注ぐ。

「今の内にレミリアを…!」

混乱に乗じ、幽々子と紫がレミリアに襲い掛かる。

が、二人は直後に吹き飛ぶ結果になる。

「私を無視しないでよ。」

あの緑髪の女性…同時に幽々子と紫を相手にするつもりなのか!?

「霊夢、加勢するぜ!恋符『マスタースパーク』!」

「霧雨魔理沙か…!!」

霊夢と魔理沙を相手にしようとしている青年。

「レナ!今のうちにレミリアを連れて逃げろ!!俺達は後から追っ
!」

「でも、らぐなさんが!」

「俺なら大丈夫だ、問題ない!行け!!」

「…解りました!!」

俺はレミリアの手を取り、逃げに徹した。

「…らかな視点」

「…行つたか。」

「みたいね、でも後で私は彼を喰らうわよ？わざわざ逃がして…結局意味ないのに。」

「けれど、邪魔者を排除しないとゆっくり喰えないだろ？幽香。」

「そうね。シマウマを食べるライオンは一匹でいいわ。だから…解つてるわね？」

こうなつた幽香は止められない。

まあ…止める気もないけどな。

俺も、止まる気はないが。

ついに使う時が来たな…この力を。

「…ああ。」

俺は背中の武器を取る。

『あの異常な世界』の産物を。

「…霊夢、逃げるなら今のうちだぞ。」

「逃げるなんて選択肢、私にはないわ。」

「そうか…」

残念だ、霊夢。

…お前の命は、保証出来ない。

「ならば、せめて死なないでくれ。」

武器…異質な武器から流れってくる、魔力。

それは、俺を『人間』という枠から外そうとする。

これが…幽香が言っていた、『神を殺す力』か…

「今の俺は、本当に何をするか解らないぞ…!!」

バンツ!!と地面を蹴り、霊夢に向けて振る…斧。

「当たらなければどうって事ないわ!」

確かに、当たらなければどうもならないな。

「そこでこれだ。斧符『フラッドスプラッシュ』！」

斧を振る度に水の塊が散らばる。

「何…？」

水の塊はふわふわと漂っている。

さて…仕掛けますか！

「弾ける…！」

瞬間、塊は四散し、霊夢に直撃！

「うっ！」

「痛みに気を取られてる暇はないぜ？」

今のはあくまで水による攻撃。

つまり、追撃が可能…！

「もっと痛くなるからなあ…！」

斧で霊夢を一閃！

「ぎゃあっ…！」

だがこの斧はわざと殺傷力を落としてある。

だから怪我はしない。

打撲傷は付くかもしれないが。

「…此処は諦めろや、霊夢。仮に俺を倒した所で、後ろに居る彼女は間違いなくお前をぶちのめすぞ？俺以上に彼女は暴れるからな…死ぬぞ？マジで。」

「…彼女は紫と幽々子が止めてくれる…そんな事にはならない！」

「だといいんだがな。霊夢、俺を倒すのは後にしな。その二人…既にやられてるかもしれないぜ？」

「…!?!」

動揺が見えた。そりゃそうか。

2対1でやり合っておいてやられるんだからな。

「いや、既に倒してるわ。」

「!?!」

霊夢の顔に衝撃が走る。

「…昔の二人なら間違いなく私がやられてたけど、今の二人は弱いから。」

おおっ、もう倒したのか。

「早いな…幽香。」

「貴方が遅すぎるのよ。」

俺の横に立つ幽香。

「で、次の獲物はどれかしら？」

目が怖い…。

「…もう終わりだ、幽香。メインディッシュが待ってる。」

これ以上無駄な血は流したくない。

「つまんない。…ま、一番強そうなのが待ってるんだから、まだ退屈しないけど。それでも退屈したら、貴方を食べるわよ。」

「それはどごういう意味だよ…。」

「色んな意味。」

ちくしょう、可愛すぎる。

「解った解った。そんな上目遣いで俺を見るな。襲いたくなる。」

「全て終わったら良いわよ？」

「そりゃ楽しみだ。…行こう。」

「ええ。」

ぼかーんとしている二人を完全に無視し、幽香は俺を引き摺って行く。

「速いよ幽香！」

「急がなきゃ…メインディッシュが…」

「首が絞まるううう！…！幽香さん！？ゆづかさーん！…」

…凄く…痛いです…

至高天の戦い(巻) (後書き)

勝手にランキング。

作者の好きな東方キャラランキング【地霊殿編】

レイマリは(ry

1位…こいし

2位…パルスィ

3位…さとり

次点…お空

こいし「1位私？嬉しいけど…なんで？」

作者「きつと最初こそ苦労するかもしれないけど、デレたら間違はなく最高の妹になるほど可愛いから。こんな妹が欲しかった…」

こいし「そろそろご飯時だけど、お兄ちゃん何食べる？」

作者「手作りだったら何でも良い！！」

こいし可愛すぎるだろ…

星蓮船編は次回！

というわけで次回

「至高天の戦い(弐)」

お楽しみに！

至高天の戦い(弐) (前書き)

今回とっても短いです…

至高天の戦い(弐)

時は少し遡り…

- 幽香視点 -

「私を無視しないでよ。」

薄情過ぎるわ。

私は貴女達の旧友なのにね。

「幽香…！」

「何の用なの〜？」

用？そう言われたらたった一つしかない。

「私は強者を喰らいに來ただけ。雑魚には用はないわ。」

「なら何故私達を邪魔する？」

全く…解ってないわね。

「簡単よ…」

雑魚以下のミジンコを喰らう為よ。」

「！！幽々子、避けて！！」

ちっ、気付かれた。

しゃがまれちゃかわされるわね。

「力は衰えてないみたいね…！」

紫の後ろで、私が斬った木々が倒れる。

「…力がなければ、戦えないもの。強者とね。」

「…やはり貴女はまだ、強者を求めているのね。」

当たり前よ。私にとって戦いは…呼吸と同義よ。

「道は踏み外してないわ。悪いことはないわよ？」

「いえ…貴女の力は既に道を踏み外している…！」

「敢えて聞きましょう…何故？」

答えは予測出来る。

「『あの力』は妖怪風情が持つ力じゃない！」

やはりそこか。

そこまで怒るんだから、余程気に食わないようね。

「いえ…使い方さえ間違えなければ素晴らしい力よ。現に見てみなさい…あれを。」

私は彼の方を向いた。

「彼は死んだ。そして力を手に入れて戻ってきた。これは進化よ。彼は進化するべくして進化した。」

「退化の間違いじゃないの？」

「貴女は弱い。だからそんな事が言えるのよ。…早く終わらせましよう。」

一瞬で距離を詰める。

「まず一人」

日傘を振り、紫を沈める。

「幾ら友達とは言え、紫を傷付けるのは許さないわ。」

戦いの眼になつた幽霊。

「貴女は歯応えありそうね…幽々子!」

「死符『ギャストリドリーム』」

その殺気…良いわ!

「貴女を前菜にしようかしら！」

こうして、幽々子と私は戦争を始めた。

「もうおしまい？」

「幽香…強いわね…」

程好い運動にはなったわ。でも、そこまでね。

「もっと強くなりなさい…それが私に勝つ唯一の方法よ。」

軽く日傘で小突き、彼女は気絶した。

「まだやりあってるのね…」

私は彼の方へ向かった。

・らぐな視点・

レナを追いかけながら、俺は幽香に問い掛けた。

「幾ら敵とは言え、親友相手によく戦えたな。情とか湧かないのか？」

「それは油断に繋がり、やがて命を落とす原因になるわ。だからあまり他人と関わりたくないのよ。」

「それはそれで寂しくないか？」

「…寂しいから戦うのかもね。でも今は大丈夫よ。」

「…周りを頼れ。幽香一人で抱え込んだってどうしようもならねえ事がある。強がんなよ。」

「その忠告はありがたいけど貴方に頼るのはごめんね（ニコッ）」

「笑うなよ…心が折れる…折角数少ないカツコつけポイントだったの…」

「嫌よ。面白いものを笑わないなんて愚の骨頂よ。」

「どうやら俺の忠告はお笑いレベルのようです。」

「…でも、心配してくれてありがとう。」

「幽香…」

わーい、優しいゆうかりんだー！

「それはそうと、例の彼は本当に強いのかしら？拍子抜けくらいの

強さだったら貴方を殺すわよ?」

元に戻ったー!?

「おいおい…仮にも紫と幽々子を倒した存在だぞ?弱いなんてことあるのか?」

内心そのドライな展開に涙を飲む勢いだが、顔に出さないようにして聞く。

「ええ。今の二人は弱いもの。所詮、井の中の蛙というくらいかしら。」

「…舐めたら逆に殺られかねんぞ?」

「解ってる。だから久しぶりに本気出そうかしら。」

…何処まで強いんだろう、幽香は。

とりあえず、こんな展開になって今更何だが…

レナ…死ぬなよ…?

至高天の戦い(弐) (後書き)

定番(?) コーナー。

作者の好きな東方キャラランキング【星蓮船編】

1位…ぬえ

2位…ムラサ

3位…ナズーリン

次点…白蓮

今回は花映塚・萃夢想・緋想天・文花帖・妖精大戦争まとめて！

というわけで次回

「手も足もついでに口も出ないとはこの事か？」

お楽しみに！

次回更新…明後日予定

手も足もついでに口も出ないとはこの事か？（前書き）

PV140000、ユニーク16000突破あ！！

この調子で次は200000PVを狙う！

…って言ったってやっぱり読者の皆様のおかげなんですけどね。

手も足もついでに口も出ないとはこの事か？

・レミリア視点・

「とういかなんで貴方が私の手を引っ張ってるのよ!？」

かなり逃げておいて、今更なんだけど。

「逃げるんだ!とにかく逃げろ!俺とレミリアは追われているんだよ!」

「あ、あんまり手を強く引っ張らないで!痛いのよ!」

「う、ごめん…」

それに、疲れた…体力的な意味でだけ。

「…レミリア、飛ばすけどいいか？」

「へ?飛ばすって何…ちょっと、うわあっ!」

いきなりお姫様だっことか聞いてないわよ!?

「口閉じておいてくれ!舌噛むぞ!」

「わ、解ったわよ!」

しかし、これなら距離は稼げる。

今は逃げるのが先決だ…追撃が来ない事を願うしかないわね。

「逃がすと思つて？」

「！！レナ、誰か来た！」

あれは…風見幽香！？

「レミリア、相手の居場所を教えてください！」

「真後ろ…距離はおよそ50m！」

「OK、それなら問題ない！俺に捕まってくれよ！！」

私がレナにしがみつくと同時に、レナは左腕を真後ろに向けて…

「砲符『リヴァイバル』！！！」

つて、真後ろにレーザーぶっ放しとか何考えてるの！？

「ちょっとしたロケットエンジンみたいなもんだ！レミリア、頼むから捕まってくれよ！」

攻撃と同時に逃げる策だったのね…！

「凄い、振り切れるわ！」

これなら…！

「鬼符『ミッシングパワー』!!」

「ぐわっ!!」

なに、何処からの攻撃!?

しかも直撃…レナ、大丈夫なの!?

「なんとか…な。だが敵は後ろだけじゃないみたいだ…!」

レナが見据えた先には。

何か異様なものを従えた、淡い紫色の髪の少女が立っていた。

「…操符『ジユラシック阿鼻叫喚』」

一斉に何かはこちらに向かってくる。

段々とそれらの輪郭が見えて来るにつれて、状況の悪化に驚くしかなかった。

「恐竜!?!」

恐竜って、もう絶滅したんじゃない？

「強引に突破するぞ！！砲符『リヴァイバル』！！」

前方に広く拡散するレーザーを放つレナ。

恐竜に突き刺さり、バタバタと倒れていく。

「なかなかやるわね。傀儡『デスフェアリー：mode A』。」

何をしたのか最初は解らなかったが、すぐに事態が変わる。

「なっ…！？」

3人の妖精が、レナの右腕に包丁を突き刺した。

「しまった！」

一瞬の力の緩み、そして私は落ちる。

「…だけだと思って？」

私だって飛べるのよ！

「レナ、大丈夫！？」

「ああ…！だけどこいつら、手練だぞ…！レミリア、先に行け！このままじゃ二人とも捕まっちゃう…！」

「レナはどつするのよ!？」

「俺は足止めをする!レミアアさえ逃げ切れればこっちのもんだ!大丈夫だ!」

レナはグッと親指を立て、言う。

「俺は死なねえ!」

「…解つたわ!」

「突破口は俺が開く!砲符『リヴァイバル・』!」

全方位レーザーで相手を無理矢理回避させる!

「行け!」

「言われなくても!」

スピードを上げ、戦場から離脱…!

レナ、死なないですよ…!

- レナ視点 -

「…さて、この状況をどう打開しようかねえ…！」

視界に入るは、二人の少女。

一人は見覚えがある…確か、伊吹萃香。
鬼かよ…

だが、もう一人は見ない顔だ。

淡い紫色の髪の毛、僅かに青がかかった黒のドレスの少女。

「…女の子を逃がすなんて男だねえ、レナ。」

「伊吹…萃香か！」

「本当はしな一対一でやりたいんだけど、生憎時間がなくてね…援軍を呼んでるんだよ。…イヴ！」

すると、黒のドレスの少女が口を開いた。

「始めまして…彩崎玲奈さん。私はイヴェリア・ノスフェル…妖怪です。貴方には恨みも何も感じていませんが、友達の為です…どうか、倒されて下さい！」

弾が放たれた！

「そつちこそ倒れてくれ！砲符『エキセントリックバルカン』！」

超ランダムのばらまき弾幕、かわせるか！？

「デスフェアリー！」

なっ、当たらない…だと!?

「残念ですね…私には当たらないのです。この相棒達デスフェアリーがいる限り。」
「どうやら妖精に防御させてんのか…!」

「ほらほら、よそ見は危険だよ! 萃符『戸隠山投げ』! ! !」

山を投げるとかふざけてるだろ…!

「にゃろっ! 砲符『リヴァイバル』!」

よし、砕けた!

あのイヴェリアとか言う少女は何をやるか解らないが、萃香はひたすら力任せの攻撃…!

つまり、萃香から倒すのが正解だ!

「おらおらあ! ! !」

弾を萃香に放って、反撃の隙を与えないようにして…!

「そこだ! ! ! 霊掌っ! ! !」

これで直撃、少しはダメージを与えられるはずだ!

…！？

霊掌が…当たらない！？

それより…

萃香は、どこにいる！？

「後ろ、がら空きだよっ！！」

声と同時に背中に走る鈍痛！

「ぐっ！」

地面を転がり、木にぶつかる。

「普通の鬼相手だったらうまくいったんだけどね。私の能力を知らないから無理もないか。

私の能力は『密と疎を操る程度の能力』。

簡単な話、あらゆるもの…物質として存在しているものならなんでも霧状にしてバラバラにしたり、集めて大きく出来るんだよ。」

「つまり今のは…自分の身体を霧にした！？」

「頭の回転早いねえ！考えてる事は合ってるよ！でもねえ…」
首を萃香に掴まれた。

「強くなきゃ、その頭の回転の早さも生かせないよ？」

「だらうな…！」

「か八か、やってみるしかない。」

「？」

「此処でギブアップはしたくないんでね！！見せてやるよ…俺の奥義…！！！」

ルーミアがくれた、結界を斬る剣。

それを素材とし、新たな武器を創る！

「叩き斬るは敵の力！一刀両断、芯斬刀！！いざ、推して参る！！
でえやああああ！！！！！！！！！！」

萃香を、一刀両断！

「って言ったってやっぱりダメージは0なんだけどね。」

「な、何をした！？」

「直に解るさ…決着、つけようぜ！！」

時間がない…10秒でケリをつけなくては！

手も足もついでに口も出ないとはこの事か？（後書き）

ごっちゃんでございぞ！

作者の好きな東方キャラランキング【花映塚・文花帖・萃夢想・緋想天・妖精大戦争編】

キャラが地味に多いので4位まで！

レイマリ（ry

1位…ゆうかりん

2位…はたて

3位…ルナチャイルド

4位…キヤーイクサーン、えーき様次点…スターサファイア

今回は総合！

というわけで次回

「勇〇30よろしくレナ10…10秒で萃香を倒せるか!？」

お楽しみに！

次回更新…明日予定

勇〇30よろしくレナ10…10秒で萃香を倒せるか!?(前書き)

前回のお知らせに大嘘がありました…

PV140000は正しかったのですが…

ユニークは160000ではなく170000突破でした。

申し訳ございませんm(.).m

改めてご閲覧ありがとうございます!!

勇〇30よろしくレナ10…10秒で萃香を倒せるか!?

〈武器紹介〉

芯斬刀：レナがルーミアから貰った黒い十字架。
それは結界を斬る事が出来る剣となる。
それをさらにレナの魔力でグレードアップした刀。

斬った者の能力を10秒だけ封印出来る。

ただし、相手にダメージはなく、封印解除後、もう一度斬っても能力封印は不可能。

つまりチャンスは一回の戦闘につき10秒である。

639

- レナ視点 -

チャンスはたった10秒…!!

10秒で萃香を倒さなければ、間違いなくやられる…!!

「さっさと決めるぞ! 霊掌っ!!」

：残り時間、9・5秒。

「何をしたか解らないけどっ、普通に動けるなら問題ないさ！」

やっぱりかわされる。

が、追撃は可能だ！！

「ならばこれだ！！溶岩二重掌波っ！！」

高熱の一撃、少しは効くだろ！！

「くうっ！やるねえ！！」

残り時間、7・5秒。

「やりたかないが、レミリアの為だ、許せ！」

勢いをつけた蹴りが、萃香を突き飛ばす。

「一気に仕留める！！」

手段は一つ、あれしかないな！

「魔力解放……!!」

これで長距離移動は充分出来る!

「行くぞ!!」

萃香に向かって走る!!

同時に左腕を真後ろに!!

残り時間、5秒。

「リヴァイバル……!!」

左腕から放たれたリヴァイバル、それは流れ星の光!

加速する俺の身体!

「輝く光は俺の魂……!!砲打あ……!!シューティング……!!」

目標、萃香の鳩尾!!

見せてやるよ、俺と妹紅で創った最大最高の一撃を!!

「ドライバアアアアアアア……!!……!!……!!」

誰よりも速く、誰よりも強く!!

「そんな攻撃、私の能力の前じゃ…って、あれ!？」

気付いたようだが、もう遅い!

俺は萃香の鳩尾を殴った!!

「ぐはあっ!!!？」

萃香は見事に吹っ飛び、遙か彼方へと消えた!

「…なかなかやりますね。萃香を倒すなんて…ですが。」

問題はもう1人、か…!

「今の技は私にぶつけるべきでしたね。奥の手を敵の前で見せびらかすのはただの馬鹿でしかない。」

「あなたの能力が解らない以上、解る方を倒すのは悪いことか？」

「…それも一理ありますね。萃香の仇、取らせて頂きますよ。」

妖精が襲い掛かってきた！

「ちいつー！！」

弾幕を展開し、接近を防ぐが…！

「前だけに気を取られてはいけませんよ。貰い物『上海人形』」

真後ろ、だと…！？

「ぐっ！！」

包丁突き刺すのが趣味か！？

「ほら、崩れた。貰い物『ゾンビフェアリー』」

不気味な妖精だな！

「一斉掃射！！」

弾が沢山来すぎ！

「ぐうっ！！」

「止め。傀儡『人形達の反乱』」

まずいな…！！これは無傷じゃかわしきれない！

「なーんてな！照準『ハイパーグラビトレンズ』！！」

レンズを盾にして奴に接近！

「懐に入れば幾ら人形が相手でも、本体はがら空きだ！！霊掌っ！
」

人形でガードされる事もないな…行ける！

「…私本体を狙うとは、中々聡明な判断です。…が、『本体ががら
空き』と考えるのは早計です。貰い物『蓬莱人形』」

ひょこつと顔を出した人形。

「終わりです。」

心臓に包丁突き立てるか普通…！

ザシュ。

「がはっ…！！」

「そういえば、貴方は不死の人間みたいですね。…私が縛り上げて
差し上げますので、素直に捕まって下さい。」

「捕まるかよ…！」

「諦めが肝心ですよ？」

…マジか、此処で捕まるのか。

「それは私の獲物よ、放しなさい。」

誰かの声が、聞こえた。

勇〇30よろしくレナ10…10秒で萃香を倒せるか!?(後書き)

というわけでとんでもないランキング。

作者の好きな東方キャラランキング【総合】

トップ10発表!!

次点のそのまた次点…レミリア、フラン

次点…咲夜

10位…魔理沙

9位…さとり

8位…妹紅

7位…パルスィ

6位…慧音

5位…妖夢

4位…ぬえ

3位…こいし

2位…ゆうかりん

1位…めーりん

実際ゆうかりんとめーりんは僅差だったりします。

というわけで次回はまさかの好きな曲ランキング!

次回「猛獣に恐怖する鬼の気持ち」が解った気がする

楽しみに！

猛獣に恐怖する鬼の気持ちが見えた気がする(前書き)

今回最も短いかも…

猛獣に恐怖する鬼の気持ちが解った気がする

- レナ視点 -

「あ、貴女は…！？フラワーマスター…！？」

フラワーマスター？聞いたことない名前だな。

が、来たこの女性…確か幽香って言ってたな。

「…あ、死体人形師ネクロマンサーじゃない。久しぶりね。いつ以来かしら？」

え？知り合い？

「貴女が神を殺した日以来よ。」

な、何？この人、かなり強いのか？
神を殺した？何者？化け物？

「ちょうど良いわ…その彼は強いのかしら？強いのなら是非殺し合いをお願いしたいんだけど。」

「待ちなさい。彼はかなり消耗している。今から殺り合った所で、貴女を到底満足させられる戦いにはならないわ。」

なんか物騒なんですけど！？
というより…視線が…怖い…

「…それもそうね。でも、私はわざわざその彼と戦いたい一心で

来たのよ？まさか何にもなしで帰れって言う訳じゃないわよね、死イ
体人形師さん？」

「代わりに私と殺し合いをするつもり？」

え…なんか俺を放って今から本気の戦いが…というより戦争が起き
そうな気がするんですが…

バチバチ火花が飛び散る勢いでお互いを見つめてるし。

「そういう訳じゃないわ。彼を何とか全快にしてから殺り合える保
証が欲しいだけよ。」

「…良いでしょう。貴女の友達を呼びなさい。そうすれば話は早い
はずよ。」

「仕方ないわね。……見ているんでしょ、紫？」

すると、隙間が開いた。

「相変わらず貴女は…私は便利屋じゃないのよ？」

「雑魚には雑魚なりの仕事があるの。…彼を戦える状態にして。今
すぐに。でないと貴女から殺すわよ？」

加虐的な笑みを浮かべる幽香と、溜息をつく紫。

「冗談にならないレベルの冗談は止めて…治療及び貴女と殺り合え
るまでのレベルまで彼を持ち上げるのには、どうやっても3日はか
かるわ。」

「3日で良いの？あら、意外に早いのね。良いわ。3日後…ね？それなら待てるわ。…その新聞記者、私を満足させなさい。」

「は？」

見慣れた新聞記者をまるで従者のように扱った幽香。

「紫、隙間開けて。3日後に太陽の丘で待つわ。来なかったらどうなるか…解るわね？」

幽香が俺を見てニコリと笑う。
ぶ、不気味すぎるぞ…

「楽しみだわ あの時みたいなスリルある戦いがまた出来るなんて…ね」

上機嫌な笑いを溢しながら、幽香は隙間の奥に消えた。

しかし、今のやり取りで解った事が一つ。

…猛獣だ、あれは。

猛獣に恐怖する兎の気持ちが解った気がする。

「はあ…かなり面倒な事になったわね…」

紫が余り見せない困った顔。

え？そんなに大事おまじこなの？

「…ごめんなさい、貴女もついてきてくれるかしら？」

「ええ。私にも責任はありますし…」

イヴェリアが神妙な顔で頷く。

「いまいち話が見えてこないんだが…」

「後で話すわ。こつちよ。」

隙間の奥に案内される俺達。

で、来た先は。

「私の家なんだけど、中で話しましょう。」

紫の家だった。

マヨヒガと言うそうだ。

最近建てたような綺麗な外壁だが、紫に聞いてみた所、「妖精達のせいで家が壊されて建て直した」んだそうだ。

「…さて、レナ…貴方には話さなきゃならないことが沢山あるわ。貴方が相手する事になる彼女の事よ。」

相手…幽香の事が。

「名前は風見幽香…私の数少ない親友の1人よ。普段は太陽の丘と呼ばれる境界の地で静かに暮らしている。

…でも、彼女はある理由で恐れられている…それは、彼女が余りにも強すぎるからよ。

私や幽々子みたいに能力がずば抜けている訳じゃない…彼女は精々花を操るくらいしか出来ない。

だけど、彼女は戦いに関しては『最強』…彼女と渡り合える者なんて、きつと指折り出来るくらいしかない。」

え？相手は最強…？

「だから彼女はある時から強い者を求めるようになった。自分と渡り合える、確実な強者を…自分の心を満たせるような戦いを、彼女は望むようになったのよ。…此処までならまだ良かったんだけど…彼女、戦いを追い求める余り、神様まで殺してしまったから…」

猛獣に恐怖する鬼の気持ちが見えた気がする(後書き)

ランキング番外編。

作者の好きな東方の曲ランキング【最初から総合】

1位…平安のエイリアン(ぬえのテーマ曲)

2位…少女幻想(藍しやま)

3位…霊地の太陽信仰(お空)

次点…ハルトマンの妖怪少女(こいし)、月まで届け、不死の煙(もこたん)

次回はなにしようか…?

というわけで次回

「最強と不死の激突」

お楽しみに!

最強と不死の激突（前書き）

後行っても5話くらいで3・5章その一は終了する予定です。

その後からその二行きますので、キャラ提供をお願いします！

詳しくは目次の「作者からのお願い」を参照してください！

最強と不死の激突

・引き続きレナ視点でお楽しみ下さい・

「神を殺したってどういう事だ…!？」

「此処からは私が話すわ。」

イヴェリアが紫に代わって話し始めた。

「私は昔の彼女を知っているの。昔の彼女は一言で言うなら『孤高の一匹狼』：それは毎日のように戦っていたわ。

ある日、ついに彼女は人間や妖怪なんかじゃ満足出来なくなった…余りにも相手が弱すぎるから。

だから彼女は人間や妖怪からかけ離れた存在に戦いを仕掛けるようになったわ。神を殺したって話はその時の事ね。」

イヴェリアは紫に「長くなるからお茶をお願い」と頼み、やがて届いたキンキンに冷えた麦茶を啜りながら話を再開した。

紫はすぐに何処かに行ってしまったようだ。

「昔の幻想郷は、史実等によると外からの脅威に怯えながら存在していた世界らしいわ。外から色んなものがやってきては幻想郷を蹂躪していた。まあ、八雲紫や西行寺幽々子、件の風見幽香が現れてからは話が変わったけどね。

特に幽香は、昔から戦いをしていたから…その身に刻まれていた戦いの才能を大いに使ったわ。」

「え？イヴェリアさんってその頃にはもう居たんですか？」

「ええ。幽香が神を殺したのは今からおよそ150年くらい前…私はその時100歳くらいだったかしら。」

さらつと衝撃の事実！？

「あ、妖怪にとっては500年くらい生きてやっと大人の人間くらいだから。しかも、妖力とかがかなりある紫や幽々子、幽香はそれでさらに身体を強化してるから、後数千年くらいは普通に生きられるんじゃないかしら。」

今で紫は確か人間で言う15、6歳くらいの身体だし、幽々子はそもそも幽霊だから老化なんて有り得ないし…この三人には老化って話はないに等しいわ。」

因みに私はまだ人間で言う10歳前後なんだけどねとイヴェリアは照れ笑いをした。

「もう一つ、私達妖怪は人間で言う所の大人の身体を手に入れるのは、妖力さえあれば何時でも手に入れられるわ。だから赤ちゃんだって産めるのよ、私は。」

なんか妖怪は凄いつて事が良く解りました。

「話に戻るわね。そんな妖怪達が居るものだから、外から来た侵略者は数を減らして行ったわ。でも、たった1人だけ永く生き延びた者が居た…そう、それが阿修羅よ。」

阿修羅は戦いの神とされる生ける伝説…彼の目の前には敵の死体しかなかった。そこまでの力を持っていたから、彼は紫や幽々子、ついでに私と張り合えていたわ。」

さらつと衝撃の事実その2!?

「でも、どうしても阿修羅は倒せなかった。瀕死に追い込む事は出来たけど、いつも逃げられていたわ。そんなある日よ…幽香が姿を消したのは。」

「姿を消した…?」

「そして直ぐに戻って来たわ。異様な力を携えて、ね。彼女は再び阿修羅と殺し合いをした…数日間に渡る戦いの末、幽香は阿修羅に止めを刺し、勝利した。」

「彼女は凄く満足そうに笑っていたわ…楽しかった、そう呟いていた。」

「こんな話だけでも解る、今から俺が戦おうとしている相手の恐ろしさを。」

「神すら彼女の前では死を迎える…そんな彼女が、貴方に興味を持った…それはどういうことか、解る?」

最強と呼ばれた彼女が、俺を直々に指名した…つまりそれは。

「俺を…敵として見ているって事ですか?」

「ええ。そしてもう一つ。貴方が阿修羅以上の強者であることを期待しているのよ。彼女を本気で倒そう、満足させようと思うのなら、貴方は阿修羅以上の強さを持たなくてはならない。」

「…」

勝てる気がしないんだが。相手は神を殺せるほどの強さ…一方俺って精々妖怪退治屋レベルだし。

「というわけで、私が居るのよ。貴方の力に関しては紫や幽々子、それに文から聞いています。貴方なら可能性はある。私はそう判断したわ。」

…幽香と張り合えるレベルの強さを、手に入れましょう。」

「え？でも、どうやって？」

「『地獄の女王』…いや、『閻魔大王』の力を借ります。」

はい？閻魔大王？

え、あの閻魔大王？

「ええ。彼女ならば貴方を鍛えるには十分でしょう。伊達に地獄を律しているわけではない。それなりの強さが、彼女にはあるから。」

「というわけで呼んできたわ。」

いきなり隙間を開けて現れた紫。

…の後ろに、誰かが居た。

キツとこちらを見据える、見ただけで畏縮してしまいそんな威圧を放つその少女。

深い緑色の髪は、肩にすらかからず、きっちりと整えている。

最強と不死の激突（後書き）

久しぶりに真面目な予告！

地獄に落とされたレナ！

そして閻魔大王の正体とは！？

というわけで次回

「貴方は強さを履き違えていると言われました」

お楽しみに！

貴方は力を履き違えていると言われました(前書き)

PV150000、評価ポイント200突破しました!

ありがとうございます!!!

貴方は力を履き違えていると言われました

- レナ視点 -

な…なんだ…此処は？

さ…寒い。

気候的な意味じゃなくて、あれだ、幽霊を見たときみたいな…

そつだ！幽々子が現れたあの時に似ている！

と…いうことは。

幽霊だらけなのか、此処は…？

「何をしているんですか？私についてこないと永遠に此処をさまよう事になりますよ？」

やばっ！

俺はなんとか一緒に来た彼女に付いて先を進んだ。

暫く進み、まるで北極に1人薄着で放されたような極寒の中で、彼女は止まった。

何となくだが…幽霊が飛び交ってないか、此処？

「…此処で良いでしょう。さて、貴方には力を付けて貰います。貴方、魔力を持っているそうね？」

「あ、ああ…確かに魔力ならあるが…」

逆に言えば魔力しかありません。後は能力しか。

「魔力の源をご存知ですか？魔力も霊力も妖力も、実は逆れば源を同じとする力なのですよ。」

「そ、そうなのか？」

「ええ。但し、性質はまるで違います。

魔力は主に弾を生成しやすい力。弾の形も、量も操りやすい。

霊力は主に能力を使うのに必要な力。そして、この幻想郷に生きる者は必ず多少なりとも霊力は持っているのです。

妖力は自身の強化…自分を大きく見せたり、威嚇したり…妖怪には必須な力です。

本来、人間や妖怪はこの3つの力の内、精々2つを自在に操るのが限界なのです。

ところが、貴方が挑もうとしている相手…風見幽香はその3つの力を完全に使いこなせる。

何が言いたいのか、解りますか？」

「つまり…幽香に勝つにはその魔力・霊力・妖力を駆使しなきゃならないって事か。」

「その通りです。貴方は実は魔力に関してはほぼ完璧です。霊力に関しては、貴方の能力の特異さ故にそれほど気にしなくても特に構いません。」

ですが：妖力に関しては元が人間ですので絶望的に駄目です。」

そりゃ人間に妖力ついてたら怖いよ。

「というわけで、貴方に選択肢を与えます。」

人間辞めて妖怪になって妖力を得るか、あくまで人間という枠から外れずに風見幽香を倒す手段を構築するか：どうしますか？」

その選択肢：答は一つしかないだろ。

俺は人間だ。だから…

「妖怪にはならねえ。俺は人間のまま幽香と戦いたい。」

すると、彼女は少し微笑んでこう返した。

「流石ですね。貴方に力を渡して、本当に良かった。」

「へ？」

そもそも初対面な気がしますが…

「貴方がレミリア・スカーレットと初めて戦った時、私は貴方に力を託しました。覚えていませんか？」

「あ…！」

弾の乱射が出来るようになったあれって…彼女の力だったのか！

「思い出してくれて何よりです。その時の約束通り、力を返して貰います。」

…大丈夫です、私の力はあくまで貴方に眠っていた力を目覚めさせる為の起爆剤でした。今更奪われた所で、貴方には何も影響はないはずです。」

だが、彼女が誰か思い出した時に俺に浮かんだ思いは感謝だった。

「あの時はありがとうございました。あなたが居なければ、俺は今此処に居なかつたかもしれぬ。」

「良いのです。貴方のおかげで幻想郷は平和になりつつあるので…こちらこそお礼を言わせて下さい。ありがとうございます。」

「ところで今更なんですが…あなたはどちら様で？」

今更過ぎるが、命の恩人の名前くらい聞いておきたい。

「失礼、名乗るのを忘れていましたね。私は四季映姫・ヤマザナドゥ…地獄の閻魔大王をしています。」

…え？

「え…閻魔大王…なんですか？」

「はい。それがどうかしましたか？」

俺は閻魔大王にタメ口を利いていたのか。

「態度が悪くて申し訳ありませんでした」

即座に土下座。

「良いんですよ、少しくらい砕けていても構いません。寧ろ、貴方にまで畏まられるのも少し困るので……」

閻魔大王様にまで会ってしまった俺。

まさか、もうすぐ死ぬのか俺？

「さて、時間もありません。貴方の意思もしかと聞き届けました。ならば、やることはたった一つです。

…貴方の能力を、強化します。」

「え？」

能力を強化？

「貴方の能力は余りにも強大過ぎて、リミッターを掛けさせてもらってしまいました。それを外します。」

「具体的に何が出来るんです？」

リミッター外すって事は何かが出来るとなりたりとんでもない強さが手に入ったりとかって言う事だよね？

「実は既に片鱗は見せているんですよ？システム『IED』…あれの力は、元は貴方の全力です。」

「はい!？」

マジですか!？」

でも覚えてません!

「貴方はシステムを自分から打ち砕き、力を得た…ですが、私が掛けたリミッターまでは破れなかった。今回はそのリミッターを外します。それにより、貴方は莫大な力を得る事が出来ます。」

「あの…リミッター外してくれるのはすごくありがたい事なんだが、外した事におけるデメリットみたいなはないんですか？」

よくあるパターンだよね。

「ありますが、今の貴方にはデメリットなんてただの石ころです。ぶち壊して下さい。そうすれば全く問題ありません。」

デメリットをぶち壊せて流石、閻魔大王様です。

人間じゃ考えない事を真面目にやろうとするその心意気に感動する!

「それでは外しますよ…後は貴方の問題です。」

フツと、身体の内側が解き放たれる感じがした。

瞬間、身体中をマグマが駆け巡るような苦しさを感じ、俺は蹲った。

「が…あ…!!」

頭がガンガンと叩かれるような錯覚。

身体中をナイフで刺されるような痛み。

「力が…抑えきれない…!!」

身体で抑えようとするが、身体が引き裂かれるような気がした。

…待て、抑えられないなら抑えなきゃいいんじゃない？

そうだよ、抑えなきゃいいんだよ！

開放して、抑えられる範囲内で調整すればいいんだよ！

「…右肩から…拡がれ…!!」

力が肩から飛び出すのが解る。

だが、それと同時に苦しみが無くなった。

「やりましたね…貴方はもう、私の助けなしにも充分戦える…どんな相手でも。…貴方は力を履き違えている…そう思っていた時もありましたが…どうやら履き違えていたのは私だったみたいですね。」

翡翠色の結晶のようなものが、レナの右肩から隆起している。

それは、人間としての力の完全体。

「その形態は文献によると『翼を求めし者』イカロスハートと言つそつです。貴方だけの空を…自由に飛んで下さい。」

力は、手に入れた。

後は…戦えるだけ戦つただけだ。

「その顔…良いわ。戦士の顔ね。」

「どうも。俺はあなたの遊び相手じゃないって所、見せてやるよ。」

「…なら、改めて名乗りましょうか。私は風見幽香。妖怪よ。」

「俺は彩崎玲奈…人間だ。」

「ふふっ、まさか人間に興味を持つなんてね…私も変わったのかしら？それは…この戦いで解るけどね。」

「さあ…始めましょう。」

太陽の丘。

そこで今、歴史に記されるはずのない戦いが始まるうとしていた。

幻想郷最強。

不死の人間。

二つの雌雄を決する戦いが。

始まる。

「最高の殺し合いを。」

二人は同時に駆け出した。

貴方は力を履き違えていると言われました（後書き）

タイトルと内容がミスマッチ？

…ごめんなさい。

次回予告！

幽香とレナ、とんでもない戦いが、始まる！

というわけで次回

「一騎討ち」

お楽しみに！

一騎討ち（前書き）

後4話で3・5章終了…

そしてカオスに突入します！

キャラ提供はまだまだ受け付けてますよ

一騎討ち

奴が最強の妖怪だって事はどうでもいい。

だが…一つだけ聞きたい事がある。

「あんたは何の為に戦っているんだ！」

「簡単よ、自分の強さを証明するため。それ以外に何も無いわ！」

「ならあんたには…仲間を守るとかって思いはないのか！」

「！…ないはずがないじゃない！強くなれば、誰も傷付かない…だから！」

殴打、蹴り、技の応酬。

だが、これで吹っ切れた。

相手は…敵じゃない！

「あんたは俺の敵じゃない…」

「私を舐めてるの？」

「違うな。あんたは敵なんかじゃない…好敵手だ！」

「だから何？」

「これは殺し合いじゃない…なら、全力を以て相手をしよう…！」

「本気になったみたいね…！良いわ、その顔っ…！」

命を奪う戦いじゃない。

誇りを賭けた戦い…なら、本気を出さないのは論外だ！

「そう言えば、あんたは弾幕を張らないんだな！」

「こんな至近距離で弾を貴方にぶつけたら、こちらも被害を被るのよ！」

「それもそうだった！」

拳や脚は相手に入らず、直前かわされるか腕でいなされるかの二択。

それは相手も同じ。

「私についてこれるなんて、ある程度はやるって事ね。」

日傘の突きが来るが、俺はそれを逆に利用する。

日傘に手を置き、支えにして飛ぶ！

「…！」

「そこだ！霊掌っ！！」

後ろからの霊掌、これは戦いを動かした！

初めて少し距離を取ってかわした幽香。

「…私に回避を優先させるなんて…ますます面白いじゃない…！」

「もっと面白くしてやるよ！」

距離さえあれば、スペルカードは使える！

「砲符『リヴアイバル・』！！」

かわせるならかわしてみろ！

「良いわね、だけど甘いわ。」

なっ、日傘で無理矢理逸らした！？

「やるな！だがっ！！」

弾幕を張り、相手の足を止める！

「そんなもので足止め？無駄な努力よ。」

リヴアイバル・型が弾かれたんだ、確かに一見すれば無駄な努力だ。

だが、これは仕込みだ！

「砲符『リヴァイバル・』!!」

全方位レーザーでさらに追い込む!

「考えたわね。でも無駄よ。」

日傘を展開され、もう一度弾かれる。

が、時間は稼げた!!

日傘を畳んだ瞬間、確かに隙は出来る!!

「!!」

「砲打!! シューティング!! ドライバああああ!!!!!!」

この一撃を入れる為、今まで無駄に見せかけた攻撃を仕掛けていた
...!!

もろに幽香の腹に入る、俺の拳!!

「ぐうつ!!」

おっしゃ、手応えはあった!!

「ブツ飛べええええ!!!!!!!!!!」

勢いを乗せて、幽香を飛ばす!!

「…よし、一撃は入れた…！此処からが本番か…！！」

遙か彼方へ飛んでいき、幽香の姿が見えなくなった。

逆に言えば、相手の出方が解らなくなった。

だが、この一撃はでかいはずだ。

俺は幽香が飛んでいった先をじっと見つめた。

幽香の姿が、いつ現れるか解らないからだ。

「来るならいつでも来い、風見幽香…！！」

「じゃ、遠慮なく」

後ろから声がした。

声がした方を向いた瞬間、視界に日傘を俺に向ける幽香の姿が見えた。

だが、日傘の先には魔力の塊が。

「喰らいなさい、マスタースパーク。」

目の前が、光輝いた。

… なんとかかわしてみたはいいが、左腕が黒く焼けている。

直撃イコール死の可能性もあつた威力だつた。

「貴方はその程度じゃない、そうでしょう！もっと力を見せなさい
！！！」

日傘による殴打を腕でガードするが、焼け焦げた左腕を庇いながらのガードの為、完全ではない。

「見せないなら殺す！」

顔を的確に狙う蹴り。

「殺されるのはゴメンだ！！！」

右腕でカウンター。

「なら見せなさい！貴方の全力を！まだ隠しているんでしょう！？」

… 仕方がない。

幽香を倒そうなんて大層な事は考えていないが…このままではいずれジリ貧になつて殺される。

やるしか…ないな!!

「そこまで見せてほしいんなら見せてやるよ…だが、びっくりするなよ?」

「驚きはしないわ。貴方が劇的に強くない限りね!」

…やるぞ、俺。

…力を全て解放する。

内側から外側へ、指の先まで拡げていく。

「これが俺の全力だ…『翼を求めし者』…全!!開つ!!」

イカロスハート

右肩から隆起する翡翠色の結晶、それは進化の証。

地面が力に耐えきれず少し沈下する。

だが、俺は戦う!

風見幽香：あんたの全力が見たいからな!!

「…貴方、あくまで人間を貫くつもりね…!良いわ、私もそれに全力で応えましょう!」

瞬間、今までの威圧はただの小手調べとしか思えないような、幽香の本気の威圧を感じた。

「私と同じ進化をした彼と、私とは違う進化をした貴方…人間と言うのはつくづく面白い生き物ね！妖力全解放…！！」

そして、自然は揺れる。

この二人の力に抵抗する為に。

「やっと本気が…楽しませてくれよ、風見幽香…！！」

「あら、楽しませるのは貴方よ？私と同列になつたなんて甘い考えは捨てなさいよ？」

再び、戦いは再開する。

かつて阿修羅と戦つた時と同じ喜びを、幽香は感じていた。

「やっと楽しめるわ！彼の他に強い男が出来たからねえ…！！」

一騎討ち（後書き）

次回予告

幽香とレナ、戦いの果てに…!!？

というわけで次回

「戦いの円舞曲」

お楽しみに！

戦いの円舞曲（前書き）

ラスト3話…？

とりあえず、もうすぐ第3・5章は終了します。

あ、PV150・000突破しました！

皆様ありがとうございました！

戦いの円舞曲

「?????視点」

「こりゃあ…まずくないか？」

正直な話、このままでは片方が死ぬまで戦いが続きそうだ。

ついでに言えば、自然破壊も甚だしくなる。

戦いは時間が経つに連れ、激しさを増している…

「どう？彼と幽香の戦いは。」

「言っていいか？このままじゃ色々とまずいぞ。」

隣に現れた隙間妖怪に思った事をぶつけてみることにした。

「レナも本気出した、幽香も本気出したと来れば、かつての阿修羅との戦いみたいに本気で幻想郷を破壊しかねないぞ？」

あれがあつたから結界を張ることに決めただろ、あんたは？」

「そうね…このままでは確かにまずい気がしてきたわ。」

「最悪結界が破られて終いだ。どうするんだ？霊夢を呼んで『例のあれ』でも使わせるつもりか？」

「でも『あれ』は彼女に負担をかける…いや、負担が大きすぎる。」

いくら彼女でも、片方を止めるのに精一杯よ。」

「…霊夢はどっちを止められる？」

「まさか霊夢にやらせるつもり？貴方、かなりの薄情者よ。」

「誰が霊夢だけにやらせると言った？あんたも手伝って貰うぞ。あんたと霊夢が居れば、レナは止められるだろ。…俺は幽香を止める。」

「でも、機嫌を損ねた彼女は危険よ。今邪魔を入れてみなさい。今以上に幻想郷の危機よ。」

…仕方ないな。

「…紫、霊夢に藍、パチュリーを呼んできてくれ。」

「どっぴいっこと？」

「結界を強めてくれ、限界までだ。…仕方がないから俺がどっちも止める。無茶かも知れんが幻想郷が吹き飛ぶよりかはマシだ。仮に俺が殺られた事を考えて、幽々子も呼んでおいてくれ。」

…全く、幻想郷の中でドンパチやらないでくれよ。

此処まででかい被害になるなんて想像すらしなかったぞ…！

・レナ視点・

「うおおおおお！！！！！！」

幽香と殴り合いになっている。

こうなってしまった以上、スペルカードはもはや使い物にならない。
後は力と体力と気力のみ。

「幻想郷最強と言っておきながらそれか！ただの殴り合いに持ち込めば体力の問題だな！」

「…阿修羅もそんなことを言っていたわね。同じミスは二度と繰り返さないわ。」

フツと、幽香の姿が消える。

「後ろかつ！！」

足蹴りを受け、俺は幽香から遠ざかる形になる。

「仕留めるわ。花符『幻想郷の開花』」

なっ、植物だと！？

「行きなさい」

蔓が伸びる。

「ちいつ!!」

弾幕を展開して触手を防ぎ、幽香に向かって突っ込む。

「遅いわ。マスタースパーク。」

ゴウツ!!!!と力の奔流が一筋の光となって具現する。

「何発でも撃てるのかよ!?!」

身体を捻ってかわしながら、幽香に吠える。

「貴方の霊掌と同じよ。これはスペルカードではないもの。」

「あくまでルールは守ってる、ってか!」

だが、何発もあんな攻撃をされていたら近付くにも近付けない。

「ならば撃たせる暇を与えなきゃいいんだろ!!」

怯むな、俺。

幾ら奴が強くても、俺は致命傷さえ喰らわなければ何と言っ事はない!

恐怖を限界まで抑える。

幽香に一撃加えるイメージをしる。

黄色い光の筋が、俺に向かう。

…止まるな、突き進め!!

「そこだああああ!!!!」

「それで勝ったと思うな!!」

俺の拳と幽香の拳がぶつかりと同時に、周囲に波が立った。

衝撃の強さが、それを生んだのだ。

「まだだっ!!」

「もっと楽しませなさい!私はそれじゃ満足しないわよ!!」

再びの体術の応酬。

二人は、確かに戦いを楽しんでいた。

それは歪んだ思想などではなく、「ただ、力をぶつきたい」という
純粋な思いだけの行為の途中で起きた事だった。

いつしかレナは「相手の力の底を見る」という思いで拳を振るい。

幽香は「純粋に戦いを楽しむ」為に拳を振るっていた。

今の二人には、幻想郷の限界とか自然保護とかと言った意識は全く

なかった、それほど楽しんでいるのだ。

- ??? ? ? 視点 -

「！！まずいな…結界について干渉しやがった…！！」

あの二人の戦いの余波は、幻想郷の危機を生んでいた。

結界が破られれば、幻想郷という世界が消滅する。

結界が、少しずつこの戦いの激しさに耐えられなくなってきたのだ。

「紫…まだか!？」

「お待たせしたわ!」

隙間からぞろぞろと現れる、結界に詳しい者達。

すなわち博麗霊夢、八雲紫、八雲藍、パチュリー・ノーレッジ、そして保険の為の存在、西行寺幽々子。

「今すぐ結界を強めてくれ！！急がないと結界が潰されるぞ…!!」

「解った!」

結界を強化する為に魔法を詠唱し始める四人。

「幽々子…行けるか？」

「今の私は本気よ？」

「OK…飛ばすぞ！！」

時間はない。

あの二人を止めなくては…！！

- 幽香視点 -

「そこよ！」

一瞬見えた隙を突き、私は彼の腹に膝を入れた。

「ぐうっ！」

続いて日傘で頭を一撃。

すかさず回転を入れた蹴りを彼の脇腹にぶつけた。

彼は地面に数回バウンドし、動きが止まった。

「終わりね…私の勝ちよ。」

彼の身体を植物の蔓で拘束し、私は彼の首に日傘の先を突き付けた。

「楽しかったわ…貴方、死なないんでしょう？ならその身に刻みなさい…私の戦いをね！」

「幽香…！」

戦いの円舞曲（後書き）

く切実なお願いく

この後の超特別編の特別出演キャラが現在…

4人です（正直）

キャラ提供してくださった皆様、ありがとうございます。

このあとにこう言うのもなんですが…

少なくとも5人居ないと話が成り立たないのです。（欲を言えば7人は欲しい）

すると更新速度が急にがた落ちします。（プロット再構成の為）

そして永遠に風神録編入れません（涙）

「冗談のような話ですがマジです。」

というわけで再度お願いです。

出演キャラをこのバカ作者に提供してやって下さい、お願いします。

無理矢理バトルに持ち込むのは…止めました。（提供してくださったユーザー様の要望には答えますが…）

そんな感じなので「どんな」キャラでも構いませんのでどうか私にキャラを分けてくれというお願いでした。

宛先は感想コメント、メッセージで随時受け付けております。

レナの前に現れたのは…！？

というわけで次回

「喧嘩両成敗とはよく言いが、これはやりすぎなレベルだと思う」

お楽しみに！

喧嘩両成敗とはよく言いますが、これはやりすぎなレベルだと思う(前書き)

第3・5章最終話!

喧嘩両成敗とはよく言いが、これはやりすぎなレベルだと思う

- 幽香視点 -

「！」

私は声の主に驚いた。

何故…何故、彼が？

「止める！冷静になって周りを見てみる！」

言われた通りに周りを見渡す。

大地はひび割れ、花畑だったはずの周りは荒んでいて…

「…な、何？私…久しぶりに大暴れしてたの？」

「あ、解ってくれた…そうなんだよ！このままじゃ色々とまずかったぞ！」

「あ…そうだったの？そう言えば結界があっただけ…忘れていたわ。」

そうだ、あの時のように暴れるのはまずかったんだっただ。紫が昔、そんなことを言ってたわね。

「つまり、貴方は私を止めに来たわけね。」

「ああ。」

それにしてもこの有様…中々に酷いわね。

また花を育てなくてはいけなくなった…戦いに飢えるのも考え物ね。

「ふう…でも久しぶりにかなり動いたからストレス発散にはなったわ。」

代償がかなり大きくなる所だったけど。

「…私は戦いを止めなきゃいけない理由は解ったけど、あちらは解っていないみたいよ？」

見れば、さっきまでの相手が蔓を引き千切って立ち上がる所だった。

「どっつするの？」

「事情は説明するが…聞かないようなら一撃かます。」

彼は背中の武器に手をやった。

・らぐな視点・

「どづいつ…事ですか…！」

「俺はこの戦いを止めに来た。それだけだ。」

頼むから解ってくれ、レナ。

「まだ…まだ戦いは終わってない！」

「だとしても、どうやってもレナは負ける結果が見えていた。止めなかつたら死んでたぞ？」

「だが…俺は生きている！邪魔をするなら…らぐなさん、貴方を倒す！」

「解らず屋め…死んでも文句は言つなよ？」

残念だがレナ、お前は俺の3回の攻撃でぶっ倒れる。

手負いなら倒せる自信はあるんでね…恨むなよ！！

「行くぞ…ヘルメス。」

俺の武器…ヘルメスが形を変える。

ヘルメスは3つの武器になることが出来る。

今回は…

「ブレイドモード。」

剣で行こうか。

「そんな重そうな武器で、俺を捉えられなくても思っているんですか！」

レナが俺に一瞬で距離を詰めて拳を振りかぶる。

縮地法か…確かに距離を詰めるには最適だが、練習を積まないとしたのだぞ？

それを証明してやるか。

「思ってるからやっているんだよ。剣符…『三連断』」

ヘルメスが吠える。

ヘルメスの剣形態は「相手を斬る」のが目的ではない。「相手を砕く」のが目的だ。

だから剣は重い、確かに重いのだ。だが…

「ヘルメスは生きた武器なんでね…学習はするのさ…！」

当てられないなら当てれる程の速さになればいい。

だから…

剣に推進力となるものを付けければ問題ない！！

「速すぎてびつくりすんなよ！！ヘルメス！！」

ブンツ！！と剣を横に振る！！

それはレナの左腕を砕く！！

「は…速い！！」

「ほらほら、ボサツとしてると頭砕けるぜえ！！トリス！！」

続いて右肩に一撃！！

「があっ！！」

「ラストお！！歯あ食いしばれよ！！」

よろけて無防備になるレナの背中に…最後の―撃を！！

全体重を乗せた―撃を！！

「メギストス！！」

「…やりすぎでしょ。完全に伸びてるわ。」

「あそこまでしないときつと俺がやられたぞ?」

「…それにしても、私としたことが…花を…」

「それは育て直せばいいじゃないか。何も一生育たなくなった訳じゃないんだから。」

「…そうね。皆、ごめん…」

こうして、レナの逃走劇は終わりを告げた。

え?もう一人はどうなったかって?

巫女、擊沈。

喧嘩両成敗とはよく言いますが、これはやりすぎなレベルだと思っ(後書き)

次回より本編は暫くお休みします。

代わりに!!

第3・5章その2をお送りします!!

というわけで仕込みをするので暫くお待ちください

コラボして下さるキャラクター達(2011/5/30現在)(前書き)

場合によっては編集する可能性が最も高い部分になります。

コラボして下さるキャラクター達(2011/5/30現在)

連夜さん提供

【東方七人録〜ある七人の物語〜】より

§高宮蓮也§

§トシキ=スピードスター§

同じく『東方聖生伝』より

§千堂刃奈§

いつしき陸攻さん提供

【幻想の運び屋】より

§上松光§

時々出没する走り書きのsouさん提供

【東方遊戯録】より

§凜音§

黒清音さん提供

【AVAで猫る】より

§猫耳レミリア§

皆様ありがとうございます…！

5 / 30 現在

まだまだ募集中ですのでドシドシどうぞ

募集が来れば来る程作者のテンションも上がります！

さらに更新速度も上がると思います！

先を読みたい方は募集に応募するといいいよ！

小説書いてない方でも大丈夫、設定さえあれば作者が頭を捻ってくれるぞ！（なんか他人視点）

いや、本当にお願ひします…

文字稼ぎではないよ！（この一文だけ文字稼ぎ）

コラボして下さるキャラクター達(2011/5/30現在)(後書き)

今回提供してくださったユーザー様の小説はどれもこの小説より100万倍以上面白いので是非ご覧下さい!

というわけで次回

「あつてはならない prologue」

お楽しみに!

あつてはならない prologue (前書き)

というわけでコラボ章突入!!

今回はプロローグです!

お知らせ

PV160,000行きました、よし、頑張つて200,000だ!

あつてはならない prologue

ある日。

本当に異変が起きていない平和な日常の1ページの事。

「…そう言えば。」

幻想郷の母と呼ばれる賢者、八雲紫はお茶を啜りながら思い出した。

「藍？居るー？」

呼んですぐに、彼女は現れた。

「はい、どうしました？」

「あのさあ、最近幻想郷に妙な空間の歪みがあつたつて言ってたじやん。あれ、どうなったの？」

「歪みは少しずつですが大きくなって来ています。まるで私達を誘っているかのようじ…」

ふう…と息を吐き、紫は立ち上がった。

「調査が必要みたいね。藍、マヨヒガは任せるわよ。」

「はい。紫様もお気を付けて。」

「行ってくるわ。」

紫は隙間を開き、消えた。

紫の気掛かりはそこにあつた。

空間の歪み…それは、結界が安定している限り起こり得ない、有り得ない事態なのだ。

まず結界の様子を確かめる為、紫は幻想郷の端に移動した。

「パツと見ただけ、異常はないみたいね…」

念には念を入れ、紫は幻想郷と外の世界を隔絶する結界…『博麗大結界』の状態を調べている。

「…異常らしい異常はない、一応霊夢にも聞いてみましょう…」

彼女の能力、『境界を操る程度の能力』による結界の調査結果は、閻魔大王さま風に言えば『白』。

この時点で結界に異常はないのは確定事項なのだが、一応もう一人の結界の管理者に聞いてみる事にした。

「結界に異常？ないわよ？」

「やっぱり？」

「ええ。でもなんで？」

貧乏腋巫女とかと呼ばれている博麗霊夢。
実は彼女、結界の管理者である。

「空間の歪みがあるらしいの。だから結界がおかしいのかなと思って…」

「でも結界に異常はない。おかしな話ね。」

「というわけで、私が直接その歪みを調べてみるわ。暫く結界の管理を貴女に任せるけど、いいよね？」

「ええ。別に構わないわ。それが新たな異変の原因にならない内に、手を打っておいて。」

でも、これが…

まさかあんな事になるなんて、思いもしなかった。

「さて、入ってみましょう。」

中で何があっても良いように、私はスペルカードをきちんと用意して、歪みの中に飛び込んだ。

歪みは暗いトンネルのような場所に繋がっていた。

ふと見ると、光が見えた。

私は光の方へゆっくりと歩いて…外に出た。

部屋…かしら？

普通の家にあるような部屋。

壁は木材だ。

部屋の真ん中に小さな机があって、何かノートのようなものがある。

私はノートを開いてみた。すると、最初のページにこのような事が書かれていた。

『このノートを見る、名も解らない君へ。』

この部屋は見渡してくれば解るように、ドアが沢山ある。

それを開けば、別の世界に行くことができる。

ただし、別の世界に行くにあたって、幾つか注意がある。

1、君がもと居た世界に、きつと空間の歪みが出来ているはずだ。それは歪みが出来ている世界であることを成し遂げなければ消えない。

が、成し遂げるのは君じゃない、ドアを開けた先に居る別の世界の住人だ。

君は、別の世界の住人を連れて元の世界に戻り、その住人に「あること」を成し遂げて貰わなければならない。

「あること」とは何か？それは自分の力で突き止めてくれたまえ。

2、君がもと居た世界の住人一人に魔法をかけておいた。

彼が彼女かは知らないが、きつとその人は大変な事になっているだろう。

だが、その人は成し遂げるべき「あること」に非常に関係する重要人物だ。

その人を探し出す事も、きつと必要になってくる。

3、君がこれをやるかやらないかは君の自由だ。だが、既に魔法はかけてあるし、空間の歪みも実際にあるはずだ。

やらないという選択もありだが、魔法は解けないし、空間の歪みも消滅しない。

4、もしやると言う英断を君がするならば、ヒントを一つ与えよう。君がこれから行くであろう世界は、君がもと居た世界の平行世界…つまり、パラレルワールドだ。

そして、そのパラレルワールドには、君が知る人物が一人居ない。その人物が、魔法をかけられた人物だ。

5、全ての「あること」を成し遂げた後にもう一度此処に来てくれ。伝えたいことがある。

それでは、君の旅に幸があらんことを切に願う。』

716

「…つまり、私は旅人。そして仲介者というわけね。」

魔法をかけられた人物とは誰だろうか？

どんな魔法をかけられたのだろうか？

…流石にその人物を放っておくわけにもいかないのです、私はこの試練に付き合う事にした。

「この扉から入ってみようかしら…」

私は扉の一つを開け、中に入ってしまった…

扉が閉まると同時に、扉に文字が滲み出た。

『東方七人録』と…

あつてはならない prologue (後書き)

次回から『東方七人録』とコラボ！

というわけで次回

「【連也&mp;トシキ編】その1『落ちた先は…?』」

お楽しみに！

【蓮也&mp;トシキ編】その1『落ちた先は…?』（前書き）

最初は「東方七人録」とコラボです！

【蓮也&トシキ編】その1『落ちた先は…?』

「紫、ふと思ったんだが」

「どうしたの、神那女？」

此処は『別の』幻想郷…レナが居る幻想郷とは別の世界。

「蓮也…幻想郷を護る男にしては余りにも弱くないか？」

「え、今頃気付いたの？」

紫と話しているのは、遠命神那女とおみかなめという色々とぶっ飛んだ強さを持った女性である。

黒と白で彩った袴に、きらりと輝く長髪、出るところは出て締まってる所は締まってるというまさに完璧な女性だ。

「我ながら今頃気付いたのだ。蓮也はなんかいまいちパツとしないんだ。」

「でも、この世界じゃトツプクラスよ？」

「ううむ、確かにそうなんだが…もっと強くて、『俺がガン〇ムだ』ならぬ『俺が主人公だ』と言えるような強さを持って欲しい、そう思うのはダメか？」

「ダメじゃないけど…でもどうやるの？」

「この間、私は暇だったから何となく色々な世界を旅していた。」

「相変わらず凄いわね」

この神那女と言う女性の能力、『世界を巡る程度の能力』はその名の通りあらゆる世界に行けるといいうスケールがでかすぎる能力である。

「するとな、面白い世界を見つけた。その世界には、どんなことをしても死なない人間が居たんだよ！」

久しぶりに面白いものを見付けたようなキラキラした眼で喋る神那女。

「つまり、不死身？」

「そうなのだ。少しちよっかいを出したくなって、真っ二つに斬ってみたが死ななかつた！」

しかも中々の上物だ：傍に置いておきたい程の！

そこでだ、蓮也をその人間と戦わせてみたいと思う。面白そうと思わんか？」

「確かに面白いとは思うけど、他の世界に介入すると言つのは…」

この世界の紫は考えた。

他の世界に介入するというのは、一見楽しそうだが危険だらけである。

例えばだが、他の世界で誤って人を殺してしまったとしよう。

パラレルワールドの大前提として、選択の数だけ世界があるというのがある。

その殺してしまった人が仮にその世界では王様になることになっていたとしたら？

その世界はおかしなことになってしまう…

そうなれば、世界は歪み、いずれ消滅する。

つまり、他の世界への介入はある意味危険なのだ。

「解っているさ。必要以上の介入はしない…ただ、その不死身の間人の強さを見てみたくてね。」

「そこまで言うならやってみるわ。」

こうして、他の世界への介入を決めた二人。

この二人、行動力が半端なかった！

「とうとうわけできてらっしゃーい」

「ちょ、いきなり何を…アッー!!」

対象を即座に隙間送りにする紫。

「うわああああ…!!」

「あ、関係ない人まで落としちゃった…ま、いいか」

こうして、この世界から送り込まれた二人。

「送っておいたわよ。一人巻き込んだじゃったけど。」

「そうか…いずれ戻ってくるだろう。それまで…ゆっくり待とうっ
「!」

「きゃっ!い、いきなり、激し過ぎるわっ!」

「よいではないかー、よいではないかー!」

高宮蓮也とトシキ「スピードスター」…

彼らは何を成すのか!?

乞うご期待!!

で終わると思ったか、甘いわあ！！

- 以下、「100万回」の紫視点でお楽しみ下さい -

「…え？」

扉を開けた先には、また部屋が。

しかもさっきの部屋と特に変わった所がない。

「迷路じゃあるまいし…」

また机の上にノートが。

「今度は何が書かれているのかしら…?」

ノートを開いてみた。

『正面に扉があるはずだ。開ければ別の世界に繋がる。
さあ、開けたまえ。新たな世界が君を待っている。
そして、そこには君を待つ人物が居る。』

「何処の誰かは解らないけど…迎えに行つてあげましょう…！」

私は扉を開け放った。

【蓮也&mp;トシキ編】その1『落ちた先は…?』（後書き）

次回予告

ついに蓮也、レナと邂逅！

というわけで次回

「その2『邂逅、そして戦いの始まり』」

お楽しみに！

【蓮世&REPORTミキ編】その2『邂逅、そして戦いの始まり』(前書き)

その2です！

暫く続きそつな予感…

- 蓮也視点 -

この小説では初めまして…だよな？

俺は高宮蓮也。

幻想郷の守護者の一人をやってる…別の世界での出来事だけだな。

で、横には俺の仲間、トシキが居る。

此処までは普通なんだ、だが…

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

俺達は普通に道端を歩いてたかと思ったらいつの間にかスキマに喰われていたんだ…

な…なにを言ってるのかわからねーと思うが、俺達も何をされたのか全くわからなかった…

一瞬とか刹那とかそんなチャチなレベルじゃ断じてねえ…

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

というわけなんだ。

「どついう訳よ、地の文に見せかけて全部喋ってるじゃない。」

な…あ、あんたは…！

「ゆかりん…なんでゆかりんが此処に…！？」

あの麗しき姿…間違いない…ゆかりんだ！

が、その直後に有り得ない一言を聞くことになる。

「一つ聞いわ。貴方の名前は？」

「は？」

俺は思考を止めた。

「蓮也、蓮也！オレはこう思う…オレ達の知ってる八雲紫は神那女の愛人だ…そんな人が、オレ達の名前を知らないなんて有り得ない！」

「そ、そうだ！ナイスだトシキ！つまり…」

あのゆかりんは偽者っ!!!

「俺を騙そうたってそうはいかねえ! その偽者! 俺はあんたの言うことなんて聞かねえぜ!!」

「に、偽者!？」

なんか相手がショックを受けているが、演技に違いない!

「そうだろ! さしずめ神那女の仕業だな! 出てこい神那女! きつちり説明して貰おうか!!」

紫色の世界に、俺の声が反響する。

「全く…勘違いにも程があるぞ。」

ふらりと現れた、女。

「神那女! 今度は何をするつもりだ!？」

「その前に彼女に謝れ。彼女は正真正銘、本物の八雲紫だ。」

「はあ!？ だって俺達の事を全く知らねえんだぞ!？ 俺達の知っている八雲紫はあんたの愛人、俺達の名前を知らないはずがない! そう

「だろ！」

「蓮也、確かにお前の推理は正しいな。だが、お前は一つの可能性を見落としている。」

『幻想郷』がお前が居る世界しかないなんて、誰が証明出来る？」

「え…？どういうことだ？」

「蓮也、きつとな…」

『わけがわからないよ』…となっている俺に、トシキが説明してくれた。

「あくまで可能性の域だけど、このスキマは『別の幻想郷』の八雲紫が開けたスキマで、オレ達の前に居るあの女性は『別の幻想郷』に存在する八雲紫…ということじゃないの？」

「え…っ、つまりどういうことだっばよ？」

まずトシキが此処まで頭が回っている事に驚き、そしてあの女性が本物のゆかりんである可能性が出てきたという事に驚き…

頭はパンクした。

「つまりこういうことよ。」

え…？

「ゆ、ゆかりんが…二人？」

目の前の有り得ない展開にさらに頭が止まる俺。

まるで咲夜さんが俺の脳にだけ幻世『ザ・ワールド』を使ったみたいだ。

以下…

『東方七人録』のゆかりんをゆかりんA（又は紫A）

『100万回』のゆかりんをゆかりんB（又は紫B）

とすることにします。

「神那女、これで二人は解ってくれるわよね？」

「そうだな。百聞は一見にしかず…これなら解るだろう。」

ゆかりんAと神那女がなんか話をしているが、それよりも重要な事は。

俺はもう一人のゆかりんらしき人物に近付き、確認をした。

「あ…あの…あなたは本物の八雲紫さんですか？」

すると、その女性は…

「本物に決まってるじゃない！いきなり誰か解らなくて聞いたら」

お前は偽者だ、八雲紫じゃない』なんて言われるなんて！存在否定なんて初めてよ！」

目に涙を溜めていました。

「そ…それはすいませ『グシヤツ』」

謝ろつとした瞬間、身体が見えない床にのめり込みました。

「お前…いくら他の世界の紫とは言え、泣かせたな？泣かせたよなあ？」

「が…がなべ…だにを…（か…神那女…何を…）」

「お前はさっさと殺されてこい！！」

ぐいと身体を掴まれ、ぽいっと投げられる俺。

「うそおおおおお！…！？」

俺は、落ちました。

- レナ視点 -

俺は博麗神社でお茶を啜っていた。

平和だなあ…今日もこんなにゆっくり出来るなんて、なんて平和…
『グシヤツ!!』

「な、何だ今の音!？」

「グシヤツ」っていったぞ!なんかまずい音な気がするぞ!?

「い…痛てて…」

慌てて音がした方を見ると、そこには…

「キ○ンだ…○ヨンが居る…!」

某涼宮さんの憂鬱に出てるような人が、そこに居ました。

俺も読んでいました、涼宮さん。

「う…あ…ふざけんなよ神那女…後で説教してやる…!」

なんか愚痴ってる所を見ると、生きてるみたいだな。

「大丈夫か？」

「あ…ああ。サンキューな。」

手を貸し、彼を立たせる。

「ところで、愚痴ってたみたいだが、なんかあったのか？」

「いや、こつちの話だ。それより、此処は博麗神社か？」

「？ああ…それがどうかしたのか？」

「紫のスキマに喰われて落ちてきたんだが…」

「紫が？」

また外の世界の人間を連れて来たのか…

と考えていたのだが、直後の彼の言葉に引っ掛かりを感じる事になる。

「だけど、『此処も』幻想郷なのか…神那女は何を考えているんだ？」

「此処も？という事は、幻想郷から来たのか？」

「ああ。確かに幻想郷から来たんだ。」

だが、レナはこの青年に見覚えがなかった。

妖怪退治をやっている関係上、幻想郷を飛び回っているレナは、一応人里の住民達には知られている。

が、レナは彼を見たことがない。

というわけで、レナはもしかしたら自分の記憶にないだけなのかもしれないので、彼にこう質問してみた。

「君は誰だ？」

すると彼はこう答えた。

「俺？俺は高宮蓮也。そういうあんたは…？」

「ああ、俺は彩埼玲奈。どうやら歳も近いみたいだし、レナって気楽に呼んでくれ。」

と蓮也の方を見た瞬間。

蓮也は震えていた。

「ん？どうしたんだ？」

「え…レナって…あんたの事なのか…？」

「ああ。」

「あ…あの…不死身の…!？」

「一応そういうことになってるな。それがどうかしたのか？」

「…そういうことが、神那女…!レナ、頼みがある！」

「頼み？」

蓮也の頼みは衝撃的なものだった。

「俺と戦ってくれ!!」

「…え？」

【蓮也&mp;トシキ編】その2『邂逅、そして戦いの始まり』(後書き)

次回予告

蓮也VSレナ!

鉄壁の守りを持つ蓮也!

不死身を武器にするレナ!

どうなるの!?

というわけで次回

「その3『鋼と人力』」

お楽しみに!

【蓮也&mp;トシキ編】その3『鋼と人力』（前書き）

その3であります！

ネタ詰めたら凄いいことになった…

【蓮也&トシキ編】その3 『鋼と人力』

・トシキ視点・

あ、初めまして。

オレ、トシキ「スピードスター」って言います、よろしくね。

オレは今、別の世界の紫…ここじゃゆかりんBらしいけど…に連れられて見慣れない場所に来た。

というかまだゆかりんBは泣いているみたいなんだ…こういうときに何をすればいいのか、オレは解らない。

オロオロするしか出来ない…いや、ホントどうすればいいの？

「…女性が泣いてるって言うのに、慰め一つもないのね…」

慰めればいいんだな！よし、早速…

「だだだ、だい…じょうぶか？」

見事に噛んでしまいました。

「…大丈夫の一言も言えないの？…もしかして貴方、女性恐怖症か何か？」

「そ、そこまでじゃ…ないんだけど…じ、女性と話すのはかなり苦

手で…なんか緊張するって言うか…」

「だとしたら極度のあがり症ね…かなり酷いわよ、貴方。」

よく言われます。

このままじゃ彼女なんて一生出来ないよなあ…

「あがり症には原因があるわ。貴方の場合、きっと幼い頃に女性に関する酷い経験をしたからなんじゃないかしら？」

「実はそんなこと…なくて…」

生まれつきだったりします。

「大丈夫よ。貴方があがり症だからって私は貴方を嫌う事はないわ、安心して。それより、貴方の名前は？」

「あ…オレはトシキ。トシキ＝スピードスター。」

「名前だけは噛まずに言えるのね。よろしく、トシキ。」

ゆかりんBが手を差し伸ばしてくる。

「あ…よろしく…」

手を握った。

暖かいなあ…

「とりあえず、あの男を探すわよ。あの男…許さないんだから…！」

蓮也、ゆかりんBに命を狙われているぞ。

…死んだな、今のうちにご冥福をお祈りしておこうか。

・レナ視点・

「待て、いきなり戦えって一体どういう事だ？」

出会って5分も経っていないんだが。

「どうやらそれが、俺の使命みたいだ。レナ…レナがかなり強いってのは知っている。けど、俺は強くならなきゃ…でないと、守りたいものも守れないから。」

事情はよく解らないが、腕試しをしたいみたいだ。

「…よく解らないが、どうやらやる気みたいだな…！解った、付き合おうか！」

…蓮也は今までの話から判断すると間違いなく能力持ち…相手の出方が解らない以上、『翼を求めし者』イカロスハートはまだ取っておくべきだな…！

「文句は言つなよ、蓮也！行くぞ…！」

地面を軽く蹴り、まずは小手調べの軽い格闘だ！

「最初から本気だ！」

パイプ…？あれが武器か？

確かに妙な気配があのパイプからする…何かあるな！

「生憎、俺には武器なんてないんでね！霊掌っ…！」

魔力付きのパンチ、受け取れ…！！

「うおっ！これが噂の霊掌か…！」

パイプで防がれる、それにしてもパイプにパンチは中々痛いな…
幾ら死なないと言っても痛覚はまともにあるから、確実に当ててい
かないと拳がイカれる。

「リーチも短いしな…！」

パイプによる殴打をかわしながらの霊掌のカウンター。
だが、攻撃をかわしてからのカウンターに入るまでの時間が若干か
かっている、その間に蓮也にかわされる。

「今度はこちらの番だ！喰らいなっ！！」

なっ、パイプからの弾幕！？

「くっ！」

腕で盾を作り、直撃は免れたが…

「まだまだあ！」

いつの間に銃を！？

「くそっ！」

銃撃を回避する為に、俺は蓮也から離れざるを得なくなった。

「パイプから弾幕出るわ、銃持ちだわ…！やりづらいな！」

「でも死なない方がいいさ、武器使えても殺られちゃ意味は…ないからなっ！！」

パンパンと乾いた音が銃口から響く。

「そこまで銃撃がお望みなら付き合ってやるよ！砲符『リヴァイバル』！！」

最初は両手使わないと撃てなかったが、今は片手間でも撃てる！

「残念だが、レナの対策はきちんとしているんだ！反射『ミラーシールド』！！」

盾…？

「なっ！？跳ね返った！？」

嘘だろ！？リヴァイバルが跳ね返されるなんて！？

「あっつ！」

身を捻ったが、軽く左腕が火傷したみたいだ。

「余所見は駄目だぜ？怒符『怒りの炎』！！」

俺の周りから炎の柱が迫ってくる。

「止まってたら殺られるのか…！ならば…！」

蓮也に突っ込めば、炎はかわせるだろ！

「かかったな…！俺の勝ちだ、レナ…！神器『パイプ・ザ・グング
ニル』！！」

まんまと誘われたって事か…！！

蓮也がパイプを振りかぶる。

「そおい…！」

パイプを投げた…って速くないか！？

「ふうっ!?」

ぽっぽー!と蒸気を出しながら、パイプと俺は飛んでいく。

このパイプ、腹にのめり込んでるぞ!

「やったぜ…!此処までしかけりゃ流石のレナも…!」

なんか遠くで聞こえる。

「ざけんなあ!」

パイプを掴み、俺は「切り札」を使った!

「翼を求めし者…!!」
イカロスハート

右肩に現れる翡翠色の結晶!

「まだだっ!!この勢いを殺すには…!」

空中で自在に動けるようにならなくては…!!

「飛ぼうとした人間の名があるなら、翼を俺に授けてみせろっ!!」
イカロス

そして、力はそれに答えた!

翡翠色の結晶は姿を変え、光の翼と化した！

「うおおおおお！……！！！」

止まれと願い、力を翼に込める！

身体が…止まった！

「パイプを頂くぜ、蓮也！」

しっくりくるな、このパイプ。

「やばっ…！パイプ奪われるのは考えてなかった！くっそ…！ならっ…！」

蓮也を包む…壁？

「否定幻想実現…プラチナ製のドームだ！」

何製かさえ言わなければよかったのに…

「靈掌っ…！」

「あ」

プラチナ製のドームにぽっかり穴が空いた。

プラチナって金属だからね…融点あるよね。

「ガツデム！…と言ったかあ！！レナ…貴様は狂え！！」

蓮也の左目が紅くなった気がしたと同時に。

俺の視界が、黒くなった。

【蓮也&トシキ編】その3『鋼と人力』（後書き）

次回予告！

蓮也の能力が明らかに！

レナはどうする！？

トシキ、君はいつになったらレナに会えるんだ！？

というわけで次回

「その4『デジャヴと狂気』」

お楽しみに！

【蓮也&mp;トシキ編】その4『テジヤヴと狂気』(前書き)

ユニーク19,000突破…!

もうすぐ大台の20,000だー!!

【蓮也&mp;トシキ編】その4『デジャヴと狂気』

- 蓮也視点 -

…ふう、鈴仙を嫁にしておいて助かった…

レナは何をどうしても死なないみたいだからな…ならば頭を狂わせてしまえばいい。

俺の能力…『幻想を実現する程度の能力』の1つ、『波長的幻想実現』。

ぶっちゃければ鈴仙の能力…『狂気を操る程度の能力』をさらに強化したような感じの能力だ。

相手が俺の目さえ見てくれれば狂わせられる。まるでギ〇スだな…そのうち『貴様は…死ね!!』とか使えるようになるのだろうか。

ま、レナが狂ってくれたから俺の勝ちはほぼ決まったようなものだ。

さあて…止めを用意しておきますか。

「魔砲『デイバインバスター』」

右手の先に集まる紫色の光。

「……終いだ。」

ゴウッ！！！！！

「…な、なんで…」

なんでだ、なんで。

なんでなんでなんでなんでなんでなんで…

俺が、宙に舞ってるんだ。

「…済まねえな、蓮也。蓮也の精神攻撃は、治した。」

レナの能力は解る…『己の傷を癒す程度の能力』。

だが、一体何のカラクリだ？

傷なんて与えていないはず…なのに、何故？

「精神まで狂わせたのが悪かったな。狂わせて自傷行為に走らせるか自殺に持ち込む…それが、鈴仙の能力だろ？」

「だが、俺はレナに狂気をぶつけた…狂ったはずだ！」

「悪いな。俺はその対策もきちんとしていたんだ。精神異常も、立派な『傷』だぜ？」

やられた、治っちまうじゃん！

「マジかよ…！それでも、なんで俺が宙に舞ってたんだ!？」

するとレナは、右手を開いて見せた。

レンズ…？

「照準『ハイパーグラビトンレンズ』…蓮也のミラーシールドと同じ事を行ったまでだ。」

「びっくりだ…！サプライズだぜ、マジで…！」

「戦いを再開しようぜ？蓮也…まだ終わりじゃないんだろ？」

当たり前だ…だけど、俺も結構疲れてるんだ…

「次の一撃で決めてやる…!!」

「お、そりゃいいな!んじゃ、大技出しますか!」

レナの動きが…止まった?

「大技には大技で対抗だ!螺旋…」

「砲打…」

同時に動く二人!

「超電磁い!!ゲッタアアドリル!!ブレエエエエク!!」

「シューティング!!ドライバアアアアア!!」

「どがべしっ！」「」

で、同時に倒れた。

被害状況は…

俺 ぶっ飛んで木を薙ぎ倒し、全身打撲

レナ ドリル直撃でぶっ飛んで地面に埋まり、全身打撲

「あ…が…やべえ…身体が…」

「俺もだ…死にはしないが…こりゃやばい…」

…お互い、虫の息状態…

…そして。

この世界に一人、とんでもない事になっていた人がいた。

「な…なんで…」

その人は自らの変化に驚いていた。

「なんでこんなに気持ち悪い身体になったのよおおおお！…!?!?」

その人の身体には、緑色の鈍く光る触手が生えていた。

「最近全然出番ないなって思ってた影でちまちま頑張ってたのに！それの報いがこれなの！？あんまりだよー!!！」

うわああんと泣いているこの人物。

名前は…

碎先零奈。

そっだよ、名前一致ネタだよっ！！

こんな奴居たっけ？と思う方は第二章読むと幸せになれると思うよ！

「なんなのこの妙にヌメヌメした触手は！？なんかえっちい感じがしてやだよー！！」

キヤラ完全崩壊。

「ふえ？何これ？」

多数の触手の内の一本が器用に一冊のノートを掴んでいた。

「…」

零奈はそのノートを開いて見てみた。

『済まないな、君に魔法をかけておいた。別の世界に居る、零奈という女性の力を一部コピーして君に移植した。』

その触手は「しゅー君」と言っつて、君の思い通りに動いてくれる優しい奴だ。

見た目はアレだが、どうか嫌われないでやって欲しい。』

「しゅー君っつて…言っつなの？」

すると触手達が一斉に頷いた。

「え！？皆しゅー君なの！？」

『あ、そうだ、触手達全てひっくりくるめてしゅー君だからな。』

「そ…そうなんだ…」

『しゅー君は多彩な才能を持ち合わせている。まず、弾幕が張れる。』

「ほんと！？やってみて！」

すると、触手達はあちこちに弾を乱射した。

「すごいー!!」

『次に、君の心が読める。試しに、撃つてみたい方向に目を向けて念じてみたまえ。』

「……」

零奈は右手の方向に見て、軽く念じてみた。

すると触手の一本から弾が右に放たれた!

「一心同体って事…?」

『さらにだ、実はしゅー君は他人の治療までできる。怪我人が居たらやってみたまえ。因みに君にも使えるぞ。』

「才能有りすぎだね…天才なの?」

すると触手は何かを書いて見せた。

【ちがうんだ、しょくしゅいっぽんいっぽんがちがうさいのうをもってるんだ。ぼくみたいにてさき(というよりしょくしゅだけどね)がきょうなやつもいれば、だんまくをはるのがとくいなやつもいるんだ。】

「平仮名でも文字が書けるって器用不器用の話じゃない気が…」

【れんしゅうしたんだ!でもかんじはあんまりかけないんだ…】

「それでも凄いよ…」

【ぼくたちはいろいろできるんだ、だからきらいにならないでね！】

「解ったわ。でも、ちょっと…このままじゃ流石にやばいかなあ…」

【かくれることならできるよ！でも、あなたの中からだをすこしかりなきやいけないんだ…】

「別にいいわ。それくらいなら大丈夫よ！」

【わかりました！そしたらかくれるね！】

背中に寒気が走った。

「背中に隠れたのね…これから宜しくね、しゅー君。」

『気に入って貰ったようで何よりだ。だが、君には1つデメリットがある…』

「え?」

『まあ…それはいずれ解るだろう。』

「すっごく気になる!」

こうして、触手を手に入れた零奈。

これは大丈夫なのか！？

色んな意味で！

そしてレナと蓮也の運命や如何に！

トシキ、君は何処に行ったんだ！？

次回を待て！

【蓮也&mp;トシキ編】その4『テジヤヴと狂気』（後書き）

此処で1つ…

東方七人録のファンの皆様、ごめんなさい！（零奈的な意味で）

というわけで次回

「その5『この世界の零奈はなんか…真面目だなb y トシキ』」

お楽しみに！

【蓮也&mp;トシキ編】その5『Jの世界の零奈はなんか…真面目だなb』

PV170 / 000 突破感謝

・トシキ視点・

「…あのう…いつになったら蓮也の所に着くんですか？」

「蓮也って？」

「貴方を偽者呼ばわりした…」

「ああ…あいつね。」

ゆかりんBにとっては蓮也は「あいつ」扱いなんだ…

解らなくはないけど、存在否定されたし。

「トシキって、あいつの友達なの？」

「そうですね。仲間ですし、友達です。」

「そう。じゃあ1つ聞いていい？」

「な…なんでしょう…」

「蓮也、後で殺っていいかしら？」

「…」

怖いです、ゆかりんBは怖いです。

「…ど、どつぞ…」

ごめん、蓮也。

こうするしかなかったよ。

「そう それは良かった」

作り笑いとかマジで怖えええ…

「あ、今日は遅いから何処かで泊まりましょ？」

「え？」

「私の家に泊まっていきなさい。汗もかいたし、風呂に入りたいわね。」

「そ、そうですね…」

ま、まあ気を付ければ泊まるくらい、なんてこと…

「でも布団がないわね…トシキ、私と同じ布団で寝なさい。そうすれば何も問題ないわ…」

「#&* < = //」

想像しただけで頭がオーバーヒートしました。

「…びつくりするほど女性に弱いよね…」

口をパクパクして、もはや話し相手にもならないトシキを半ば引き摺るようにしながら、ゆかりんBは隙間を開け、中に入っていた。

「此処で良いかしら。」

紫はトシキをとりあえず布団に寝かせ、その顔をポーツと眺めていた。

「…とりあえず、悪い奴ではなさそうね。」

「紫様…この人間は？」

「あ、藍…他の世界から拾ってきた人間よ。」

「人間…ですか？」

「ええ。悪い奴ではないから安心して。それよりも、風呂を溜めてくれないかしら。彼を風呂に入れるわ。」

「解りました。」

藍が奥に消える。

「早く起きないかしら。色々聞きたい事もあるし。」

・零奈視点・

「…これ、なに…？」

私は目の前の事態に脂汗を垂らすしかなかった。

…青年が二人、倒れている。

一人はレナなのは解るけど、もう一人は見たことがない人だ。

どちらも傷だらけだ…

「あ、治してあげなきゃ！しゅー君、頼むわ！」

触手から緑色の液体が溢れる。

少しの量でよかったみたいだ、服の乱れや傷がみるみる治っていく。

「う…う…」

「こ…この能力は…零奈か!？」

「えっ!？なんで私の名前が解るの!？って…そっか、この力は…」

別の世界の彼女…零奈の力か。

知らない青年の方が先に起き上がり、私を見て一言。

「あるえー？零奈…じゃないじゃん。」

それに反応する、よく知る青年。

「待て蓮也、彼女は零奈だぞ?」

「違う、俺の知ってる零奈はこんな真面目な少女じゃない……………」

…あ、そっか、この世界の零奈なのか。」

解ってくれたみたいです。

「…そうか、何処の誰がやったかは解らないが、彼女に零奈の力が宿ったということか。」

彼…蓮也は私の説明で全てを理解してくれたみたいです。

「…にしてもこっちの零奈は凄く…まともだ…」

蓮也は私を見ながら溜め息をついた。

「…そんなに酷いんですか…?」

「酷いってレベルじゃないぞ…なんせ自分は女性なのにも関わらず、女性を襲おうと…いや、もう襲ったのか。」

「過去形!? それか過去完了!?!」

「幼女だろうが大人だろうが彼女には関係ない…気に入った女性を自らの触手で○○○から○○○、果ては○○○○○○○○○○や○○○○○○まですべて自分色に染め上げるんだ…あくまで本人の話だが…」

緊急的に伏せ字（全年齢版だからね）にしたが、当然私達は伏せ字の中身を聞いているため…

「…」

「…ゴクリ…。」

解らない人は解らないままでいいよ！
世の中、知らない方がいいこともあるよ！

「俺の知ってる零奈は男だったら間違いなく変態という名の紳士…
が、零奈は女性だから、変態という名の淑女、か…」

因みに「淑女」は若い女性にも使える言葉だ、この言葉だけを聞いてBBAだと思ったら大間違いだ。(ソースは広辞苑)

「とにかく、こっちの零奈が常識を持っていてくれて、本当に良かった…こっちも変態だったりしたら泣いてたぞ…」

「よ、よっぽど酷かったんだね…」

暫く私は蓮也を慰めていたのだが、突然蓮也が声を出した。

「あ、そうだ、こっちにもう一人来ているはずなんだよ。トシキって言うんだが、知らないか？」

「知らないなあ…」

「私も見てないわね…」

「トシキを探さなきゃいけないんだ。レナ、零奈、済まないが協力してくれないか？」

「構わないぜ。」

「大丈夫よ。」

こうして、私はトシキという人物を探す事になった。

・その頃のトシキ・

「良い湯だな、アハハ」

「私も入るわよ。」

「え、待ってくれ、混浴とか聞いてな（ぶしゅううう）」

「…お湯が血だらけに…くすくす…」

ゆかりんにいじめられていました。

【蓮也&mp;トシキ編】その5』「この世界の零奈はなんか…真面目だなb

次回予告。

もう少しで蓮也編終了！

だが…これで終わりじゃないよ？

というわけで次回

「その6『スピードスターの名は伊達じゃない』」

お楽しみに！

…わけのわからない人の為のあらずじ。

レナ、零奈、蓮也 トシキ探し

トシキ 瀕死

トシキの運命や如何に！

・以下、トシキ視点でお楽しみ下さい・

「う…う…」

記憶が一部飛んでいる。

ありゃ？なんでオレは布団で寝てるんだ？

確か風呂に入って…それから…それから…

思い出せません。

「あ、起きたのね。」

「ゆ…紫…さん？」

というより…なんで寝間着？なんで目の前に顔が？
髪も伸ばしてるし…頬がくすぐつたいです。

「もう夜も遅いわ。貴方、結構気絶していたわよ。」

もうひとつ、寝間着姿…

ほんのりした紫色のゆったりした、ふわふわしてそんな寝間着。

…凄く…色気があります…

「あんまりにも女性に弱すぎるものだから、少し貴方の心の境界を
弄らせて貰ったわ。貴方、このままじゃ女性の裸見ただけで死にそ
うだから。」

「そ、そうなんですか…」

そう言えば、ちらりと素肌が襟の辺りから見えているのに、鼻血が
出ない。

「それと、貴方には訓練が必要ね。将来、貴方が嫁を持てるように
なるための訓練よ…女性の本気、味わいなさい。」

「え、ちょ、何するんですか紫さん…え、嘘、マジで、アッー!!」

この後、何故か記憶が飛んでしまい、気が付いた頃には朝になっていた。

真横で紫さんがすやすやと眠っている時点で凄くおかしいのだが。

「な…何が…あつたんだろう…」

思い出したら負けな気がして記憶を漁るのは止めた。

唯一解る事は…大人の階段を1つ上った気がしている事だ。

「やっと起きたのね。第二ラウンド行くわよ」

「え、嘘、もう一回とか聞いてないよおお!!…!!」

「良いもの持ってるじゃない 使わなきゃ損よ」

「アッー!!…!!」

…助けて、誰か。

・蓮也視点・

…こつちも何が起こってるのか解らない…

「なあ…レナ…これは何なんだ…？」

「解らない…何があつたんだろ…」

俺とレナ、すなわち男性陣は目前で起きている事に顔を赤らめていた。

目の前には零奈が眠っている、そこまでは普通なんだ。

…が…

何故に四肢が触手に拘束されて、宙に浮いているのだろうか…

「レナ、これ以上はなんか駄目だ、色んな意味で駄目だ！」

「確かに、やるぞ…！」

俺は右腕に撃ち込み式の杭打ち機バイルパンカー、リボルビング・ステーキを創造する。

「分の悪い賭けは嫌いじゃない……！」

「霊掌っ……！」

手を縛る触手目掛けて一撃加える。

パンツ！！と杭が打たれる音がする。

「よっしゃ、次は足だ！」

「オツケー、任せろ……！」

もう一撃、レナが霊掌を加え、零奈の身体が崩れ落ちる。

「大丈夫か、零奈……？」

「う……うん……レナ……？」

「良かった……無事で……って……」

レナが黙り込む。

「どうした、レナ……」

俺も黙るしかなかった。

だ……だ……だ……だ……

服のちょうど下着がある部分だけ何故か溶けていて、下着が露出して
るんだぜ？

「へ…へ…変態！！私が寝てる間に襲おうとしたの！？」

「待て、冷静に話を」

「言い逃れなんて聞きたくないわ！さっさと死んでなさい！傷符
炸裂する痛み』！！」

「『ぎゃあああああ！！！！！！』」

「…え？私を…助けてくれたの？」

「『はい…』」

「う、ごめん！よく解らない中、こんなことしちゃって！」

「こちらこそすみませんでした……」

顔がポコポコに腫れている二人に、触手で治療する零奈。

「で、蓮也、トシキが何処に居るか解るか？」

「解らないな……あ、もしかしたらゆかりんと一緒かも。」

「紫と？そうか……なら紫の所へ行ってみよう。」

俺達はとりあえずゆかりんの家、マヨヒガへ向かう事にした。

・その頃のトシキ・

「……っ、疲れた……」

「気持ち良かったわ」

もう腰がガクガクで…

え？なんでつて？聞かないでくれ…

「…トシキ、彼が来たみたいね。」

「へ？」

「蓮也。^{あいつ}」

「ま、マジで！？」

オレは自分の能力、『速度を操る程度の能力』を発動し、一瞬で服を着た。

「何処ですか！？」

「向こうね…」

紫さんが指したのは遙か先。

「掴まって下さい！飛ばしますよ！！」

「え？何するの！？」

「瞬足『韋駄天走り』！！」

「ひゃっ！」

超高速のダッシュ！

待ってるよ、蓮也…！

感動の再会、見せてやるぜ！

【蓮也&mp;トシキ編】その6『スピードスターの名は伊達じゃない』（後

次回蓮也編最終回！

というわけで次回

「その7『感動の再会?』」

お楽しみに！

【蓮也&amp;amp;トシキ編】その7『感動の再会?』(前書き)

蓮也編最終回!

【蓮也&トシキ編】その7『感動の再会?』

・トシキ視点・

「よっ、蓮也!」

「トシキ!大丈夫か!」

蓮也、生きてたんだな。

「ああ!それより蓮也、頼みがある!」

「なんだ、我が友よ!」

俺は満面の笑みで、こう言った!

「死んでくれ!」

「そうか、俺に死んで欲しいのか、なら死のう……………って、ええええええ!!!」

何故だ、何故に死ねと言うのか!?!と言うような啞然とした顔の蓮也。

「だって蓮也、忘れてるだろ?自分のしでかしたことに…」

「…?」

ピンと来ない蓮也。

ああ…マジで死んだな。

だってその惚けた感じを見て、ゆかりんが…

「紫奥義『弹幕结界』」

スペカ発動してるもん。

「え『ピチューン!!』」

残機が1つ減りました。

「まだよ。境符『四重结界』」

ピチューン!!

「貴方が死ぬまで撃つのを止めないわ、『深弹幕结界・夢幻泡影』」

ピチューン!!

「境界『永夜四重结界』」

ピチューン!!

「存在否定なんてよくしようと思ったわね、魍魎『二重黒死蝶』」

ピチューン!!

「結界『生と死の境界』」

ピチューン！！

「……………」

「やっと死んだのね。」

オーバーキルってやばすぎだよゆかりん…

「申し訳ございませんでした」

蓮也の土下座。

「許さない…絶対許さない…！」

怒りのゆかりん。

「もう許してあげて…」

宥めるオレ。

「…トシキがそこまで言うなら…いいわ、トシキに感謝する」とね。」

何とか助かった蓮也。

「というより、紫がそこまで怒るの初めて見た…何をしたんだ、蓮也?」

「私が八雲紫じゃないと言ったのよ。…殺したくなるのも解るでしょ、レナ?」

彼がレナか。

「……………うん、解らなくはないね…ところで、その袴姿の君がトシキか?」

「ええ。オレがトシキです。トシキ=スピードスター。一応、神の端くれです。」

「神様!?!」

びっくりされてるが、いつものことだ。

「うちの蓮也が迷惑かけました、すつごくアホだったでしょ?」

「頭ん中?のトシキに言われたくはないな!」

「んだと蓮也!?!ブツ飛ばされてえのか!」

「おおいいぜ、白黒はつきりつけようや!…!」

オレと蓮也が睨み合う。

「…レナ、任せるわ。此处でケンカされても困るし。」

「解った！砲符『リヴァイバル』！！」

光線が迫る。

「「えっ」

チュドーン！！

「…」

「…」

蓮也もオレも、地面に伏していた。

「…そう言えば、成すべき『あること』って何なのかしら…?」

とゆかりんが言った瞬間、オレと蓮也の身体が光り始めた。

「え、何が起きるの?」

「身体が…消えてく…!!」

オレと蓮也の身体が少しずつ薄くフェードアウトしていく。

「別れの時って事か？」

「みたいだな。短い間だったけど、楽しかったぜ。」

蓮也がレナに親指を立てる。

「もう行ってしまふのか…早いな。」

「大丈夫だ、レナ！俺達が居なくなっても…」

「心には何時でもいる！そうだろ、蓮也！」

「そういうことだ！また何時か会おう！んじやな！」

オレと蓮也の姿が…

いや、オレは蓮也が消えた事しか解らなかったが…

消えた。

- 紫 (B) 視点 -

蓮也とトシキの姿が消えたと同時に、頭に響く声。

『彼らはよくやってくれたよ。だが、まだ終わらない…またあそこに来てくれたまえ。』

「はあ…暫く続きそうね…」

私は小さく嘆息し、またあの歪みに向かった。

【蓮也&mp;トシキ編】その7『感動の再会?』(後書き)

次回より「幻想の運び屋」とコラボ!!

というわけで次回

「【光編】その1『始まりはいつも突然に』」

お楽しみに!

次回更新はプロット等の制作関係上、2、3日後になると思います。

【光編】その1『始まりはいつも突然に』（前書き）

今回より「幻想の運び屋」とコラボです！

【光編】その1『始まりはいつも突然に』

- 紫視点 -

私はあの時と同じように、歪みの中の扉だらけの部屋に居た。

だが変わった事があった。

まず1つ、多数ある扉の1つが板を打ち付けられて封印されていた。

もうひとつ、ノートの記述が増えていた。

私はそれに目を通した…

『さて、君のおかげで1つ確実に変わった。まずは礼を言おう。だが、まだ扉はある。是非、扉を開き、新たな世界を見てくれたまえ。』

「2つ目の別の世界…どうなっているのかしら？」

私は扉を開け、中に入った。

閉まる扉に刻まれる文字。

『幻想の運び屋』

- ??? ? 視点 -

今日も何時ものように、彼女…ひえだの あきゆう稗田阿求あきゆうの家の前でトラックを停める。

「光、ちよつと良いですか？」

「え？」

何時もの阿求あきゆうなら真つ先に『乗せて下さい！』と目をキラキラさせて言うのだが、今回はそれが無い。…なんで？

「今日も乗せて貰おうと思って、玄関に行ったら…これが…」
阿求から渡される小包。

本当に小さな段ボール箱に入っているようだ。

「それと、その箱の上に、これが…」

続いて渡される茶色い封筒。

封筒には達筆な文字で『上松光様』と書かれている。

「俺宛て…?」

俺は封筒を開け、中のものを引っ張り出した。

「なになに…?」

中には便箋と、小さな押しボタンが1つ。

俺は便箋から目を通すことにした。

『上松光様へ

この小包を、ある場所へ届けて頂きたいのです。
届け先は…彩崎玲奈。彼に届けて下さい。宜しくお願い致します。

追伸

この宅配は数日かかるので、お仕事を終えてから取り掛かって頂くと有り難いです。

宅配の準備が出来ましたら同封のボタンを押して下さい。』

「直接運び屋の方に置いてくれりゃ良かったのに……」
俺は聞こえるはずもないと思いつながら、依頼人に少し愚痴った。

「でも誰からなんでしょうね？」

「阿求じゃないの？」

俺は阿求か、彼女の家族からかと予想していたが……

「違います。それに、彩崎玲奈なんて人、私は知りません。」

「そうか……」

だが、届け先の住所が書かれていない。
何処に届ければいいんだ？

「数日かかるらしいし……まずは仕事を終わらせよう。」

「そうですね。」

仕事を終わらせ、やることをやってからこの宅配をしよう。

俺は阿求を乗せて、何時もの通り仕事に戻った。

「ふう…疲れた…」

途中、阿求を下ろし、ガソリンも補給。

だが、まだやることはある。

「『突然ですが、急用のため5日程休業致します。皆様にはご迷惑をお掛けしますが、何卒なにこそご了承下さい』…と！」

この貼り紙をしておかないと、普通に荷物が集まってしまう。

「あ、早速準備しているんですね。」

「そうなんだよ……………なんで阿求が？」

さっき下ろしたはずなのに…

「取材と称してついてきました！」

「……………解ったよ、ついてきていいよ。」

「わあい！」

「その喜び方は何となく駄目な気がする！何となくだけど！」

そんなショートショートをしながらも、準備を整え、いよいよ俺と阿求はトラックに乗り込んだ。

「このボタンを押せばどうなるか…押してみよ、なんとかなるさ…」

「ポチつと!」

「え!?!もう押したの!?!」

その瞬間、トラックがガタリと揺れた。

「な、なんだあ!?!」

「く、車が落ちてます!」

「マジかよ!阿求、俺に掴まっててくれ!」

「はい!」

トラックがまるで蟻地獄に喰われるように沈んでいく。

…俺達は、そこで意識を手放した。

【光編】その1『始まりはいつも突然に』（後書き）

次回予告ー！

光はどうなる…！？

というわけで次回

「その2『届け先は何処に？』」

お楽しみに！

今度こそ次回更新は2日後くらいになると思います。

【光編】その2『行き先は何処へ?』(前書き)

お待たせしました!

ユニークついに20,000突破!

凄いなあ…

ありがとうございます!

【光編】その2 『行き先は何処へ?』

- 光視点 -

「う…あ、阿求…大丈夫か?」

あれからどれくらい時間が経ったのかは解らないが、俺は目を覚ました。

まるで投げ技を喰らいまくったかのように身体中が痛い、それより阿求が心配だった。

「こっちは大丈夫です…でも、此処は?」

トラックの窓から外を眺めると、空がやけに明るい。

というよりも、真っ昼間だ。

太陽の…と言ってもあれが本物かは解らないが…位置がそれを教えてくれた。

「とりあえず、色々見てみよう…話はそれからだ。」

俺はキーを捻り、エンジンを始動した。

…あんなことになったにも関わらず、奇跡的にエンジンが動いた。

異常な音も聞こえない…不幸中の幸いという奴か。

「人里に行ってみよう。情報が欲しい。」

「そうですね！」

トラックを走らせ、人里へ向かう事にした。

- 紫視点 -

「って、また部屋じゃん……」

私は「また」の展開に少々落胆した。

「ノートか……」

とりあえず、中を読んでみる。

『扉を開けてみたまえ……と言いたいところだが、もう彼は君の世界に来ている。今回は見つけやすいだろう……本来、君の世界ではまだあつてはならないものも引き連れているから。』

「もう来ているんだ…」

私は引き返し、その「彼」を探しに行った。

- 光視点 -

「…おかしいな。」

俺はある可能性が頭に浮かび、自らが置かれている立場に悲観する。

「え?」

「普通、俺が運び屋だと知っているなら…」

窓越しに見える、人々の視線。

「俺達をこんな奇怪な目で見ないだろう。」

「つまり…どういうことですか?」

いまいち事態が飲み込めてなさそうな阿求に、俺は最悪の可能性を

話した。

「俺達は何処かに連れて行かれた。それは確定だ。だけど、此処は…俺達の知る世界、俺達の知る幻想郷じゃないかもしれない。」

「へ？」

すっとんきょうな声を上げる阿求。

それもそうだ、とんでもない仮説だから。

「そう考える理由は2つ。まず、俺を知ってるような人が一人もいない。

そしてもう1つ、俺のトラックを珍しそうな目で皆見ていること。

こんなこと、俺が幻想郷に来たばかりの頃じゃなかったら有り得ない。」

「皆、忘れたんじゃ…？」

「…忘れるなんて事も有り得ないよ。一人二人の世界じゃない、全員が同時に忘れるなんて、それこそ…あ…！」

俺は思い出した。

そんなことを出来るのは、一人しかいない！

「阿求、慧音先生の所に行こう！」

「…あ！」

「もしかしたらもしかするかもしれない…！慧音先生が『全員の歴史を食べた』としたら…！」

勢いで動こうとしたが、寸前で「待てよ？」と立ち止まる。

「仮に慧音先生がやったとしても…なんでそんなことを？」

「そんなことを考えていてもどうにもなりませんよ？少しでも可能性があるのなら、確かめるべきです。」

「確かに…確かめるだけなら悪い事はないな。よし、行こう！」

俺はハンドルを握り、慧音先生の元へ車を走らせた。

「は？なんで私がそんなことを？」

慧音先生が「？」と首を傾げている。

すつとぼけられて…いるのか？

「いや、俺の事を知ってる人が一人もないんですよ。」

「そんなことを言われてもな…当の私も君の事は全く知らないんだ。…横に居る彼女なら見たことがあるが…確か、稗田阿求だったか？」

「ええ、合ってますよ。」

「私は最近、能力を使うような事は…彼が冤罪を疑われた時くらいしかなかったな…」

「彼？」

阿求が突っ込む。

「知らないのか？レナだよ、レナ。」

「レナって…あの彩崎玲奈？」

「何故にフルネームなんだ…そうだ。彼の冤罪を晴らす為に、私は歴史を確かに食べた。…が、それ以外は全くだ。」

「そうなんですか…」

慧音先生が、そもそも俺の事を知らないという時点で既におかしい。そして、その違和感はさらに深まる。

「ところで…あの動くものは何だ？どうやら君たちはあれを使えるようだが…」

「…！」

確定だ。

この世界は…俺の知る幻想郷ではない！

「あれは自動車って言うんです。少しの操作で楽に動ける機械なんですよ。」

「ほう、興味深いな。今度河童に聞いてみよう。機械は河童が強い

から。」

「すみません、ありがとうございました。」

俺達は慧音先生と別れ、今のやり取りで解った事実を阿求に伝えた。

「…まずいな、この世界は幻想郷なのは幻想郷だが、俺達の知る幻想郷じゃない。それに、文明もかなり差がある…トラックはないよ。うだし。」

「つまり、別の幻想郷、と？」

「そうだな…ガソリンも補給出来ないし、トラックは大事に使わないとな…！」

だが、今の話を聞いて良かった事はある。

彩崎玲奈…彼は実在する人物で、かなりの有名人。

ならば、彼の行方は楽に掴みやすい。

「よし、情報収集だ！彩崎玲奈…彼についての情報を掴もう！」

が、その直後にある言葉を聞く。

「それこそさっきの上白沢慧音に聞けばいいんじゃない…」

「あ」

というわけで再び慧音先生の元へ戻る俺達であった。

【光編】その2『行き先は何処へ?』（後書き）

次回予告↓

光、ついにレナに出会う！

というわけで次回

「その3『宅配終了?』」

最終回じゃないですよ（；^_^A

お楽しみに！

【光編】その3『宅配終了?』(前書き)

pV180000突破!

此処まで来たら200000行きたいですね!

【光編】その3『宅配終了?』

ーレナ視点ー

俺はと言うと、今…紅魔館に居て…

「あそぼー」

「はいー!」

なんて言っつてフランと遊びと言う名の一方的リンチを受けていた。

だつて無闇に本気出してフランをボコったりしたら、それこそ…

「むー!許さないよ!」

なんて言っつてフランは怒り、そして俺は色んな意味で死ぬ。

いや、死にはしないんだが、死ぬ。

不死の人間だからこそ言える、この微妙なニュアンスが伝わるかどうかは甚だ疑問だが…。

そんなビジョンが見えていたので、俺は手抜きというわけではないのだがフランにボコされるといふ選択肢を取った。

痛いけど、怒らせて紅魔館破壊 住む場所がなくなった!という事態になるよりかは大いにマシだ。

「ドカーン」

で、握った。

うん、握るまでは良かったんだ、だけど…

「なんで俺の右腕が吹き飛んでんのー!？」

主人公、右腕失くしました。

日常パートで右腕失くす人間の主人公なんてあんまりいない気がする。

「凄いでしょ!これを編み出すまで時間かかったんだよー？」

「うん…凄いな…」

フラン専属執事たる身(え、そんな設定あったっけ?と思う方は第一章参照)なら主の成長は素直に喜ぶべきなんだが…

血が腕があつた所からドバドバ出てます。命の危機です。

「あれ…目が…霞む…」

目の前が、真っ暗になりました。

「あれ？咲夜ー、レナが倒れちゃったよう！」

「って、これはまずいですよ！フランお嬢様、今すぐパチュリー様を呼んできて下さい！」

「わ、解った！」

翼をパタパタとして飛んで行くフラン。

この後、レナはちゃんと助かりました。

光視点

俺達は玲奈についての情報を集め、彼がどうやら紅魔館にいるらしいとの情報を掴んだ為、紅魔館に向けてトラックを走らせていたはずなのに。

普通に紅魔館に着くはずなのに。

「よおお兄さん、ええもん持ってるやん。俺達に譲ってくれよお。」

…現在の状況、野良妖怪達にトラックを包囲され、先に進めません。

「…阿求、どうしようか？」

窓を隔てた先の魑魅魍魎ちみもろりょう達によるびっくりシヨールを冷や汗を垂らし
て眺めながら、俺は聞いた。

「平和的解決…は、出来なさそうですね。」

「仕方ない…やりたくはなかったんだが…」

俺はガサゴソと自分が座っている運転席の真下のスペースから、あ
るものを取り出す。

F N F i v e s e v e N …

ぶっちやけ、拳銃だ！

「さらに自分に暗示発動！自己暗示だ！」

俺の能力、『暗示をする程度の能力』も併用して…

「トオオオオオリイガアアアアアア、ハッピーイイイイイイイ
イ！！！！！！！！！！」

銃火器乱射の超危険人物（犯罪者とも言う）に、一時的になる！

「光が壊れたああああああ！！！！！！！！！！」

阿求が叫んでいるが華麗にスルーし、俺は銃弾を乱射！！

別の世界なんだから、ちょっとくらい暴走してもいいよね。

「はははは！！さいつこうに、highって奴だあ！！！！」

銃弾は相手の身体を貫いたり、跳弾したりして相手を血に染め、まさに地獄絵図。

トラックに振り返り血がかかったが、関係ないね！
後で落とせばいいもん！

「ふう、すつきりしたぜえ…」

全て終われば、周りは無惨に横たわる妖怪達の体。

「こ、怖いよ…」

「んな？なんかあったの？」

暗示が切れました。

「あ…そういうことか…」

俺が銃を持っていた事と、周りの地獄絵図を見て、俺は全てを理解した。

さて、その後は特にトラブルもなく、ついに紅魔館に到着。

「此処か…」

俺はトラックから降り、宅配物を持って入ろうとした、その時。

「その人間、止まりなさい。」

びくっ！

顔を声のした方へ向けてみると、そこには…

紅魔館の主、レミリアが居た。

「私の許可なしにこの紅魔館に入ろうとするなんて…余程死にたいみたいね。」

額に怒りマークを付けても違和感ない程の良く出来た作り笑いにビビった。

「違います！俺は宅配物を届けに来ただけなんです！」

嘘じゃないもん。殺されるのだけは勘弁願いたい所だ。

「宅配物…？そう言えば、貴方の持つてるその箱、宅配でよく見るわね。何、私宛てなの？」

「違います、彩崎玲奈さん宛てなんです…」

すると、レミリアはさらりところどころ答えた。

「ああ、レナなら今出られないわ。死にかけてるから。」

「ええっ!?!？」

し、死にかけ!?!命の危機!?!?

「ま、レナの事だから直ぐに治るでしょうけど。でも私が代わりに届けておくわ。こちらに渡して頂戴。」

「あ、中身が何入ってるか全く解らないので、取り扱い注意でお願いします。」

俺はレミリアに箱を渡しながらそうお願いした。

「解ったわ。とりあえず本人に届けるわ。本人に届けたら貴方に伝えに行くから、少し待ってて。」

レミリアは箱を担ぎながら扉を器用に開け、中に入ってしまった。

「待つしかないか……」

俺は暫く待つ。

と、数分後、レミリアがとんでもなく焦った顔で走ってきた。

「あ、あんた！何恐ろしいものを届けてきてるの!？」

「え?」

そんな危険物だったのか?

「と、とにかく来なさい！見れば解るから!」

「あ、あああれえええ……」

俺はレミアに引っ張られ、紅魔館に消えた。

「…光、遅いなあ…」

なんて車の中で待っている少女おきつも居たりするが。

【光編】その3『宅配終了?』 (後書き)

次回予告！

レナに届いた荷物とは!?

次回「その4『荷物の中身』」

お楽しみに!

【光編】その4『荷物の中身』（前書き）

残り2話くらいでおしまいです！

【光編】その4 『荷物の中身』

…物語の整理がてら今までのあらすじ。

レナの居る幻想郷に迷い込んだ光と阿求は、得られた情報を元にレナが居る紅魔館へ向かう。

レミアに荷物を託したが、すぐにレミアが恐ろしいものを見たような顔をして戻ってきた。

…レナの運命や如何に！

―光視点―

「…な、なんじゃこりゃあ…！」

俺は目前の光景に夢ではないかと頬をつねりたい勢いだっただ。

というのも、目の前には黒いスーツ姿の青年が居たのだが…

彼、なんかおかしくなってます。

眼が虚ろだし…まるでヤンデレ化した人の眼だし…

ケタケタ不気味に笑ってるし…

「壊シテシマエ…皆消エテナクナレバイインダ…」

怖いよ…

「あれがレナよ…！」

レミリアが苦虫を噛むような表情で言う。

え、あそこでケタケタ高笑いしてる彼がレナなの？

「今の彼は正気を無くしてる…さっきの荷物を開けた途端に、彼が…！」

荷物の中身何だったの…

「お嬢様、どうします!?!」

ナイフを構えるメイド長。絵になるなあ…

「咲夜、奇襲をかけて!その間に私とフランで仕留めるわ!その運送業者!貴方も手伝いなさい!」

「手伝いたいのも山々なんですけど武器がありません」

あんな化け物じみた相手に武器なしで挑むのは自殺行為だと思う。

「仕方ないわね…!咲夜、レナの時間を止めて!」

「かしこまりました!」

直後、青年の笑い声が止まる。

「今の内に武器を取りに行きなさい!」

「す、すみません!」

俺は走ってトラックにある拳銃を取りに戻った。

―咲夜視点―

困った事になりました。

あのレナの狂いっぷりから予測するに、荷物の中身…どうやら障気
のようですね。

それも特濃濃度の障気。

邪悪なる魔力を込めた空気は障気と化し、耐性のない人間や妖怪は
…狂う。

レナは障気に当たった事がないから、あそこまで影響を受けたん
ですね。

…にしても、今回は色々とまずいですね。

不死に加え、実際の力は幻想郷トップクラスのレナが狂って暴走し
たとなると、どこまで食い止められるか…

「お嬢様、何処まで許されますか？場合によっては首をかつ切る事
になりますか…」

首をかつ切るだけで終わるなら安い方ですが。

「構わないわ。フラン、両腕を破壊出来る？」

「ちょっと動きを止めてくれたら大丈夫だよ？ただ、咲夜的能力使われちゃったら能力使えないよ。」

「…ということよ。咲夜、何とかしてレナの動きを止めて。私も手伝わわ。」

「かしこまりました。」

…と言われても、何処まで出来るか…
数秒止められれば御の字、という所でしょうか。

「お嬢様、フランお嬢様、準備は宜しいでしょうか？そろそろ解除します。」

「いいわ。」

「3つ数えたら解除します…1…2…」

数え終わる前に、フランお嬢様が先に駆け出した！

「3!!」

再び彼の笑い声が響く。

「アヒヤヒヤヒヤ…ヒヤアツ!!…?」

今の彼でも、僅かに感情があるようですね。

左腕が、へし折られています。

「お前はレナじゃないから、幾らでも壊してあげるよ！」

「面白い、才前カラ壊シテヤロウ！」

意識がフランお嬢様のみに向いている、それは甘さとしか言えない！

「レナには悪いけど、もう一度死んでもらうわよ！神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「お嬢様、私に合わせて下さい！奇術『エターナルミーク』」

お嬢様のスペルと私のスペルの同時攻撃…かわせますか！？

「甘イナ！ソナナ攻撃、私二八効力ヌ！」

「確かに、これだけでは甘いかもしれません。」

「何？」

「意識を取られ過ぎなんです。だからこうなります！！」

大量のナイフによる移動の制限、さらにお嬢様のグングニルが彼に向かい…！

「ナメルナ！」

「舐めないで欲しいのはこちらの方です…！フランお嬢様！」

「『準備出来てるよ！』」

相手がフランお嬢様の方を向く。

…4人のフランお嬢様を相手にするつもりですか？

「『禁忌』フォーオブアカインド』…ぶらす！禁忌』レーヴァ
テイン』！」「」

さあ、チェックメイトです。

「『レーナから離れる！』『」

レーヴァテイン×4から放たれる業炎。

「ぎにやあああああ！！！！！！！！！！」

業炎、ナイフ、グングニル…流石にただでは済まないはず！

「お待たせしましたあ！！俺もやりますよ！自己暗示…！！」

やっと来ましたか、運送業者さん。

彼も面白い能力を持っているようです。

「イツちまいなあ！！おらおらおらおらあ！！」

実弾とは中々ですが、もっと早くしてほしかったですね。

蜂の巣になった、敵。

「マ、マダダ…まだ「貴方の出番は終わりよ。」」

何かに殴られ、地面に伏すレナの身体。

が、近くには何も無い。

こんなことを出来るのは一人しかいない。

「や、八雲紫！？」

「意外ね…レナにもこんな弱点があったなんて。でも大丈夫よ。結界を使うわ。」

瞬間、レナの身体が結界に包まれる。

「霊夢を呼んでくるわ。ちょっと待ってて。」

隙間に消える紫。

…おいしい所を持っていかれましたね…ですが、もう大丈夫みたいですね。

「ふう…何とかなったみたいね。咲夜、紅茶をお願い。」

「かしこまりました。」

動いた後の紅茶は確かに美味しいです。

…八雲紫、霊夢、そしてあの運送業者さんの分も用意しておきましよう。

【光編】その4 『荷物の中身』（後書き）

次回予告。

光、『まともな』レナに出会っ！

というわけで次回

「その5『今度こそ宅配終了？』」

お楽しみに！

【光編】その5『今度こそ宅配終了？』（前書き）

次回最終回！

【光編】その5『今度こそ宅配終了?』

―光視点―

俺は今、すごいものを見ているのではないだろうか。

幻想郷の結界管理人、八雲紫と博麗霊夢。

レミリア・スカーレットを始めとする紅魔館の面子…十六夜咲夜（現在「紅茶を淹れてきます」と言って不在）、パチュリー・ノーレッジ、紅美鈴、フランドール・スカーレット。

…彼女達が一堂に会するなんて、そうそうない。

「…で？レナは大丈夫なんでしょうね？万が一なんてことがあれば、私は貴女に宣戦布告するわよ、八雲紫？」

私が幻想郷とレナとどっちを取るかなんて…貴女なら解るわよね？」

レミリアが真剣な表情で言う。

それだけ彼は…欠けてはならない存在なのか。

「大丈夫よ。ただの障気感染。霊夢がきちんとお祓いしてくれるから、問題はないわ。けれども、万全を期して、今日は安静にするといいわ。」

「…巫女、レナは大丈夫なのね？」

改めて確認するレミリア。

「いい加減名前呼びなさいよ…ええ。やたらと濃い障気だったけど、大丈夫よ。ただし、今日は無理をさせないこと。一応念のためよ。」

結界に暖かく包まれたような彼は、安らかな顔だ。命に別状はないようだ…良かった。

「…解ったわ。こういうことは余り詳しくないから、その…ありがとう。」

それを聞いた霊夢は身体を一瞬硬直させた。

「紫、今すぐ帰りましょう。嵐の予兆よ。」

「そうね。これは大きい嵐ね。」

「お前ら私を何だと思ってる!？」

ツツコミに入るレミリア。うん、有り得ないね!

「だって貴女のようなプライド高い吸血鬼がお礼なんて…最近、幻想郷の一部の空間が歪んでいるけど、貴女の仕業だったのね。これで解決出来そうね。」

面白いネタを見つけたような顔をして言う紫。

「あのねえ!幾ら貴女達にとって有り得ない事が起きたとしても、

異変レベルではないでしょう、これは！お礼言っただけが悪いのよ！
「？」

「別に悪いとは紫は言っていないわ。ただ…貴女も変わったのね。」

「はあ？」

少し霊夢に突っ掛かり気味のレミリア。

…まあ、自分が礼を言っただけで異変レベルなんて言われたらそりゃ怒るよな。

「少し違うわ霊夢、私達は変えさせられたのよ。良い方向に、彼…
レナのおかげでね。」

「そうね…。確かに、レナが来てからは目立った異変は少ないわ。
貴女と紫と…あの姫かぐやくらいしか。

妖怪が悪さをするのも少なくなってきた気もするし…平和になってきている、ということかしら。」

平和も良いけど、そしたら別の仕事を探さなきゃ…と一人呟く霊夢。

「…まあとにかく、暫く私と紫がレナを見てるから、心配は無用よ。」

「…そうか。くれぐれも頼むわ。」

「任せなさい。私達も、レナをこんなことで死なせるなんて惜しい事はしないわ。」

「お待たせしました。お茶をお持ちしました。」

「ちょうど良いタイミングね、ツツコミに回ったせいで喉が渴いたわ……」

「霊夢と紫様もどうぞ。」

手早く渡されるティーカップ。

というか咲夜が「紫様」って……お客さんとはいえ違和感がある。

「お茶だ………あ、これ美味しい!」

「香りが良いわね。…ジャスミンティーかしら?」

「ご名答です、紫様。取れたて新鮮のジャスミンを用いました。」

実は作者も良く飲んでます、ジャスミンティー。
すっきりして飲みやすいよ。(個人的感想)

「貴方も是非どうぞ。」

あ、忘れられてなかった。

「どうもありがとうございます。」

一口飲んでみる…う、美味い!

「咲夜、これ紅茶じゃないよね?」

「そうですね…烏龍茶にジャスミンの香りと風味を入れただけですから、紅茶ではないですね。」

「しかし、これはこれで良いわ。咲夜、これからはたまにこのお茶を淹れなさい。違う味と言つのも良いものね。」

「かしこまりました。ところで霊夢、レナが起きるまでどのくらい時間がかかるのかしら？」

「そうね…早くても日が沈む頃かしら。でも、明日の朝にはピンピンしてるはずよ。」

「それでしたら本日は此処に泊まって行って下さい。お嬢様、別に構いませんよね？」

「構わないわ。レナが大丈夫と判断するまでは帰さないつもりだったから。」

「…ということですよ。」

「解ったわ。紫、交代でレナを見ましよう。」

「ええ。念には念を入れて、ね。」

というわけでその後の会話から、霊夢と紫がレナの看病、咲夜が夕飯作りを担当することになった。

「…あ、咲夜さん、もう一人来るんでその人の分も夕飯をお願い出来ませんか？」

勿論、阿求の事だ。

かなり待たせてしまっているから、彼女も連れてきた方がいい。

「もう一人ですか？わかりました。では早めにその人を呼んでおい
て下さい。食事は作りたてが一番ですので。」

「すみません、ありがとうございます。」

俺は阿求を呼びに、トラックに戻った。

「遅いです！荷物を届け終わったかと思ったら拳銃取りに来ただけ
で、それっきり戻ってこないなんて！」

「ごめん、阿求。事情は後で話すから、俺に付いてきてくれ。」

「…へ？」

「お腹、空いただろ。咲夜さんがご飯作ってくれてるから、一緒に
食べよう。」

「…もう、心配ばかりかけるんだから…」

「んな？なんか言った？」

「なんでもありません！さ、早く行きましょう！」

「あ、ああ…」

俺達はこのあと、咲夜さんが腕を奮って作った豪華なディナーを美味しく頂き、紅魔館に泊まる事にした。

【光編】その5『今度こそ宅配終了？』（後書き）

というわけで次回、光編最終回！

「その6『光溢れる世界へ』」

お楽しみに！

【光編】その6 『光溢れる世界へ』

- レナ視点 -

「…うな…」

なんだか悪い夢を見ていたような気がする。

それにしても、かなり寝ていたようだ…どれくらいだ？

「起きたんですね、レナ。」

「咲夜さん…すみません、寝てしまったみたいですね。」

俺は起き上がろうとしたが、咲夜さんに制された。

「レナ、貴方は障気にやられてしまっていました。障気は舐めてかかると死ぬ事すら有り得ますので、どうか今日は寝ていて下さい。」

「そ、そうなんですか…解りました。」

どうやら俺は中々まずい状況だったらしい。

…流石に咲夜さんに迷惑がかかるのもアレなので、俺は素直に寝ている事にした。

「…なんか最近、良い事が全然ない気が…気のせいかな。」

光視点

「届けたはいいが、どうやって帰るんだ？」

レナに無事（と言うのも疑問だが）、荷物を届けた今、後は元の俺達の知る幻想郷に帰るだけである。

…が、どうやって帰るの？

行きは行きで随分と凄い事になっていたし、そもそもあの状況からして一方通行だったし。

これは困ったことになったぞ。もしかすると帰れないのか？

「大丈夫よ、光。貴方達は私がきちんと元の世界に戻すわ。」

「紫さん…てか、なんで俺の名を？」

「色々調べさせて貰ったのよ。今、あっちに帰る道を作ってる所だから、もうちょっと待ってて。」

まあ、紫さんの言う事なら大丈夫だろう。

「解りました。」

なんとか帰れそうだ。

つと、帰れると解った以上、最後にやらなくてはならないことがある。

俺はある場所に向かった。

「すみません、彩崎玲奈さんですか？」

レナはベッドの上で休んでいた。
が、寝てるわけではなかったみたいだ。

「？ああ…君は？」

「私、上松光と申しまして、今回の荷物の配送をしてたんです。」

「あ、まさか謝りに来てくれたのか？だったら別に気にしないでくれ。運送業者とは言え、箱の中身は見れない事もあるし、果物と言

つといて野菜が入ってたなんて事もあるくらいだから。」

「ですが、こちらのチェックも甘かったのは事実ですし……」

「違うさ。今回悪かったのは障気なんかを入れた奴の方だよ。それでも自分が悪いと思ってるんなら、もうこの話はしないでくれ。俺は『たまたま運が悪かったんだ』の一言で片づけるつもりだから。」

「…解りました。」

暫く沈黙が流れ、彼が口を開いた。

「君も、何処かから来た人間なんだろ？」

「ええ。もうすぐ帰れるみたいです。」

「そうか…俺のような奴が言うのもなんだけど、君を待っている人は君が思う以上に沢山居る。そういう人達を大切にやってくれ。俺なんかに謝るより、そっちの方がずっと大事だ。」

「…はい。」

彼は俺よりずっと大人だ、そう感じた。

「さて、と！しみたれた話はこちらまでにして、なんか食べよう！お腹が空いちやっけてたまんないんだよ。」

…うん、とつても言いづらいんだが…

「俺…ついさっき食べ終わったんですよ…」

「…」

なんてこった。

そんな事もあったが、時は早いもので、それから2日後の早朝…

「そしたらそろそろ行きます、色々ありがとうございます！」

「ああ！気を付けて！」

彼らを後ろに、俺はトラックのアクセルを踏み、紫さんの隙間に突っ込んで行った。

「…荷物、半端ないな…」

帰った先の運び屋の倉庫に恐ろしい量の荷物が山積していたのは、言うまでもないか。

「よっしゃ、今日も仕事しますかね！休んだ分頑張らないとな！」

俺は普通の日常に戻った。

【光編】その6『光溢れる世界へ』（後書き）

次回より『AVAで猫る』とコラボ！

というわけで次回

「【猫耳レミリア編】その1『The Survival』」

お楽しみに！

【猫耳レミリア編】その1『The Survival』(前書き)

最もカオスになるかも知れない猫耳レミリア編突入！！

【猫耳レミリア編】その1『The Survival』

これは、とあるゲームをしていた少女があるトラブルに巻き込まれた、そんな感じの物語である。

「はあ…」

と溜息を吐く、レミリアにそっくりな姿の少女が居た。

彼女の名は猫耳レミリア。

名前の通り、あの紅魔館に住む吸血鬼、レミリア・スカーレットにあやかっている。

が、そんな事はあまり問題ではない。

少なくとも、彼女が今さっきまで置かれていた状況に比べれば瑣末な問題ではないのだ。

「ぎ…ぎんこつ…」

目前に起きている、悲劇。

「なんで…こんなに…皆…」

膝から崩れ落ちるようにして、へなへなと座り込む彼女。

それもそうだ。

今まで周りに居た見知らぬプレイヤー達が一瞬で斬り捨てられたのだから。

「…？驚いた…まさか生き延びる人が居たなんて…」

少しずつ、『彼女』がこちらに歩いて来る。

「こ、来ないでっ…！」

生存者はその『彼女』に向かって両手に構えた銃火器マシンガンのトリガーを引く。

恐怖からの攻撃。

だが、銃弾は上手く行っても『彼女』の白銀の髪を僅かに掠る程度。

そんな攻撃で、『彼女』を倒せるはずはなかった。

震えた銃身、不安定な精神状態では、どう考えても倒せる可能性は0。

「…」

相手が何か言っているが、猫耳レミリアにはその言葉すら届かなかった。

「まず、人の話を冷静に聞けるようになるのか。」

一瞬、まさに一瞬で二丁のマシンガンが奪われた。

「か、返して！」

猫耳レミリアは必死に武器を取り返そうとする。

「とにかく落ち着いて。そしたら返してあげるよ。」

「え？」

動きが止まった。

「まず、自己紹介から。私はクロナと言います。貴女と同じ、ネットの中の存在だよ。」

「ふえ？CPUとかNPCじゃないの？」

「ちゃんと中的人也居ますよ？」

「うつそ！？ホントなの！？」

「ホントです。ちなみに中身は男だけだね。」

「えっ」

俗に言うアレなのかと一瞬思ったが…

「だって妹が勝手にキャラ作成しちゃったもん…」

「妹居たんだ」

「うん」

まあ、なんか色々あって、私は助かった。

「…そんなオチだったんですか!？」

クロナさんに聞いた話の全容は、これだ。

どうやら、「絶対的に強い存在」を探していたらしく、クロナさん本人が直々に確かめていたらしい。
で、それに生き残ったのが…私。

「あの…斬られた人達は…」

「強制ログアウトになっただけ。大丈夫。」

「それに、その顔…明らかに…」

「魂魄妖夢だね。」

さっきの白銀の髪からしてまさかとは思ったが…本当だったとは。

「それに、私がやってるAゲームVVAではあなたを見た事ないけど…」

「別のゲームからの出演。そうだ、これからあなたにはやって貰いたい事があるんだけど…」

「え?」

ポカーンとしていると、衝撃の一言を聞かされた。

「今からあなたにはある場所でサバイバルしてもらいます。きつとあなたは喜ぶ場所だと思っけど、あくまで生き残るのが目的だから。やられたらいろいろとまずい事になるから、気を付けてね。」

「具体的には…?」

すると、クロナさんは顔を背けてこう呟いた。

「…最悪、死ぬ事に…バーチャルのはずなのに、本人が。」

「ええっ!?!」

何この超物理法則完全無視なペナルティは!?

「とりあえず、きつと向こうに行けば解ると思っけど…とにかくいつてらっしい!」

ぽいっといきなり投げられる私。

その先にはよく見る紫色の隙間が。

「うそおおおおお!!!…!?!?」

かぶつと隙間に喰われる私。

「…これでいいかい、紫さん？」

クロナという仮面を消し去り、俺は本来の姿に戻る。

「ありがとう。戦闘能力は0に等しいけど、能力はかなり便利ね。」

「まあ、この能力を得たせいで肉体を失くしたんだが。」

なんせ毛玉だもん。

「…そうね。後は私に任せて。」

「あいよ。」

【猫耳レミリア編】その1『The Survival』(後書き)

次回「その2」『Escape from Enemy』

とんでも展開はまだ続く！

猫耳レミリアの運命や如何に！

【猫耳レミアア編】その2『Escape from Enemy』（前書き）

お待たせしました、その2です！

「はあ…」

此処は何処？

というより…なんか寒気がする。

なんだろう…後ろから恐ろしいオーラを感じるんだけど…

「こんにちは。」

後ろから声がした。

私は一応、確認の為に振り向いてみた。

ゆうかりんが居ました。

最初からクライマックスです、本当にありがとございました。

現実。

うう…クリア出来る気がしない。

とりあえず、現在はきつとStage 1の道中と言った所だろうか
…にしては中ボスがかなり理不尽な強さな気がするが…

流石現実。

『東方猫耳絵巻』

Stage 1 : 『幻想の世界』

中ボス : 風見幽香

ボス : ????

Stage 2 : 『?????』

中ボス : ????

ボス : ????

Stage 3 : 『 ???? 』

中ボス : ????

ボス : ????

Stage 4 : 『 ???? 』

中ボス : ????

ボス : ????

Stage 5 : 『 ???? 』

中ボス : ????

ボス : ????

Stage 6 (Final) : 『 ???? 』

中ボス : ????

ボス : ????

∴ 幽香から逃げて、私は新たな場所に着いた。

「∴ よりによつて、なんで迷いの竹林なのよ……」

位置関係がすごくおかしい気がする∴ あの際間妖怪の仕業かもしれない。

「あ、此処つて幻想郷なんだよね？なら……！」

きゅぴーんと目を光らせる私。

それもそのはず…

愛しのレミリアお嬢様が居るんだから！

「よし、お嬢様の為ならこんな竹林なんて楽々突破出来るわ！」

私は意気揚々と竹林に入る。

一時間後。

「迷いました…」

ずーんと落ち込む私。

ホントに迷うんだね、迷路なんだね。

「確かこんな時は藤原妹紅を探せばいいんだっただっけ…」

そう、もこたん。

何処かにINする事に定評があるもこたん。

寧ろけーねにINされるんじゃ…角的な意味で。

「って何考えてるのよ私！今はこの竹林を出ることだけを考えるのよ！」

私は確実に脱出する為のある妙案を取った。

竹に傷をはつきりとつけ、目印とする。

「よし、これで大丈夫！ついでに妹紅に会ったら万々歳よ！」

…現実、このあと2時間程会えませんでした。

この間の出来事を列記してもいいのだが、竹を見た、印を付けた、何故か印を付けた竹をまた見たの繰り返しなので面白くも何ともな

いので割愛。

「ありや？なんであんたがこんな所に？」

「あ、藤原妹紅だ！会いたかったよぉ〜！」

救世主、現れる。

そう言えば本物のお嬢様って妹紅と仲良かったなんて描写…なかった気が。

私は涙を浮かべて妹紅の身体に抱き着く。胸…でかいけど。私と違ってかなりでかいけどっ！！

「うわっ、なんで抱き着いてくるんだ！？お前は吸血鬼だろ！私の血はきつと美味しくないよ!？」

「ふえ？血は要らないよ？」

どうやら本物と勘違いしているみたいだ。

「へ？あんた…レミリアだろ？」

「ううん…レミリアであってレミリアでない。私は猫耳レミリア。血は要らない、雑食系の普通の女の子です!！」

自分で『普通の女の子』と言うのも色々とアレだが、少なくとも本物みたいなカリスマさ及び強さは持ち合わせていないつもりなので、きつと普通…だと思っ。

「そ、そうなの？もう一度聞くけど、普通のフリして後ろから襲いかかって来るとかって展開じゃないよ…ね？」

「そんな勇気ある事出来ませんよ…」

まずはこの竹林を突破する事が一番なのに、その唯一の近道を塞ぐような真似は出来ない。

「わ、解った…とにかく、外に出たいんだよね？」

「永遠に迷うのは嫌…」

「よし、だったらこっちよ！」

私は妹紅についていくような形で、なんとか竹林を脱出した。

「すみません、ご案内ありがとうございました。」

「ほ、本物と違ってすっごく礼儀正しいっ！？」

凄く怪訝そうな目でこちらを見てくる妹紅。

「本物がこんな性格だったらしいのにな…」

そうこう言っている内に、何故か人里に着いてしまいました。

「へっくち！」

「お嬢様、風邪を引かれたのですか？」

「いいえ咲夜、誰かが私を噂していた気がするのよ…」

と言っていた本物さんが居たりした。

次回予告

「その3『Flying a Visitor』」

なんと本編で出ていないあのキャラが先にフライング登場！

こゝこれはアリなのか！？

とにかくお楽しみに！

出てくるキャラのヒント：三月精・緋想天・風神録（あややや以外）の内から出ます。

【猫耳レミア編】その3「Flying a Visitor」(前書き)

PV190000・ユニーク20000突破感謝!

ど、何処まで行くんだ!?

【猫耳レミリア編】その3「Flying a Visitor」

「…面白そうね、現界は。」

と、下の世界の営みを観察していた少女が居た。

勿論、現界とはレナ達が住んでいる世界の事である。

「…まずいですよ、総領嬢様^{めいしやうじやう}。総領嬢様の事だから、現界に降り立ってみたいとかって思っているんでしょう?」

「解ってるんなら私に付いてきなさい、衣玖。衣玖が居ればなんとかなるわ。」

「始末書何枚書いてると思ってるんですか…?私、最近総領嬢様の珍事に頭を痛めているんですよ?」

「自由こそ人類に認められた最大の選択よ。これを活用せずしてどうするの?」

ルールは守るに越した事は確かにないが、だからといってそれを一から十までできっちりかつちり守るなんて馬鹿げた事は面白くもなんともないので却下。

私は面白い事が好きなの。こんな平和で何にも起きない世界はスリルがなくて面白くないわ。

「…それもそうですが…あまり粗相^{そそう}をなされると、大天使様に怒られますよ?」

「うっ、痛い所突くわね。でも、天人たるもの色んな世界の民の事を知らなければならぬ。違う?」

「どうだ!かなりまともな意見、認めるしかな…」

「至極まともな考えですが、この状況から言い訳と判断します。」

「予想の斜め上だったー!?!」

「そこはちゃんと空気読んで!認めてよ!」

「いえ、空気を読んだ結果ですが…」

「う、うぬぬ…衣玖には口喧嘩で勝てる気が全然しないわ…」

「で、諦めて白旗を上げる。」

「ですが、ここ数ヶ月天界以外の世界を見ていませんね…現界はどうなっているのでしょうか?確かこの間見た時は紅魔館から霧が見えていた時でしたし…総領娘様の仰る通り、気にはなりますね。」

「が、私の気持ちをきちんと掬すくってくれるのが彼女…永江衣玖ながえいくの優しさだ。」

「でしよう!?!行こう、現界に!」

「はあ…まあ、私が何時もの通り始末書を数枚書けば解決する問題ですし、行ってみますか?」

「流石、そうこなくっちゃ!」

こうして私達は現界に下りてみることになった。

久しぶりの現界…どう変わっているのか、非常に楽しみね。

猫耳レミリア視点

「人里ってこうなっているのね…」

正直な話、原作はプレイしているので大体「此処は何処？」というのは解っていたりするのだが、流石に人里には入った事がなかったので見るものが新鮮だ。

一昔(と言っても江戸時代くらいかしら?)の街並みはきつとこうなっていたんだらう、私はそう感じた。

「そう言えば、喉が渴いた…なんか飲み物が欲しいな…」

と、目の前にちょうど狙ったかのように茶屋があり、私はスキップをしながら茶屋へ向かった。

『東方猫耳絵巻』

Stage：1 『幻想の世界』

中ボス：風見幽香

ボス（？）：藤原妹紅

Stage：2 『人里で…』

中ボス：????

ボス：????

Stage：3 以降は割愛。

「おっ、これはとっても美味しいわね！店員さん、もう一本！」

「かしこまりましたあ！」

あれ？あそこではくぱくと三色だんごを食べてるのって…？

桃が乗った帽子を被った、今時の若い娘と言えるような白がメインのカラフルな服装。

背中にかけてる、緋色の剣。

蒼いしなやかな長髪に、これまた緋色の眼。

ま、まさか…この人って…

比那名居天子ひなな井してんしじゃ…？

「あのう…もしかして、比那名居天子さんですか？」

「むえ？へっせほづらけど？」

だんごを頬張ったままこつちを見る天子。

…同胞だつ、貧乳の同胞が居た！

「つるぺただあー！やっと仲間が居たよあー！」

「そのの者、待ちなさい。総領娘様に近付くな！」

私にドリルを向ける、もう一人の女性。

あ、キヤーイクサーンだ。

「ふあふあひく、ほうはっはひないほ。（まあまあ衣玖、そうカツカしないの。）」

「しかし…！この者が危険人物だったらどうするんです！」

その質問に、天子はだんごを飲み込んで返した。

というより本当に天子の命を狙ってるんだったらここで一発やってるよ。

「じゃ、衣玖が殺ってくればいいじゃない。」

「あのですねえ…しかし、危険人物かどうか判断させて貰わなくては、総領娘様の命が危ない。その者、名を名乗れ！」

「わ、私？猫耳レミアよ。」

「私は永江衣玖！覚悟お！」

衣玖の右腕のドリルが唸る！

「なかなかやりづらいわね…！あんまりやりたくはないんだけど…！」

両腕にマシンガンを構えると同時に発砲！

命中精度は悪い（使用者のスキルの意味で）けど、牽制にはなるはず！

「ふむ、銃火器が貴女の武器ですか。相性は最悪ですね…ですが、これならどうですか！？魚符『龍魚ドリル』！！！」

ドリル…+弾幕！？

「くっ！」

私は持ち前の回避術でなんとか掠り^{グレイス}だけで済んだ。

が、服がちよっと焦げたー！お気に入りだったのにー！

「遠距離じゃ当たらないし…あれをやるしかないわね！」

銃口を相手に密着させてのショット。

威力は幾分か落ちるが、確実に当てる為にはこれしかない…！

「折角の遠距離武器を使わないのですか！？それでは宝の持ち腐れですよ！」

「ええ、確かに、このままじゃ宝の持ち腐れね…！」

「！」

何かやる、そう直感的に感じた衣玖は警戒する。

「策を張ろうとしているようですが、その前に潰せば問題ない！雷符『ライトニングフィッシュ』！！！」

一直線に向かう魚の群れのように、雷撃が猫耳レミアに襲いかかる。

「そう来ると思ってたわ！」

それを読んでいたかのように、絶妙な身のこなしで雷撃を回避する。

「なっ！？」

「やりたくないけど、こんな所で死にたくないから！羨望『レイピア・オブ・ガン』！」

本物のような立派な武器は出来ないけれど。

本者のように強くないけど。

でも、望みを力にするくらいなら、出来る!!

本来実弾しか放たないはずのマシンガンから、紅色の小刀が無数に放たれる。

「…相手の力を見誤っていたようですね…!!」

それは衣玖に着弾し、勝負は決した。

「凄いわね。あの衣玖を倒すなんて。今度は私の番かしら?」

剣を構え、戦闘態勢を整える天子。

「久しぶりの戦いだから、腕が鳴るわ!」

「ほお、腕が鳴るのか。」

「そうよ!」

「そうか…ならばその前に貴様の頭をかち割らせて貰おうか!」

「え？」

と天子が振り返った時には時既に遅し。

人里の守護神、慧音先生の頭突きが襲いかかる所だった。

え？その後はって？私も一撃喰らったよ

Stage：2 『人里で…』

中ボス：永江衣玖

ボス（ある意味ラスボス？）：上白沢慧音

結果：頭がリアルに割れそうな頭突きを喰らいました。よく死んでないね私：

【猫耳レミリア編】その3「Flying a Visitor」（後書き）

次回予告

「その4『Goto Pandemonium』」

猫耳レミリア、ついに紅魔館へ！

その道中に…！？

お楽しみに！

前回のお知らせに大嘘がありました…（またかよ）

PVは確かに190000だったのですが…

ユニークは21000でした、申し訳ありませんでした。
改めて、ありがとうございます！

【猫耳レミリア編】その4『Goto Pandemonium』

今までのプレイバック。

『東方猫耳絵巻』

Stage：1「幻想の世界」

中ボス：風見幽香

ボス（？）：藤原妹紅

Stage：2「人里で…」

中ボス：永江衣玖

ボス（と言う名のラスボス）：上白沢慧音

今回はStage3！

猫耳レミリア視点

慧音の頭突きと言う名の制裁を受けた後、戦う気を完全に失くした私と天子は「TKG（つるべたは希少価値だ軍団）」を設立した上で、再会を願って別れた。

「さて…早くお嬢様に会いたい…」

私の当面の目的は麗しきレミリアお嬢様に会いに行く事。
本物のお嬢様さえ見れば死んでもいいわ。

「行こう、お嬢様に会いに！」

スキップをしながら先に進む。

「って、これは何なのおおお!?」

私は紅魔館に続く一本道を進んでいた…はずなのだが。

目の前が氷で、先に進めない。

マシンガンを撃つて氷を砕いてみたが、氷は分厚いようで、砕けそうな雰囲気はない。

が、誰がやっただくらいは予測出来る。

「あのバカの仕業ね…!!」

チルノ。公式も認めた『バカ』。

「困ったわね…このままでは先に進めない…」

ところが、実はこの氷の向こうではある戦いが繰り広げられていたりしていたのだ。

???視点

くっ、レナに届けたいものがあっただけなのに、なんでこのバカはわかってくれないのよ!?

「気持ち悪い、その姿は！凍れば少しはマシになるわ！電符『ヘイルストーム』!！」

「しゅー君、弾幕展開!」

吹雪を回避しながら弾幕を展開し、なんとか回避する。

「手荒な真似はしたくなかったんだけど、話しても解ってくれないから実力行使しなくちゃ! !しゅー君、一回身体に戻って!」

【え!?!あぶないよ!】

筆談とか相変わらずの才能の凄さだが、今はそんな事を言ってる場合ではない。

「良いから戻って!策はあるから!」

【わ、わかった!】

戻ってくれた!よし、あの手段が使えるわね。

「気持ち悪いものを出さなくていいの?あたいはあの時と違う、さ

らに強くなつたんだから！」

「だったらさつさと本気を出しなさいよ。でないと私は倒せないわよ？」

はい、挑発に…

「言われなくても解ってるわ！」

乗った！

相手は両手に氷の剣を持ち、一直線に私に向かってきた！

「面白いわ！正々堂々と戦わせて貰う！」

チルノのように武器は持ってないし、作る事も出来ないが、私には『あれ』がある…！

「ええいつ！」

真一文字に小さな身体を精いっぱい使って剣を振り下ろす。

それを私は直に…

喰らった！！

「なっ！？あんだ、かわさないなんて、死にたいの！？」

「人の事より、自分の心配をした方がいいわよ？」

私の力さえ知っていれば、この時点で私から離れないといけないんだけど…

ま。知ってるわけがないよね。

斬られた右腕から鮮血が舞う。

痛いけど、これでいいの。

これで、私の勝ちが決まったから。

さっきから小さな小さな『傷』が私の素肌のあちこちに付いている。全く、女性にとっては敵なのよ？

…でも、その『傷』こそが私の最大の武器。

『傷を操る程度の能力』…今更の能力説明とか、よく引つ張ったわね。

名前の通り、自分に付いた傷を自在に操れる。

というわけで、ぶっ倒れて貰おうじゃないか。

「さようなら、妖精さん。傷符『ペインバースト・リバース』」

…自分の傷を圧縮、及び増幅。

そして、ちょっと当てに行くだけで全ては終わる。

翼が折れた、傷だらけの妖精は放物線を描きながら飛んで行く。

小さくバウンドし、相手は動かなくなった。

「ふう…終わったかしら。」

私は彼女に触手製の治療薬を塗り、先を急いだ。
チルソ

猫耳レミリア視点

…先に進めない…

奥からなんか音がしたが、何が起きてるかわかんないし、どうしま
しよ…

「お前、なんでこんな所に居るのかー？」

「！ー！」

振り返ったその先には、つるぺたその2、幼女ことルーミアが居た。

「というより、貴女の思ってる人物じゃないからね。」

「え？レミアじゃないのかー？」

「うん…ちょっと違う。私は猫耳レミア。レミアであって、レミアじゃない。」

「よく解らないけど、お前を食べていいのかー？」

「駄目っ！」

良いって言ったら肉体的な意味で間違いなく喰われる。

カニバリズムは勘弁。

…でも性的な意味でなら喰われていいかも。あ、逆に食べてしまうかも。

「うう…お腹空いたのだー！」

「解ったわ。ご飯食べに行きましょう。でもね、この氷があって先に進めないのよ…」

「解ったのだ！夜符『ナイトバード』！」

チュドーン！

氷が砕けました、妖怪って凄いな！

「行きましょー！」

私とルーミアは紅魔館へてくてくと歩いて行った。

【猫耳レミリア編】その4『Goto Pandemonium』（後書き）

次回予告！

ついに、ついに猫耳レミリア、紅魔館に着く！

というわけで次回

「その4『Into the Pandemonium』」

お楽しみに！

カオスの権化となる今回及び次回…！

先に謝っておきます、ごめんなさいっ…！

・レミリア視点・

私は日課となった、『紅魔館に住む者』の運命の行く先を確かめていた。

「…？」

また妙なビジョンを運命から見た。

何これ…私？

893

が、怪我したとかそんな様子はなく…
寧ろピンピンだわ、でも何かに驚いているみたい。

これから何か不吉な事でも起きるのかしら？

暫く物思いに耽^{ふけ}っていると、近くで「パン」と乾いた音が鳴った。

これは…パチエね。

空間転移魔法…かなり高レベルの魔法よ？

「どうしたの、パチエ？」

「紅魔館ニルに近付いてくる妙な魔力を持ったものについてよ。」

「妙…？氷精チルノとか宵闇ルミアの妖怪じゃないの？」

彼女達も随分妙に強い魔力を持っているが…？

「違うわ。この魔力の感じ…レミイ、貴女のものよ。」

「は？」

フランだと言うならまだ私の妹だから解るが、私そのもの？

確認の為、フランの居場所を聞く。

「フランは？」

「レナと外で何時もの通り遊んでいるわ。咲夜も一緒だから、フランじゃないのは確かなのよ。」

…確かに、外では相変わらずの閃光が見えている。

それに、フランの楽しそうな笑い声、レナの悲鳴が聞こえて、咲夜が「レナ、大丈夫ですか!？」なんて言っている。

フランじゃないのは確か。だとするなら…？

「パチエ、美鈴を起こしてきて。ドッペルゲンガーの類かも知れないわ。」

普通に考えれば、擬態能力を持った妖怪：例えば影真似人形ドッベルゲンガーとか魔法使い。

「…と思つてよく調べてみたんだけど…ドッベルゲンガーにしては真似が巧うますぎるのよ。ドッベルゲンガーならば1分に一度だけ魔力の波長が狂う、ノイズが入るはずなのよ。そしたら変身魔法かなと思つて、解除魔法もかけてみたけど効果なし。」

「つまり…?」

結論は…

「余程の高レベルの変身能力を有する何かか…同一人物、この二択よ。」

変身能力だったとするなら、私の弱点である太陽光対策をしていないと変身した所で即死する。

それに、誰かを騙すつもりなら日が照つている内に来ては意味がない。

…同一人物の可能性が高い。

「…同一人物だとしたら何の用なのかしらね?まさか紅魔館ニルを自分の家と間違つているのかしら?」

「同一人物だとしたらもう一つ問題が生じるわ。『同じ人間は自然には二人と存在出来ない』…魔法界の大原則が覆るわ。」

人口だとしてもやはり複製クローンでしかない以上、生命維持はおいそれと簡単には出来ない。

賢者の石による命の複製…ホムンクルス人造人間がちょうどいい例だわ。あれの

制御は大変…それに命の複製と言つのも、倫理的にかなり問題があるしね。」

パチエがふうと一息付く。

「ふむ…でも、そのものに会ってみない限り、真実は解らないわ。百聞は一見に如かず…その件のものが来るまで待っていきましょう。」

「ええ。警戒だけはきちんとしておきましょう。美鈴を起こしてくるわ。」

パチエは再び「パン」と音を立てて消えた。

「私の複製クローンか…面白い事をしてくれるじゃない。本物の実力、見せてやるうじゃないの。」

- 猫耳レミリア視点 -

『東方猫耳絵巻』

Stage:1 『幻想の世界』

中ボス…風見幽香
ボス…藤原妹紅

Stage : 2 『人里で…』

中ボス…永江衣玖

ボス…上白沢慧音

Stage : 3 『紅魔館付近』

ボス?…ルーミア

今回はStage 4!

「お・な・か〜、おながすいたのだ〜
おいし〜いたべもの、たべたい〜のだ〜」

ランランと歌うルーミア。

…やべえ、可愛い。

あ、ダメダメダメ、私はお嬢様一筋なの!

「もう少しで着くわ、待っててね。」

「わーい!」

…今更思ったのだが、こんなに日が照っているのにも関わらず、私はピンピンだ。灰になったりする様子は全くない。

やはり見た目だけがレミリアで、中身はただの人間ということなのだろうか？

「…灰にならないのは嬉しいんだけど、飛ぶくらい出来たっていいんじゃない…」

ジャンプ力は地味に高かったが、空を自由に飛べる訳ではない。タケコ○ターが欲しいと思った今日この頃。

それに、キヤークサーンと戦った時のあのスペルカードは何だったのだろうか？

夢中になっていたとは言え、A V Aは当然スペルカードの実装はなされていない。

そもそも関係ないしね。

まさか、幻想郷だから能力が追加された、とか？

そんなことは…あるのかな？

よく解らないが、もうすぐ愛しのレミリアお嬢様に会えるんだー！
カリスマMax状態のお嬢様、きっと言葉では言い表せない程のかっこよさなんだろうなあ…

「着いたよ？」

「あ…」

いつの間に、紅魔館に着いていた。

…何時ものように寝ている門番、とは行かなかった！

「貴女ですね…侵入者は！」

え、なんで起きてるの？

こついう時って、寝ていてスルーできるんじゃないの？

「それにしても、お嬢様にそっくりですね…化けの皮を剥がしてやる！覚悟お！！」

えっ、縮地法？

一瞬で姿を消すとか、Z戦士なの！？

「待ちなさい、美鈴！」

首筋に当てられたはずの裏拳が、寸前で止まった。

とっつより、この高圧的な声って…まさか！？

「…その者、一度だけチャンスを与えよう。私に化けているのなら正体を表せ。でない次は…殺すわよ？」

と、独りでに開かれた扉の奥から現れた…

もう描写なんて要らないよね？私のターンで良いよね？

…よし、良いみたいだから…

きやあああああ！！

最高最愛のお嬢様がついにキタあああああ！！！！！！

「ちよっ、貴女…」

幻想郷一の美少女、カリスマ溢れる麗しきお嬢様キタあああああ！！

「ねえ、ちよっと…」

よし、お持ち帰りよ！

何があっても絶対持ち帰りするんだから！

というよりお持ち帰りさせてよ、お持ち帰り！

お持ち帰りするんだー、おーもーちーかーえーりー！！

「お持ち帰りなんてさせないわよ！？ていうかなんで地の文で喋ってるわけ！？」

簡単ですよお嬢様、『愛』です！

愛さえあれば地の文で喋るなんて朝飯前どころか寝起きでも出来ます！

「とりあえずレミリアお嬢様、私と結婚してください！そして新たな幻想郷を、私と一緒に創りましょう！」

マリッジ、marriage、レッツマリッジです！

「ええっ！？幻想郷を創るといっのは中々面白そうだけど、結婚は勘弁よ！？そもそも貴女、女性でしょう！？」

くうう、その意図しない展開に驚いてる顔…

萌えるっ！

「愛に性別なんか関係ありません！愛さえあれば全て変えられるんです！」

「何その少年漫画的な思想は！？とにかく、結婚はしないわ！」

「ええー…」

「露骨に嫌そうな顔をしない！」

「しょぼーん…」

「顔文字を持ってこない！」

ぐぬぬ…（…）この顔文字まで知っているとは、流石お

嬢様！

「…仕方がない、最終手段を講じましょう…要は私が主人公になれば主人公補正で願いは叶うはず！

レミリアお嬢様、見ていて下さい！愛を知った人間は最強だと言う事を、此処に証明してみせましょう！」

「はあ…そこまで言うなら一度だけチャンスをおあげしましょう…私の部下を全員倒せたならば、結婚でも何でも好きになさい！！咲夜、何としても彼女を倒すのよ！！」

「かしこまりました、お嬢様！」

…十六夜咲夜…レミリアお嬢様の寵愛を受けている…敵！

「レミリアお嬢様の愛を受けるのは私だけで良い…！十六夜咲夜、同じ貧乳としてなら歓迎するけど、これは別の問題よ…！！」

「なっ、私はちゃんとあります！」

「そう主張するのが貧乳よ！わたしたちとにかく…やられなさい！！」

此処に、レミリアお嬢様を賭けた死闘が、始まった。

『東方猫耳絵巻』

Stage : 4 『結婚試練』

中ボス : 十六夜咲夜

ボス : 紅美鈴

Stage : 5 『結婚試練2』

中ボス : パチュリィ

ボス : フラン

Stage : 6 『最後の壁』

中ボス : ????

ボス : ????

次回予告！

これが…最終回？

え、最終回…じゃない？

ええっ、どっちなの！？

というわけで次回

「その6『Let's Marriage!』」

お楽しみに！

・猫耳レミリア視点・

「お嬢様は、私が守る!！」

白銀の閃光のような速度で、ナイフが飛んでくる。

「良いわ、何から守るのは全く知らないけど、守ってみなさい！」

閃光を横目に見ながら、私はお返しにと言わんばかりにマシンガンの火を吹かせる。

「何から守るのが、ですって…? 貴女からですよ!！」

ナイフの発射速度が上がる。

人間で出来る発射速度じゃないわよ、あれは…

それにナイフだから、刺されば重傷間違いなし。

…ならば近距離戦か!

私は腰を落として体勢を低くし、真っ直ぐ咲夜に向かう。

「遠距離戦を仕掛けると思っていました…! どうやら近距離戦の方が得意みたいですね!」

両手にナイフを構えての近距離戦。

相手のやり方は、此処までは読めている…想定範囲内。

やることは一つ。

「そのナイフは危険物よ！取り扱い注意ね！」

ナイフを狙った、ショット。

ナイフさえ弾き飛ばせば、こちらにも勝機はある！

「やはりそう来ましたか…ですが、それを読まれないと思うのは甘いです！」

確かに、ナイフに銃弾を当てて弾き飛ばすにしても、ナイフを動かされたらおしまいだ。

…銃弾、だけならね。

「甘いのはそつちよ！はあっ…！」

手首を蹴り、ナイフは宙を舞う！

「…っ…！」

「ボサツとしてないの！」

両手のナイフを蹴飛ばし、私はさらに咲夜に緊迫！

「肉弾戦なら負けないわ!!」

相手が人間である以上、急所は定まっている…!!

「そこお!!」

ぐっと身を落とし、人間の急所の一つ、溝尾目掛けて正拳突き!!

「ぐうっ!!」

「まだよ!!」

よろけた隙だらけの相手にさらに追撃を!

左腕のラリアットからの右手のストレート!

左手の裏拳からの、顎へ掌底!!

「伊達に格闘技やってるわけじゃないのよ!!」

止めの遠心力を加えた、回し蹴り!!

咲夜は見事に吹っ飛び、地面に叩き付けられた。

「さ、咲夜!?!」

お嬢様が咲夜の方に走っていく。

…命に別状はないはず、安心して下さい。

「お…お嬢様…すみません…」

「…くっ、パチエ！治療は任せるわよ！美鈴、咲夜の仇を取るのよ！」

「かしこまりました！」

パチュリーが咲夜の治療に当たり、続いて美鈴が私の前に立ちはだかる。

…きつと一番の強敵になり得る相手、紅美鈴。

私の武器…格闘技の技は、あらゆる格闘技のスキルを持ち合わせている美鈴には間違いなく効かない。

かといって遠距離での銃撃は普通にかわされて、接近されてシバかれて終いだ。

…遠距離戦は考えない方がいい…！

近接で張り合うしか、勝てる手段は…ない！

私はある意味最終決戦を前にする勇者となっていた…！

と、その瞬間！

「美鈴、あそぼー！」

美鈴に抱き着く…

フラン。

「え！？妹様、今は遊んであげられないですよ！」

「えー！遊んでよぉー！」

駄々をこねるフラン。

か…可愛い…！

「レナと遊んでいたらいいじゃないですか！」

「だってえー…レナは倒れちゃったんだもん。美鈴、遊んでよー！」

このままではテコでも動かないと判断した様子の美鈴は、困った顔でお嬢様の方を向いた。

「お嬢様…どうします?」

すると、お嬢様は顔を横に振った。

そして口パクでこう言った。

「諦めなさい」と…

「解りました…では妹様、あっちで遊びましょう!」

「やったあ!美鈴大好き!」

…あ、美鈴が居なくなった。

こ、これはまさか…まさか本当にお嬢様と結婚出来るんじゃない!!

「パチエは咲夜を治療してるし、美鈴はフランと遊びに行っちゃっし…!小悪魔!何とかして!」

「何とかしてと言われてもお…!」

困惑した様子で飛んでくる小悪魔。

その30秒後、倒れました。

え?殴ったら倒れた

「小悪魔ああああ！！！！？くっ、レナ！貴方だけが頼りよ！…あれ？レナは？」

誰かを探しているお嬢様。それもそそるっ！

「お嬢様…レナは…もうすぐ来ます…」

向こうで若干回復した咲夜が喋る。

「そうなの！？レナなら止めてくれるはず！頼むわレナ！」

ところが、やってきたのは…

「お、お待たせ…主人公…やってきました…」

ポロポロの包帯姿のミイラだった！

「…え？何、その姿？」

「お嬢様…レナは…さっきまで妹様と遊んでいて…大怪我を…」

「あ」

伏線は張っていたのだ！

「貴方も敵ね…？えいつ！」

一発殴つたら…

「ぐぐらっ!」

即死。

「う…嘘…まさか此処までやられるなんて…」

顎が外れそうな程口をぽかんと開けるお嬢様。

やったあ!これで結婚決定だあー!

【猫耳レミリア編】その6『Let's Marriage!』(後書き)

次回予告!

最終回だ!

というわけで次回

「その7『Ceremony』」

お楽しみに!

【猫耳レミアア編】その7『Ceremony』（前書き）

というわけで最終回だ！

【猫耳レミリア編】その7『Ceremony』

というわけで私、猫耳レミリアはレミリアお嬢様と結婚する事となりましたあー

つ、つまり私は永遠にお嬢様と一緒に…

あ、あんなことやこんなことも…

ゴクリ。

ど…どうしよう？

このまま行ける所まで逝っちゃおう、あ、行っちゃおうか？

「行こう！天国ヘブンの向こう側へ！」

ふふふ…忠誠心は鼻から出るなんて言ってた咲夜っぽい人間（咲夜じゃないよね、あれは）も居ただけ…

愛情は身体中から出るのです！

「おーじょーさまっ！」

私のがばっとお嫁さんとなっただお嬢様に抱き着く。

「うわっ！どうしてそんなにくっつきたがるのよ!？」

「だって、可愛いんですもの、可愛いものを愛でない理由が、何処

にあるんですか？」

「か、可愛い!？」

ポシユと、顔を真つ赤にするお嬢様。
これぞ真の深紅スカーレットデビルの悪魔!…なんてね。

「ところで、結婚式は何時になるんですか？」

「そうねえ…色々手配してるし、きつと一週間後くらいになるかしら。」

正直な話、最初お嬢様は結婚に反対していた。
しかし、勢いで言ってしまった一言「部下を全員倒せたなら結婚でもなんでも好きにして」。

まさか美鈴が離脱、パチュリーは治療、そしてレナとか言う奴のボロボロっぷりまでは考えていなかったように…

しかし言ってしまった以上は守らなければならない、そう思ったのか（これを諦めたと捉えるのはなんとなく嫌なので止めた）、意外に抵抗は激しくなかった。

「…それよりも、貴女の事はなんて呼べばいいのかしら？幾ら見た目が私そっくりで猫耳がついているとは言え、猫耳レミリア猫耳レミリアなんて言ったらなんか妙よ？」

確かに、結婚生活ではそれは妙だ。

「そうですねえ…でしたら、花音かのんって呼んで下さい。そうしたら違

和感はないと思います。」

「花音…良い名前じゃない。よし、これで名前については解決ね…あ。」

何かを思い出したかのようにポンと手を叩くお嬢様。

「ホントに相手は私なんかでいいの？もっと良い相手、居るんじゃないの？」

「いいんです。寧ろ、お嬢様じゃないと駄目です。」

「そこまで言うならいいんだけど…子どもとか、当然産めないわよ？ほら、子どもって、どうしても男の力が必要よ。」

「え？幻想郷では常識は通じないんじゃないんですか？永遠亭のお医者さんに頼めば…」

なんせ蓬莱の薬まで製造出来るんだから、きっとそんな薬もあるよ
うな気が…」

「それは倫理的にアウトよ！当たり前障りない方法とすれば…養子や里親ね。血は繋がってない…というか繋げる事は出来ない…戸籍上はどうにかなくても、血は受け継がれない。それでも、私の子だからって心から愛でてくれるの？言っちゃ悪いけど、そこまでできた人間なんて…」

私はぴしゃりと返した。

「愛しますよ。私はそういう人間です。血が繋がっていようがなか

るうが、そんな事は瑣末な問題でしかありません。血が繋がっていないからって、子どもをぞんざいに扱いますか？そんな事をする奴は、親なんかじゃない。人間として狂ってる奴です。それ以上に、親子の絆と言うものは本来堅いものです。そんなちやちな事実なんか、絆は壊されるわけがありません。というか、壊されちゃならないものなんです。」

「花音…」

「私は一人の女としてお嬢様を愛しますし、子どもも愛します。これは変わりのない事実、不変の真理です。だからそんな事は気にしないでください。」

「凄いわ…こんなによく出来た人間がまだ居たなんて…私、人間を見直したわ。」

本音中の本音だもの、ついでに好感度もアップ！

「というわけで愛し合しましょう！私、お嬢様とずっとこうしたかったんです！」

「わわ、いきなり裸になるな！それとこれは別問題よ！」

「時には獣のようにお互いの身体を貪るのも大事なスキンシップです！世の中には
で悩んでる夫婦がごまんといるんですよ！」

「その知識は知りたくなかった！というか他にもスキンシップの方法があるでしょう！」

「そんなんじゃないや もう満足出来ないんです！あ、シチュエーションの問題ですか？ とか、 が好みですか？」

「放送禁止ワードを飛ばしまくるな！変態過ぎるわよ、貴女！」

「違いますよ、例え変態だとしても、変態と言う名の淑女レディですよ！」

「なんか聞いた事がある！でも、初めてはあげないわよ！」

え？まさかの？

「余計襲いたくなってきた！初めては、私のものだあああああ
「！！！！！！」

「きゃああああ！！助けて咲夜ああああ！！！！！！」

その後どうなったかは、ご想像にお任せします。by 作者

?????視点

「こりやまずい事になったなあ…まあ百合は好きだけど。でも、色

々とまずい気がする…」

「そうね。このままじゃ色々歴史とかおかしくなるわね。」

「おかしくなるどころか幻想郷で百合が公認されちまいますよ。このままじゃ、将来の幻想郷が少子化しちまいます。」

「『貴方の上司』はなんて言ってるの？」

「そうっすね…ノーコメントを貫いています。つまり、俺とゆかりんで止めるしかないみたいっす。」

「どうするの？」

「やりたかないんですが、俺の力を使います。ゆかりんは準備して下さい。」

「解ったわ。ところで一つ聞きたかったんだけど…自称文々。新聞記者さんとはどういう関係なの？名前、一致してるじゃない。」

「あれは俺に似せた別人ですよ。俺とは関係ありません。たまたま名前一致ですよ。」

「へえ…建前はそれくらいにして、本当は？」

「言わないよ！？何衝撃の展開を期待してるんですか！？今のが真実です！」

「…そういつことしておくわね。」

「猫耳レミリア…貴女は彼女…レミリア・スカーレットを一生涯愛し、如何なる時も彼女と互いに助け合う事を誓いますか？」

「誓いますっ！！」

「…レミリア・スカーレット、貴女は彼女…猫耳レミリアを一生涯愛し、如何なる時も彼女と互いに助け合う事を誓いますか？」

「誓います。」

「では…誓いのキスを…」

「とでも言っと思ったか？」

「何？冗談は止めてよね、幸せに水を差されたくないから。」

すると、目の前に居た神父が顔に手をやり…

引き裂いた。

「なっ…!?!」

その下から見えた顔は、良く見た事がある顔だった。

「こんにちは、幸せ絶頂な所悪いけど、死んで貰うわ。紫奥義」
幕結界」

そんな至近距離でかわせるわけな…!!

ピチューン!!

「…そんなあ…なんであそこでピチュったの私…」

現実に戻され、しくしくと血の涙を流す私。

「だから言っただじゃないか。」

「だ、誰!？」

何!？どっから話してるの!？

私以外周りには誰もいないのに!？

「クロナの中の人…と言えはわかるかい？」

「ああつ!！」

居たね、そんな人。

「言ったよね?『これはサバイバルだ』って。残念だったねえ…や
られなければ結婚出来たのに。」

「きいさまああああ!…!…!…!…!…!…」

私はまさに怒髪天を衝く状態でぶちギレた。

「…ふう、でも此処でお預けにしたのには理由があるんだよね…
だって此処でハッピーエンドにしちゃったら後が困るんだよ…
まだ、まだ物語は終わらないんだから…」

【猫耳シリリア編】その7『Ceremony』（後書き）

いろんな意味ですいませんでした…

というわけで次回より「東方遊戯録」とコラボ！

「【凜音編】その1『なんか別の世界に来てしまった』」

お楽しみに！

【凜音編】その1『なんか別の世界に来てしまった』（前書き）

凜音編突入！

注：今回の凜音の能力は100%発揮出来ている状態です。

【凜音編】その1 『なんか別の世界に来てしまった』

- 紫視点 -

…ふう、別の世界から確か色んな人が此処に来るって設定じゃなかったかしら、この章は？

なんか途中からだいぶおかしな状況だったような気がするんだけど…結婚騒動起きるわ、存在否定されるわ、珍しい機械を華麗に乗り回す青年が現れるわで…

最後までいまでもなストーリーを希望するわよ、作者さん？

「で、何故に俺を掴む」

右手にすっぱり入るサイズの毛玉と化した作者。

もう少し可愛かったらあの某まっくろ〇ろすけみたいな可愛さだったのに…惜しいわね。

「最後までいまでもに事を進めて欲しいから（はあと）」

「…ちよっち待って、上司に聞いてみる。」

毛玉が目を閉じる。

暫くして…

「…うん、最後まですごぶる凄い人がやってくるよ。」

「普通の人は居ないのかしら」

存在否定した人、女性に弱すぎる人（というより神様）、^{トラック}車を乗り回す銃火器使い、公式が認めた百合思想なレミリアそっくりさん…そろそろ普通の人が見たい。

「だってこの小説の主人公が^{レナ}すごぶるチートっぷりを発揮してるのに、特技も何もない普通の人が出したらその人空気になっちゃうじゃん。そんな人モブキャラで十分だよ。

コラボ先の小説の主人公さん達は皆、それぞれはつきりした特長があるじゃないか。」

「なんか沢山のものを敵に回した気がするけど、確かにそれもそうね。で、最後に来る人はどんな人？」

すると作者は苦笑した。

「…普通からはかけ離れています。まず、完全な人間じゃありません。言ってしまうえば半人半妖…半分人間半分妖怪ですね。」

「最後まで個性溢れる面子だったわね」

ついに妖怪なのね。

まあ神様やレミリアそっくりさんが来る時点で随分幅があったけど…

「振り返ってみると凄く豪華な面子でした。」

「いや、まだ終わってないからね。もう一つ、あの空間の歪みの原因は掴めた？」

結局あの空間の歪みの原因は何だったのかわかんないとなったら、こじつけか後付け設定乙wwwwなんてメッセージが来る可能性があるらしい、だから聞いたのだが…

「ゆかりんの予測通りでしたよ…あの空間の歪みには間違いなく何か異質なものが居る。それは上司も言っていました。」

「敵なの…?」

「正直解りません。それは俺にも解らない…今は待つしかないっすね…」

「解ったわ。上司さんに宜しく伝えておいて。」

「あいさ。」

…あの毛玉ですら解らないとなると、相当の化け物か何かなのか？

…考えても結果は解らない、私はこれから来る存在の方に意識を向ける事にした。

- ??? ? 視点 -

「此処は何処？」

俺は…何してたんだっけ？やばい、忘れた。

つーかパツと見、今まで見ていたような風景じゃないというのは理解した。

というより、ついさっきまでの展開を…

何故か覚えていない。

最後に言った事って言えば…

『ボソンジャンプ』

ああー、あれか、ワープしようとしたら何か色々な要素のせいでもない所にワープしてしまいましたって言う、よくあるパターンのあれか。

その要素とやらが解らない限り、もう一度ボソンジャンプしたらまた変な所へ飛ばされてしまいそうだ。

…今の状況を軽く説明すると。

森。おしまい。

え？それじゃ解らないって？そうだなあ…少なくとも周りの木が檜っぽい所を見ると、迷いの竹林…ではないな。

檜のマイナスイオンのものが俺の心を安らげる。

マイナスイオンか？木の香りじゃないか？

まあどっちでもいいや。

で、地面は草が生えてない、踏み締められた固い土。

つまり、よく人が通る道というわけだ。

因みに土は程よく乾いている、雨はここ数日降っていないようだ。

…困ったな、ボソソジャンプが使えない以上、飛ぶか歩くかするかしない。

が、飛んだら色んなものに見られそうだな…それはそれで面倒だし、歩くか。

月が見えている。

綺麗な三日月だ。

雲一つないみたいだし…うん、趣があつていいなあ。

走るのもいいが、この風流を楽しむのも半人半妖の俺としては悪くはない。

俺は空を見上げ、ホントに上を向いて歩いている。

涙はないが。

そうだ、此処が何処か解らない以上、こんな話をしている相手が誰か全く解らない。

此処で自己紹介をしておこう。

俺の名前は凜音。

名字はないし、この名前も幻想郷に来てから名付けて貰った名前だ。

前の名前？覚えてない。

実は昔、幻想郷に行こうと思って自殺した男だ。

だが、幻想郷に来れたはいいが、何故か身体が女性のものになってしまった。

しかもスタイルはそんなに悪くない。

なんで此処に来る直前の事は覚えていないのに、こんなことは覚えているのだろうか。

よく解らん、記憶と言うものは。

話がずれた、で俺の能力は『ゲームに出てくる技を使う程度の能力』。
ゲームに出てくる技なら基本的に何でも使えてしまう。

ファイアとかホイミから始まり、その気になればエターナルフォー
スプリザード（効果：相手は死ぬ）や、ワールドデストロイヤー（

効果：カンストクラスのダメージを与えて相手を殺す）とか普通に使えてしまう。

勿論、そんな大技を使った後はかなり疲れるけど。

おっと、非戦闘時向けの技もきちんと使えるぞ。

例えば…

「エスナ」

毒とか喰らったらこれを使えば治る。致命傷を受けない限り病院知らずだ。

後、妖怪だから妖力も使える。

というわけで戦闘能力はそこそこあると自負するが…

ドーンッ

「おっと。」

人にぶつかってしまった。考え事をしていたら人にぶつかってしまった…確か故事にそういうエピソードがあったな…推敲、だっけ？

「すみません、大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫よ。」

俺はふっと見たその人を見て硬直し、冷や汗を垂らした。

え…何で…

「あぁっ！私のお団子がー！」

振袖姿の美女の彼女が…

「貴女、このお団子どうしてくれるの!?!」

西行寺幽々子、通称ゆゆ様が此処に？

あ、あの故事通り、偉い人にぶつかって命の危機なパターンか…

気づいた頃には時既に遅し。

あのM78星雲のヒーローみたいに、ピロンピロンと警告音が頭に響きます。

「弁償してよ！」

「…へ？」

その後、お団子一つを弁償して俺は命を落とす事を回避出来た、良かった良かった。

【凜音編】その1『なんか別の世界に来てしまった』（後書き）

次回予告

幽々子に連れていかれた凜音！

どうなの！？

というわけで次回

「その2」で、此処は結局何処？」

お楽しみに！

【凍音編】その2 『結局、此処は何処？』 (前書き)

ついにPV大台の200,000突破あ！

わーい、やったぞー！ (お前一人がやった事じゃねえ)

ありがとうございます！

【凜音編】その2 『結局、此処は何処？』

- 凜音視点 -

というわけで、俺は現在白玉楼に居る。

あの後お団子一つを弁償して素直に謝った所、『別にいいわよ』と凄く軽く流してくれた。

が、それでは終わらなかった。

幽々子に連行され、俺は白玉楼に連れてこられた訳だ。

…それにしても、ほんわかし過ぎだるゆゆ様…

もぐもぐ美味しそうにお団子食べてるし…

「おいしーい」

「それは良かった。」

うん、二重の意味で良かったよ。

「貴女、何処から来た人なの？」

幻想郷みたいな世界…と言いたいのだが、あれは昔の世界だからな

あ…

「外の世界…になるのかな？」

「外の世界には面白い人がいっぱい居るのね。貴女…妖怪でしょ？」

「!！」

ば、ばれちまったよいきなり！

人間じゃないと解ったから、殺しにかかるつもりか！？

「そんな絶体絶命の状況に陥った時のような顔をしないの。大丈夫よ、貴女が妖怪だからって殺しはしないわ。私の友達は妖怪が多いから。」

うふふと微笑みながらまたお団子に手をやる幽々子。

「でも、食べ物呪いの呪いは恐ろしいわよ。それで人一人殺すくらいなら簡単なもの。というわけで、暫くは私の言つとおりにして貰うわ。これくらいで済むなら安い方よね？」

いつの間にか『殺す』準備が出来ている幽々子。

胸の上、ちょうど心臓の真上に手が置かれている。

「心臓を潰すなんてグロテスクな事はしないけど、魂を抜くなら後はちよつと細工をするだけ。…言いたい事は、解るわよね？」

つまりだ、断つたら…

間違いない死ぬ。

「…で、俺は何をすればいいんだ？」

従う素振りでも見せておかないと、こちらが殺られる。

「物解り良い子は好きよ。…そうねえ、ある子を倒して貰おうかしら。最近調子に乗ってるあの子を、そろそろここできついお灸を据えて欲しいのよ。」

え？それだけ？

「ああ、一つ注意ね。彼、死なないから。」

「不死身が相手なんですか」

死なない奴にどうお灸を据えろと…あ、半殺しにすればいいのか。

「そうそう 半殺しにしちゃって良いから、頑張ってるね」

「はい。」

ふむふむ…結局、幽々子の気に食わない奴をぶちのめしてこいと言
う話か。

喧嘩だって事か…なら、考える必要もそんなになさそうだ。

要は相手を見つけて、ワールドデストロイヤー辺りをぶつけりゃ終

いだろっし。

結構楽だな、こんな事を断ってたら死んでたなんてバカバカしいぜ。

…とってた時期が、俺にもありました。

一体何故、このような思考の変換に至ったのか。

理由はCMの後！

ます』って、アカシック・レコードにも書いてあるわよ?」

「待てレミリア、それは作者の発言だ!」

しかも感想欄を隅から隅まで読まないと解らないぞ!?一見さんお断りなネタはやめような!?

「あんだ、馬鹿でしょ?」この小説内だけに限定』すれば、作者の脳内プロットアカシック・レコードよ。作者の気まぐれさえ発動してしまえば、幾ら不死身のあんだだつて死ぬことくらい普通に有り得るわよ?」

「な、なんだつてー!」

すべては作者の気まぐれかよ…!」

「諦めなさい、レナ。今運命に逆らつて主人公死亡どころか消滅というフラグをわざわざ立ててるのか、苦汁を此処で我慢して舐めて、次の章以降で活躍するか…!」

ぐぬぬ…鬼畜過ぎるぞ、作者!

「し、仕方ない…もうこれ以上の不幸なんてあるかあ!何でもドォーンとかかかってきやがれえー!」

開き直りつて、大事だよね!

レナ、消滅しました。

【凜音編】その2 『結局、此処は何処？』 (後書き)

次回予告！

レナを消滅させたのは誰なんだ！？

そして、レナは大丈夫なのか！？

状況が良く解らない、補完を要求するっ！

というわけで次回

【凜音編】その3 『殺りすぎちゃいました』

お楽しみに！

【凍音編】その3『殺りすぎちゃいました』（前書き）

6月初の更新！

作者、これからもがんばりますよ！

【凜音編】その3 『殺りすぎちゃいました』

凜音視点

「終わったか…」

うん、ワールドデストロイヤーぶつけたし、塵一つ残ってないだろ
う。

もう少し加減しても良かったか？せめて灰は残しておいた方が良かったか？

…え？『なんであんたがこんな所に』って？

少し遡ってみるか…

〈回想〉

「こいつか…」

幽々子から貰った紙に書かれてた文を読み、俺は奴を探す事にした。

今回の目標は彩崎玲奈。

奴を半殺しにすれば俺は助かるらしい。

恨みはないが、死にたくないのな…許せ！

「紅魔館に居るらしいな…うん、見つけるのは早そうだ。」

行き先さえはつきりしていれば、前回のボソソジャンプのように変な場所に飛んでいってしまう可能性は限りなく0だ。前回は「とにかく遠くへ」って思ってたような気がするから変な場所に飛んでしまったんだ、そう考えたんだ。

「ボソソジャンプ」

よし、これで確実に紅魔館へ行ける！

「…え？俺、紅魔館へ飛んだつもりなんだが…なんで…」

太陽の丘に？」

「…で、今回は紅魔館に…」

着けませんでした。」

今度の行く先は…」

マヨヒガでした。

「あら、貴女が今度のお客さん？」

「あ、ゆかりんだ」

で、さっきのゆづかりんの時のようにゆかりんに遭遇。エンカウンター

「今度も女性なのね。しかもそこそこスタイル良いし…中に入って。」

「ありゃ？俺、用事があるんだけど…」

「幽々子の頼みを聞いておいて、私の話を聞かないなんて話、有り得ないわよね？（ニコッ）」

「うそーん…」

これ、場合によっちゃさっきのゆうかりんより酷くないか？

俺は力なくゆかりんについて行った。

「貴女のような面白い来訪者は最近いっぱい居るけど、妖怪はいなかったのよ。別の世界にも妖怪は居るみたいね。」

「そうなんですか……」

此処も幻想郷らしいな……まあ、幻想郷だから、全てを許容するんだろうな。

「で、貴女は何の妖怪なのかしら？妖怪である以上、何かを司っているのは確か。一応、私は『幻想郷この世界の秩序を司る妖怪』と言う事になっているわ。」

お茶を啜りながら話すゆかりん。

「何の妖怪か？と言われてもなあ……。とにかく、俺は妖怪になってどうしようとかあんまり考えた事はないんだよ。強いて言うなら、俺の知ってる誰かが傷つくのは嫌だな。」

「……そう。貴女も見所があるわね。そんじょそこのダメ妖怪に見習ってもらいたいわ。」

ふう……と軽く溜息をつき、ゆかりんは話を続けた。

「そう言えば、幽々子に何を言われたの？あちこち飛び回ってたみたいけど……」

「ああ、その事ですか。…ある人物をボコボコにして来いと言われてまして……」

「その人って誰なの？」

「確か…彩崎玲奈とかって……」

「…そう、貴女も不運ね。一つ注意しておくわ。『本気でレナを倒すつもり』なら、自分の力を過信しない事ね。それは貴女を殺す要因になりかねないわ。」

「そんなに強いんですか？その玲奈とか言う人は……」

「ええ。人間であつて、人間でない。彼はそこまでの力を持った男よ。ただの不死身なんかじゃないわ。」

…ふうん。やっぱりワールドデストロイヤー決定だな。
あれなら関係ないだろ。

「解りました。ありがとうございます。」

俺は立ち上がり、部屋を出ようとしたその時。

「どうせならレナの所に連れて行ってあげるわ。ほら貴女、空間跳躍^フ、出来ないんでしょ？」

「え？何でそれを？」

「実はね、あれのシステム弄ったの私なの。忘れた？私、そこらへの計算は得意なのよ？」

…あ、そう言えば数学が得意って設定、公式にあつた気がする。

あれは藍しゃまもそうだったよな？まあ式神が出来るんだから、主だって出来るのは当然っちゃあ当然だな。

「というわけで貴女のその妙なワープ術は封じたわ。あ、ちなみに次飛んだら地獄行くから。」

何そのぶらり地獄下車の旅みたいなさらりとした発言は！？

「ほら、レナを倒しに行くんでしょ？行くわよ！」

「え、あ…はい…」

俺は隙間の力を借り、その玲奈とか言う奴の所へ向かった。紅魔館だけどな。

戦いは先手必勝、つまり出会い頭に最大火力の攻撃をかければいいわけだ。

つまり、俺のやる事は一つ。

ワールドデストロイヤーによる先制攻撃…もとい不意打ち。

ぱつと高火力な技を考えて、真っ先に浮かんだのがワールドデストロイヤーだった。

「レナの後ろに回ったわ。自信はあるみたいだから、吹き飛ばすなりなんなり好きにきなさい。」

「解った、ありがとう!」

隙間が開いた。

見えた男が、何かほざいていた。

「…何でもドオンとかかってこいやあー!」

おお、死ぬ準備も出来たか。

「じゃ、遠慮なく。一撃で沈めてやるよ、覚悟は出来たか? ワールドデストロイヤー!」

ゲームの技に必要なもの(この場合斧)は技の発動する直前に手に入る。

俺は斧を振り下ろし、爆風が放たれ…

うん、服までは流石に再生されないか。
相手、素っ裸だもんな。

「…うん。」

戦いムード台無したが、とりあえず俺が男で良かったな。
見た目は女だが。

【凜音編】その3『殺りすぎちゃいました』（後書き）

次回予告！

改めて凜音vsレナ！

どうなの！？

というわけで次回

「その4『死なないとかマジチートだわ…え、人の事言えないって
？』」

お楽しみに！

【凜音編】その4 『死なないとかマジチートだわ…え、人の事言えないって?』

- レナ視点 -

超速再生…それは失われた身体を一瞬にして再生できるという恐ろしいチート機能だが…

一つだけ弱点がある。

それは、服は再生不可能であること。
つまりさっきのように身体消滅レベルの攻撃を喰らうと、素っ裸で再生してしまうのだ。

962

公然猥褻で普通に捕まる、主人公なのに。

戦闘に勝っても、人間的にぼろ負けである。

というわけで大事な場所を隠しながら俺は服を取りに行く。

もう数枚必要になるだろうから、余分に服を取っておく。

誰にも見つからずに服を着る事に成功した俺は、慌てて来た道を戻

る。

「お待たせだな！おっ始めようか！！」

というか相手は女性ですか。

何だろ…美少女と言うより美女の部類だな。

「俺は凜音だ。見てくれは女だが、中身は男だ。」

見た目が女性で中身は男…？

「巷で有名なニューハーフ！？」

「ちげえよ！俺は一回死んで幻想郷に来たんだが、なんでか幻想郷に来たら女性になってたんだよ！ニューハーフじゃねえ！」

「そういう建前ですか」

「どんな建前だ！これが真実！」

あ、怒らせちゃった。

「…あんた、玲奈とか言ったな？死なない人間らしいが…色々ムカつくからぶっ殺す！」

そうして凜音は此方に向かって…

「ガハッ！」

胸に痛みが走る。

俺は胸に視線を落とす…

見事に心臓を貫く、一本の剣。

「マナの剣…斬れ味は抜群な伝説の武器だ…目には目を、不死身に
は伝説を。」
チート

ブシャって噴水のように血が噴き出す。

「終いだ。俺の勝ちという形でな。」

うん、確かに、俺がただの人間ならそうだっただろう。

…が、伊達に修羅場潜り抜けて来た身じゃないんでな。

「…ああ、そう。不死身も舐められたもんだな、心臓貫いただけで
死ぬとは。ふざけんなよ…!!」

心臓に突き刺さる剣を左手で掴み、俺は右手を凜音に向けた。

「砲符『リヴァイバル』」

赤い閃光が、視界を塗り潰した。

- 凜音視点 -

いきなりビームぶっ放すとは、やはり不死身は色々とぶっ飛んでい
る。

が、かわされないようにと自分の手を省みず、マナの剣の刀身を掴
んだのは予想外だった。

あのビームをもろに喰らうのは絶対に避けなければならない。

そう直感的…いや、本能が吠えたように感じた俺はある行動を取る。

マナの剣を、自ら手放した。

そして身体を落とし、ビームを回避する。

チツと髪の毛の一部が燃えるのが聞こえたが、髪の毛で済むなら安
いものだ。

相手は不死身とは言え、それを除けば普通の人間。

心臓に突き刺さる障害物をそのままにしたまま動くとは到底思えない。マナの剣

しかも相手は不死身だ…

ほら、引き抜いた。

で、相手はその武器を使わないはずがない…
掴むだろうな、自分の武器として。

…使わせるかよ、あの剣は俺のものだ。

「うわっ、剣が消えた!？」

隙あり。

「そこだ!！」

玲奈の左肩に右手を押し付け…!

「パルマファイキオーナ!！」

左腕を、ビームとその熱で焼き切る。

幾ら再生機能があっても、切断部分が熱で壊死していれば、再生は出来ないのが普通だ!

「にゃろっ!！」

が、右腕は残っている。
お返しと言わんばかりに左頬が埋没した！！

「人間の出来る強さじゃないな、そのパンチはっ！！」

「他人の左腕焼き切っておいて、何言いやがる！」

とにかくにも、もう片方も斬っておいた方がいいだろう。
そう判断し、次の行動に出る。

再びマナの剣を呼び出し、俺は前に出る。

相手は武器持ちではない、ならばマナの剣は『リーチ』と言う意味
でかなり有利に立てる武器になりえる。

「さっさと右腕もくれっ！！」

剣が奴の武器代わりの右腕を斬るべく動くが、奴には当たらずに空
を斬る。

「させるかよ！砲符『リヴァイバル』！！」

またビームかよ、いい加減にしやがれ！！

「つとぉー！」

何だ、さっきより攻撃範囲が広い！

「そこだぁー！！」

直後、腹に入る、奴の拳。

「ぐっ…！」

まずい、このままラッシュを喰らう訳には！

「プロテス…！」

物理攻撃の威力を軽減出来る魔法の障壁を創る！

これで立て直しにかかれば…！

「そんな結界、叩き斬ってやる！」

なっ、奴は武器持ちだったのか！？

右手に握られた黒い剣が、それを物語る。

「おいでませ結界カッター！でえやああああ…！」

クソッ、破魔能力付きの斬撃か！？

「ちっ！」

俺はこのままでは分が悪いと判断した。

妖力、魔力を補充しなくては。

ワールドデストロイヤーでかなり消費してしまった、このままでは
まともに技が使えなくなる。

「吹っ飛んでろ、バシルーラ！」

「うお、ちょ、待て、うわああああああ！！！！」

奴には一時離脱をお願いして貰った。

奴が遙か彼方へ飛んで行く、時間稼ぎはなんとか出来そうだ。

「今の内に…！」

マナの剣による魔力と妖力の補充。

これをした上で、さらに態勢の立て直しを図る。

「ベホマ」

体力が、元に戻る。

「ウォール」

物理耐性プロテスのある障壁と、魔法耐性シエルのある障壁を同時に張る。

「確かにゆかりんの言うとおり、奴はただの不死身じゃないな…」

正直、甘く見ていた。

戦い方を考える必要がある。

時間は稼いだ、ここでどうするかが鍵だ。

下手に大技は出せないな…魔力・妖力切れは致命的。

ならば：物理戦闘、か。

と思った瞬間、何か気配がした。

奴か？何処に居る？

俺はマナの剣を構えながら、注意して辺りを見る事にした。

〈今回の凜音が使った技について補足〉

・ワールドデストロイヤー

「テイルズオブデイスティニー」に出てくる有名なボス、バルバトス・ゲーティアの技。即死クラスの衝撃波を放つ。因みに射程距離は画面の見える範囲内と言っかなりぶっ飛んだ技である。

原作じゃこの技の発動を止められない!!ゲームオーバーである。

・パルマフィキオーナ

「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に出てくる機体、デイスティニーガンダムの武装の一つ。手を相手に接近させ（と言

うより押しつけ）、掌からビームを放ち敵を破碎する。疑似シャイニングフィンガーと思って頂ければイメージ出来るはず。

・プロテス

FFシリーズの魔法。かけた相手に対する物理攻撃ダメージを軽減出来る。上位魔法に「プロテダ」があるが、こちらは物理攻撃ダメージを大きく軽減出来るが持続時間が短めである。

・バシルーラ

ドラクエシリーズの呪文。かけた相手をぶっ飛ばし、戦闘から離脱させる。効かない事も。

・ベホマ

同じくドラクエシリーズの呪文。かけた相手の体力を全快する。一回につき一人にしか使えないが、上位呪文に「ベホマズン」があり、こちらは味方全体が対象で、全員の体力を全快する。

・ウォール

FFシリーズの魔法。プロテス及びシェル（魔法ダメージ軽減効果）を同時にかける。

【凜音編】その4 『死なないとかマジチートだわ…え、人の事言えないって？』

次回予告！

ぶっ飛ばされたレナの次なる行動とは！？

そして、熾烈を極める凜音とレナの戦い！

というわけで次回

「その5 『殴り合い』」

お楽しみに！

【凍音編】その5『殴り合い』（前書き）

凍音編最終話！

ユニーク22000突破！

【凜音編】その5 『殴り合い』

レナ視点

ちくしょう、相手は中々骨があるな。

左腕が吹っ飛んだとか、このままでは勝てる気も起きない。

「『翼を求めし者』…!!」
イカロスハート

右肩に魔力を開放し、ある事を行う。

「戻ってこい、俺の腕！」

左腕が、戻ってきた。

「我ながらびつくりする能力だな…不死身でよかったわ…」

が、両腕が手に入った以上、やるのは奴凜音の撃破。

「行くか！」

俺は凜音を探しに行った。

凜音視点

「っ！！！」

後ろからの玲奈の強襲に、俺は思わず防御しか取れなかった。

「やるね！まさか受け止められるなんて思いもしなかったぜ。」

俺はマナの剣で玲奈の拳を受け止めているのだが、さっきと比べて明らかに相手の力が上がっている。

何だ…？相手は何をした？

「にやるっ！！！」

俺は渾身の力を込めて奴の身体を押し返す。

が、押し返したかと思った瞬間、玲奈奴の姿が消える。

「ぐっ！！！」

背中に走る鈍痛。何処から来た！？

「くっ、奴の姿が見えない…！！！」

奴の姿が、まるで消えたかのように見えない。
いや…見えているのだが、僅かしか見えていない。

瞬間移動、それもかなり高度の。

「迷うな、俺…こつ言う時は…！」

目を閉じ、精神統一を図る。

視覚を遮断して、奴の居場所を感じる。

「そこだっ…！」

左前、剣を直感的に振るう！

剣の先に何か当たった感触がした、確実に斬れている。

が、勝負を決めるまでのダメージは与えられていない、決めないとまずい！

「こつちも本気を出させて貰う…！」

奴の速さに対抗するためには、こちらも速度を上げなくては…！

「トランザム…！」

これで奴の動きに反応できる、こちらも攻めに転じる！

常人には視認が非常に難しい戦い。

一瞬火花が走ったかと思うと、次の瞬間には消えている。

また別の場所で火花が走り、また別の場所で…の繰り返し。

だが、お互いにダメージは確実に蓄積して居た。

「にやるっ!!」

打撲、擦過傷：生傷も増えるばかり。

「そろそろ終いだ!!」

同時に最大の攻撃をかける!!

「砲打『シューティングドライバー』!!」

「もう一発かましてやるよ!ワールドデストロイヤー!!」

が、お互いを倒すには至らず、二人ともまだ耐えていた。

「まだかつ!!」

同時に動いた二人、もはや拳と拳の打ち合いになっていた。

誰もが泥沼の戦いになると思った、その時。

事態は急展開する。

「凜音、レナ！！今すぐ戦いを止めて！！」

かなり焦った様子で現れた、紫。

「このままじゃ凜音、貴女は元の世界に帰れなくなるかも知れないわ！」

その声を聞いて、凜音は即座に手を止めた。

「どづいつ…事だよ？」

その質問に、紫は何も言わずある一点を指差した。

凜音、そして異変に気付いたレナは、紫が指差した方を見る。

空に入った、一筋のヒビ。

そのヒビは、少しずつだが大きくなっていく。

「…およそ3週間くらい前から、空に小さな空間の歪みが出来ていたの。私はそれを観察していたんだけど…いきなり歪みが消えたかと思ったら、空にヒビが入り始めて…あのヒビの向こうから、恐ろしい気配を感じる…」

「…!!ヒビが!!」

凜音が見た先で、ヒビが大きくなり、ついに砕けた。

砕けた先には、灰色の空間が見えている。

その奥から少しずつ這い出した、異形。

「…!!」

【凜音編】その5『殴り合い』（後書き）

次回予告！

コラボ章衝撃のラスト！！

まさかの展開が待っている！

というわけで次回

「歴史に刻まれない聖戦」

お楽しみに！！

歴史に刻まれない聖戦（前書き）

前にも先にも、此処まで長い話は此処しかありません！

ユニーク２２２２突破、うん、そろ目だったから言いたかっただけです^_^；

歴史に刻まれない聖戦

その異形は、遙か上から大地を見下ろしていた。

∴この大地を破壊する、異形はそう義務付けられているように、機械的に行動に出た。

口を大きく開け、エネルギーを集める。

大地を焼き払うには充分過ぎる程の量のエネルギーを集めて尚、異形はエネルギーをかき集める。

塵一つ残さない、完全なる破壊。

異形にとって、それは使命だった。

このまま口に溜まったこのどす黒いエネルギーの塊を放てば、目の前は更地へと化す。

ただ荒れ果てた砂の大地が広がるだけになる。

それが世界の破壊に繋がるとしても、彼：彼女：いや、『思念集合体』であるそれにとっては、ただ無限に広がる世界の一つが壊れた、言ってしまうえば多くある玩具の一つが壊れただけとしか事実を捉えられないのである。

自ら考え、行動するという思念は、ある日にある一つの思考を行う。

『無限に広がる世界を、統一する事は出来ないのだろうか。』

ただの思念ならば、それが空想でしかあり得ない事実だとすぐに結論付ける。

だが、それぞれ別の考えを持った思念が集まり、議論を交わす。

その内に思念は器を成し、世界に具現した。

議論によって決められた結論に則って忠実に動く器。

『思念集合体』…太古の文献にはそう記述されていた。

多数の思念は議論を交わし、結論を出した。

『統一が出来ないのならば一つの世界だけ残して全て破壊してしまえばよい』

その結論を履行するだけの力を、器に与える。

思念集合体である故の力だ。

そして器は、世界を破壊し始める。

この世界も、思念集合体：即ち『彼ら』にとってはただ壊すだけの世界でしかなかった。

そう、破壊の力を孕んだ塊を放つ、ほんの少し、コンマ3桁前までは。

彼らは失念していた。

幻想郷
この世界の、異質性を。

「させるかあ!!」

巨人のような、機械のような風貌をした『器』の顔の部分を一撃殴る一人の男。

「レナ!?!」

この世界の一人、彩崎玲奈。

その衝撃で頭が遙か上を向いてしまった為、エネルギーの塊は空に放たれる。

このままでは結界に直撃する。

それを許さぬと動く幻想郷の賢者、八雲紫。

お得意の隙間で、エネルギーを無かった事にした。

「レナ！あれは敵よ！どんな手を打っても構わないから、あれを討つてー！」

「言われなくても解ってる！凜音、手伝ってくれ！」

「俺は面倒事には関わりたくないんだが…」

『だが』この世界の住人ではない彼女はこう続けた。

「面倒事を持ってくる奴は一番ムカつくんでね…さっさとくたばれや木偶の坊！！」

凜音が地面を蹴飛ばし、器に迫る！

「マナの剣！俺に応える！！」

剣が主に力を与える。

「仕掛ける！ライザアアア！！！！」

剣を振りかぶると同時に剣から桃色の光の筋が空高く伸びる！！

「ソオオオオオド！！！！！！」

巨大な剣は器を真つ二つに斬り分けた！

だが、直ぐに器は再生を始める、終わらぬと感じた凜音はさすがに援軍を呼ぶ！

「ちいつ、この程度で終わらないか！レナ！！」

「任せろ！！」

先程まで殴りあいをしていたとは到底思えないコンビネーション連携の良さ。

レナは既に準備を整えていた！

「砲打つ！！シューティングっ！！」

脇腹目掛けてレナは巨人の遙か上から急降下！

さらに『翼イカロスハートを求めし者』の加速も加わり、まさに流星のごとき速さになる！！

「あ、ああ！けどそこまでしたら暫く俺はまともには動けなくなるぞ！無理に攻撃範囲を広げたらその分身体に負担がかかる…！」

「何秒くらい動けなくなる!?」

「…7秒だ！それ未満は保証できん！」

「解った…！レナ、リヴァイバルを奴に！最大火力で構わない！ラグは俺が何とかする！」

「すまない…頼んだぞ、凜音！」

「礼なら奴を倒した後に言え！」

即座にレナは魔力を右手に集める。

凜音はリヴァイバルが放たれる瞬間を待つ。

「最大火力でどうだ！！砲符『リヴァイバル・』！！！」

ゴウツ！！と轟音を立て、赤い閃光が巨体を包む。

「ジャスタウェイ！！」

凜音は大量の棒人間のような形をした爆弾を投げ付けた！！

爆弾はビームによって爆発、それが各所で起こり巨体は爆発に覆われた！

「これで少しは堪えただろうが…!!」

爆発による煙が薄くなって行くにつれ、敵の損傷状況が見えてきた。先程までの著しい回復速度は無くなり、だいぶ再生のスピードが落ちてきた。

だが再生が止まった訳ではない、今この瞬間にも再生をしている。

「まだかよ…!!」

凜音は再び攻撃を仕掛けようとした、その時。

「っ!!」

身体の力が抜け、片膝を付く凜音。

「もう魔力切れかよ…!!」

何とか立ち上がるが、マナの剣からの魔力補充には少し時間がかかる。

だが此処で補充にかかるわけには行かない。

補充にかかればレナが無防備どころか何も出来ずに攻撃を受ける恐れがある。

凜音は体力を使ってレナの所へ向かう。

『…我が頭脳は損傷しておらぬ。』

『問題ない。しかし、器に損傷が見られる。』

『このままでは器が碎ける。知識の泉より力を借りるべきだ。』

『異論はない』

『異義なし』

『賛成だ』

『では…満場一致の賛成により、知識の泉より力を借りる。』

刹那、巨人の動きがピタリと止まる。

『破壊こそ未来。闇こそ開明。』

『我らは全てで一つ…歴史に刻まれない聖戦、勝者は…我等だ。』

嵐が吹き荒び、巨人から禍々しいオーラが放たれる。

『…小さき民よ、我等に楯突いた罪…償え。』

『この世界なりの方法で、この世界を無に還そう…我らこそ、「闇」だ。』

『暗黒』”救いあれ”と愚者は云った』

空が黒に染まる。

巨人の両腕が、レナを覆い隠す。

「しまった！やらせるかよっ！！」

凜音は巨人の腕に斬りつけるが、ダメージが全くない。

「くそっ！！」

魔力切れ故に、体力だけで剣を振るう。

しかし、それは鋼を噛み砕こうと必死に動く蟻のごとき小さすぎる抵抗であった。

『闇を知る…それは我等を知る事である。』

掌から黒い光線が放たれ、レナに直撃。

『消えるがよい』

両手がレナに迫る。

「それ以上はやらせねえ！！」

乱暴に剣を振り回す凜音。だが、動きが止まる事は無かった。

「止まれ、止まれよ！！」

願いは…届かず。

グシヤリ。

『次は貴様だ』

『我等は闇。光は駆逐されなければならない。』

「くっ…!!」

レナがやられた今、頼れるのは己の身一つのみ。

が、魔力は切れ、相手に与えられる物理的ダメージもほぼ0。

…完全に無理ゲーだよな、これ？

「だが諦めない！それがゲーマーだからなあ！！」

俺は戦いを挑む。

相手はラスボスだな！！

戦場より離れたある場所にて。

「起きなさい、レナ。」

「あ…ゆか…り？」

「危なかったわ。あと少し遅れていたらどうなっていたか…」

紫はかなり傷付いたレナに手を置く。

「今の状況を教えましょう。完全に此方が劣勢よ。凜音が戦ってくれているけど、何処まで持つか…」

「…行かなくちゃ…」

無理に動こうとするレナを制する紫。

「貴方は此処に居なさい。今の貴方がどうしようとしてもただの邪魔者でしかない。」

その代わり…最強の助っ人を呼んでおいたわ。」

ザッと、足音がした。

「…皆…!」

そこにはもうこの世界に居ないはずの者達が、全員揃っていた。

「よっ、レナ。随分ポロボロじゃねえか。」

「何かあったのか?」

「蓮也…トシキ…!」

「今度はまともだな。」

「また会ったわね。」

「光に猫耳レミリアまで!どういう事なんだ!?!」

まさにびっくり仰天である。

「全てはこのノートからよ。あの化け物の存在を把握していたみたいね、このノートは。」

紫にノートを渡され、それに目を通すレナ。

そのノートには…。

『もうすぐ異質なものが現れる。
それは全てに仇なすものだ。
だが…例え一つの世界で歯が立たなくとも、今の状況なら、あるいは…』

「…あれを倒す為に、今まで空間を歪ませて世界を結んであったのね。あの歪みは言わば糸…世界と世界を結んだ、細い細い糸…」

「事態がいまいち飲み込めないが、要は皆…ここを救う為に来てくれた、そういう訳か…」

「ええ。貴方は寝てなさい。その間に終わるわ。…皆。」

紫は救世主たる者たちに顔を向け、話し始める。

「また呼んでしまつて申し訳ないわね。でも、きっとこれが貴方達の、この世界での最後の仕事になると思うわ。」

今現在、正体不明の化け物がこの幻想郷を破壊しようとしている。

レナと…あなたがた貴方方と同じ境遇に立っている凜音という人が化け物に戦闘を仕掛けたけれど、全くと言うほど歯が立たないわ。」

「ゆかりん、つて事はその化け物を倒せばいいんだな？」

この呼び方…蓮也か。

「ええ。単純に言えば、ね。でも色々と問題があるわ。まず一つ。

接近するのにかなり時間がかかつてしまう。見てくれれば解るけど、此処からあれまでの距離化け物は離れている。」

「でも、それは紫さんの隙間使えばいいんじゃない？」

「そうもいかなくなつてしまつたわ、トシキ。さっき、私はあの化け物の攻撃からレナを無理矢理守つた。…その後遺症で、長距離の隙間による移動が出来なくなつたわ。」

「え!？」

「それに、私はレナを治療しなきゃいけない…正直、隙間を使つて
いる暇はないわ。でも、まだ手はある。」

ハッと閃いたような声が聞こえた。

「…移動手段は、俺のトラックか!」

「頭の回転が速くて助かるわ。そうよ、隙間が使えない代わりに光

の軽トラックがある。皆にはあれで奴に接近して貰うわ。」

「給油しててマジ良かった…！」

「質問。私の役目は？」

この声は…猫耳レミリアか。

「貴女には立派な仕事があるわ。接近中、必ず奴から攻撃を受ける。貴女はそれを判断して撃ち落とすなりなんなりして貰う。場合によっては武装による攻撃もお願いするわ。」

「解ったわ。」

少し間を置き、紫は苦しそうに続けた。

「間違いなくこれからの戦いは熾烈を極めるわ。…死なないで。それが私から言える最後の言葉よ。」

「…死ぬ訳あるかよ、ゆかりん。だってさ…」

鉄パイプを構え、蓮也は一言…！

「仮にも幻想郷の守護者の一人たる俺が、こんな事で怯むもんかよ…！」

「そつだな…蓮也の言う通りだ。」

??? 視点

私が出向いても良いのだがな…しかし我が力はこの幻想郷に多大なる変化を齎す。^{もたらす}
齒がゆいな…民の力になれぬとは。

「その為に俺が居るんじゃないですか。俺の力なら、この幻想郷に与える影響は少ない。それに、もう手は打ってあります。」

ふむ…あの救世主達を導いたのも、お前だったな。

「空間の歪み…あれは俺にとっても偶発的でした。ですがあれがあったから、俺は此処まで出来た。」

だが、あの人数で大丈夫なのか？幾ら有力者とは言え、人数不足ではないのか？

「そう思っておいて、もう一人呼んでいるのですよ。」

奥から一人の少女が現れる。

ほう…平和主義のお前にしては、随分物騒な人間を連れてきたな。

「私をこれ以上貶すつもりなら殺すわよ。」

「待て。君を連れて来たのは別の目的だ。君に倒して欲しいのはあれだ。」

床に、その敵の映像が映る。

「…解っているわよ。要はあれを倒せば良いのね？」

「ああ。頼んだ。」

「わざわざ遠出したんだから、報酬はたんまりと頂くわ。」

そう言い残して、彼女は消えた。

今回は私が出る幕はなさそうだな。

この戦いの行く末…見届けなくては。

????.視点

さっと地面に着地した私は、生の気配を感じた。

…1、2、3、4つの生が、一つのどす黒い生へ向かっている。

どす黒い奴は、もう一つの生と戦っているみたいね。

でも、かなり押されている。

遠くに3つ、生の反応がある。

あっちは大丈夫ね。

「なら、私はこっちに向かうのが一番ね。」

私は黒の方へ向かう事にした。

レナ視点

俺は紫の治療を受けているが、このままではかなり時間がかかる。俺も行かなくては、凜音が心配だ。

「じっとしていなさい！治るものも治らないわよ！？」

「だが、このままでは凜音が！！」

「解っているわよ！だからじっとしていなさい！」

「くっ…！」

俺はこのままじっとしているしかないのか。

「お待たせ！私の出番ね！」

「零奈…！」

「早速治療を開始するわ！しゅー君！」

【がってんしょうちのすけ！】

どろりとした液体が、俺を包む。

そして何の原理は解らないけど、傷が全て治った！

「紫、貴女も！」

紫にも液体がかけられる。

「…ありがたいんだけど、なんか汚された気が…」

「気にしないで！とにかくあれが敵なんでしょ！行くわよ！」

「あ、隙間が使えるわ」

「よし！行くわよ！」

俺達は隙間に飛び込んだ。

凜音視点

正直な話、きつすぎにも程がある。
救援くらい来てほしいものだが…！

『闇に押しつぶされよ。暗黒「原罪の十字架」』

十字状に光線が放たれ、俺はなんとかかわす。

『よくぞかわした。だが、何処までかわし続けられる？』

まずいな、このままではやられる。

決定打が与えられない以上、かわすのに体力を使い続ける事になり、
いずれジリ貧になる。

『見切ったぞ。暗黒「救いあれ」と愚者は云った』

しまっ…！！

両腕が迫ってくる。

此処で、終わりか？

「斬り裂け…！」

片手が、斬り落とされた。

歴史に刻まれない聖戦（後書き）

あんまりにも長すぎる（一話にまとめると余裕で一百万文字突破）の
で次回こそ最終話！

というわけで次回

「聖戦の終焉」

お楽しみに！

聖戦の終焉（前書き）

これがコラボ章最終話！

長いよーっ！

聖戦の終焉

「な、何だ!？」

一撃で左手が斬り落とされるなんて、何だよ今の攻撃は!？

「幾ら身体がでかいとは言え、造りは人間と同じね。手首部分はそれ程堅くない。」

剣の刀身を眺め、刃零れはこぼがないか確かめる、一人の少女。

「…でも、この程度で終わるはずもない、か。」

見ると、既に左手が再生を始めていた。

「流石『思念集合体』ね…肉体、いや『器』は不死に近いのね。」

「は?あんた何言ってるんだ?あれはどう考えても肉体だろ!」

凜音がそう食いつくと、少女は剣を凜音に突き付け、冷たく言い放った。

「あれより先に死にたくないなら言葉には気を付ける事ね。私は貴女の味方なんかじゃないわよ?それに、私にはちゃんと名前があるの。千堂刃奈せんどうしんなという立派な名前がね。」

「…ああそう、名前の件に関しては謝ろうか。だがな、いきなり出てきて上から視線はないだろ?」

すると、刃奈は凜音を睨み、売り言葉に買い言葉でこう返す。

「少なくとも私は今の貴女より強いという自信はある。だから上から目線くらい我慢しなさい。」

「…へえ。強けりや何やつてもいいって訳か。なら、あんたより強いつて事を示せりやいいんだな。」

「まあ、そうなるわね。」

この状況、この話の間に凜音はある事をしていた。

「OK…状況は理解した。刃奈…だっけ？『死ぬなよ』。」

「は？いきなり何言って」

刃奈がそう言い終わらない内に、凜音は行動に出た。

いや、賭けに出た。

「アルテマ」

世界が、純白に染まった。

「あんたいきなり何やってんのよ！？あと少し早かったら死んでたわよ、私！」

「…そのくらい…しないと…奴は…倒せない…」

全ての魔法と呼ばれるカテゴリの中で最高とされる古代の究極魔法、アルテマ。

修得には魔法の真髄を理解していないといけないとされる魔法。

だが圧倒的な破壊力に引き換え、魔力を異常なまでに消費する。

そう、それは…

「ついさっき…魔力を補充したのに…このザマかよ…」

魔力切れ、それを示していた。

「あなた…まさか…！」

「やっと気付いたか…刃奈、あなたにわざと喧嘩を売って隙を見せ

ながら俺は奴の動きを見ていた：奴が警戒を解き、攻撃に移ろうとするその瞬間、奴には最大の隙が出来る。その結果が…あれだ。」

相手の身体は黒焦げになっている。
直撃した証拠だ。

「だが：奴を倒すには至らなかったようだ…。見ろ、もう再生を始めてやがる。」

見れば、その黒焦げの身体がまるで脱皮するように元に戻っていく。

「：確かに、まだ終わりじゃないみたいね。まあ、貴女が強いというのは解ったから、そこで休んで。後は私がやるわ。」

「え？」

「折角、貴女が追い詰めてくれたんだから、少しくらい頑張らないとね。」

そう言い切った瞬間、刃奈の姿が消える。

間髪入れずに、巨人の両手が輪切りにされる。

「私、料理は出来るのよ？」

しかし、両手はすぐさま再生する。

「うーん、蜥蜴みたいで嫌ね。ちょっと試してみようかしら。」

輪切りが駄目なら、微塵^{みじん}切り。

剣の振るう速度を上げるのではない。

『斬撃の回数』を増やせばいい。

「微塵斬りにしてやるわ。」

両手だった欠片が、空を舞う。

「これで少しは上手く…行かないわね。」

再生する腕を見て、刃奈は溜め息をついて一言。

「うん、無理ね」

「はあっ!?!?」

さっきまで自信満々な口振りだったはずなのに、もうお手上げなのか!?!と凜音は驚愕した。

「まさに無理難題。斬り刻んでも駄目、全体攻撃も駄目となれば、

火力を上げるしかない。でも貴女は体力が限界に近い。なら、一旦名誉の撤退をして体力を回復すべきね。」

「だが、放っておいたら奴は幻想郷を破壊する！少しでも奴を引き付けて、レナが来るまでなんとか…！！」

確かに刃奈の言う通りにすれば、反撃の手立てが見えるかもしれない。

だが奴はその間にも幻想郷を破壊しかねない。凜音は先程の戦いでそう確信していた。

「そうね…それも問題ね。なら、誰かが活路を開くしかないわね。」

刃奈が剣を構える。

「行きなさい。」

「まさか、あんたがやり合っつて言うのか！？」

「いい加減名前と呼んでよ。ええ、その通り。決定打を与えられないなら、相手にも決定打を与えさせないようにすればいい。」

泥仕合に持ち込めば、時間は稼げるわ。その間に撤退しなさい。」

「待て…！死ぬなよ…！後、俺は凜音だ、刃奈、名前を呼んで欲しいなら俺の名前を覚えてくれや！」

「…解ったわ、凜音。行きなさい！」

「おう！」

凜音は踵を返し、後退を始めた。

「さあて…生まれつきのスピード狂ならぬ戦闘狂の戦い、見せてあげようかしら。」

刃奈は相手をきっと見て、戦闘を始めようとした、その時。

巨人の顔が、爆発した。

「狙い通り！」

巨人の顔にロケットランチャーを直撃させたのは、猫耳レミリアだった！

「こっちに気づいた！来るわ！」

「上は頼むぞ！多少荒い運転になるが、掴まっててくれ！」

猫耳レミアは光の運転するトラックの上に立ち、相手の出方を窺うかがっている。

「蓮也、武器をありったけ用意して！トラックに積んでた武器だけじゃ足りないわ！」

「解った！」

否定的幻想実現により、トラックに武器が独りでに積まれる。

「無理はすんなよ、猫耳！いざとなったらオレが速さを遅らせる！」

「猫耳って…まあいいわ、ありがとう、トシキ！…来た！！」

巨人は此方の存在を完全に捉え、防衛策を張る。

大量の岩石によるこちらへの妨害。

「これくらいならどうにかなるのよ！舐めるな！！」

ロケットランチャーを発射後、すかさず両腕にガトリングガンを装備、岩石に向かって乱射！！

岩石は爆砕、破砕を繰り返す！

「細かいのは狙ってる暇ないわ！私は大物を撃つ！蓮也とトシキは細かいのを頼むわ！」

「任せろ！否定的幻想実現……！！！」

蓮也はこの状況での最も最善の手段を取る。

「ATフィールド……！！！」

トラックの上部を守る、橙の盾！

「これなら少しは大物が来ても耐えられる！光、頼むぞ！」

「オツケー、飛ばすぞ……！！！」

トラックは加速し、ぐんぐんとスピードを上げていく。

「って、こりゃかわせねえぞ……！！！」

フロント 目前に見えた、地面を勢いよく転がっていく岩。

「オレの出番だな……！！！」

瞬間、岩だけがまるでスロー再生したかのように動きが遅くなる。

「現人神なめんなよ、と……！！！」

トシキの能力が発揮し、岩の速さだけが0に限りなく近づいたのだ。

「これなら楽々かわせる！ありがとう、トシキ……！！！」

「早まれ…!!」

なんと銃弾が急加速する!

「これで少しは火力が上がるわ!」

先程より大きな爆発が、巨人の身体に炸裂!

「光、後どれくらいであれに接触出来るの!?!」

「今時速90kmで奴に接近している!残り…20秒ってどこか!」

つまりあれとの距離は約500mとなる。

「皆、降りる準備をして!ここからは奴に張り付いての戦いになるわ!」

「了解だ!」

何時でも飛び降りれるように、運転手の光以外の全員が用意する。

あれとの本格的な戦い…後にこの世界では『歴史に刻まれない聖戦』となる、大きな戦いが幕を開ける。

今まではあくまで「予告編」…今からは「本編」である。

「OK、飛び降りてくれ!」

「行くっ！」

私達はトラックから飛び降り、巨人に張り付いた。

- 刃奈視点 -

あの爆発…凜音のものではなさそうね。

なら、援軍ということ考えて良いのかしら？

でも、これは私の戦い…私はこの戦いで援軍に力を借りる事なんて一切しない。

私一人であれを倒せるとは思わないけれど、でも馴れ合いなんてしない。

…私は私のやり方でケリをつけるわ。

「さあ、かかってくるなさい…負の思念の塊。私はただの狂人だから、ちよつとのことじゃ驚かないわよ！」

私は私なりの戦いを始めた。

- ??? ? ? 視点 -

あの者は…自分だけで戦おうとしているのか？

「みたいですね。それはそれで構わないと思います。あれは一人でどうにか出来ないのは彼女も解っているはず。それを知った上でも彼女は一人で戦う選択をした…余程の理由があるんでしょう。」

しかし、あれでは勝てぬ…負ける為の戦いをわざわざしているようなものだ。彼女…死ぬかもしれないんだぞ？

「死にはしませんよ。…ヒーローは遅れてやってくる。」

む？…どういう事だ？

「見てのお楽しみですよ。…人の可能性を、舐めてはいけない。」

- 現在の状況 -

* 刃奈、思念集合体と戦闘中。

*凜音、回復の為撤退。

*光、猫耳レミア、蓮也、トシキの4名、思念集合体に接触。

*レナは…？

-レナ視点-

「レナ、あれは何なの？」

隙間の中を走りながら、零奈が聞いてきた。

「化け物…としか言えないな。幾ら攻撃しても身体が再生する。まるで俺だよ、あの化け物は。」

「いいえ、あれは貴方じゃないわ、レナ。」

紫が言う。

「幻想郷の住人の能力は、他人には完全に真似出来ないわ。これは変わる事がない絶対真理よ。」

つまりあの化け物は何かしらの手段で再生しているだけ…能力ではない、ならトリックは確実にある。そのトリックさえ解れば、再生を止める事が出来るかもしれない。」

「トリックか…しかし、どうやって見破るんだ？戦いの中で見極めるのはかなり困難に近い。」

「だから私が居るのよ。レナ、貴方は零奈と一緒にあれをどうにかしてこの場に留めておいて。あれの魔力解析を行うわ。」

「魔力解析？」

「傷を再生する以上、何かしらの力が必要になるはず。その力がどんなものか調べて、力が何処から来ているか調べるの。後はそこを集中攻撃すれば、きっと再生は出来なくなる。」

「…時間はどれくらいかかる？」

紫は「そうね…」と手を顎にやり、思考を巡らせているようだ。

少し間が空き、紫は口を開いた。

「まず一回あれに再生をさせなきゃいけない。それも腕一本再生するレベルで。そこまでに3分かかると仮定して…ざっと10分。それより早くは出来ないわ。」

それにもう一つ問題がある。

…私は魔力解析をしている間、完全に無防備になるわ。つまり解析が終わるまで、私を守ってくれる人が必要になるわ。」

「…そうか。10分稼げば、活路は見えるんだな？」

「ええ。」

勝利の為の10分。

その間に紫を守れるかが最大の鍵になる。

俺達は奴を討つ為に隙間から外に飛び出た。

- o u t s i d e -

巨人に攻撃を仕掛ける刃奈。

一振りで相手の両腕を切断、さらに攻め立てようとするが、その前に腕が再生し決定打を与えられずにいた。

『小さき民よ、我を斬ろうとしても無駄だ。我らは「思念」…負の思念の力は、無限なり。』

「ああそう！だけどね、『人間の可能性』を舐めて貰っちゃ困るのよね！！」

刃奈は再度攻撃を始める！

「ちよつと待ったあ！！」

その声が聞こえると同時に、巨人の腹が歪む！

「なっ…！？パイプ！？」

巨人に刺さるパイプを見て、余りのもシユールさに啞然とする刃奈。

「俺、参上！！」

とカツコつける青年が1名。

そう、蓮也である！

「なんか何処かで見たような顔ね…しかも、初対面なのに何故か親近感が湧くわ…って、危ない！！」

カツコつけた行為に怒りを覚えたのか、巨人は掌から光線を蓮也に向かって放つ。

「大ピンチ！？…って言うと思ったか？否定的幻想実現！！」

蓮也は自身を金属のドームで囲う。

「そんな壁じゃ、奴の攻撃は防げないわ！」

その刃奈の言葉の通りドームは赤熱し、ドロドロと熔け始める。

が、ドームの中には誰も居なかった！！

「ドームの中に、誰も居ませんよ？恐怖の力、見せてやんよ！魔砲『ダイバインバスター』！！」

ゴウッ！！！

「ぼさつとしないで、援護を頼む！」

「え！？あ、解った！」

胸の部分がぼつかり穴が開いているが、再生はまだ出来るようだ、
少しずつ穴が小さくなっていく。

そして成り行きで蓮也の援護をすることになった刃奈。

「…仕方ないわね、私も本気を出そうかしら！生符『輪廻転生の導
き』！」

円形状の白い弾が、巨人に襲い掛かる！！

「おお、押してる…！」

巨人の身体が少しぐらつく。

『…我等は負けぬ、負の力があるかぎり、我等は消えぬ！』

「まだよ！」

ぐらつきはしても倒れはしない巨人の身体。

「火力が足りないって事が…！」

『小さき民よ…我等の怒りを感じよ。暗黒』”救いあれ”と愚者は云った』

両腕が二人に迫る。

「先駆けは反則だぜ？」

両腕の動きが、止まる！

「何…！？腕が止まった！？」

「おいおい蓮也、ゆかりんと言う嫁が居ながら浮気か？二股はいけないぜ。」

遅れて現れた、援軍！

「トシキ！」

「早く安全な所に逃げな。奴さん、無理矢理動かそうとしてやがる。」

蓮也と刃奈が腕から離れた事を確認し、トシキは能力を解除した。

すかさず巨人は反撃として岩を召喚する。

「やらせるかよ。瞬弾『ハイスピードブレット』」

トシキが軽く腕を振ったかと思うと、岩は碎ける。

「今…何が起きたの？」

事態が飲み込めない刃奈に、蓮也は説明する。

「トシキの能力は『速度を操る程度の能力』なんだ。あらゆる物体の速度を操れる。今は弾の発射速度を上げた結果さ。あんな攻撃、トシキにとっちゃ止まって見える。…いや、本当に止めていたりするんだが。」

やがて岩の生成速度より弾の速度の方が早まり、巨人に着弾し始める。

「弾の当たりが浅いな…蓮也、ポケットとするな。援軍が来たんだから戦うぞ。」

「そっぴゃトシキ、光と猫耳レミリアは？」

「途中で凜音って言う人に会って、彼女を治療してるんだよ。後で来る、心配すんな。」

「…解った。やるか！」

トシキと蓮也、二人が手を組んだ時…

そして男は…

ゴッーン!!

『痛いわ！なんでワイがこんな痛い思いさせなあかんねん！』

巨人の頭にぶつかった。

「あいてて…：：：たく、紫の奴、空から落とさなくていいだろ…：：：ん？」

青年はよく見た顔を見た。

「おお、蓮也じゃん！」

「レナ…：：：お前、怪我してたんじゃ…：：：」

「ああ、色々あって治った！それより心の友よ、頼みがある！」

「なんだ、魂の友よ！」

「紫が奴の弱点を見つけられるらしい、10分時間を稼いでくれないか！奴の腕をぶっ飛ばすくらいの一撃をかましつづ、10分稼いでくれ！」

「ああ、それくらいならば出来る！なあ友よ！」

「最早誰が誰だか解らないぞ…因みにオレ、トシキです。」

心の友 蓮也

魂の友 レナ

友 トシキ

である、念のため。

「10分か…最初の1分は俺が稼ぐ！」スピードワールド「速度世界」！！」

トシキが何かを発動したが、見たところ何も変化がない。

「はったりか？暗黒「原罪の十字架」」

相手は攻撃をしようとした…

だが。

攻撃は発動される事はなかった。

「『速度世界』…お前の速さはオレのものだ。」

相手は身動きがとれず、ただ突っ立っているだけの格好だ。

「この世界だけでなら言える…オレが、神だ。」

トシキの姿が消える。

そして巨人のありとあらゆる部分に殴打が加えられる。

「神力込めてこれかよ…だが、時間はきっちりかつちり稼がせてもらうぞ！」

この時点で既にトシキの動きは殆ど見えないのだが、さらに動きが早くなり、殴打の回数が跳ね上がる。

「おらおらおらおらあ！！」

さらに殴る速度が上がり、相手は攻撃を受け続けるしかない！

「ラストお！！」

顔を蹴飛ばし、トシキが戻ってきた！

「はあ…はあ…蓮也…後は頼む…」

「ああ！任せろトシキ！」

続いて前に出たのは蓮也！

「最初からクライマックスだ！吹雪『ノースブリザード』！！！」

猛吹雪が吹き荒び、巨人が凍り付く！

「砕けるお！！メタル・オブ・ガードナー！！！」

なんと銀色の筋肉質の男性のようなものが現れる！

「無駄無駄無駄無駄無駄あ！！！！！」

凍り付いた身体は、本来よりかなり脆くなる。

それは巨人にも言える事で、蓮也はスタンド「メタル・オブ・ガードナー」の力を使い、氷ごと巨人の右腕を砕いた！

「まだ片腕残ってるよな！迅雷『駆け抜ける衝撃』い！！！」

今度は蓮也の攻撃、雷撃が左腕を砕く！

「終いだ！！螺旋『超電磁ゲッタードリルブレイク』！！！」

ドリルは巨人の胸を貫く！

「ちいつ、まだ終わらないのか！」

再生を始める身体を見て、蓮也は顔を歪ませる。

「見えた！皆、奴の弱点が見えたわ！」

吉報が入る！

「早っ！10分どころか5分も経ってないよ、ゆかりん！」

「藍も協力してくれたのよ！それよりも、奴の力は頭と胸に集中しているわ！同時に攻撃しないと再生するというオプション付きよ！」

「俺達、さっきから頭と胸ばかり攻撃してるぞ！？」

「コンマ0.1秒でもずれたらダメ…ぴったり合わせないと！」

「なら俺に任せる！速度さえ操れば、同時に当てるくらいなんて事はない！」

トシキが二発の弾を同時に発射！

確かに弾は相手の頭と胸に当たったが…！！

「そんな弾で終わるなら安いものよ…！」

「なら私が！」

刃奈は剣を振るい、かまいたちのような飛ぶ刃を放つ！

だが、相手はびくともしない。

「何…！？さっきより堅くなってない！？」

『同じ攻撃では、我らは倒せぬ。我らは思念…考えるという知識を持ち合わせている。』

「二点を同時に貫いて、尚且つ火力がある攻撃をしなきゃいけない…早めにけりを付けないと、此方が不利になるばかりよ!」

「それなら任せなさい。」

「!!!」

ついに、凜音、光、猫耳レミリアが現れた!

「とりあえず、凜音を治療している間に戦いは見させて貰ったわ。要は二点を同時に貫くような最大攻撃を仕掛ければ良いのね?」

「あ、ああ…だが猫耳レミリア、どうやるんだ?それが解れば文句は言わないぞ。」

「戦略なら私に任せなさい、レナ。『楔』^{くわく}よ。楔を打ち込んでおいて、それを全力で叩くのよ。」

まず私と蓮也がグングニルで奴の頭と胸に突き刺す。それを、トシキとレナで叩く。トシキはスピードを早めて一つの楔を殴り、レナはシューティングドライバーでもう一つを殴る。そうすれば絶大な力で楔は奴の身体に突き刺さり…」

「身体は碎ける!」

「そうよ、トシキ。凜音は奴の攪乱を。あと、その…」

「刃奈よ。」

「刃奈ね。刃奈は凜音をサポートして。応急処置だから、無理は出
来ないのよ。」

「待ってくれ、俺は？」

光が突っ込む。

「光、さっきトラックから散弾ミサイルを出してたわよね？あれで
奴の装甲を削って。一瞬だけでも奴の表面に傷が付けば、砕けやす
くなるから。」

「あいよ！」

つまり、策とはこうだ。

まず光が散弾型ミサイルで相手の装甲を削り、そこに蓮也と猫耳レ
ミアアがグングニルで撃ちこむ。
それをレナとトシキが殴り、釘打ちの原理で相手の身体を砕くとい
う作戦。

「解った？早速仕掛けるわ！気付かれない内に仕留めるのよ！」

「オツケー！まずは俺からだな！！！」

光がバズーカを構える！

「自作のとおっておき散弾ミサイル、喰らいやがれ！！！」

ミサイルは弧を描き、相手に着弾して小さな爆発を起こす！

「行くわよ、蓮也！」

「ああ！」

二人が同時に槍を投げる体勢をとる！！

「羨望『レイピア・ザ・グングニル』！！」

「神器『パイプ・ザ・グングニル』！！」

二本の槍は、これからの布石となるべく相手に突き刺さる！！

「再生なんかさせるか！レディアントソード！！」

「出し惜しみはしないわ！聖炎『不死鳥の羽ばたき』！！」

緋色の剣が巨人の行動を阻むように迫り、その後ろから爆炎が！！

「止めだ！瞬足『韋駄天走り』！！」

「砲打『シューティングドライバー』！！」

二つの流れ星が、釘を殴り付け……！！

『ぐ、ぐぬぬぬ……！……！ 此処までやるとは……！……！』

『我らに致命傷を与えらるとは、貴様ら……！……！』

『お、覚えていろよ……！次こそは必ずや叩きつぶして……！……！』

身体全体がひび割れて行き、思念の器は壊れて行く。

『忘れるな！我らは闇！我らは何時でも貴様らを見ているぞおおお
お……！……！……！』

その声が最後だった、器は砕け散り、今度こそ終わった。

そして、影の救世主達も、同時に消えた。

「…皆？」

「この世界でやることを全て終わらせた者達は、元の世界に戻るの
が理つす。皆、帰ったんですよ。」

「そうか…終わったんだな。」

毛玉を横に、レナは空を見上げる。

「何処に行っても、心は繋がっている…そうだろ、皆？」

空が、頷いたような気がした。

完。

聖戦の終焉（後書き）

次回より風神録突入！

の前に、お知らせをさします。

お知らせ（2011 / 6 / 17 追記）

というわけで次回より風神録編突入しますが、ここでお知らせです。

もう活動報告を読んで頂いた方はご存知かもしれませんが、風神録編突入（つまり次回更新）を約2〜3週間後に遅らせます。

というのも理由があるのです。

理由その1

『風神録編プロット作成』

風神録編は物語上とんでもなく重要になってきます。さらに、一つのクライマックスが待っています。

故にプロットは緻密に構成し文章にしておきたいわけです。

出来るだけ定期更新したいので書き貯めもこの期間にしたいのです。

今のうちに言っておきますが、守矢三神が好きな方はあややが出てきたら地霊編まで待って貰った方が、もしかしたらいいかも…

理由その2

『文の大幅加筆修正』

読み返すとヘンテコな所が多々ありますので此処で一気に加筆修正しようと思っています。

既に修正は開始していますが、さらに修正する可能性もなきにしもあらず、尚且つ新たに伏線を張ったりするかもしれないので、修正後の文も是非読んで頂ければありがたいです。

理由その3

『他の小説の更新』

実はこの小説、作者史上最大のヒット作品になっています。(PV
220000突破！)

が、他の小説が放置気味に…(汗)

というわけで他の小説も更新します。

東方奇人伝(らぐなVer)及び外伝がメインになりますのでそちらをお楽しみに。

というわけで読者の皆様にはご迷惑をおかけしますが、暫くの間お待ち頂くと共にこれからもご声援を宜しくお願いします。

*お願い

風神録編でレナと同行してほしい人を募集します。

紅（レミリア以外）・妖・永・花・萃の全てから1人か2人まで募集します。

出して欲しいキャラが居ましたら感想やメッセージでどうぞ。

お知らせ(2011/6/17追記)(後書き)

*修正後の文の更新状況等もこちらに追記します。なので編集を何回か行います、ご了承ください。

更新状況

第二章@3まで修正終了。

『風神録予告編』動き出す意思（前書き）

特別先行投稿、風神録編第一話です！

『風神録予告編』動き出す意思

「?????視点」

…ふむ、新たな異変が起ころうとしているな。

「そうですね。そして次の異変…それはこの世界にとってきつと大きな節目になる。」

時に、お前が蒔いた『種』は育っているか？

「ええ。一つが花を咲かそうとしています。この時に間に合っただけ良かったです。」

そうか。ならば最悪の事態は回避出来そうだな。

「それよりも、『あの日』が近付いてきています…あちらの状況はどうなっているんです？」

釈放は決まったそうさ。しかし、既に数百年もの時間が過ぎてしまっている…彼女の志が、この世界に通じるかどうか…

「通じさせなきゃならないんです。そのために俺は『種』を蒔いた…全てが花を咲かせた時、それは対話の時です。もう歴史は繰り返さない。いや、繰り返しちゃいけないんです。」

…だが、我等の直接の介入は許されない。それは解っているのだから？

「解っています。それを差し引いても、俺は彼女の志を引き継ぎたいと思った。だから俺は……」

お前の意志は私に届いている、だから私はお前を信じる。
…私の代わりに、彼女を頼む。

「ええ。来るべき和睦の為に。」

- ??? ? 視点 -

「…時は満ちた。今度こそ悲願を達成しようではないか。」

「この世界の支配…面白そうじゃん。私も協力するよ。」

二柱の神が、意見を一致させた。

それは行動開始の合図。

「解りました…では、行動に移りましょう。まずは…博麗霊夢、彼女を……」

この世界の宗教は一つで良い。
巫女は1人だけいればいい。
だから。

「殺しましょう。」

「???視点」

「ついに『奴』が行動を起こすようだ。…ついに、ついに俺は『奴』に…。」

「…悲願が叶うわけね。でも…」

「ああ。なるべく『あれ』は使わないようにする。出来れば使う事なく仕留めたいが、相手が相手だからな…きつと無理だ。」

「それでも、使いすぎは危険よ。本当に人間の枠から外れるわよ。」
「だとしても構わない。」

人間の枠から外れたとしても、俺は奴を…

「目的さえ果たせば、俺はもうその力を使う事がなくなる。これが最初で最後だ…」

「その言葉が真実であることを願うわ。…必ず戻って来なさいよ。でないと許さないわ。」

もとより戻らないつもりはない、だが何が起こるかは誰にも解らない。

細心の注意を払うべきだなと自分に言い聞かせてから俺は答えた。

「ああ。」

・レナ視点・

俺は紅魔館で毎度の事ながら平和に過ごしていた。

やはり平和はいい。

異変が起きないというのは素晴らしい事だ。

「今日も平和だなあ…」

俺は何もしなくていい時には、いつも庭で仰向けになって空を眺める。

雲一つない青天だ。

ふう…と息を吐く。

その後に思いつきり空気を吸う。

身体の中の空気が入れ換わったような気がして気持ちがいい。

秋が近付いていた。

近づく心地よい秋の空気を感じながら、俺はいつの間にかウトウトしていた。

「起きろ！おーきーろー！！」

なんか声が聞こえるが、誰の声か、言葉の意味すらまともに解らなかった。

目も開けたくなかった。

こういうこと、稀にあるよね。

「無理矢理起こすしかないぜ！恋符『マスタースパーク』！！」

で、無理矢理叩き起こされた。

いや、叩くと言うよりビームでぶっ飛ばされたと言った方が正しいか。

「痛えな！何すんだ！！ってあれ、魔理沙？」

ポロポロになりながらも俺は敵襲かと思ひ咄嗟に周りを見渡すと、そこには魔理沙が。

「全然起きないから叩き起こしたんだぜ！普通はこんなことしないけど、レナは死なないからいいかと思つて！」

「だとしてもいきなりマスタースパークはないだろ！？」

照れ笑いしている魔理沙に全力で突っ込む。

自分の能力があつてよかつたと思えた瞬間でもあつた。

「そんなことはどうでもいいんだぜ！それより大変だぜ！」

「どうした？」

「霊夢に殺人予告が来たんだぜ！」

「！！！」

霊夢に殺人予告？

犯人は余程の自信家か馬鹿かの二択になる。

そもそもな話、事情はよく解らないが霊夢は幻想郷にとっては欠かせない存在だといつか紫から聞いた事がある。

つまり霊夢を殺すと言つのはある意味、幻想郷の全住人を一瞬にして敵に回す行為なのだ。

「…魔理沙、それが本当ならまずいな。霊夢は今何処だ？」

「博麗神社だぜ！」

「解った、魔理沙は紫を呼んできてくれ！俺は博麗神社に向かう！」

「解ったぜ！」

俺は博麗神社に向かった。

博麗神社に着くと、神妙な顔をした霊夢が居た。

「霊夢！大丈夫か！？」

「まだ何もないから大丈夫よ。それにしてもわざわざ果たし状まで書いて殺人予告だなんて…余程自信があるのか馬鹿なのか。」

霊夢が一枚の紙を俺に渡す。

目を通してみた。

『5日後に殺しに行きます。残り5日の命、有意義に使って下さい』

ね。』

「…この手紙が何処の誰かから来たかは解らないけど、私に渡しにきたのは文よ。文は『今度出来る神社の巫女だ』って言ってましたが…』って言うてたわ。

文の事だから余程の事がない限り手紙を貰ったその日に配達する、つまり残り4日なわけね。」

はあ…と溜め息をつく霊夢。

「魔理沙があちこちに飛び回ってるみたいね。レナが来たとなると次はきつと…。」

「噂をすれば何とやらよ。」

何処からか紫が現れた。

まあもう慣れてるから、何時もの隙間だと解る。

「話は魔理沙から聞いたわ。貴女を殺そうとする馬鹿がいるらしいわね。」

「馬鹿だけならいいんだけど、本当に殺しにかかれるほど強いのかもしれない。だとすればまずいしね。」

「それもそうね。まあ…魔理沙にレナが居るんだから大丈夫だろうけど。」

「わざわざごめんさい。こんな事に呼んでしまって。」

「構わないわ。貴女は少なくとも、此処に居る皆にとっては大事な存在…そんな貴女が死ぬ事になるのは、何としても避けなければならぬわ。」

「…ありがとう、紫。」

… 霊夢を殺そうとする奴は、絶対に許さない。

俺はどんな相手だろうと退かない、そう心に誓った。

時の流れというのはこういう時はかなり速い。

あっという間に5日が経ち、ついに霊夢が殺害されるとされる日になった。

「…来るなら来なさい。私を殺せるものなら殺してみなさい！」

「随分と威勢の良い方なんですな。巫女と言うからもう少しか弱い方かと思ってましたが。」

来た！

鳥居の真下に立つ、緑髪の…

緑髪の…

巫女さん？

霊夢そつくりの腋を露出した服。

色が青っぽい事を除けば霊夢と同じものだろう。

が、何処かで見たことがある顔だな…何処だっけ…

「あんたが私を殺そうと来た奴ね。たった1人で来るなんて、余程自信があるのね。」

霊夢が札を構え、戦闘態勢をとる。

「…ええ。『人間』の貴女には負けるはずがないんです。だって私…」

自信満々の笑みを浮かべ、彼女は言い放つ。

「神ですから。」

『風神録予告編』動き出す意思（後書き）

次回はもうしばらく待ってて下さいね！

というわけで次回

「人と神の争い」

お楽しみに！

人と神の争い（前書き）

今日からまた更新開始です

人と神の争い

「神とは大層な存在ね。でも、私はそう簡単には死にはしないわ。」

「それが最期の言葉でいいんですか？余りにもセンスがないと思いますが。」

「死なないから。少なくとも、あんたには殺されないから。」

「強がりを言ってられるのは今の内ですよ？」

「それは貴女にも言えるわ。」

「そうですね。では…そろそろ死んで貰いますか。」

彼女は軽く右腕を振る。

すると、彼女の横に白い大蛇が現れた。

「巫女が蛇を使うなんて中々珍しいわね。」

「私が信じる神の使いですけどね。猛毒持ちの蛇ですから、咬まれると死にますよ？」

「そう…じゃ、その蛇から倒そうかしら。」

「倒せるものならどうぞ？」

余裕綽々の表情を浮かべる青い巫女に対し、霊夢は行動に出た。

「霊符『夢想封印』」

狙うは白き大蛇！！

「そんな攻撃、通じる訳がないじゃないですか。」

ふわりと袖が舞い、彼女は霊夢の弾をかわす。

「それでおしまいですか？そんな訳無いでしょう？」

「ええ。その程度で終わりと見くびって貰っては困るわ。」

相手は神。

ならば全力で仕留めない！

同時に駆け出した二人が、彼女に攻撃する！

「恋符『マスタースパーク』！」

「魍魎『二重黒死蝶』！」

一つの太い光線と、それを囲むように小さな弾が放たれる！

「連携とはやりますね。ですが！」

まるでこれを読んでいたかのように、彼女は弾と光線をかわし、反撃をする！

「ミシヤグジさまー！」

白蛇が魔理沙と紫の方へ飛び掛かる！

「…それを待っていたのよ。」

「は？ミシャグジさまに咬まれたら死ぬんですよ？まさか咬まれた
いんですか？」

勝ったと言わんばかりの笑みを浮かべる少女に対し、霊夢はその自
信の虚を突いた！！

「蛇じゃなく、猛獣が咬むのよ。…貴女をね！」

少女の真後ろ、翠の片翼を広げた猛獣が！！

「砲打『シューティングドライバー』！！」

背中を直に襲う鈍痛の強さが、猛獣の力の強さを示す！

少女は前のめりになる。

そこを霊夢は見逃さなかった！

「霊符『封魔陣』！」

「なっ…！！？」

少女を結界が包み、蒼い電撃が少女に走る！

「きゃああああー！！！！」

電撃が収まり、少女はよろよろと立ち上がる。

「…まだです…こんな所で…私は…私は負けるわけには…！！」

「諦めなさい。幾ら神とは言え、4対1では勝ち目はないわ。」

確かに手負いの少女から見れば、相手はほぼ消耗していない有力者4人。

このままでは少女が圧倒的不利の状況である。

「ふふふ…あははははー！！」

突然少女が笑い始めた。

「何が可笑しいのよ？」

「何が可笑しいって？そうですねえ…貴女方にも理解出来るように説明すると…」

少女は不気味に笑って続ける。

「もうすぐ貴女達に絶望が訪れます。」

「！！何か来るわ！！」

紫が声を上げる。

その声とほぼ同時に、少女の両脇が『歪んだ』。

「早苗ー、まだ終わらないのー？」

「余りにも遅いから心配したわ。」

その双極は、一目見ただけで恐怖を感じさせるような殺気を僅かに放っていた。

闘いに慣れていない者には気付かれない程のほんの僅かの殺気…。
が、死線を潜り抜けた4人は気付いていた。

『この二人は…強い！』

「早苗、大丈夫？随分傷を負ってるみたいだけど…」

「ええ。ですが、妙な術を受けてしまいました…神力しか使えないんです。」

「後は私達に任せなさい、早苗。こんな人間達なら私達二人で充分よ。早苗は先に退きなさい、彼女が待ってるわ。」

「…解りました、神奈子様、諏訪子様。では、また後で…。」

少女が姿を消した。

「????視点」

「あ、早苗！ってその傷、大丈夫なの!？」

「大事には至りません…ですが、予想以上にダメージを受けました…先に戻りましょう、後は神奈子様と諏訪様様がやってくれます…」

「…いや、早苗は先に戻ってて。」

「え?」

許さないわ…絶対に許さない…!!

「ちよつと全員殺して来るわ」

人と神の争い（後書き）

次回予告。

二柱の神の実力の前に、レナ達は…！？

さらにまさかのあの人物が現れ、事態は急展開を迎える！

というわけで次回

「私は親愛なる友の為に戦うだけだから」

お楽しみに！

私は親愛なる友の為に戦っただけだから（前書き）

リアルが忙しい…

ぐぬぬぬ…

あ、7月初の更新ですね。

私は親愛なる友の為に戦っただけだから

「?????視点」

「ダメですよ！幾ら貴女でも、やっていいことと悪いことがあります！」

此処で仮に彼女の身に何か起きてしまったら、計画が頓挫しかねない。

計画の完遂の為に、彼女には私と一緒に退いて貰いたかった。

しかし、彼女は…

「…確かに、自分の手に負えない事は無理にやらないのが一番ね。けど早苗…それ以前に…計画だ何だと言う前に、私にはしなければならぬ事があるわ。」

「え?」

「隙間妖怪やら貧乏巫女やら泥棒にやられたんでしょ?やられたんなら殺り返す。それが自然の摂理よ。」

「ですが…!」

「大丈夫よ、早苗。『私は死なない』わ。」

…こうなった彼女を止められるのはきつと神奈子様か諏訪子様だけ

…最悪このお二方に止めて頂くしかない。

私は諦めた。

「解りました。ですが…」

せめて言う事には従つてと言おうとしたが、左手で遮られた。

「解ってるわ。無理はしないし、神様の言う事には従つわ。」

「ならいいのですが…気を付けて下さいね。」

「ええ。行ってくる。」

彼女は踵を返し、神社の方に向かって行った。

- レナ視点 -

「殺される相手の名前くらい最期に聞いておきたいわよね。名乗るだけ名乗っておこう。私は八坂神奈子…神だ。そしてこっちが…」

「洩矢諏訪子よ。私も神だけどね。」

背中に円形のしめ縄を付けている大人びた女性が八坂神奈子、もう一人、目玉付きの帽子を被った少女が洩矢諏訪子と言っらしい。

神奈子が口を開いた。

「今回来たのは他でもない、博麗霊夢…お前を殺しに来た。」

「さっきの女のグルね。雰囲気がそっくりよ。」

確かに、彼女達から感じる何か…魔力ではなさそうだが…それはさっきの少女のものと同じだ。

「グルと言えばグルだな…まあ早苗は私達の神社の巫女だ。」

「神社…ねえ。どう見てもおかしいな宗教団体よ。もっとまともに布教活動をなさい。」

早苗…何処かで聞いた名前だ…何処だ？

「そう言ってもらえるのも今のうちだぞ？さて、博麗霊夢以外の3人に聞こうか。率直に言おう…我等に従わないか？」

『！…！』

どういっつもりだ？

「我等に従えば自由だ。我等からすれば、お前達が味方であること自体に利点が大いにある…特に服従などを強いるつもりはない。悪くはない話だとは思うか？」

こんな時の答えは大体決まっているが、俺も答えは一緒だった！

「ざけんなよ…！俺はあんたのような奴に従うのが…！！！」

即座に攻撃を仕掛ける！

「嫌いだ！！砲符『リヴァイバル』！！」

紅い閃光が、神奈子に向かって突き進む！

「甘い。」

が、閃光は奴を貫く事はなかった。

煙の中から見えたのは半透明の結界のようなもの。

どうやらそれが盾代わりになったようだ。

「…私は神よ？神には不可能という事はない。」

「相手が神だろうと何だろうと関係ねえ！！その盾、ぶった斬ってやんよ！」

俺は芯斬刀を抜き、相手に迫る！

「実体剣か。確かに早苗の言う通り、バリアを貫くには適切な武器だ。だが…」

神奈子の後ろから何かがこっちに近付く。

「斬らせなければどうって事はない。神祭…」

辺りが暗くなり、俺は空を見上げた。

しかし、眼に映ったのは茶色の『何か』であった。

「『エクспанデッド・オンバシラ』」

俺は空から迫る『何か』から逃げようとした。

「…人間、貴様の考えていることは解るぞ！」

神奈子の追撃を受け、退くにも退けなくなる。

「なら、せめて一緒に潰れようや。」

痛み分け…！

「そうか…だが、余りにも幼稚な考えだ！諏訪子…！」

「わかってる！」

突然、身体が動かなくなる。

何があったのかと身体を見ると、鉄の輪がきつちりと俺の身体を拘束していた。

「潰れるのはあんただけだよ…じゃあね。」

くっ、拘束が解けない！

その間にも、空から落ちてくる。

くそっ…!!

「レナ!!」

身体が宙に浮かぶ。

それもそのはず、だって…

「魔理沙!?!」

魔理沙の箒に吊るされてるもん。

「大丈夫!?!」

潰されはしなかったけど…

「この拘束さえ何とかならない限りには戦えないぞ!」

「任せて!レナのリヴァイバルを元に作った、これを使う時が来たぜ!ナノスパーク!」

魔理沙の右手に握られた八卦炉から、針のような光線が少し出る。

その光線は、鉄の輪を焼き切った!!

「サンキュー!何とかなった!」

「へへへっ、役に立ったんなら何よりだぜ!」

っと、それよりあのデカイのはどうなった!?

「ほう…! 隙間で我が御柱を喰らうか!」

「当たり前よ! あんなのが落ちてきたら此処はただじゃ済まないもの!」

紫が隙間を開き、デカイのを中に…って隙間すげえ!!
あんなの入れられんの!?

「だが、いずれ限界は来る。どこまで持つかな?」

「私達二人を相手にするつもりかい、八雲紫!」

魔理沙が飛ばしてくれたとしても、やはり少しの間紫は挟撃されるという苦しい展開だ。

が…俺は知っている、紫がこの状況で何もしないはずがないと。

ほうら、紫が…笑った!

「何も私『だけ』が相手する訳じゃないわよ。」

「何を言っている? 博麗霊夢を前に出して囿にするつもりか?」

「そう考えるならそう考えてなさい…今よ!!」

刹那、何処からか漆黒の槍が神奈子に突き刺さる!

「な…んだ？」

「待っていた、この時を！」

隙間から飛び出して来た人物、それは…！！

「らくなさん！？どうして此処に！？」

「あの馬鹿神には色々と因縁があつてな…！手伝つぞ、レナ！」

「はい！」

俺とらくなさんが並ぶ！

「何処の馬の骨か知らぬが、お前も私の力の前にひれ伏すがよい！」

「ハッ、俺は神を信じないんでね！仮に信じたとしてもあんたは信じない、八坂神奈子！」

「ならば死ね！！！」

木の柱が飛んで来る！

「死ぬのはあんだだ！！ヘルメス！！！」

柱を叩き斬る彼に対し、相手は…！！

「諏訪子、援護を頼むわ！」

「わかったよ！ミシヤグジさま！」

増援を呼び、確実に対処する！

「レナ、頼みがある！」

「何ですか！？」

猛攻を掻い潜りながら、俺はある一つの策を伝えられた。

「奴らを同時に攻撃するのは至難の技だ…ならば1人だけでも戦闘不能に追い込む、レナ…俺に合わせてくれ！」

「解りました！」

散開する二人！

「一対一にするつもりか？面白い、お前達の意向に従ってやろう！」

神奈子が彼に気を向けた、その時！

「…かかったな！レナ！！」

「はい！砲符『リヴァイバル』！！」

不意打ちとしてまずレナがリヴァイバルを放つ！

「ぬっ！？だが、それで私を倒せると思うな！」

神奈子が結界を展開し、身を守ろうとする！

「そこだあ！！槍符『ロンギヌス』！！」

もう一人がなんと結界に直接黒い槍を突き刺す！

「何っ！？」

結界は不完全な形のまま、緑の閃光に包まれる！

「ぐぬうううう！！」

結界を破砕した閃光は、確実に彼女に傷を負わせる！

「まだだっ！！」

レナは「翼を求めし者」を展開し、らぐなは剣を持つ！

「砲打『シューティングドライバー』！！」

「劍符『狼牙一閃』！！」

一点に集中した二撃は、相手にとってはきつい攻撃であった、神奈子は膝を付く！

「わ…私に…膝を付かせるとは…！！許さんぞ人間！！」

「神奈子！」

諏訪子が神奈子に近付き、肩を貸す。

「このままでは『計画』に支障が出る…！諏訪子、此処は退くべきね…！」

「早苗の仇は取りたいけど、それは今じゃない…私達の間はまだ完全とは言えない、退きましよう。」

「『『『『逃がさない!!』『』『』『』』」

撤退しようとした諏訪子、神奈子に対し、レナ・らくな・霊夢・紫・魔理沙の5人は追撃をしようとした、その時!

「傷符『ペインバースト』」

何処からか黒い光が伸びて、5人は身を翻してかわす!

「早く逃げなさい。私でもこの5人は相手にし切れないわ。」

「かたじけない、礼を言うぞ!」

その僅かな隙を見逃すことなく、神奈子と諏訪子はぷつりと姿を消した。

光が細くなり、レナは事態を理解した。

神奈子・諏訪子を逃がしてしまった。

そして…。

「お久しぶりね、レナ。悪いけど、此処で死んでくれる？私は親愛なる友の為に戦っただけだから。」

その声の主は、余りにも意外過ぎた。

白い…心をそっくり写したような純白のゴシッククロリータの服。

ふわりと舞う、少し銀色に輝く髪。

そう、彼女は味方である…はずだった。

「れ…零奈…!？」

私は親愛なる友の為に戦っただけだから（後書き）

次回予告！

敵は…零奈！？

零奈の真の力が今、明かされる！

というわけで次回

「The PAIN」

お楽しみに！

T h e P A I N (前書き)

リアルが忙しいなんてマジ勘弁w

The PAIN

- ??? ? ? 視点 -

ほう…面白い事になったな。

「そうですね。まさか彼女が守矢神社側に付いていたとは…これは少し興味深いですね。」

しかし、ルーツは同じなのだろうか？

「そうですね。『彼』は博麗神社側に付き、『彼女』は守矢神社側に付いた。ルーツが同じでも、事実には僅かな…しかし確実な違いがある。平行世界パラレルワールドの根の2つが、交わろうとしている…いや、もう交わったのですね。」

…この戦い、どう見る？

「同じルーツを基にした二人の激突…一対一さしならば互角でしょうね。ですが、今の状況は5対1…彼女が圧倒的不利の状況です。ですが、仮にも1人はこの世界の英雄…その英雄のルーツと同じ彼女が、このまま簡単に倒されるものでしょうか？

私はこの戦いを見てみたい…これは新たな試みですよ。」

ふむ…まずは見てみるか。

- 零奈視点 -

「私は親愛なる友の為に戦っただけだから。」

と大喧嘩吹っ掛けたはいいものの、余りにも分が悪すぎる。

5対1とか何、リンチ？

…でも、力の実験にはちょうど良いかも。

いざとなれば逃げる手筈ももう講じてあるし。

「零奈、なんで君が！」

「レナも友達の為に異変を解決してきたんでしょ？それと同じよ。私も友達の為にこうしているの。」

早苗の為だからこそ、こんなことやるんだけど。

「…けどその友達は、霊夢を殺そうとした！それがどういふことか、零奈なら解るだろ！？」

「ええ…勿論解ってる。なら逆に聞いわ、その霊夢は過去に何をしたか、レナは知っているの？」

「過去に…？」

「彼女には殺されても文句が言えない理由があるのよ。レナ、貴方が此処に来てからは成りを潜めていたようだけど…彼女は妖怪にとつては悪魔よ。」

そう…彼女は悪魔。

「悪魔…どういうことだ!？」

「紅魔異変が起きる前…博麗霊夢、彼女は私利私欲で妖怪達を虐げた。ただ『金がない』、その理由でね…!!」

「だが、それは悪い妖怪を懲らしめる事だろう!？そんなことだけで殺されなきゃならないのか!？」

「ええ…それだけならば構わなかった。でも、彼女のその行動は人々にある思いを植え付けた…『妖怪は悪い奴なんだ、虐げるべき存在なんだ』と…!」

それ以来、人々と共存出来ていたはずの罪のない妖怪達も自然に虐げられるようになり、山に逃げていくように住みかを移すしかなかった…!!それを罪と言わず何と言うの!？」

「それはそういう妖怪のせいだろ!霊夢だけのせいじゃない!」

「…レナ、貴方も人間こそがこの世界の頂点と考えているの?人間が絶対の正義で、それに逆らうものは全て悪…排除するしかないと考えているの?」

「そんなことは言っていない!だけど、それで霊夢を殺してしまつたら憎しみが増えるだけだ!」

「それでも、彼女さえ居なければ妖怪達はもつと自由だったかもしれない。あくまで可能性の域を出ないけれど、それだけ博麗霊夢…
貴女の行動はっ！！」

零奈が動いた！！

「周りに影響するって事、いい加減に学習しなさい！！傷符『ペインバースト・リバース』！！」

2つの黒い光が、霊夢に向かって伸びる！

「そんな攻撃、ただで受けるとは思わない事ね！境界『二重弾幕結界』！！」

霊夢は結界を展開し、攻撃から身を守る！

「流石ね…でもっ！！」

零奈は構わず霊夢に迫る！

「何のつもり？結界に阻まれるのを解っているのに…？」

「確かに、普通の攻撃ならそうでしょう…阻まれておしまいね。だけど『私』はそれでは終わらない！」

「！！！」

結界に手を押し当てる零奈…

「砕ける!!」

結界が割れ、破片が空を舞う!

「なっ…!?」

「戦士に盾は必要ない…必要なのは剣だけよ!」

「させない!」

零奈が霊夢に向かって放った回し蹴りは空振り、霊夢は姿を消した。

「…そうね、貴女も居たんだけ、八雲紫。」

間一髪、紫の隙間でなんとかダメージを受ける事態だけは避けられた。だが、これで解ったのは『結界は砕かれるだけで、本来の役目では全く使えない』。

つまり、霊夢…いや、それより紫の攻撃手段はほぼ皆無になったというわけだ。

「今のうちにかくりを明かしておきましょうか。」

私の能力は『傷を操る程度の能力』…私が触れたものに刻まれた『傷』を自在に操る事が出来る。勿論、自分の傷も操れるわ。」

「!じゃあさつき防がれると解っていながら攻撃したのは…!」

「流石、博麗の巫女はお察しがよろしいよう。そう、結界に傷を付けたかっただけなのよ。傷さえ付けば、後はそれを増幅して結界

を砕くだけよ。」

なんて力だ…！

「だけど、傷を付けるのにスペルばかり使っていたらいずれ貴女は攻撃手段を無くす…なら、結界を張り続けければ良いってことね！」

「勝手にそう妄想してなさい。貴女がそう思うならそうなんですよから。」

「良いわ、その妄想が現実になる所を見せてあげる！」

札を飛ばす霊夢に対し、零奈は冷静に弾道を見極めてかわす。

「さっさと当たりなさいよ！」

「当たると痛いもの、好き好んで当たりたくないわ。」

「なら当てに行く！皆、援護を頼むわ！」

紫と魔理沙が前に出る。

だが、1名動こうとしない者が居た。

「…そうか、君らしいやり方だ、零奈。つまり俺のやるべき事は…これ、か。レナ、行くぞ。」

「え？でも、零奈を倒さなきゃ霊夢が…！」

「零奈は霊夢を殺さない。大丈夫だ、問題ない。」

「問題大有りですよ！いくらなんでもそれを信じると言う方が無理があります！」

「事情は後で話す。このままでは奴等の思う壺だ…行くぞ、レナ！」

「…解りました、ちゃんと事情は話して下さいね！」

誰にも気付かれないように、二人はその場を離れた。

The PAIN (後書き)

次回予告！。

レナ、新たな旅へ！

というわけで次回

「こんな始まり方は今までなかった気がする」

お楽しみに！

こんな始まり方は今までなかった気がする(前書き)

更新不安定で申し訳ないです…

こんな始まり方は今までなかった気がする

- 零奈視点 -

…行つたわね。

察しが早い人は本当に助かるわ。

あの神は目の前に居る巫女よりも頭がおかしいしね。

ならより頭がまともな方に付くのが普通でしょ？

しかしまあ、信用させるのにかなり苦労したわ。

だけど、力もついた、信用されている、此処まで来たら後はあの二人に賭けるしかないわね。

私は時間を稼ぎましょう、なるべく長く…ね。

「さあ、気付かれないように上手くやらなくちゃね…」

- レナ視点 -

「…そろそろ話しても良い頃だろう、レナ。あいつの…零奈の目的を…」

「さつきも言っただんですが、霊夢を殺す事じゃないんですか？」

「違うな。俺の推測が正しければ、そもそも『零奈には霊夢を殺す理由がない』と言う結論に至る。」

「え、でもさつきのって本気の攻撃に見えましたが…」

ペインバースト…あれの火力は半端じゃない。

「なら考えてみる。幾らお人好しとは言え、『自分とは違う生き物の為にわざわざ復讐を果たしに来た』なんて言う奴が居るか？」

友達とか居るならまだしも、他人の為にそこまで出来るような人間なんていないな。」

「話が良く見えないんですが…」

要は、とらぐなさんが言い、続ける。

「つまり零奈は復讐を目的としていない、ならば目的は何だ？そう考えた時、俺はある仮説を考え付いた。

もしかすると『零奈は霊夢を博麗神社に留めておきたい』のではないかな。」

「…あ！！」

そうか、確かに零奈の前に来たあの3人は本気で霊夢を殺そうとしていた！

それから霊夢を守りたかっただけだったって可能性も…！

「零奈の目的は霊夢を保護する事…間違いなくあの馬鹿神は霊夢を殺しに来るだろう…：そうなった時に、一番霊夢を守る方法…：それが『敵のふりをして戦う』事だったんだな。」

「そしたらもう戦う必要ないんじゃないんですか？こうして俺達が止めに行っているんですし…：」

「そうはいかないぞ、レナ。霊夢達の性格を考えろ…：それを知ったら霊夢はどうする？」

「…飛んできますね…」

「だろ？そんなことになれば零奈の努力が無駄になる。今回は俺達で奴等を仕留めるぞ…：と言いたい所なんだが。」

らぐなさんが立ち止まる。

「正直な話、俺一人でやっと神一人を倒せるか倒せないかって所だ…：もう一人の神をレナに任せるとしても、きっと刺客が立ちはだかる…：二人じゃ分が悪いと判断した。というわけで…：」

目の前の森の奥から、二つの人影が現れる。

二人とも…：空を飛んでるみたいだが…：？

「援護を頼んだ。」

現れたのは…！

「はあ…久しぶりに外に出れると思っただら任務ですか…あ、レナ！」

「小悪魔！？何で此処に！？」

え？いつもパチュリーやレミアの世話役の小悪魔が何故に？

「彼女はああ見えて恐ろしく強い。特に賞金稼ぎとなるとびっくりな程強いぞ。」

「まあ元賞金稼ぎですけどね。神様ぶちのめしたら賞金と聞いて、久しぶりに血が騒ぎました！」

「あ、ああ…よろしく…」

強そうな気が全然しないが、助っ人は多いに越した事はない。

そしてもう一人…

「妖夢を連れて来ないで外に出るなんて何年ぶりかしら。」

この間が抜けた喋り方…

「幽々子!？」

「頼まれたから出て来たのよ、今度の敵もなかなか強いんですけど?」

待て、俺じゃなくても良かったんじゃない?

「と言うわけだ、レナ。この2人が居ればなんとかなるだろう。」

「なんとかなるって…」

だが、仲間が多いに越した事はないのは事実。

「行きますか!」

4人での冒険、後に「守矢神社殴りこみ事件」と報道される冒険が始まった。

こんな始まり方は今までなかった気がする(後書き)

次回予告。

やっとこさ物語進みます！

タイトル未定っ！！

お楽しみに！

妖怪の山に入ったようです(前書き)

いつの間にかユニーク24000突破していました!

皆様ありがとうございました!

妖怪の山に入ったようです

此処までのあらすじ。

霊夢を殺そうとした早苗・神奈子・諏訪子の3人はレナ達に振り返りに遭い、撤退を余儀なくされた。

だが、追撃しようとしたレナ達の前に現れた人物は…

なんと零奈。

霊夢・魔理沙・紫は零奈を倒そうとするが、何故からぐなは動かなかった。

らぐなは零奈は霊夢を殺すつもりはないのではと考え、自分のやるべき事：すなわち追撃をする事が最も適切な策と考え、レナを連れて追撃を行う。

援護として小悪魔・幽々子を連れて…

・以下本編、レナ視点でお楽しみ下さい・

そう、俺達は神奈子と諏訪子を追おうとしていた…はずなのだが。

「美味しい!」

何故かピクニック状態になっていた。

と言うのも幽々子がお腹を空かせてしまい、食事をせざるを得ない状況になったのだ。

妖夢がいつか愚痴ってたな…『幽々子様が冥界の管理をしていなければ、今頃路頭に迷ってしまいましたよ…今でさえ給料の8割は食費なのに…』って。

まあそれほどよく食べるで有名な幽々子。

いつの間にか目の前にあったはずの食料が消えていた。

おい…かなり量があった気がしたけど…

「はあ、おいしかった」 あ、背中貸して!」

で、当然の事のように俺の背中にもたれる。

こつなつたら動かないのが普通だが、動かないといけないため、幽
々子を背負う形になるわけだが…

軽すぎます。

何にも背負ってないような感覚がします。

「だって私、幽霊だもの。幽霊が重くなつたつて言ったら凄い話に
なるわよ〜。」

幽霊がどうやって物を食べるのかと考え始めたらきりがないので、
そういう事にして先を急ぐ。

らぐなさんいわく、『奴等の本拠：守矢神社は妖怪の山を越えた所
にある』んだそうで、必然的に妖怪の山を越えなければならぬわ
けだ。

たまに会う萃香から話を聞いた事があるが、妖怪の山は基本的に人
間は立ち入り禁止だと言う。

妖怪は人間を嫌っているのが大多数であり、人間を見ただけで怒り
狂う妖怪もいるんだそうだ。

…が、俺は普通に入れる。

『妖怪の最高峰である鬼の萃香と仲が良いのなら、コイツは信用出来る』と捉えているようだ。

元居た世界では『鬼は狂暴で嘘つき』というのが通例だったのだが、この幻想郷の鬼は余程の事がない限り狂暴さを見せないと紫から聞いた。

それに正直者らしい。いや、間違いなく萃香に関しては正直者だ。

いつだったか妹紅の『正直者の死』が直撃していた。これが何よりの証拠だ。

「待たれよ。此処からは妖怪の山。人間は通れぬ…って貴殿方ですか。びつくりしました、滅多に此処を通る者は居ないもので…」

見張りをしていた男の天狗は頭を下げた。

というより、鼻とか長くないんだな…見てくれは翼さえ除けば人間そっくりだ。

案内してくれると言うので、俺達は彼に付いていく事にした。

「そう言えば、近頃妙な気配を感じます。ちょうど此処を越えた辺りからでしょうか、空気が変に淀よどんでいるような気がするのです。」

天狗がらぐなさんに話し掛ける。

「そうか…やはりな、それはきつと今度の黒幕の仕業だろう。」

「黒幕、ですか…？何か知っているの？」

「ああ。ちょうど此処を越えた辺りに近頃神社が出来たらしい。」

「神社、ですか…人間の信仰を集う場所のはずなのに、何故此処の近くを選んだのでしょうか？」

「それが解れば話は早いが…もう一つ、過激派が喜びそうな話題がある。出来るだけ内密に願うが…」

「なんでしよう？」

「博麗霊夢が殺されそうになった。」

「何ですって…！？」

天狗は驚きを隠せないようだ。

「で、最悪な事にその神社の奴が霊夢を殺そうとしたわけだ。過激派は間違いなく神社側に付くだろう。」

「それは危ないですね…此処に住む妖怪の殆どは人間…特に博麗の人間を嫌っている…その者達が全員敵に回るとなると…」

「此方にも戦力が必要だ。そこで頼みがあるんだが…萃香と文を呼んできてくれないか？」

「解りました。それでは代わりに案内させましょう。」

天狗が何かぶつぶつと呪文を唱えると、3匹の小さな鴉が何処から飛んできた。

「彼らに付いて行って下さい。宿に着きます。そこで待っていて下さい。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

俺達は鴉の案内に従って宿へ向かう事にした。

???視点

「ん…?」

私の眼は、何かを捉えた。

4人の余り見ない人間…いや、人間だけじゃないみたいだが…がこっちに向かってくる。

『ピピ…ガガ…聞こえるか?』

「はい、こちら様です。」

手に持つ河童製の無線通信機トランシーバーを耳に当て、私は連絡を聞く。

『今、そちらに4人程人が向かっているが、彼らは敵ではない。丁重にもてなしてやってくれ。』

決して明瞭とは言えないが、聴きとるには十分なレベルだ。

「了解しました。敵ではないと確認できて何よりです。」

『後、文は居るか?』

軽く見渡してから、答えた。

「そうですね…外に居ないみたいですから、新聞社の中と考えてい
いかと。」

『解った。鬼の彼女は…?』

「いつもの通り、頂上付近で呑んでいるようです。」

『解った。ありがとう。引き続き監視を頼む。』

「了解です。」

通信を切り、私はその4人に危険が近付かないか監視する事にした。

…?あれは…??

妖怪の山に入ったようです(後書き)

次回予告

椀が見たものとは…!?

というわけで次回

「1…焼き芋ってマジ美味しいよね」

お楽しみに!

1…焼き芋ってマジ美味しいよね(前書き)

おお、次回100話目です！

1…焼き芋ってマジ美味いよね

「?????視点」

あれは…確か…この山の伝説の一つ、『穰^{みの}りの神』。

人間には滅多に姿を見せないはずなのに…何故？

もしかすると、彼らはただの人間ではないのかもしれない。

…暫く経過観察が必要のようだ。

「レナ視点」

「…」

さっきから小悪魔が黙っている。

「どうしたんだ？」

俺が辺りを警戒している様子の小悪魔に聞くと、小悪魔はその事実を告げる。

「…私達を付けてる奴が居ます。…2名ですね。」

「敵なのか？」

「だったらもう襲いかかってもおかしくない。それをしないと
ことは、それ以外の目的があるのかも…」

「そうでしょうね。でも、敵ではないわ。」

幽々子がそう言い切る。

「は？姿も見てないのになんで敵じゃないって解るんだ？」

「だって…」

美味しい匂いがするもの

「」「はあっ！…！！？」」「」

俺達の呆れた声に構わず、幽々子はある一方向に走っていく。

そしてすぐに…

が、どっちがどっちなのかよく解らない。

静葉と穰子みのしと言つらしい。

どつやら髪飾りをしている方が静葉で、何故か裸足な方が穰子らしい。

穰子いわく、「芋が豊作過ぎて二人じゃ食べられないから焼き芋にして配っていた」んだそうだ。

そんな時は幽々子の出番、ぱくぱくと食べていってくれる。

「どちそうさまでした！」

そして焼き芋は無くなった（『そして誰もいなくなった』みたいな感じだ）。

「お兄さん達は何処に行くの？此処を通れるって事は妖怪さん達と仲が良いってのはわかるけど……」

あくまで目的は守矢神社であつて、此処ではない。

「そうだ…最近変な神社を見なかったかい？」

「神社つて言つたら、こないだあつちの方に出来たよ？あそこにはいっつも人間さんとか妖怪さん達が入りしてるよ。」

「何してるかまでは解らないんだ、でも賑やかだったよ?」

「どうやら、相手はかなりの人数居るようだ。」

「解った、それだけ聞ければ十分だ。ありがとな。」

「よく解んないけど、気を付けてね?」

「とりあえず、腹ごしらえだけして、俺達は先に進む事にした。」

「…あれが、皆の敵なんだ。」

「そうだね。報告だけでもしておく?」

「別にしないでいいでしょ。どうせ解ってると思っし。」

「それもそうだね。」

???視点

あの4人は特に脅威とは思えない、ならば安全と捉えるのが吉か?

「お勤め御苦労さまね、椛。」

「あれ？加藤さん来てなかった？文に用事があるって言ってたんだけど…。」

「もう話は聞いたわ、安心して。」

あの男の天狗は加藤さん（作者注…勿論仮名です）といって、真面目な天狗だ。

「それよりも、なんかこの事件、きな臭いのよね…。」

「新聞記者としての勘、ですか？」

「そうね。今は勘でしかないけど…調べてみる価値はありそうね。」

この場合、彼女は取材を優先する。

彼女いわく「後世に伝えるべき情報は残しておくべきだ」って。

「…となると、私が出なきゃいけないみたいですね。」

「椛は引き続き見張ってて。私が出なくても大丈夫なようにしておいたから。」

「へ？」

すると、彼女は笑ってこう返した。

「此処がピンチだって言うのに、あの2強が動かないはずがないじ

やない。」

- 加藤視点 -

「…困りましたね…予想はしていましたが…」

こうして呼ぶべき相手が気持ち良さそうに寝ている所を見ると、起こすに起こせない。

酒瓶が…きれいに並べられている。中身は空っぽだが。

「あら、加藤さん？」

私はびくつとし、声のした方に振り返った。

「あ…貴女は…!!」

1…焼き芋ってマジ美味しいよね（後書き）

次回予告。

モブキャラの加藤さんが見た人物とは！？

そしてレナ達はずいにあの人物に出会う！

というわけで次回

「 2…にとりメカ開発所」

え？誰が出るかタイトルで解るって？

…とにかくお楽しみに！

2...にとりメカ開発所(前書き)

100話、100話、100話っわ〜!

と言っわけで100話目です、やったね!

2…にとりメカ開発所

―加藤視点―

「あ、貴女は…!？」

正直私は、彼女が現れるとは全く考えていなかったのです。

妖怪の山でも会うのは珍しい人物…

イヴェリア・ノスフェル。

一部の妖怪からは、『妖怪の山の裏番長』なんて呼ばれている。

「余り会わないのに、よく私の名前を覚えていらっしやいましたね…イヴェリアさん。」

「人間ならまだしも、同じ妖怪なら名前を覚えなきゃ失礼でしょ？」

「光栄ですね…まさか裏番長に名前を覚えて頂けたとは。」

「裏番長なんてやめてよ…私はやるべきことをやってるだけだわ。あ、萃香に用があったの?」

「ええ。彼女にも起きて話を聞いてもらいたいのですが、この様子です…」

もう一度私は萃香さんを見る。

さっきと変わらず眠っている…まあ数分しか経ってないから、変化がないのは当たり前なのだ。

「私に任せて。萃香!お酒持ってきたわよ!」

「マジで!?!」

ガバツと起き上がる萃香さん。

やはり裏番長は凄いと改めて思った瞬間であった。

「早速飲むぞ〜!」

「待つて萃香。飲む前に話を聞いて。」

「うん?なんかあったの?」

まるで親子だ…親が子をあやすみたいな感じがする…。

「最近、近くに神社が出来たって知ってる?」

「神社?そんなの出来たの?凄いなえ!」

「ただ出来ただけなら良かったんだけど…なんか良い噂を聞かない

の。事情はよく解らないんだけど…」

「イヴェリアさん、此処からは私が話します。つい先程、博麗霊夢が殺されそうになりました。」

『！！』

さっき私が取った表情ときつと同じ表情を二人は取る。

それもそうだ…彼女が居なければ、幻想郷の存続に関わる事件になる。

萃香さんの表情が急に変わる。

この眼…本気の眼だ。

「詳しく話を聞かせて貰いたいね、加藤。やった奴は誰かい？」

「私もつい先程聞いたので話の全体は解らないのですが、その神社の関係者…というのは間違いないようです。」

「誰から聞いた？」

「よく妖怪の山に入る彼です。不死じゃない方ですよ？」

誰の事が解って貰えたようだ、萃香さんは「むう…」と少し考え、口を開いた。

「信憑性は高いね…イヴ、どうする？私的には今すぐにもその神社とやらを壊したいんだけど。」

「相手の戦力が解らない以上、下手に出たら駄目。まずは戦力の把握…最悪、この山の過激派が全員敵に回るんだから、下調べをしなければ。」

「でも…!!」

萃香さんが語気を強めたが、イヴェリアさんがそれを制する。

「萃香の言いたい事も解るわ。』もたもたしてたらさらに事態は悪化するだけ』でしょう?それも確かに言えるわ。だけど、仕掛けるのは萃香じゃない…私よ。」

「なんで!?!」

「私の存在は萃香ほど広く此処に伝わってない。それを逆手に取るわ。私が神社に殴り込みに行けば、皆は私をどう見る?」

「…あ!?!」

そう言うことが…!!

「そう、皆は私を見たことがない奴と捉える。そして皆はその神社の関係者…幹部と言ってもいいでしょう…ないし萃香とコンタクトを取るはず。そこを叩くわ。」

一瞬の気が緩む瞬間…そこを突けば、相手には一番の被害を与えられる…」

「そっか!イヴはそれを考えていたんだね!」

「だから萃香、貴女は集められるだけの戦力を集めておいて。私が

まず仕掛けるから。加藤さん、貴方からも他の妖怪達に援護を要請して頂けるとありがたいわ。」

「解りました。」

「忙しくなるわね…人形達を準備しなくちゃ。」

- レナ視点 -

俺達はあれから鳥についていき、小さな小屋を見つけた。

そこには1人、妖怪がいた。

犬走椋。

彼女は山に異常がないか監視をしていたようで、俺達をずっと見ていたらしい。

…って何処から見てたの？

「ああ、失礼しました。私は一応、視力だけは良いんですよ。」

「どうやら椀の能力、『千里先まで見通す程度の能力』の影響らしい。椀が「向こうにも小屋があるのでそっちに行きましょう」と言うので、俺達は椀に付いて行く。」

「それにしても、貴方達お二人は解るのですが、なぜ冥界の管理人と紅魔館の下っ端が居るのでしょうか？ 私にはどうしても解らないのです。」

「下っ端って何！？ 実際そうだけど！」

「私は呼ばれただけよ。」

「…そうですか。では早速ですが、貴方達にはこの後、ある人の方に行つて欲しいのです。」

「ある人？」

「ええ。皆様もご存じのとおり、妖怪此処の山に住む妖怪達は二つの派閥に分かれています。」

まず一つは『妖怪こそが全ての生き物の頂点、人間は隷属れいぞくさせるものだ』と考えて騒ぎを起こす者達…『過激派』。

それに対し、『妖怪も人間も自然から見れば同列の存在なんだからお互い助け合つていこうよ』と考え、穏便に暮らそうとする者達…『議論派』。

この二つの派閥は今の今までたびたびぶつかる事がありました。…ですが、今回の騒動…守矢神社による博麗霊夢殺害未遂事件、これを機に事態は大きく動き出しました。

過激派が守矢神社側に付き、今度こそ博麗霊夢を殺そうとしています。」

「それは物騒だわ。」

「他人の命を取ろうと思えばすぐ取れる人が何を言っているのやら。とにかく、このままでは議論派も動かざるを得ません。そこで私達はある手段を取る事にしました。…中立派を味方にします。」

「中立派？そんなのが居るのか？」

「ええ。『河童』…彼らはどちらにも付きませんでした。ですが、此処が戦場になる可能性がある事を伝えれば、あるいは…」

「河童は住処を守るって言っらしいしね。住処が戦場になるって言ったら流石に動くでしょ。」

「…だと良いのですが…それにしても、紅魔館のメンツは引きこもりが多いと聞きましたが、意外に知識は偏っていないんですね。」

「…レナ、全部終わったら奴をぶっ倒していいかしら？」

「待て、大体ああいふ情報は全て編集長がソースだ…倒すなら編集長を倒してくれ。レナに聞いても困る。」

「…解ったわ、我慢する…！」

そうこうしている内に…

「着きました。此処が河童の住処…いや、研究所と言った方が正し

いでしょうか。」

え…滝なんですが、此处…

「大丈夫です、あれは見せかけなので、勇気を持って突っ込んでください。」

滝に突っ込めと!?

「うう、籠ってだから身体力チコチだよう、ん？」

あれ、滝の向こうから誰か出てきた。

2…にとりメカ開発所（後書き）

次回予告。

滝の向こうから出てきた人物とは！？

そして零奈vs霊夢！戦いの展開や如何に！？

というわけで次回

「 2・5…おねだん以上にとり…と言ってる裏で激戦だったり」

お楽しみに！

2・5……おねだん以上にとり……と言ってる裏で激戦だったり(前書き)

PV24万突破

2・5…おねだん以上にとり…と言ってる裏で激戦だったり

- 零奈視点 -

「ほらほら！博麗の巫女が私なんかには押し回されてるんじゃないわよ！」

「くっ…！！」

私の策は順調、しかし予想以上にあの神奈子おはなこから貰った力は強いよ
うで、能力という点を差し引いても私が有利な状況みたい。

もうあの娘の巫女装束はボロボロ。

動きにもキレがないし、私が本気で殺そうと思えば殺せる状態だ。

でもやらない。

弄ぶつもりはないけど、これが私の使命だから許してよね。

「その魔法使いとスキマ妖怪！このままじゃお友達が死んじゃうわよ！」

…まあ、スキマ妖怪に関しては攻撃手段がほぼ皆無だから防御に回るしかないんだけど、その肝心の防御手段が私には全く効果がないんだから木偶の坊状態。

故に魔法使いさんが頑張るしかないんだけど…

「くそっ！キリがないぜ！」

最初『弾幕はパワーだ』なんて言ってたのに、その弾幕で私に傷一つ付けられないなんて拍子抜けだわ。

…本当は傷付いてるんだけど、それが能力で帳消しになってるんだから結果的に傷一つ付いてない。

「そろそろ御仕舞いにしようかしら…!!」

腕をそれぞれ魔法使いと巫女に向ける。

「壊死『インジュアリアクシデント』」

黒い光が伸びる。

当たればただでは済まない…

「させないわ！」

あら、やっぱりスキマで消えた。

…ん？作戦会議？

良いでしょう、時間は少しあげましょうか。

「…霊夢、魔理沙、此処は退くわよ。このままじゃ間違いなく私達は負ける…」

「いや、1つだけ手段はあるわ。『あれ』を使うしかないでしょ、

紫。
「

「『あれ』は負担が大きすぎる…！それに、今の貴女じゃ…！」

「もって2分ね。でもその2分で仕留めれば良いわ。相手が無敵だと言っなら、こちらも無敵になるだけよ。」

「…場合によっては貴女を無理矢理連れていくわよ？それでもやるの？」

「やるわ。…紫、魔理沙、援護を。」

「…やれやれだぜ。」

「無理はさせないわ…！」

仕掛けるな。

ならばこちらも仕掛けますか。

「来なさい、博麗霊夢！」

「ええ…行くわ。」

貴女を倒してね！」

「！」

何か来る！？

「博麗が奥義、貴女に見せてやるわ！奥義…『夢想天生』…！！！」

何だ！？霊夢の身体が光っている…！？

「余所見をしてるなんて余裕、ないわよ！」

な、何時の間に距離を詰めた！？

距離はあったのに…！

「ぐはっ！」

腹部のど真ん中、人間の急所の1つ…鳩尾を的確に突かれた。

急所に攻撃するなら速さも威力も関係ない…確実に痛手になるからだ。

少し足が宙を浮いたが、私は体勢を立て直す。

酸の味が口腔に広がる…気持ち悪い。

しかし、確かあの神奈子あははは『夢想天生は弾幕による攻撃』なんて言ってたはずだが…

「物理攻撃なんて聞いてないわよ…！！」

正直な話、予想外だ。

「そりやそうでしょ。この『夢想天生』は試作型…この技はレナと紫と、参考にさせてもらった紅魔館美鈴の門番にしか見せてないもの。今、この技に無理矢理にでも名を付けるとしたら…」

霊夢は再び拳を構える。

「『夢想天生・道』タオ」

- レナ視点 -

「うわっ、人間!？」

そして滝の向こうに消えた誰か。

声からして女性、さらに住んでいる場所からしてきっと彼女は妖怪の可能性が高いが…

それにしてもかなりビビってたな、今。

「にとり、私が居るから大丈夫です。」

「ふえ？権？」

恐る恐る滝の水から顔を出す女性：もとい少女。

暫く俺達を見渡し、彼女は口を開いた。

「なあんだ、椀が居るなら安心だ。で、どうしたの？」

「…にとり、貴女の…いえ、『貴女達』の力を借りたいの。」

するとにとりとか言う少女は不敵な笑みを浮かべ、答えた。

「へえ…それは面白そうな話だねえ。来なよ。話だけは聞いてみるよ。」

滝はなんと見てくれだけで、当たっても濡れたりしない。

滝の向こうにあったのは、冷たい鉄の道であった。

「…気になるかい、人間？此処は技術の結晶の源となる場所…『日々此研究』、先人はそう言っている。」

こっちだよ、とにとりに言われ、俺達とはある部屋に入った。

「さて、あそこにモニターがあるわけだが…あれに映ってるのが我々の技術の一部だよ。」

指差された先のモニターを見ると、工事見学で見るとようなベルトコ

ンベアに小さな何かが乗せられ、運ばれていく。

「今は大量生産の時代だ…より良い技術により生まれたものをより多くの人々に活用してもらおう…これ程技術者にとって嬉しい事はないよ。そして、それを快く認めてくれたあの人達にも感謝だ…」

「あの人達？」

「八坂神奈子。」

「なっ…！？」

まさか既に繋がっていたのか！？

「どうしたんだい？そんな怖い顔をして。そういえば椀、話って何？」

「その八坂神奈子の事よ…貴女達にとっては救世主かもしれないけど、私達にとっては害悪でしかない。博麗霊夢が殺されそうになったのよ。」

「え？」

にとりの顔が変わる。

「やはり知らなかったのね…嘘だと思っなら調べてみても構わないわ。」

「…いや、その必要はないよ。今情報が入った、どうやら本当みたいだ…そんなことをした以上、提携は切るべきだ、それは解る、解

るんだけど…」

にとりの顔が暗くなる。

「資金繰りがきつくなる…八坂神奈子からはかなりの援助を受けていた…それが絶えるとなると、此処を引き払うしかない…」

すると、とんでもないところから助け船がやってきた！

「仕方がないな。」

声がして、俺達は声の方向に振り返った。

「…君は…？」

らぐなさんだ。

「本当なら頼むつもりはなかったんだが、ツテがないわけじゃない…奴に頼んでみるか。」

口笛を吹くらぐなさん。

「ども 呼んだ？」

2・5…おねだん以上にとり…と言ってる裏で激戦だったり（後書き）

ちよつとした解説。

霊夢のオリジナルスペカ『夢想天生・道』について。

本来の夢想天生は無敵＋無意識下の弹幕カウンターなのですが…

今回のスペカ『夢想天生・道』は無敵＋有意識下の格闘によるラッシュです。

その分オリジナルの夢想天生より持続時間は短く（オリジナルは半永久、しかしこちらはもって15分）、しかし火力はあります。

詳しい説明は次回及び感想で質問があればそこで…

というわけで次回

「3…災厄の身代り」

お楽しみに！

3…災厄の身代り（前書き）

少しずつですがクライマックスに向かってますよー！

3…災厄の身代り

- 霊夢視点 -

「一気に片を付けるわ！」

使ったは良いが、早くケリをつけないとこちらが圧倒的に不利になる。

そうなることは解っているから、宣言通りに仕留める…！

「何のクラクリかは知らないけれど、当たらなければどうって事はないわ！」

なんか何処かで聞いたような台詞が相手から聞こえたが、私は当てに行くのではなく…触れに行く！

「私の身体だけが武器とは思わない事ね！」

軽く相手に向かって掌を向け、空気を押す。

瞬間、空気は圧縮され衝撃波となって零奈に襲い掛かる！

「忘れてた…！貴女は真空の鎧を纏ってるようなものだった…！」

零奈に波が当たり、零奈は吹き飛ばす。

暴風ぶつめたようなものだし…飛ばない方がおかしい。

「…危なかった…神力がなかったら、今頃死んでたわ。」

零奈は立ち上がる。

「今まで3人を相手にしていたにも関わらず、疲れは来ていないよ
うだ。」

というよりも、あの身のこなしのよさ…まさか。

「…あんた、疲れも外に渡しているわけ!？」

「その通り。最近出来るようになったのよ。おかげさまでさらに長期戦に強くなったわ。疲れ知らずって凄いわね。」

「どつりで手応えがそんなにないわけね…!」

これは最悪の事態だ。

傷もなかったことに出来るだけで随分とやりづらいのに、長期戦に持ち込んで相手の隙を作る事も出来ないとは。

…! そうだ!

「解ったんならその鎧、さっさと外しなさい!」

弾を展開しながら零奈がこちらに迫ってくる。

「外してあげるわよ…!」

私も随分と周りに感化された、こんな賭けにさらに賭けを仕掛けるなんて。

大穴中の大穴、レナやあの新聞記者風に言えば『当たれば奇跡、外
れば死』って所かしら。

「だけど後悔はしないことね！死んでも文句は言えないわよ！」

腕と足だけに力を、『あらゆるものから浮いた』力を集める。

「そこ！」

右腕を振るい…！

一撃を、入れた…！

拳を入れたのは溝尾からずれた部分だったが、それでも確実に腹に
入れる事が出来た。

「吹っ飛べ…！」

渾身の力を込め、体重を右腕に乗せる。

「流石に…これは…耐えられない…！」

再び零奈の足が宙に浮く、だが今度は天に向かって身体が上って行
く。

「ナイスよ霊夢！」

そして、この機を狙っていたかのように隙間が開き、零奈の身体が吸い込まれるように隙間の奥に消えた。

「…紫…ちゃんと閉じ込めたんでしょ…？」

「当たり前よ。これ以上暴れられても困るもの。それよりも、随分息が上がってるわ…無理をしたみたいね。」

心配そうな表情を浮かべる紫。

それもそのはず、夢想天生の力は一点に集めるような…いや、容易に集められるような力ではないからだ。

「あんたが…役立たずだった…だけじゃない…」

「結界が碎かれるのよ？相性が悪すぎた、それだけのことよ。」
と紫と話をしていった所に、空から声がした。

「大変だ、大変なんだぜ！」

「あ、役に立たなかった人その2だ」

勝てたから冗談が言えるんだけど。

「冗談でも止めて欲しいぜ…っと、それより！レナがいないんだ！」

「…！」

どういふこと!?

だけど、それを考える時間はなかった。

レナがない、その事実を知ったその瞬間。

「操神『オモイカネデバイス』」

「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」

「『インペリシャブルシューティング』」

私達は、意識を無くした。

- レナ視点 -

「ども 呼んだ？」

…率直に言おう。

…誰？

それもそのはず、レナは彼女のことをほぼ知らないと言っても過言ではないのだ。

なんせ彼女はまさに瞬殺されていたし…

「紹介しよう。彼女は因幡てゐ。 兎だ。」

「兎は兎だけど、そこら辺にいる兎と同列みたいな言い方しないでよ…喋れて人と似たような姿な兎は珍しいんだよ？」

確かに、兎と言う割には人と似た姿だし、耳がピョコピョコ動いている…

ってあれ本物！？

「で、私を呼んだって事は良い儲け話があるってことでいいんだよね？」

「ああ。それがあれだ。」

研究所を指差すらくなさん。

「投資みたいだね。施設はかなりの上物、未来はかなりありそうだね。今のままで大丈夫なような気がするんだけど？」

「それが、ある取引先がヤバめの所らしいと解ってな…そいつらと縁を切りたいんだが、そいつらが結構な額の資金を提供してたみたいで…」

「よくあるパターンだね。さて、此処からビジネスだ。いくら出せば良いのかな？」

「え？えつと…月々2000万円くらい資金提供受けて…それがそつくりなくなるから…」

数字の部分だけ気持ち声が小さくなった気がするが、にとりはそう呟いた。

が、その後衝撃的な一言を聞くことになる！

「2000万？え？そんなものでいいの？」

『はあっ！？』

俺、小悪魔、幽々子、桜が見事に驚愕の八モリ。

「私ならその倍出すよ？月4000万、それでどう？」

「ほ、ほんとに！？」

にとりの表情に光が戻る。

「決まりだね！良いことにお金が使えそうで良かったよ！」

「あ、ありがとう！」

ガシッとお互いに手を握るてるとにとり。

だが、1つ釈然としないことがある……

「らぐなさん、あのてゐって人、どれだけお金持ってますか？4000万なんてポンと出せる金額じゃないですよ？」

「そつだなあ……前に数兆円資産があるって言ってたぞ？」

「……ほわっつ？」

どの世界にも、お金持ちは居るんだな…そう思った瞬間だった。

- ??? ? 視点 -

「…良かった。にとりは大丈夫みたいね…にとりに持たせておいて本当に良かったわ。」

私特製の身代り人形…効果があると確認出来て良かった。

「…となれば、この人形を色んな人に渡すべきね…」

私はこっそりとその場から離れた。

3…災厄の身代り（後書き）

次回よーこくー。

ついにあの人が動き出す！

というわけで次回

「 3 . 5 ……妖怪の山の日陰には
「

お楽しみに！

3・5…妖怪の山の日陰には(前書き)

ついにお気に入り100の大台来ました!

な、長かったよ…

今回は仕込み故少し短めです。

3・5…妖怪の山の日陰には

今までのあらすじ。

- ・にとりの研究所は救われた！
- ・零奈inスキマ
- ・あれ？誰は？

以下本編！

- ??? ? 視点 -

「イヴェ、にとりの件は大丈夫だったわ。私が出る幕もなかったみたい。」

文さんからのリークだったけど、世に出されない内に手を打っててよかった。

「みたいね。ついでにとりとコンタクト繋がれば完璧ね。」

「それはあの不死身君がしそうよ？一応、私達と目的は同じみたいだから。」

不死身君の存在は妖怪の山にも知られている…なるべくなら敵に回したくない存在として。

「今のところは、ね。でも場合によっては敵になり得るわ。前にやり合った事があるけど、手強い存在よ。」

…うん、会った事ないから解らないんだけどね。

「ふうん…ところで、こちらの戦力はどれくらいになりそうかしら？」

「私に貴女、萃香に文と椀…後は加藤さんを始めとする妖怪の皆よ。数にして…150くらいかしら。」

「150もあれば十分ね。何時攻め込むの？」

「萃香の準備ができ次第になりそう。もう既に私の人形を潜り込ませてるの。後は攻めるだけって所までやっているわ。」

「流石…ね。」

人形1つで此処まで戦況を操る事が出来るなんて、『妖怪の山の裏番長』の名は伊達じゃない。

「調べた所、巫女に関しては貴女がきめんだってことが解ったわ。奇跡を起こせるとかって言うけど、その真反対の力を使う貴女なら…」

「そうね。巫女に関しては私がやりましょう。でも、それ以外はキツいかも知れないわよ？」

「構わないわ。巫女さえ止められれば勝ち目がある…組織の頭の首ヘッドさえ取れば、組織は自然に崩壊する。」

私の肩に手を乗せて、彼女はこう続けた。

「難…貴女を頼りにするわ。平和の為に…覚悟を決めましょう。」

未来を創る為に、手を汚す…。

矛盾としか言えない行為だけど、私達に出来るのはこれだけ。

私はそれを自分に言い聞かせながら…

「ええ。」

頷いた。

・レナ視点・

…というわけで、にとりの研究所は資金難という大きな問題を解消

し、にとりは吹っ切れたように機械を動かしていた。

ついでにとりは八坂神奈子を倒す事に快諾、今は秘密兵器という何かを造っていると言っていた。

「守矢神社に着く頃までになんとか間に合わせるから、皆も頑張ってください！」

俺達はにとりを始めとする河童さん達を味方に付け、再び守矢神社に向かつて出発した。

「…皆さん、すみませんが此処からは先に行って下さい。私には仕事があるので…」

「仕事？見張りか？」

「ええ、かなり持ち場を離れてしまったので…」

「そうか…確かに外から敵が来たら困るしな…解った、気を付けてくれ！」

「皆さんもお気を付けて！御武運をお祈りします！」

そうして椀と別れた。

- ??? ? 視点 -

「我々が新しい世界の頂点に立つ！我々が新たな秩序を創り出すのだ！」

そう、我々こそがこれから始まる世界の頂点でなければならない。

その為には、古い秩序は一掃されなければならない。故に、博麗霊夢：彼女の存在は邪魔でしかない。

「今までの世界では、人間が頂点に立つような世界だった：しかし、これからは違う！長年人間に虐げられてきた君達妖怪が頂点なのだ！」

『うおおおおおおお！！！！！！！！』

妖怪達で溢れかえる狭苦しい空間で、歓声上がる。

余程人間に恨みを感じていたのだな：だが、それが力となる。

両手を広げ、戦意を高揚させようと言葉を続ける。

「さあ、我々と共に行こう！そして、理想郷を創り出そうじゃないか！」

『守矢教万歳！神奈子様万歳！』

サツと踵を返し、舞台の影に居た二人に声をかける。

「これで良い…諏訪子、早苗、行くわよ。」

「博麗霊夢を潰しに行くのかい？」

「その前に、私達を邪魔しようとする奴等を排除する。それからでも遅くない…理想郷の創造は。」

「どうやら敵はもう来ているようだ。」

その敵を潰してからでも、私達にとって都合の良い世界は作れる。

「足掻くなら足掻いてみる…古き者よ。私を楽しませてくれ。でないと退屈してしまっから。」

3・5…妖怪の山の日陰には（後書き）

次回予告。

え？風神録編のメインキャラって彼女でしょ？（後に主役になったし…）

そんな彼女が満を持して登場！

え？何回か出てた？

気にしちや駄目です！

というわけで次回

「4…最速の黒翼」

お楽しみに！

4…最速の黒翼（前書き）

リアル忙しすぎて1カ月近く放置してますね…

申し訳ないです。

4…最速の黒翼

- 椛視点 -

…ふう、予想以上に時間を食ってしまった。

早く戻って、戦いの準備をしなくてはならない。

「地味に時間を食ってしまったし…皆待ってるだろうなあ…」

疲れるからこの手段は取りたくなかったんだけど、私はある手段を使う。

私も天狗の端くれ、高速移動くらいなら出来る。

で、さらに速度を上げ…

ほら着いた。

「遅い！5秒の遅刻よ！」

秒単位で遅刻かどうか判断する時点で何かがおかしい気がするが、それも新聞記者ゆえの職業病だろう。

「すみません、彼らを撒くのに手間取っちゃいました。」

ここで謝っておかないと、後でいろいろ面倒なことになる。

「：まあいいわ、それよりも準備が出来たの。後は彼女の連絡を待つだけ。」

「既に仕掛けてる、と?」

「ええ。場合によっては今からすぐにも…」

と文が言おうとしたその時、彼女の携帯が鳴った。

「もしもし?」

即座に取る彼女。

直後、電話の主は私にも聞こえるような大声を上げて叫んだ。

『やられた! 私たちの行動は既に読まれてたの!』

「え、一体どういうこと、イ…」

が、すぐに電話は切れ、これ以上の情報は掴めなかった。

だが、何か起きた、それもまずいことが起きたんだということは電話の主の声、そして文の顔から容易に予測出来た。

「椛、今すぐ守矢神社に向かいますよ！」

「ええ！」

私たちは最速の翼を拡げ、守矢神社へと向かった。

イヴェリア視点

「…どうりで人形たちの定期連絡がないと思ったら…！貴方…スパイだったわけね…！」

私はある男を睨んでいた。

そう、味方であったはずの、加藤を。

「騙す事になって申し訳ない。だが、やり方は過激とはいえ、『古き秩序を排除して、新たな秩序を創る』…その考えには私も賛同するのです。だからこんな真似をしたわけですがね。」

「だけど、あのやり方じゃ秩序は変えられても、人間との関係は悪化する！そうすれば戦争にもなりかねないのよ！？」

すると、加藤はフツと笑い、こう返した。

「構いませんよ。そうなれば『秩序』の名の下に、人間を殲滅できるのですから。」

…だが、その考えは破滅しか生まない、そう伝えようと思ったが、それは思いだけで終わった。

加藤が戦闘態勢を取ったからだ。

「…イヴェリアさん、貴女の実在は新たな秩序の障害と成り得る。故に貴女には、ここで消えてもらいましょう。」

「あくまでやる気ね…!!」

残った人形は数体。これで加藤を倒せたとしても、守矢の面子は…

「ぬっ!?!」

!?!加藤の身体が、何かに締め付けられてる!

まさか…!

「イヴ、逃げて!コイツはあたしが仕留める!」

「萃香…!!」

そうか、今まで霧になっていたから解らなかったのか!

「それは私達の台詞よ」

同時に萃香に向けられた、3本の手。

「…撒いたつもりが、逆に追い込まれたってこと…?」

萃香は誰か解っているようだ。

「そうよ。私達に楯突こうとは、中々勇気があるじゃない。でもそれは勇気なんかじゃない、ただの無謀よ。」

最悪のシナリオだ。

此処に守矢の3トップが来るとは…!!

「おとなしく降参して、私達に付きなさい。そうすれば、この御柱を無駄な血で汚さなくて済むから。」

「神奈子の言うとおり、素直に降参した方が身のためだよ?」

「私達に勝てるでも思っているのですか?だとすれば、それは儚い夢ですよ?」

いくら私と萃香でも、八坂神奈子、洩矢諏訪子、東風谷早苗の3人を同時に相手しろというのは無理がある。

詰まれた…か?

「そうだねえ、流石にあんたらを相手にするのはキツイよ。ここは

素直にあんたらの言う事聞いておくのが賢いね。」

ほら、萃香ももう諦め…

「…って言うつとでも思った？甘いよ！！」

萃香の姿が消えた！

「なっ…！？」

そうか、そういう事ね。

その隙、貰うわー！！

「デスフェアリー！！！」

神相手には小手先にしかならないが、今の状況なら牽制には十分！

「くっ…！小賢しい真似を！」

さて、私もお暇します、これでね！

「貰い物『上海人形』！」

仕込んでおいて助かったわ…！

この情乱に乗り、私と萃香は撤退した。

早苗視点

「逃げられると思わないことね…！早苗、あの人形使いを追って！
諏訪子は鬼の方を！」

「解った！」

「はい！」

神奈子様の仰るとおりに、私はあの人形使いを追いかけた。

空から見れば、簡単に見つけられる…そう思った私は上空に飛んだ。
が、そこには…

「やっぱりね。所詮は人間って所ね。」

「貴女は…！」

???視点

「こんなことをしちゃって本当に大丈夫なの、永琳？」

「ええ姫様、私達は頼まれただけ…罪は全部『彼』が被ってくれま
すから、大丈夫です。」

永琳は倒れている3人に何かを飲ませている。

「それ、なんなの？」

なんて妹紅が言うもんだから、聞かなくてもいい薬の中身を聞かされる羽目になった。

「睡眠薬、それに記憶操作の薬です。暗示さえかければ私達に襲われたなんてこと、すぐに忘れます。」

「そんな便利な薬あるんだ…」

大体この手の薬は永琳が一やばいことをやってた時代《蓬莱の薬を作った頃》に作ったものだったりするのは内緒だ。

「まさか、あんたに頼まれる日が来るなんてね…輝夜。」

「仕方ないじゃない、私は『彼』に頼まれただけよ！そうじゃなきゃなんで妹紅なんか…！」

「『なんか』って何よ！扱い酷すぎでしょ！」

だってそれくらいの扱いだもん。

「2人とも、喧嘩はそこそこにしてこの3人を縛りましょう？ここまですでに頼まれたことなんですから。」

「…そうね。さっさと終わらせて今度こそ妹紅を殺すわ。」

「正当防衛で殺されても文句は言えないよ、輝夜？」

この話を聞いて、永琳はひとり「喧嘩するほど仲が良いってなんでこの2人は気づかないのかしら…」と思ったそうなの。

4...最速の黒翼（後書き）

次回予告。

ついに風神録編佳境！

というわけで次回

「5...奇跡は普通でしかない」

お楽しみに！

5… 奇跡は普通でしかない(前書き)

復活2本目!

そしてクライマックスに入りつつありますよー!

5…奇跡は普通でしかない

レナ視点

俺たちはあれから、守矢神社に向かつて動いていた。

…が、いつまで経っても神社らしい神社、というよりも建物らしい建物すら見ることもないことが続いていた。

ついにシビレを切らした小悪魔がらぐなさんにこう突っかった。

「一体何時になったら守矢神社に着くのよ！？この間にも相手は動いているんでしょ！？」

「もうすぐだ！だが突入はまだ出来ない！」

「なんでよ！？さっさと倒せばいいじゃない！」

その尤もな発言に、らぐなさんは少し躊躇し、やはり言うべきかと一人自問自答したようで、こう答えた。

「…俺たちは切り札：相手の手札すら見えないのに、いきなり切り札を切る馬鹿が何処にいる？それは氷結妖精^{チルノ}だけで十分だ。」

「だけど、過激派が決起したらどうすんのよ！？それこそ取り返しがつかない事になるわよ！？」

「でも、後手後手に走るのもどうかと思うわよ。」

小悪魔を援護するような形で、幽々子が議論に割って入る。

「戦いはいつも先手必勝：後手は不利な事にはまったく変わりないし、むしろこれ以上時間をかけてもメリットどころかデメリットしかないわ。」

あれ、いつもの間が伸びたような話し方が無くなった。

「でも、いたずらに時間を浪費しているわけじゃない…まるで何かきっかけを待ってるみたいに…私の読み、外れてるかしら？」

「…幽々子さんの読みは合ってますよ。切り札を切るのはいつも大一番の時…これはギャンブルでも戦争でも常識です。後はタイミン
グの問題…そう、タイミングさえ合えば…」

本当は今すぐにでもらくなさんは守矢神社に乗り込みたい、それは彼の性格上考えてもおかしくないことだ。

それを理性や理屈で抑えつけている…彼が一番歯がゆい思いをしているはずだ。

そんな時、異変は起こった。

「あれ…？あれ、何？」

最初に気付いたのは小悪魔。

小悪魔が空を指差すので、その方を見ると、花火のようなものが昼下がりの空に輝いていた。

それを一目見たらくなさんが顔を変えた！

「…！皆、戦闘態勢を取ってくれ…！ついに突撃の時が来た…！」

すかさず背中 of 剣に手をやるらぐなさん。

「やっどですか…! どんどん殺っちゃうけど、いいのよね!？」

「なるべく回避してくれ…! って言っても無理か、任せる!」

遠距離射撃用のライフルを構え、ガチャリと補充リロードをする小悪魔。

「場合によっては冥界送りにするわ〜。」

「…自由にやっちゃってくれ!」

扇子をパツと広げ、不敵に笑う幽々子。

「…らぐなさん、目的はあくまで八坂神奈子、洩矢諏訪子、東風谷早苗の3人ですね?」

「ああ! あの3人をどうにかしない限り戦いは終わらない!」

そう、目的はあの3人…それだけなんだ。

「…霊夢の仇、取らせて貰う…!!」

俺達は一斉に光の方へ走った。

らくな視点

…この戦い、無事に生き延びる事が出来たらいいのだが。
俺にとって、この戦いは決戦。

「それは貴方次第じゃないの？力、使うんでしょ？」

…ちっ、こんな時にお前の声を聞くとは。

お前の正体を考えれば、俺はじきに死ぬってことで確定みたいだな。

「ないない、せつかく見つかった依り代なんだから、すぐに使い物
にならなくするなんてことはあり得ないわ。私ももう少しこの世界
を見たいしね。」

ハッ、そうして俺の隙を見てどうにかしようって魂胆は見てんだ
よ。

「つれないわね。そんなつもりはないのに。」

嘘つけ。お前の言う事成す事全てが信用できない。お前は俺に従っ
てりゃそれでいいんだよ。

「はいはい…わかりました。」

「…あの男、もしかして……気のせい、かな？」

小悪魔は不思議そうに彼を見ていたのだが、すぐに気を取り直して進んだ。

早苗視点

「あ、貴女は…！」

私は確か人形使いを追いかけていたはず。

それなのに、目の前に居るのは…

「人形で悪かったわね。でも親友をみすみす見殺しにする真似は、私には出来そうにないから。」

雛人形。

「…貴女、確かまともに出れる身体じゃなかったはずですが…」

そして記憶が正しければ、目の前に居る彼女は周りを不幸にする、ある意味疫病神の存在。

そんな彼女が顔を出すとは予想外だった。

「ご生憎様、他人に不幸を齎すからつてずっと独りで引き籠ってる必要はもう無くなったから。ご心配なく、『自称』神様。」

へえ、人形でも挑発って出来るものなんですね。

…いいでしょう、その挑発、乗ってあげましょう。ただし…

「私に楯突くということは神奈子様と諏訪子様に楯突くということ…死んでその罪、償って貰いますよ。」

此処ではつきりと『格』を見せつけます。

「死ぬ…？幻想郷の新参が何を言っているのやら。とにかく、私に関わるんだ…」

！！この威圧感、只者じゃない！？

その威圧の主は似合わないほどの不気味な、まるで聖母がいきなり悪魔になったかのように口を吊り上げて言う。

「『不慮不幸の事故』で死なないうちを付けて…！！」

事故…ね。

ただその事故、『奇跡』が起きれば人的損害は軽微になるって知っているのか、甚だ疑問です。

「先人はこう言いました、『奇跡は起きるものじゃない、起こすものだ』…。」

神奈子様、諏訪子様、どうか御加護を…！

「奇跡の力、舐めて貰っては困ります…！！」

私は、戦います！

雞視点

「奇跡の力、舐めて貰っては困ります！！」

…やっぱり威圧は効果なし、か。

これで素直に帰ってくれば問題なかったのに…

「仕方ないです…悪く思わないで！」

ならば実力行使、弾幕を張り、相手の出方を窺^{うかが}う。

その弾幕をいとも簡単に躲^{かわ}して見せる相手。

すかさずお返しの弾が来る。

星形の弾幕…あの爆窃少女と被^ひってる気もするが、私は相手がやったのと同じように身を翻^ひしてみせる。

というより、回るのは私の専売特許なのよ…真似しないで。

「神様もどきにしてはよくやるじゃないですか。でも、私が本物です！秘術『グレイソーマタージ』！」

一気に勝負をつけるつもりのようにだ、まだ始まって時間が経っていないのにスペルとは。

「その攻撃、危ないわよ。庇符『ブロークンアミュレット』」

一回こっきりの防御術、アミユレット魔除けを犠牲に相手の攻撃を無効化。

そして…

「頭上注意」

その攻撃が、まさか自分に降りかかるとは到底思えない。

これは『事故』だから…

「なっ…!?!?」

先手は、撃ったわ。

5…: 奇跡は普通でしかない(後書き)

ラストのは誤字じゃないです(汗

次回予告。

ついに戦争、開幕!

そして衝撃のラストへ加速する…!

というわけで次回

「 6…: 天之神、降臨【前編】」

お楽しみに!

6...天之神、降臨【前編】（前書き）

PV26万、ユニーク27000突破しました！

ありがとうございます！

6…天之神、降臨【前編】

（現在の状況）

- ・レナ、らくな、小悪魔、幽々子 守矢神社へ
- ・雛vs早苗
- ・イヴェリア、萃香、共に逃走中
- ・諏訪子は萃香を追跡中。
- ・あれ？神奈子は？

- 早苗視点 -

「なっ…!?!?」

私は確かに相手難に向かってスペルを放ったはず。
ところが、そのスペルによる弾は相手に当たるところか私に降りかかってきた。

「くっ!」

流石に「自分の弾幕喰らって致命傷受けました」という展開は回避したかったので、仕方なく神力に依る結界を張り、弾幕から身を守る。

「…『何が起こったかさっぱりだ』って顔してるわね？私のスペル『ブロークンアミュレット』の作用よ。一回こっきりだけど相手の攻撃を全て無効にして、そっくりそのまま返す…危なかつたわね。

自分の攻撃を受けてやられるなんてドジは踏みたくないものね、貴女も。」

「…ええ。でも、それは一回こっきり…ならっ…!」

別の攻撃を仕掛ければ、それは守れないということ！
すかさずお祓いの呪いましなを込めた札を飛ばす！

「厭いやな札ね…」

的確に弾で相殺されてしまう。
でもそれでいい、だって！

「これは困です！本命はこっちです!」

背中に張り付いた札が、策の成功を示す。

「滅…!」

緑色の雷撃が落ちる、それは妖あやかしにとっては毒の巫女の呪文！

「ぐううっ!」

…やはり、これくらいでは倒せませんか。

見れば、相手は少々手傷を負っていますがまだまだ元気なようです。

「…ただの巫女じゃないとは思ってたけど、結構の手練てだねじゃない…!」

「今更挑んだ相手が強いと解りました？なら早くやられて下さい、私にはやるがあるので。」

「嫌よ。私も退くわけにはいかないもの。」

「…どうしても死にたいみたいですね…！ミシャグジさま！」

早めに決着をつけたい私は、白蛇を味方に付ける。

2対1…どんだん不利な状況に追い込めば、事故すら無くなる…！

「先に言っておきますが、このミシャグジさまは猛毒持ちです。咬まれば確実に死にますよ！」

弾幕を張りつつ、白蛇でさらに逃げ場を無くす手。

どう出る、雛人形！

「…時間稼ぎは終了のようね。」

この状況で、逃げずに突っ込んでくる！？

「はあぁっ…！」

弾幕には弾幕をということですか…！

「いいでしょう！咬まれて死ぬなり弾に当たって死ぬなり好きにしてください！奇跡『白昼の客星』！」

回避不可能の弾、白蛇…どっちを選びますか？

すると、相手は弾に当たり、くるくると錐搦み落下していく。

拍子抜けですね…あっさりと諦めるなんて。

私は地面に落ちた雛をミシャグジさまで締め上げ、止めのスペルを

用意する。

「…死ぬ前に、最後に言い残す事がありますか？」

私は最後の願いだけなら叶えてやろうという勝者の特権に足を入れていた。

どう転んでも、私の勝ちですから。

「私は…まだ…死なないわよ？」

「最後まで強がりますか！なら遺言は聞かない、望みを絶った上で殺してあげましょう！」

最後のスペルを発動しようと、声を上げようとした、その時。

スペルカードが、何かに撃ち抜かれた。

「…え？」

刹那、何処からか襲い掛かる大量の銃弾。

雛を縛り上げていたミシャグジさまも、頭部を銃弾に貫かれて力なく地に伏した。

「な、なんなんですか！？いくらあのミシャグジさまが私が呼び出したものとは言え、こんな簡単に死ぬわけ…！」

「所詮貴女のやってることはただの蛇に魂を憑依させてるだけ。本

物を使ってるわけじゃないからこんな簡単に死ぬのよ。」

…誰？誰なんです、この声？

その言葉の主は、すぐに現れた。

「はあい、契約通りに貴女をぶち抜きに来ました 神様なんて嫌いだからさあ…。」

背中黒い翼…あれは…悪魔！？

でも悪魔って、あの紅魔館の姉妹しかいないはずじゃ…！！？

悪魔はライフルを片手でこちらに向け、ニヒルに笑ってこう言ってみせた。

「死んで頂戴。」

イヴェリア視点

「雛…！」

小さくなる雛の妖力を感じ、私は一瞬立ち止まる。が、すぐにその場を離れなくてはならなくなった。

「神祭『エクспанデッド・オンバシラ』」

今私がいた場所に、柱が落ちてきたからだ。

「仲間を囚にして逃げるとは、お前も中々薄情だな、妖怪。」
「八坂神奈子…！」

八坂神奈子までは騙せなかったか。

「私とやり合いたいんだろう？さあ、1対1だ…どこからでもかかってこい。」

「なら、遠慮なく殺らせてもらおうか。剣符『狼牙一閃』」

ガチン！！と金属音に近い音が聞こえ、刃と柱を交わらせる2人。

「誰だ、貴様？」
「テメエを殺しに来た。」

一旦距離を取る2人。

一人は八坂神奈子、もう一人は黒いマントの青年。

「…その姉ちゃん、逃げるなら今の内だ。」

青年の声が聞こえるが、私は逃げない。
いや、逃げちゃいけない気がした。

「…言っておいたからな？巻き込まれても文句言つなよ。来い…悪魔！！」

黒い気が、青年に纏わりつく、そして、次の瞬間…

「憑依完了…」

見た目は変わらないが、明らかに感じるものがさつきと違う。この悍ましい力…そして「悪魔」というフレーズ…

「殺される前に名前聞いておきたいよなあ？俺は処刑人…だが、ただの名無しだ！！」

彼は、「悪魔」の力を得た。

6…天之神、降臨【前編】（後書き）

次回予告。

目覚めた悪魔。

銃火器乱射の悪魔！

ここにスタイリッシュ神殺し小説が今始まる！

というわけで次回

「God may cry」

お楽しみに！（笑）

…うん、本当はこっち！

「6…天之神、降臨【後編】」

お楽しみに！

6…天之神、降臨【後編】（前書き）

こあが…こあが怖くなった…！

6…天之神、降臨【後編】

小悪魔視点

「神様に懺悔はした？部屋の隅でガタガタ震えて死ぬ準備は終わった？信じていないはずの別の神にも助けを求めて見捨てられる準備は？」

久しぶりの仕事だから、身体が鈍ってないか心配だけど…まあ、これくらいなら問題ないわね。

「その人、さつさと逃げておきなさい。巻き込まれて死にましたって言われても責任は取れないよ。」

私は傍観者を貫いている彼女にそう言うておいた。

…本当に責任取れないもん。

「…あくまで1対1をモットーとしますか…いいんですか？私を一人で倒すなんて真似をして。」

「構わないわ。どうせ勝つのは私。逃げるなら許してあげるけど？」

「神の私に刃向かうのですか？それは愚かですよ。だいたい…」

そこから先の言葉は続かなかった。

長々しくなりそうな気がしたから、彼女の右耳に銃弾を掠らせただけだけ。

「雑魚ほどぺらぺらとしゃべるのよね。今のは警告よ。あんたの話なんて聞きたくないの。」

「そうですね：なら、解らせるしかないようですね：格を。」

やっと戦闘モード？随分とお気楽なのね。この約6秒で数百回死んでるよ、貴女。

「神に逆らった罪、その身に刻みなさい！開海『モーゼの奇跡』！』早速スペル、随分余裕がないみたいね。余裕ないように仕向けたのは私だけだ。」

「さっきまでの自信はどこに行ったのかしら？弾の撃ち方もまるでなっていない。安地だらけよ？」

実際、相手の弾幕にはムラがあつて、所々に安全地帯がある。

「そんな疎らすぎる攻撃をするから隙が出来るのよ。」

「っ！？」

そのびつくりした顔、ウケる。

弾幕回避しておいて早苗の後頭部にライフル突きつけてる私も私だけだね。

「バーン。はい、一回死んだ。」

「！！」

未熟すぎるわ、ここで激昂したって全くメリットないことに気づきなさい。

お怒りになった神の攻撃は激しさを増す。

でも、さっき以上に疎らな弾幕。勢いだけでは敵は倒せない。

「びつくりするほど戦いに関しては素人なのね。神様っていうもんだからもう少し強いんだと思ったんだけど、拍子抜けね。」

「どこまで神を侮辱すれば気が済むんですか！！」

力に頼りすぎな証拠ね。さしずめまともな戦いは数回程度しかして

ないと見た。

「…知ってる？神って死ぬのよ。悪魔によつて、ね。」

「『神と双極を成す力』のことですね…！！」

「そ。未熟者の神様に見せてあげましょう。これが本物の『神』よ…！！」

弾幕をかわしきり、左手の甲に刻まれた刻印をなぞる。

「第壹封印術式解除：解除暗号^{コード}…『アーリマン』…！！」

遠く彼方、魔界より届けられる『力』。

私の全力のほんの5%、それでも恐怖を伝えるには十分。

「もう一度言うわね。神様に懺悔は済ませた？部屋の隅でガタガタ震えて死ぬ準備は？」

神に逆らった恐怖を知るのは…貴女よ。

らくな視点

「どう？私の力を借りた気分は？」

「知るかくそサキュバスが。絶不調だね。吐き気がする。」

「でも仕方ないのよ？契約の関係上、貴方は女性型悪魔としか契約を結べないんだから。」

「ちっ…」

「でも安心なさい。契約はきっちりと遵守するわ。それが悪魔だもの。」

「わかったわかった…来るぞ!!」

御柱をかわし、相手を視界から離さぬように注視する。

「反応速度が…上がってやがる。」

「そりゃそうよ。悪魔の身体能力舐めないで。人間の5倍は軽く行つてるわよ?」

「…なら一気に仕留めるぞ!!」

ヘルメスを手に、俺たちはあの世界…魔界で得た呪文を込める。

『我が血は黒くあれ。我が道は暗黒に、我が剣は無であれ…』
ヘルメスが脈打つ、故郷を懐かしむように。

「魔界の力、見せてやるよ。鬼門…『空無』^{そらなし}。」

ヘルメスを大地に振りおろし、世界は揺れる。

相手に突き刺さる『黒』がやがて天高く伸びていき、四方八方に放散する。

「少しは効いてくれよ…結構な大技なんだぜ?」

本来ならこれは使うべきではなかった。

だが、奴の出方、戦法がはつきりしていない以上、先手必勝。そう、それでよかった。

この後に起こる事さえ考えなければ。

「ほお…やるじゃないか。今は少し痛かったぞ、人間。」

「なっ…!?!」

大技かましてもあんなにピンピンしてるのか、あいつは!?!

「ならば今度は私の番だ。御柱『メテオリックオンバシラ』」

おいおい、あんなのアリかよ…!

空が…落ちてくるってまさにこのことか？

「死んだな、俺。」

あの技の代償として、身体がまともに動かなくなる。

「もう一度死んでくるわ、俺。」

目の前が、赤く光った。

「…ただで死なせはしないわ。せつかく手に入れた憑代を手放さないって言ったじゃない。」

貴方の身体、借りるわよ。」

これでいいわ。

これで彼は…「人から外れる」。

名も知らない神…貴女には実験台になってもらうわよ。

「逝ってみよう、殺ってみよう 人間の皮を被った悪魔…その力、見てみたいしね。」

「…クロス。」

6…天之神、降臨【後編】（後書き）

次回予告。

力を解放した2匹の悪魔！

あれ、レナは？

というわけで次回

「Extra…地之神、降臨」

お楽しみに！

Extra…地之神、降臨

レナ視点

「んな…？」

いつの間にか、俺は一人になっていたようだ。

らぐなさんは「すまん、先に守矢神社へ向かっていてくれ！」と言ったきり行方不明、小悪魔は「敵が居る…攪乱かくらんするから先に行って」で離脱、幽々子は…あれ？

とにかく、俺は一人だ。

まあ目的はあの3人とはいえ、見つからなければ戦いようもない。俺は守矢神社に向かいつつ、索敵もしていた。

…と、そこに。

「ちよこまかと逃げるな！土着神『手長足長さま』！」

「捕まるのは嫌だからねえ！酔符『鬼縛りの術』！」

なんか特撮ものでもあるかのような巨大な怪物みたいなものが、身動きできずにいる。

「な、何だ！？なんで神が縛られるんだ！」

「鬼だつてある意味神様なんだよ！」

つて、あれは萃香と諏訪子じゃないか！

「加勢するぞ、萃香！砲符『エキセントリックバルカン』！」

不規則に跳ねる弾が、巨人の身体をぐらつかせる。

「くっ…！増援か、しかも厄介な奴！」

と諏訪子が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる一方、萃香はと
いうと…

「おっ、レナじゃん！いいとこに来たよ！あたしじゃ張り合うだけで精一杯でねえ！レナ、支援頼むよ！」

張り合えるんなら支援いらぬ気がしたが、状況が状況なので支援
をすることに。

「解った！一気に畳み掛けるぞ！『翼を求めし者』、展開！！」

イカロスハート

相手の力の見誤りはもうしない、最初から全力だ！

「2対1なんて卑怯だ！ならこっちだつて増援を使う、崇符『ミシヤグジさま』！」

現れたのは、白い大蛇…つてめちやくちやく長くないか！？

「早苗のと勘違いしてもらっちゃ困るよ？こっちは本物、力はある
！」

確かに、あの蛇からも強大な力を感じる。

早苗のあれとは違うようだ。

「…レナ、白蛇の方を頼まれちゃくれないか？あたしは本体をやる
よ。」

「大丈夫か？随分と怪我してるようだが…。」

よく見れば、生傷が身体のおちこちにある。

「大丈夫大丈夫、こんな傷なんともないよ！」

そう言うなり軽く酒を口に含み、傷口に向けて噴射する。

「民間療法丸出しだ！」

「今までこれで治ってたから大丈夫！それより自分の心配をしな！」
…そうだ、それよりも問題なのは、この白蛇。

今まで妖怪という類の蛇なら倒したことはあるが、この蛇はまんま蛇だ。

つまり野生動物…野生動物はかなり戦いが巧いと、本か何かで見たことがある。

注意すべきはこの蛇なのかも知れない。

「…そうですね。これはキツイかもな…！！」

「どうした？いきなり怖気着いたか？ミシャグジさま、あれを頼みます。」

諏訪子は萃香と戦うべく、萃香の方へ向かう。

…人間vs大蛇。なんか某グラップラーみたいだな。

「落ち着け、俺…奴から来るのを待つんだ…」

痺れを切らして飛び込めば、奴の領域内に入り、カウンターを喰らいかねない。

ならば限界まで待って、奴から来るのを待つしかない。

此処からリヴァイバルを撃つという手もなくはないが、型はいいとしても、型は撃つ時に僅かな隙が出来る。

その隙を突かれてしまったら終いだ。

「限界まで引き付けて…霊掌か。」

そう、狙いはそこ。

一撃、たった一撃に全力を。

「来いよ蛇…潰してやるからよ。」

僅かに恐怖が残るが、それを虚勢で振り払う。

右手に魔力を。目線は蛇の瞳。

「…」

準備は整った。

後は奴が動いた瞬間、そこを狙う！

「……」

蛇も俺を睨む。

動いた方が負け、それは蛇も知っているのだろう。

…諏訪子と萃香の戦いが向こうで起こっている中、此処だけが妙に静かだった。

「シヤアアアアアアア！！」

動いたのは蛇、一直線に俺に飛び掛かる。

「にやろっ！！！！」

その蛇の頭目掛けて拳を振り下ろす。

蛇には確かに拳は当たった、手ごたえもあった、だが…

「ぐうっ！！」

拳が当たったのは蛇が俺を咬んだ後だった。

「見事なり、人間。私と刺し違えるとは、なかなかだな。」

「なんだ…蛇が喋ってる？」

激痛、さらに毒を入れられたようで目の前がふらふらしているが、その声だけははっきりと聞こえた。

「人間、貴様は妙だな。まだ生きている。」

「一応死なないことになってるんでね…！！」

そういえば、毒では試したことがなかったな。どうなるんだ？

「良かるう。貴公に頼みがある。このままでは『命が消える』…我が主と対になる者だ。」

諏訪子と、対…？

「八坂…神奈子か？」

「ああ。このままでは何かが起こる。敵であることは承知だが、どうか止めて貰いたい。」

「…何故だ？」

「我らは戦いを、血を望まない…使役される身だが、思いはそうだ。」

「…そうか。なら、見るだけ見よう。この身体で止められるかは解らないが…」

「感謝する。ならば、戦うふりをして貴公を神奈子の方へ飛ばす。」

「…頼んだぞ。」

「…頼まれた。」

蛇に飛ばされる俺。

途中、諏訪子と萃香の姿が見えたが、互角の戦いのようだ。

「…これで良いのだろうか？」

「ああ。これで準備は整った。」

「まさか貴公の姿を今一度見るとは思わなかった。が、借りは返したぞ。」

「ああ、そうだな。」

「彼に何かあるのか？」

「何かは解らない。だけど、彼に関しては見てみたかった。地獄の資料で興味を持った、それだけだけだ。」

いずれ彼には会うことになる。
私の世界で…

Extra: 地之神、降臨(後書き)

次回、風神録編最終話。

ラストを、見逃すな。

終局：始まりの終わり（前書き）

これが最終話だ！！

終局：始まりの終わり

???視点

此処とは違う世界で妙な反応が観測されたため、私：岡崎夢美ゆめみは助手の北白河ちゆりと共にその反応の正体を探り…結論が見えた。

「これは彼女が黙っちゃいないでしょうね…!!」

「そうですね、教授。」

そう、全てのデータが正しいと仮定するなら、この反応は…

「で？その教授様はこれがまた魔力とか言う変な力に依るものだと
言い出すのかな？」

「…科学信者が何の用？」

邪魔するならお引き取り願いたいわ。

朝倉理香子…魔法使いのはずなのに科学信者という変人。

「…って地の文に見せかけて咳いてんじやないわよ！悪かったわね
信者で！」

「あら、自覚あるんだ。見直した。」

「…そ、そう？」

これ以上無駄話はしたくない。彼女の魔力、科学に対する知識は半端ではないのは事実なので、魔法のスペシャリストである理香子に意見を聞いてみることにする。

多分彼女もこの妙な空気を感じたからここに来たんでしょうし。

「…ここから真面目な話ね。これ…」

私はデータが記録されていく機械コンピュータのモニターモニターを突ついて彼女に聞いてみた。

「どう思うっ？」

「どうも…どうもって…これ、どう考えても科学じゃ説明できない。」

もつと異質な『何か』よ。現地の映像、出せる？」

「ええ。」

私は軽くキーボードを叩き、画面を変える。

「…言っているいい？これ、悪魔よ？」

「やつぱり？私も同じ結論に至ったの。でもおかしいわね。なんで悪魔なんかがあの世界に居るのかしら？」

「悪魔とは別だけど、霊体ならあの世界に行ける。それは『彼女』が証明して見せたじゃない。それに、悪魔にはもう一つ、あそこに行ける手段がある。『契約』よ。」

「契約？魔法にはそんなのがあるの？軽く調べただけだから解らない。」

「ええ。物理に詳しい貴女ならこう言えば解るでしょう…錬金術、ホムンクルス人造人間。」

「ああ…、それね。良くわかった、ありがとう。」

錬金術：「何かを得るためにはそれ相応の対価が必要」という「等価交換の定理」が深く根付いてる魔法に近い科学、物理学。

悪魔とかいう人外の力を得るためには、『契約』が必要…そういうわけね。

「でもこれ…やばくない？力が増えてくのが解る…暴走してるわよ、これ。」

その理香子の発言はデータからもはっきり解る事実だった。

だが私たちは出る幕がないだろう、だって…

「まあ、いざとなれば向こうにいる皆が止めてくれるし。問題ないでしょう。」

あっちにも、抑止力はある。

「それもそうね。」

???視点

これこれ、この力、漲る力、滾る力！

「これを私は待っていたのよ！悪魔はあの世界でしか力を発揮できない、その為に私はこの人間に憑依つたのよ！

でなければ何故こんな下等生物なんかに！恐れ慄け人間！！これが私のお！！！！」

完全に私のものになった肉体を動かし、名も知らない神に緊迫。

「力よ！！！！」

ふうん、この魔力で異常に強化した拳を御柱でやり過ぐすとは、流石神ということだけはあはるわね。

…でも、甘いわ。甘ちゃんすぎる。

「悪魔、舐めんじやないわよ」

この肉体に張り付いた『影』の形を変え、刃にして相手の脇腹に突き刺す。

「がはっ！！！！」

いい、いいわその顔。

苦悶に満ちたその顔を、私は見たかったの。

もつと見せて、その顔？

「まずはその面剥いでみようかあ！！！！」

高速の魔法詠唱からの劫火の雨を、相手に降らせる！

「つうっ！！」

自分の身体じゃないからまだ本気とまではいかないが、これでも十分通用するのは解った。

「はいはい次い！」
連続詠唱、大地から氷の針の山を生み出し、相手の身動きを制限する。

「やらせるか！」

地面を蹴り、相手は飛び上がる。

…かなり予想通り過ぎるんだけど、どうする？

「殺す！！」

飛び上がった先の空中に瞬間移動、右手に魔力を込め…

「うらあ！！」

一撃。

面白いように相手は地面を跳ねていく。ボールかっつての。

「はい、詰み。」
チエックメイト

首筋に剣を突き立て、完全に勝利を導く。

「妙な真似したら殺すわよ。まあどっちにしる殺すけど。」

…最後に聞かせて。貴女、ここまで力があるのに、人間に憑依するってどういうこと？」

あ、そんなこと聞きたいの？

いいわ、教えてあげましょう。

「私の身体はある『化け物』に封印されちゃってるのよ。だから私は霊体同然だったんだけど、依り代が見つかった、ただそれだけのことよ。」

「予想はできるわ。だいたいそんなこと出来る奴は一人しか居ない…私の記憶の中じゃ、ね。」

へえ、あんたも知ってるんだ。「あいつ」を。

「面白い、名前だけ聞いてあげよう。」

「八坂神奈子…一応神よ。」

そういう貴女は？なんて聞かれたから、名前だけ教えてあげる。

「私？悪魔の一部、メイライアよ。」

「聞いたことないわね…てっきりその殺人的な力から、『あの姉妹』のどっちかと思ったんだけど。」

「残念。あの姉妹はこんな手の込んだことしないわ。もっと直接的に殺しにかかるし。」

「…そう。じゃあさっさと殺しなさい。神も悪魔も負ければ『無』よ…」

「意外に諦めいいのね。うん、じゃあ殺すよ。でも神様なんだから、またすぐに会えるでしょうし。」

「そうね。その時は今度は同士として飲みましょう？」

「ええ、そうしましょう。」

殺しにかかるうと剣を振り下ろそうとした、その時。

「待ち…やがね…!!」

小悪魔視点

「…!!」

なんだ、この妙な魔力？

というより、これって…!!

「そこの神様！あなたの仲間が危ないよ…!!」

「えっ！？本当ですか!？」

「嘘かどうかは見てから言いなさい、行くわよ!！」

私と早苗は一直線にある場所へ向かった。

そう、あの場所に…

View point Out

「待ち…やがれ…!!」

そこに現れたのは、レナ。

「うん？なんか来た？それにしても…」

悪魔メイライアはその人物を一瞥し、いちへつ言い放った。

「随分死にかけじゃない。いんや…既に死んでもおかしくない。

…なあんで死んでないのかなあ？」

玩具を見つけたかのように声を半音上げるメイライア。

「俺は…死なない…だから…俺は…あんたを止める!!」

「うん、寝言は寝てから言おうか」

一瞬で距離を詰め、レナの目の前に立つ悪魔。

軽くデコピンをすると、レナはまるで殴られたかのように吹っ飛ぶ。

「これに反応できないでなんで私を倒せるのかな？『死なない』か

ら？」

「…」

ふらふらと立ち上がるレナ。

「ムカつく…死なないのは人外の特権なの。私や、そこでボロボロになつてる神奈子みたいな人外のね。人間ごときが不死になつてんじゃないわよ。」

「待て、彼はただの人間だ！関係ない人間なんだ!！」

神奈子が叫ぶが…

「関係ないって言われてもねえ…ヒーロー気取りの馬鹿には死ぬくらいがちょうどいいわ。そこで見てなさい。少しだけ本気を出してあげるわ。」

悪魔は左腕でレナの首を掴みあげる。

「ちよつなら」

レナの心臓を、悪魔はレナの体内で『砕いた』。

「…っ！！！！！！」

神奈子は戦慄した。

これが「悪魔」…悪魔の前では、人は無力。

それは「神と双極を成す」のが悪魔だからというのは解ってはいた。だが、悪魔や神はこんな簡単に人を殺していいのだろうか。

そう思った瞬間、神奈子は気を失った。

「あれ？神奈子は気絶？いいわ…私も少し暴れすぎだし、少し休み

まじよ……」
「させないわ」

悪魔は声の方向を向く。

「……ヒーロー気取りその2、3？ たった2人で？ どうするつもりよ？」

「そう言ってられるのも今の内……今の私はとつても……」

キレてるから。」

刹那、悪魔の目の前に居た2人の内、一人が消える。
同時に悪魔の右腕が切断された。

「っ……!?!?」

「ぼさつとしない、幽々子!!」

「解ってるわ。『反魂蝶 八分咲』」

悪魔から鮮血が舞う。

レナとの戦いで使ったそれとは明らかに威力が違う。

この攻撃は本気……これが幽々子の全力であった。

「幽香、後は頼むわ。」

「任せなさい!!」

いつの間にか2人に分身していた幽香。

「終わらせるわ」

「この一撃で」

「貴方を、こんな死なせ方には」

「させない!!」

「奥義」

2人の幽香がそれぞれ持つ日傘の先が輝く。

「Twin Spark」

悪魔は、光に包まれた。

「…使い物にならなくなったな、あの神は。さて…私もそろそろ動くか。」

『まさか、こんなことになるとはな…』

「場合によっては私が手を打ちます。彼の死は痛いが、それで計画を頓挫させるわけにはいきません。」

『済まぬ…頼むぞ…』

彼は、死んだ。

〈終局〉

あとがき

というわけで、衝撃的な結末とはこのことだったので。

主人公、死亡。

いつか書いてみたかった結末の一つだったんです。

「…そう、貴方は話が唐突すぎる。」

…と横で映姫さまが睨んでらっしゃるのでまともに話を進めます。

この最終話、いくつも伏線を張りまくりました。

なのでわからないことだらけだと思いますが、それは追々説明します。

そして、最初に旧作キャラ（理香子、ちゆり、夢美）を出したのに
もきちんと意味があります。

そう、これで話が終わるのは余りにもおかしすぎる（映姫さま風）
「私の台詞を真似しないで」

…横に映姫さま居るのも、きちんと意味があります。

はい、次回からの主役（の一人）は映姫さまです。

次回から、物語の核心に近づいていきます。

あ、次回から新章ですが、舞台は映姫さまが居る地獄および『魔界』です。

楽しみに待っててくださいね。

感想などはいつでもどうぞ。

魔界篇：序章（前書き）

ついに新章突入！！

魔界篇…序章

「…」

此処は地獄。

その奥にあるちよつとした広間に、地獄を管理する10人の強者…すなわち『閻魔』が一同に会していた。

本来ならこの光景は余程の罪を犯した者に対する量刑を議論する時にしか見られない、それに議論は余りにも形式的で、結論はだいたいの『永久に地獄に投獄する、輪廻転生など許さない』となるので議論の光景は静か、その一言に尽きる…はずである。

が、今回は事情が違った。

というのも、議題は残虐なる囚人の事ではなく、不運にも死んでしまった『ある人物』の処遇について、である。

「一体どうするのだ!!」

なんて机をガンガン叩き、進まぬ議論に苛立つ閻魔の一人。

「どうするもなにも…」

と困り果てる閻魔も居る。

まさににっちもさっちもいかない状態になっていた。

何故ここまでややこしくなったかと聞かれたら、閻魔達は口を揃えてこう言うだろう。

『悪魔に殺された人間など聞いた事がない!!』と。

本来、悪魔というのは霊的存在であつて、悪魔が人間を殺める際には人間の魂を喰らう、又は破壊するのが主である。つまり、地獄に『悪魔に殺された人間の魂』が来るはずがないのである。

ところが、今回は魂が喰われたり、破壊されていない。だから閻魔達は困つたのである。

悪魔や天使、神といった『殺意を持った』超自然的な存在の前には、人間は魂を残し得ない。

それは閻魔達にとつて大前提であり、不変の真理である…はずだつた。

それが根底からひっくり返つたものだから、閻魔達はオロオロしている。

閻魔と言っても、此処に居る閻魔は元は人間…予想外の事態が起きれば不安になるのも当然である。

この先行きの見えない真つ暗な議論を黙つて見据える閻魔が一人居た。

四季映姫・ヤマザナドウ…この魂について最も深く知っている閻魔である。

彼女の本心は勿論、この魂を元の世界に戻してやりたいという思いで一杯なのだが、その場合、ある問題が起きるのも同時に理解していた。

悪魔や神に傷つけられた魂には、修復出来ない程の傷がつく。と言っても深い傷などではない、ごく小さく、浅い傷なのだ。だがそれが、魂を肉体に戻す時に邪魔をする。

魂を肉体に戻して蘇生…それは閻魔にとっては造作もないことなのだが、その時に肉体に『印』がつく。

その印は、悪魔や神には見える。

そしてその印を見るや否や、悪魔や神は発狂する。

何故か、それはその『印』の意味にある。

その印の意味は、『この印を付けられた者は神や悪魔に逆らう者である』という意味である。

神や悪魔に逆らうというのは言ってしまうえば『真理』に逆らうということと同義であり、絶対不変である真理に逆らう者は何としても排除されなければならない。

よって『印』が付けられた者…閻魔はそれを『咎人』と呼ぶのだが…は地の果てまで神や悪魔に追いかけて回され、確実に魂を消される。

仮に神や悪魔に逆らって死なずに無事だったとしても、その者も神や悪魔に傷つけられた時点で既に咎人と化しており、やはり地の果てまで追いかけて回され…消される。

そう、このままではこの魂の主…彩崎玲奈も咎人と化し、悪魔や神に追われる身となってしまう。

だから映姫は考えていた。どうすれば彼を…レナを咎人にせずにはらせる事が出来るか。

正しく言えば、映姫にはある答えがあった。

だがその答えをこの場で言えば他の閻魔の怒りを買いかねない、そ

れほど本来は避けるべき答えなのだが、映姫にはそれ以外に彼を甦らせる手段が思い付かなかった。

この閉塞した議論を打破すべく、映姫はついにその策を話す事にした。

だが、この意味のない雑音議論だらけのこの場を黙らせる、それをしてから。

「いい加減にきなさい!!」

普段見せる事のない映姫の怒りを込めたその声に、辺りは黙らざるを得なくなった。

「このままではどう考えても時間の無駄よ。貴方達は余りにも無様過ぎる…」

「それはどういうことだ!! 貴様、それでも閻魔か…」

が、激昂したはずの閻魔は映姫の一睨みで「ひっ」と情けない声を上げた。

全員が映姫の言葉を待つ形に持っていつてから、映姫は口を開いた。

「要は彼の魂を咎人でない形で肉体に戻してあげればいいのです、違えますか?」

「しかし、そんな手段があるわけが…」

「あります。ただ、私達が傲慢の塊である誇りを捨てる事が必要ですが。」

「…手段を聞こうじゃないか。」

「簡単です、彼の魂は魔界に居た悪魔によって傷つけられた。ならばその傷を癒すには…」

「まさか…!!」

閻魔達の顔が一斉に青くなる。

「ええ、『魔界の王』の力を借ります。」

「ふざけるな!!この地獄はこの世界にも属さない中立地帯!それを破るつもりか!」

「ふざけているつもりは更々ありません。ですが、地獄の本来の目的…『魂の救済』という観点から見れば、誇りが何だと言ってる暇はありません。まさか、そのまま放置するなんて閻魔にとってあるまじき行為をやるうとでもしてなければ、何としても彼を救わなければならぬ。それが閻魔である私たちの義務よ。」

「しかし…!!」

「そう、これは私の独断でしかない。この行為、もしかすると間違いがあるかもしれない。この行為がはたして正しい行為なのかどうか、第三者に判断して貰いましょう。…入って。」

扉が開き、ある人物が部屋に入ってくる。

「…なっ…!?!」

閻魔たちはその人物の顔を見た途端、さらに焦りが増えた。

「改めて紹介しましょう。西行寺幽々子…冥界の管理人よ。」

「こんにちは、皆さん。」

幽々子が軽く会釈をすると、室内は喧噪に包まれた。

「こんなところに彼女を寄越すとはどこまで神経が狂ってるんだ
!?!」

「この神聖なる場所に、閻魔以外の者が立ち入る事は禁じられて
いるはずだ、なのに何故…!?!」

幽々子は暫く無言だったが、ついに本性を現した。

「黙りなさい、殺すわよ。」

「…え?」

閻魔達は今の言葉が聞こえていないようだ。

「一応、私はこの議会で認められた『冥界の管理人』よ?私の邪
魔をする場合は殺しても構わないって言ったのはどこの誰かしら
?」

「馬鹿を言つな、そんな横暴許せるか!今すぐ貴様の権限を剥奪
する!」

「却下」

映姫の一言で、全員が黙る。

この議会では完全一致でないと議題の結果の確定及び既存事項の変
更は認められない。

閻魔の一人である映姫が却下したことによって、幽々子の権限剥奪
は無効、現状維持となる。

「ありがとう、映姫。」

「構わないわ。厄介事に巻き込んでごめんなさい。」

「さて、魂の復活に『魔界の王』の力を借りるか否かについて、
だったわよね？」

万策尽きたかのように閻魔達が黙るなか、幽々子は自分の意見を話
す。

「前例がない以上、確かに批判的意見が多いのは解るわ。でも、
彼は今まで善行を積んできた。どう考えても彼は甦らせるべきよ。
たとえ魔界の王の力を借りることになっても、ね。」

「ならば、この第三者意見を参考にして、意見を聞きましょう。
この魂を甦らせるかどうか…」

「…というわけよ。結構厄介かもしれないけど、宜しく頼みます。」

「大体の話は解った。貴女の言うとおり、本当に彼に甦らせるだ
けの価値があるかどうか、見極めさせてもらうわ。私のやり方でい
いのよね？」

「ええ。あの悪魔に対抗しなくてはならない以上、寧ろ貴女のや
り方でやってくれた方が好都合よ。」

「了解。じゃ、軽く可愛がってあげるわ。」

えへへと笑うその女性に、映姫は望みを託した。

「頼んだわ…神綺。」

魔界篇：序章（後書き）

次回予告。

え？どうなるの？

まさかの展開から目を離すな！

というわけで次回

「魔界入りしました」

お楽しみに！

魔界入りしました(前書き)

PV28万突破ひゃっほう!

魔界入りしました

「う…此処は…？」

俺は確か、化け物みたいな奴に心臓砕かれて…死んだ。痛いとかそんな事思う暇もなくて、本当にあっさりと死んでしまった。

しかし、俺が死んだという以上、幻想郷はどうなるのだろうか？ 守矢神社の件はどうなったのだろうか？

霊夢や皆は無事なのだろうか？

…が、もう死んだ身だ、物事を憂うことが出来たとしても、もう俺には何も出来ない。

そう言えば、死んだ者って確か閻魔大王様…いや、四季映姫さまに世話になるんじゃないっけ？

となれば、近いうちに彼女に会えるのだろうか。

…と思った瞬間、景色が変わったように思えた。

暖かい。ちょうどいい塩梅のそよ風が心地よく感じられる。

俺は川の土手に寝転がっていたようだ。

俺は身体を起こし、辺りを見渡す。

土手。川。…おしまい。

人影も、人の気配もしない。

そう解った瞬間、妙に風が冷たくなったように感じた。

独り。その事実が、まるで俺をどこか遠いところに持って行きそう
で、なんだか不安になった。

「…よし！」

俺は立ち上がる。

どうせ死んだ身なんだ、時間は限りなくある。
なら色々見て回ろう。

…と歩き出した、その時だった。

「おーい！おーい！！その青年、待ってくれ！」

青年と呼ばれたので、誰の事かと周りを見渡すが、俺しかない。
やがて声の主が、川の上流から流れてきた。

木製の小舟に乗った、鎌を持った赤い髪の女性。
彼女が俺を呼んでいたようだ。

「ああー、良かった良かった！あんたを見つけれなかったら映
姫さまに怒られる所だったよ。っと、自己紹介がまだだったね。あ
たい、小野塚小町。よろしくな。」

「あ、ああ…」

初対面のはずなのだが、俺は成り行きで小町という女性と握手した。

「あんた、彩崎玲奈でOKだよな？」

「？ああ…そうだが、それがどうしたんだ？」

「単刀直入に言うわ、『もし仮に』生き返る事が出来ますよって
言われたらあんた、どうする？」

「！？」

待て、死人はそう簡単にパンパン生き返れるものなのか？

「…実は嘘でしたってオチじゃないんだよな？」

「嘘じゃないさ。死人をさらに辱めるのは此処地獄の規律ルールで固く禁じ
られてるんだ。だからあたいはあんたに嘘を付かない…いや、付け
ないんだよ。」

へへっと軽く笑う小町。

「まあ嘘付いても良いことないしね。で、さっきの話だ。あんたはどうしたい？」

「俺は…」

答えは、決まっている。

「その話、詳しく聞かせて欲しい。」

「ああ、悪い話じゃないはずだよ？なんせこの話を振ったのは映姫さまさ。結構時間もあるしさ、これに乗ってから話をしようじゃないか。」

俺は小町に言われるがままに小舟に乗った。すぐに舟は川を下り始める。

「まずあたについてだ。あたいは此処…みんな『三途の川』なんて呼んでるこの川で、あんたのような魂を導く仕事をしてる死神の端くれさ。」

「つまり水先案内人…ってことか？」

「そういうこと。まああたについてはこれくらいにしておいて、そろそろ本題に移ろう。あんた、死ぬ瞬間のことを覚えてないかい？」

「死ぬ瞬間？…化け物に首根っこ掴まれて、んで…心臓砕かれて…」

「うん、結構覚えてるんだね。なら話は随分と早くなるね。問題なのはその『化け物』なのさ…あれ、言っちゃつと悪魔なんだよ。」

「悪魔？」

…という小悪魔とかレミリアとかのあれとは違うのか？

「ああ。私達の間じゃ、『悪魔』ってのは2つに分かれるんだよ。」

一つは魔法使いとかが自分の下僕しもへとして呼び出す下級の悪魔。んで、もう一つはまさに『化け物』…あなたには墮天使とか神に反逆する奴って言えば解るかな？そういう力の強い、魔王みたいな奴さ。今回あなたは『化け物』の方の悪魔に殺された…これがちよいと問題なのさ。」

どんぶらどんぶらと舟が流れていく。

「化け物はどうやっても化け物でね…呪いのようなもんを目標とした獲物に付けるのさ。その呪いが、あなたを苦しめる。詳しくは解らないけど、とにかく映姫さまですらどうにもならないレベルなんだよ。んで、その呪いを解かない限りにはあなたを復活させることなんて無理だ、そう考えた映姫さまは地獄の暗黙の規律を破つてまで、ある人物に呪いを解くことを依頼した…」

「そのある人物って…？」

「それについてはあたいも名前しか聞いた事ないんだよ、なんせ会ったことすらないもん。でも名前だけなら解る…『神綺しんき』、彼女だか彼だかあなたを助けてくれるって話さ。」

「で、その神綺って人に会いに行くわけか？」

「うん。だけどね…それにも問題があるわけよ。先に言っちゃうと、あなた一人で会いに行くことになるんだ。」

「え？」

「今から行く世界に問題があるわけさ。今からあなたには『魔界』って世界に行ってもらう。あそこは『力こそが正義』って言うても過言じゃない世界。神綺に会おうって言うなら圧倒的な『力』が必要さ。要は『敵はみんなぶっ飛ばせ』、それに限る。ま、あなたなら神綺に会えるさ。映姫さまが認めた存在さ、大丈夫。」

「…ああ。」

「もうすぐ着くよ、魔界に。準備しときな。」

「解った。」

やがて、すぐにやたらとでかそうな門の前に着いた。

「此処さ…この門を潜った瞬間、命の保証は出来ないよ。それでも行くんだね？」

「当たり前だ…!!」

俺は拳を握る。

「やらなきゃいけないことは、まだ沢山残ってる…!こんな所で立ち止まるわけにはいかない!」

「解った…気を付けて!」

「ああ…!!」

門が、開いた。

???視点

「神綺様、門が開きました!」

「構わないわ。彼でしょう…」

そう、貴方にも覚悟はあるのね。

なら、魔界なりのやり方で歓迎してあげましょう。

「幻想郷で最強かなんか知らないけど、私達を舐めないで頂きたいものだわ。総員、戦闘配備。目標…侵入者。」

死よりも恐ろしいもの、とくと味わいなさい。

「全魔界の民に告ぐ。これは戦争よ。… 1対2000万の、ね。」

魔界入りしました(後書き)

次回予告。

魔界入りしたレナの前に、いきなり敵が！？
見えるものは全て敵：この圧倒的不利な状況、レナはどう覆すのか
！？

というわけで次回

「Search&Destroy!!」

お楽しみに！

くお知らせというかお願いく

この魔界篇で出してほしい旧作キャラを募集します。
ただし、旧作版の霊夢(霊夢)、魔理沙、魅魔さま、幽香、アリス
は除いて、です。

出してほしいキャラいましたら感想及びメッセージでお願いします。
(感想の方がテンション上がります)
宜しく願います。

S e a r c h & a m p ; D e s t r o y ! ! (前 書 き)

冒頭はたぶん見覚えある文だと思いますが、笑い飛ばしてやって下さい (^_^ ;

S e a r c h & a m p ; D e s t r o y ! !

「諸君、私は戦争が好きだ、好きで好きでたまらない、私は戦争が大好きだ。

あらゆる世界、あらゆる状況、あらゆる規模、とにかくにも戦争が好きすぎるのだ。

戦列を成した兵の一斉掃射が迫る敵を撃ち崩すのが好きだ。

勇敢にも向かった敵兵が蜂の巣になった時は心が躍る。

強襲兵の操る魔物モンスターが敵の拠点を撃破するのが好きだ。

悲鳴を上げて燃えさかる家屋から飛び出してきた雑兵を魔法でなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった。

銃剣先を揃えた兵隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ。

恐慌状態の新兵が既に息絶えた雑魚を何度も何度もザスザスと刺している様など感動すら覚える。

屈服した捕虜達を木製の十字架に吊るし上げていく様なものはもうたまらない。

泣き叫ぶ奴隷達が私の振り下ろした手の平とともに本性を現した獣に食われていくのを見ているのも最高だ。

愚かな抵抗者共レジスタンスが雑多な小武器で健気にも立ち上がったのを領域エリアごと跡形もなく消し去った時は絶頂すら覚える！

見下していたはずの愚民共に滅茶苦茶にされるのが好きだ。

必死に守るはずだった村々が蹂躪され女子供が見るも無残に殺されていく様は、とてもとてもそれはとても悲しいものだ。

外の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ。

あの愚かな巫女共に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ。

諸君、私は戦争を…地獄の様な戦争を望んでいる。

諸君、私に付き従う戦友諸君

君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか！？

疾風迅雷の限りを尽くし神の遣いの天使を殺す嵐の様な闘争を望むか！？」

『戦争！闘争！！破滅！！！！』

「よろしい、ならば戦争だ！

我々は渾身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳だ。

だが、この暗い地の底で何百年もの間堪え続けてきた我々にただの戦争ではもはや足りない！！

大戦争を！！

一心不乱の大戦争を！！

我らはわずかに2万に満たぬ敗残兵に過ぎない！だが！！諸君は一騎当千の強者だと私は信仰している。

ならば我らは諸君と私で総力2000万と1人の軍集団となる。

我々を忘却の彼方へと追いやり今を生きる連中を叩き起こそう！

髪の毛をつかんで引きずり降りし眼を開けさせ思い出させよう！！
連中に恐怖の味を思い出させてやる！！
連中に我々の顔を思い出させてやる！！！！

天と獄の狭間には奴らの哲学では思いもよらない事があることを思い出させてやる！！

2万の超人の戦闘団で世界を燃やし尽くしてやる！！

全魔方陣錬成開始！本隊『メルクリウス』進行開始！

出動！！全大隊、全規律解除！！
シミッター

『忘れられた軍隊』総帥より全隊へ！
目標！！侵入者、魔界門周辺！！

作戦を開始せよ！！

征くぞ、諸君。」

「…神綺様って、こんなにノリが良かったっけ…」

見事に某戦争狂のように大演説をしてみせた神綺に対して、神綺の部下である夢子はそう思ったそうなの。

「さて、正直な話、貴女の話聞いてなかったら彼に興味すら湧かなかったわ…」

演説を終えたばかりの神綺は、今回の戦争を引き起こしたもう一人の張本人に対して言った。

「ねえ、アリス。」

「?????視点」

「え、殺していいの?」

「どんどん殺していいんだって。」

「何回も何回も、それこそ肉片になって血を全て引きずり出すまで殺すよ?」

「いいのいいの。どんどん殺しちゃって。」

「あは そおれは楽しいね。ねえー、夢月。」

「そうだね、幻月お姉ちゃん。」

魔界でも生粋の狂者とされる姉妹…殺戮を生業とする姉妹が、牙を剥いた。

「…で、この悪魔モドキはどうなるの？」

あの戦いの後、私と幽々子は沈黙していた悪魔：元人間だった者を無理矢理封印。

その封印儀式にある人物が協力してくれた。

宵闇の少女、ルーミア：彼女曰く「目には目を、闇には闇を。」らしく、悪魔モドキは真つ黒な球体に包まれている。

「解らない：普通、悪魔に身体を乗っ取られたということになれば、元の人間の魂は悪魔と同一化してどうしようもなくなって命を奪うしかなくなる。でも今回は違う：まだ魂が2つある。」

「つまりまだ救いようがあるって事？」

「うん：それに、魂は争ってない：当分は大丈夫かも。外から刺激を加えない限りね。」

「どう言う事なのかしら？悪魔にとっては損でしかないのに…」

「解らない。本当にどう言う事なんだろう…」

事情は解らないが、とにかく今は経過観察が必要のようだ。

???視点

暗い…

本当に、周りが見えない…

深淵のまた奥にいるような、黒。

そう言えば、俺はあの後…どうなったんだ？

「私に身体を明け渡しておしまい。」

お前、何勝手なことをしてくれてるんだ！

「仕方ないじゃない。このまま放っておいたら、貴方が死んでたんだし。言ったでしょ？ 依り代はそう簡単に手放さないって。」
「知るかそんな事！ 大体お前は自分勝手すぎるんだ！」

「だって私、悪魔だもん。」

それが免罪符になるとでも思ってるのか！？

「うん。」

こいつ、真正の馬鹿だ…？ 以下ってどういう頭だよ。

「やたら強力な結界みたいなのがけられてるから、当分は動けない。うん、出番なしって所ね。」

ま、いい機会だ、しばらくサブキャラはお休み頂こうか。

レナ視点

「おわああああ！！！」

魔界に入って間もなく、俺は不気味な化け物に追われるようになった。

一つ目の蝙蝠みたいな奴から、人型のオオカミみたいな奴まで…まさに魑魅魍魎に追い掛け回されていた。

「…ちいつ！！！」

牽制がてら弾幕を張る。…って良く死んだ後でも弾幕張れるな、俺が、牽制では先頭を行く化け物（妖怪かもしれないがはっきりしないので化け物）を数体倒せる程度で、一向に数が減らない。

さて、どうしたものか…

ん？前に居るあれは…カメ？

「その少年、儂に乗れい！！」

「うおう、カメが喋った！？」

「細かいことは後にせい！とにかく儂に乗れ！」

「わ、解った！」

俺はでっかいカメに乗る、同時にカメは空を泳ぐようにして飛び始める。

化け物たちは空にまでは追いかけてこないようだ、一部の翼持ちの化け物以外こつちに來なくなつたので随分と数が減つた。

「カメさん、まだ敵が居る！」

「じゃかましいわ！儂は確かにカメじゃが、立派な玄爺ケンジイという名前がある！」

「なら玄爺さん、あの敵は撃ち落としていいのか！？」

「儂に任せい！！！」

すると、玄爺から妙な力を感じた。

その瞬間、追手がまるで地面に引張られるように落ちていく。

「儂に任せればこんなもん余裕じゃ！わっはっはっは！」

…事情はよく解らないが、カメさんが味方になりました。

S e a r c h & a m p ; D e s t r o y ! ! (後 書 き)

次回予告。

玄爺を味方にしたレナ！

しかし、彼に異変が…！！？

というわけで次回

「魔界の掟^{おきて}」

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533q/>

100万回死んでも生き返りますが、何か？

2011年10月28日17時13分発行